

Symfoware Server V10.1.0



アップデート情報

Linux

J2UL-1223-03Z0(00)
2011年4月

まえがき

本書の目的

本書は、Symfoware Server のアップデート情報を記載しています。

本書の構成

本書の構成と内容は以下のとおりです。

第1章 新機能および改善項目(EEE)

Symfoware Server Enterprise Extended Editionにおいて本バージョンで追加した新機能および改善項目について説明しています。

第2章 新機能および改善項目(EE/SE)

Symfoware Server Enterprise EditionおよびSymfoware Server Standard Editionにおいて本バージョンで追加した新機能および改善項目について説明しています。

第3章 互換に関する情報

互換に関する情報について説明しています。

第4章 プログラム修正一覧

プログラムの修正一覧を掲載しています。

平成22年	1月	初版
平成22年	2月	第2版
平成23年	4月	第3版

著作権

Copyright 2007-2011 FUJITSU LIMITED

目 次

第1章 新機能および改善項目(EEE)	1
1.1 V10.1.0で追加された機能	2
1.1.1 インストール	2
1.1.1.1 インストーラ改善	2
1.1.2 セットアップ	2
1.1.2.1 パラメタのデフォルト値	3
1.1.2.2 JDBCドライバ利用時の動作環境設定	3
1.1.3 アプリケーションの開発	3
1.1.3.1 XMLアプリケーション	4
1.1.3.2 CまたはCOBOLアプリケーション	4
1.1.3.3 Javaアプリケーション	4
1.1.3.4 ODBC対応アプリケーション	7
1.1.3.5 .NET Data Provider対応アプリケーション	7
1.1.3.6 SQL文	7
1.1.3.7 トランザクションモニタとの連携	9
1.1.3.8 アプリケーション開発環境	9
1.1.4 運用	10
1.1.4.1 データベース二重化	10
1.1.4.2 ロードシェア縮退	11
1.1.4.3 ノード間通信性能改善	13
1.1.4.4 データベース構築の簡易化	13
1.1.4.5 rdbexecsqlコマンドのSQL文実行エラーの切分け	13
1.1.4.6 rdbexecsqlコマンドの実行結果の出力改善	13
1.1.4.7 システム表の追加	14
1.1.4.8 JIS2004対応	14
1.1.4.9 Connection ManagerのPRIMECLUSTER対応	14
1.1.5 性能	14
1.1.5.1 ASSIST指定	15
1.1.5.2 コミットデータ即時読み込み	15
1.1.5.3 ROWNUMのサポート	15
1.1.6 プラットフォームエンハンス	16
1.1.6.1 サーバの動作OSの追加	16
1.1.6.2 クライアントの動作OSの追加	16
第2章 新機能および改善項目(EE/SE)	17
2.1 V10.1.0で追加された機能	18
2.1.1 インストール	18
2.1.1.1 インストーラ改善	18
2.1.2 アプリケーションの開発	19
2.1.2.1 SQL文	19
2.1.2.2 アプリケーション開発環境	20
2.1.3 運用	21
2.1.3.1 データベース二重化	21
2.1.3.2 Connection ManagerのPRIMECLUSTER対応	21
2.1.4 性能	21
2.1.4.1 コミットデータ即時読み込み	21
2.1.5 プラットフォームエンハンス	22
2.1.5.1 サーバの動作OSの追加	22
2.1.5.2 クライアントの動作OSの追加	22
2.2 V10.0.0で追加された機能	22
2.2.1 インストール	22
2.2.1.1 インストーラ改善	22
2.2.2 セットアップ	23
2.2.2.1 パラメタのデフォルト値	23
2.2.2.2 JDBCドライバ利用時の動作環境設定	23

2.2.3 アプリケーションの開発.....	23
2.2.3.1 XMLアプリケーション.....	23
2.2.3.2 CまたはCOBOLアプリケーション.....	23
2.2.3.3 Javaアプリケーション.....	23
2.2.3.4 ODBC対応アプリケーション.....	23
2.2.3.5 .NET Data Provider対応アプリケーション.....	23
2.2.3.6 SQL文.....	23
2.2.3.7 トランザクションモニタとの連携.....	24
2.2.3.8 アプリケーション開発環境.....	24
2.2.4 運用.....	24
2.2.4.1 データベース構築の簡易化.....	25
2.2.4.2 rdbexecsqlコマンドのSQL文実行エラーの切分け.....	25
2.2.4.3 rdbexecsqlコマンドの実行結果の出力改善.....	25
2.2.4.4 システム表の追加.....	25
2.2.4.5 JIS2004対応.....	25
2.2.5 性能.....	25
2.2.5.1 ASSIST指定.....	25
2.2.5.2 ROWNUMのサポート.....	25
2.2.6 プラットフォームエンハンス.....	25
2.2.6.1 クライアントの動作OSの追加.....	25
第3章 互換に関する情報.....	26
3.1 コンソールへのメッセージ出力の抑止.....	27
3.2 SQL文の制限値エラー通知.....	28
3.3 Connection Manager連携時の不要メッセージ出力の抑止.....	29
3.4 トランザクションを超越するカーソルのエラー抑止.....	30
3.5 パラメタの省略値.....	31
3.6 XAインタフェースの接続方式の変更.....	34
3.7 RDBディクショナリ使用量.....	37
3.8 ポート番号の指定範囲の変更.....	38
3.9 リモートアクセスでの利用者認証.....	39
3.10 RDBNAME未設定時のエラーメッセージ.....	39
3.11 RDB構成パラメタファイルのひな型ファイル名の変更.....	41
3.12 JDBCデータソース定義の簡素化.....	41
3.13 アプリケーションの予約語のレベルの変更.....	41
3.14 DatabaseMetaDataクラス、ResultSetMetaDataクラスの未サポートAPIのサポート.....	43
3.15 WebAdmin/WebDBtoolsで使用するポート番号.....	45
3.16 SQLGetInfo関数の仕様変更.....	45
3.17 SQLTables関数の仕様変更.....	46
3.18 非活性状態のインデックスDSIの参照.....	48
3.19 アクセスプランへのデフォルトでのアドバイス出力.....	48
3.20 パフォーマンスモニタでのアドバイス出力.....	49
3.21 DSI定義での動的容量拡張定義指定.....	50
3.22 ODBC連携時のトランザクション独立性水準の初期値変更.....	51
3.23 LIKE述語の構文解析時に出力されるJYPメッセージの内容変更.....	51
3.24 rdbstopコマンドのmcオプションによるコマンドの強制停止.....	51
3.25 Connection Managerの通信機構の変更.....	53
3.26 rdbprtコマンド.....	53
3.27 リカバリポイントの自動設定.....	57
3.28 rdbupsコマンド実行時のRDBディクショナリ使用量.....	58
3.29 rdbmrdmpコマンド.....	58
3.30 rdbmrinfコマンド.....	59
3.31 rdbauditコマンド.....	60
3.32 各国語文字列型への半角カタカナ格納のエラー通知.....	63
3.33 JDBCドライバ使用時のLD_PRELOAD環境変数廃止(Solaris/Linuxの場合).....	65
3.34 アプリケーションインタフェースの変更.....	67
3.35 文字コード系の指定方法の変更.....	67

3.36 rdbrcvコマンド	72
3.37 rdbexecsqlコマンドの独立性水準	73
3.38 アプリケーションのロケールの指定方法の変更	74
3.39 コード変換機能(iconv)の組込み	74
3.40 インデックス検索の適用拡大	75
3.41 rdbloader、rdbsaloader、rdbsuloaderコマンド	76
3.42 JDBCトレースの採取方法の変更	78
3.43 GROUP BY句を指定した導出表を含むSQL文の探索条件の判定タイミングの変更	78
3.44 列名の太文字および小文字の扱いの変更	79
3.45 ACCESS_PLANの変更	79
3.46 getObjectメソッドの仕様変更	81
3.47 getLongメソッドの仕様変更	81
3.48 定義長よりも長いデータの扱いの変更	82
3.49 ジョイン順の変更	82
第4章 プログラム修正一覧	84
4.1 EEEの場合	84
4.2 EE/SEの場合	134
4.2.1 Intel64版	134
4.2.2 x86版	205
索引	277

第1章 新機能および改善項目(EEE)

Symfoware Server Enterprise Extended Editionにおいて本バージョンで追加した新機能および改善項目について説明します。

表1.1 新機能と改善項目

バージョン レベル	機能名	
V10.1.0	インストール	インストーラ改善
	セットアップ	パラメタのデフォルト値
		JDBCドライバ利用時の動作環境設定
	アプリケーションの 開発	XMLアプリケーション
		SQL/XML対応
		CまたはCOBOL アプリケーション
		埋込みC言語での8バイト2進数使用
		埋込みSQLでの複数行の一括挿入の機能拡張
		Javaアプリケーション
		APIサポート範囲の拡張
		ODBC対応アプリケーション
		APIサポート範囲の拡張
		.NET Data Provider対応アプリケーション
		APIサポート範囲の拡張
		SQL文
		INSERT文のVALUES句への値式サポート
		関数のサポート範囲の拡張
		トランザクションモ ニタとの連携
		XAインタフェースの3階層モデルへの対応
	アプリケーション 開発環境	Visual Studio 2008およびVisual Studio 2010対応
		Visual C++ 2010対応
		.NET Framework 3.5および.NET Framework 4対応
		Office 2007およびOffice 2010対応
	運用	データベース二重化
		ロードシェア縮退
		ノード間通信性能改善
		データベース構築の簡易化
		rdbexecsqlコマンドのSQL文実行エラーの切分け
		rdbexecsqlコマンドの実行結果の出力改善
		システム表の追加
		JIS2004対応
		Connection ManagerのPRIMECLUSTER対応
	性能	ASSIST指定
		コミットデータ即時読み込み
		ROWNUMのサポート

バージョン レベル	機能名	
	プラットフォームエンハンス	サーバの動作OSの追加 クライアントの動作OSの追加

1.1 V10.1.0で追加された機能

V10.1.0で追加された新機能および改善項目について説明します。

- ・ [インストール](#)
- ・ [セットアップ](#)
- ・ [アプリケーションの開発](#)
- ・ [運用](#)
- ・ [性能](#)
- ・ [プラットフォームエンハンス](#)

1.1.1 インストール

インストールに関する改善項目について説明します。

- ・ [インストーラ改善](#)

1.1.1.1 インストーラ改善

サーバ機能とクライアント機能のインストーラを以下のように改善しました。

- ・ サーバ機能のインストーラ改善
独立していた以下のインストーラを1つに統合しました。
 - Symfoware Server サーバ機能
 - Symfoware Server Advanced Backup Controller
 - Symfoware Active DB Guard
 - Symfoware Server Mirroring Controller
- ・ クライアント機能のインストーラ改善
Connection Manager機能をSymfoware Server クライアント機能に組み込みました。
Connection Manager機能がクライアントの動作OSで動作可能となりました。

これにより、最小限の選択、確認でインストールを行うことができます。



参照

.....
詳細は、“インストールガイド(サーバ編)”および“インストールガイド(クライアント編)”を参照してください。
.....

1.1.2 セットアップ

セットアップに関する新機能および改善項目について説明します。

- ・ [パラメタのデフォルト値](#)
- ・ [JDBCドライバ利用時の動作環境設定](#)

1.1.2.1 パラメタのデフォルト値

Symfoware Serverの動作環境に対して、以下で設定するパラメタのデフォルト値を適切な値に変更しました。

- RDB構成パラメタファイル
- システム用の動作環境ファイル
- クライアント用の動作環境ファイル
- JDBCデータソース
- ODBCデータソース
- .NET Data Provider

この改善により、導入時の見積りや設定が必要なパラメタの数が削減されるため、導入コストが削減されます。



参照

- 変更したパラメタの詳細は、“[3.5 パラメタの省略値](#)”を参照してください。
- サーバ機能のパラメタの詳細は、“セットアップガイド”の“Symfoware/RDB運用パラメタの定義”を参照してください。
- クライアント機能のパラメタの詳細は、“アプリケーション開発ガイド(共通編)”の“アプリケーションの動作環境”を参照してください。

1.1.2.2 JDBCドライバ利用時の動作環境設定

従来、JDBCドライバ利用時の接続情報やチューニングオプションを変更する場合、以下のいずれかの操作となり、操作ミスが起きやすい手順となっていました。

- 開発環境で設定したデータソースをエクスポートし、実行環境にインポート後に接続情報を変更する
- 開発環境で設定したチューニング情報を、実行環境で再設定する

これを改善するため、JDBCドライバの動作環境をクライアント用の動作環境ファイルで設定できるようになりました。

クライアント用の動作環境ファイルを、複数の環境で利用することで、動作環境の設定誤りを抑止し、チューニングの設定・反映作業を軽減することができます。



参照

詳細は、“アプリケーション開発ガイド(JDBCドライバ編)”の“クライアント用の動作環境ファイルの指定について”を参照してください。

1.1.3 アプリケーションの開発

アプリケーション開発に関する新機能について説明します。

- [XMLアプリケーション](#)
- [CまたはCOBOLアプリケーション](#)
- [Javaアプリケーション](#)
- [ODBC対応アプリケーション](#)
- [.NET Data Provider対応アプリケーション](#)
- [SQL文](#)
- [トランザクションモニタとの連携](#)
- [アプリケーション開発環境](#)

1.1.3.1 XMLアプリケーション

XMLアプリケーションにおける新機能について説明します。

- ・ SQL/XML対応

SQL/XML対応

SQL/XMLのサポートにより、Symfowareデータベースに格納されたXMLデータに対し、SQLインタフェースでの検索を行えるようになりました。

これにより、SQLの標準的なインタフェースを使用してXMLデータへのアクセスができるため、従来のアプリケーションの流用が可能になります。

また、検索条件として、XMLデータの内容だけでなく、リレーショナルデータを指定し、双方を併用した検索ができるので、その都度要件が変わるXMLデータ検索を柔軟に行うことが可能です。

検索には、パターンマッチング方式を採用しており、インデックスを作成せずに、大量データの高速検索を実現します。また、XMLデータを解析せずに格納するので、通常のリレーショナルデータベースとデータ格納性能が変わりません。



参照

.....
詳細は、“アプリケーション開発ガイド(共通編)”の“XMLデータを操作する方法”を参照してください。
.....

1.1.3.2 CまたはCOBOLアプリケーション

CまたはCOBOLアプリケーションにおける新機能について説明します。

- ・ 埋込みC言語での8バイト2進数使用
- ・ 埋込みSQLでの複数行の一括挿入の機能拡張

埋込みC言語での8バイト2進数使用

SQL埋込みCプログラムで、データベースとの入出力を行うC言語の型としてlong long型を使用できるようになり、長桁の整数データを扱うアプリケーションの開発が容易になります。



参照

.....
詳細は、“アプリケーション開発ガイド(埋込みSQL編)”の“ホスト変数および標識変数の指定方法”を参照してください。
.....

埋込みSQLでの複数行の一括挿入の機能拡張

構造体配列のアドレスを、複数行の一括挿入の入力データとして使用できるようになり、アプリケーションでの領域コピー処理が不要となります。



参照

.....
詳細は、“アプリケーション開発ガイド(埋込みSQL編)”の“構造体として宣言したホスト変数の使用方法”を参照してください。
.....

1.1.3.3 Javaアプリケーション

Javaアプリケーションにおける新機能について説明します。

- ・ APIサポート範囲の拡張

APIサポート範囲の拡張

JDBC4.0のサポートにより、JDBCインタフェース使用時に以下の機能の利用が可能となりました。これらにより、アプリケーションの移植性、生産性が向上します。

- RowIdサポート
- 未サポートAPIの改善
- 文字ストリームのサポート
- タイムゾーン機能
- サポートするJavaのデータ型の拡張
- フェッチサイズの指定機能
- ResultSetの更新機能
- 複数のResultSetに対する同時操作機能
- スクロール可能なResultSet機能のサポートAPI拡張
- バッチ更新機能

RowIdサポート

RowIdに関するAPIをサポートしました。

これにより、行識別子を検索条件とするアクセスが可能となり、データベース中の単一行へ最速にアクセスすることができます。



参照

.....
詳細は、“アプリケーション開発ガイド(JDBCドライバ編)”の“行識別子(SQL ROWID)を利用したデータ操作”を参照してください。
.....

未サポートAPIの改善

従来、未サポートAPIが呼び出された場合、SQLExceptionが返却されていましたが、JDBC4.0の規約に準拠し、SQLFeatureNotSupportedExceptionが返却されるように、未サポートAPIに対する動作を変更します。



参照

.....
詳細は、“Java APIリファレンス”を参照してください。
.....

文字ストリームのサポート

従来、データベースと文字列データのやり取りを行う手段は、Stringオブジェクトのみでしたが、文字列データを文字ストリームとして扱った操作(取得、更新、挿入)ができるようになりました。



参照

.....
詳細は、“アプリケーション開発ガイド(JDBCドライバ編)”の“国際化に対応したアプリケーションについて”を参照してください。
.....

タイムゾーン機能

日時値データを、指定したタイムゾーンの日時値に変更して、設定および取得できるようになりました。

これにより、複数のタイムゾーンにまたがるデータベースシステムを利用する場合など、容易にタイムゾーンを統一してデータベースに格納できます。



参照

.....

詳細は、“アプリケーション開発ガイド(JDBCドライバ編)”の“国際化に対応したアプリケーションについて”を参照してください。

.....

サポートするJavaのデータ型の拡張

以下に示す、大きいサイズのオブジェクトを扱えるデータ型および外部データを扱えるJavaのデータ型に対応したAPIを利用できるようになりました。

- BLOB型
- CLOB型
- REF型
- STRUCT型
- ARRAY型
- DATALINK/URL型
- オブジェクト型



参照

.....

詳細は、“Java APIリファレンス”を参照してください。

.....

フェッチサイズの指定機能

フェッチサイズ(1回のフェッチで取得される結果の件数)を指定できるようになりました。



参照

.....

詳細は、“Java APIリファレンス”の“Statement”インタフェースの“setFetchSize”メソッドおよび“getFetchSize”メソッドを参照してください。

.....

ResultSetの更新機能

従来、データベースにデータを挿入、更新および削除する手段はSQL文のみでしたが、JDBCのAPIで操作できるようになりました。



参照

.....

詳細は、“アプリケーション開発ガイド(JDBCドライバ編)”の“ResultSetの更新”を参照してください。

.....

複数のResultSetに対する同時操作機能

SQLの実行後に返却される複数のResultSetを同時に操作できるようになりました。



参照

.....

詳細は、“アプリケーション開発ガイド(JDBCドライバ編)”の“ResultSetの同時複数操作”を参照してください。

.....

スクロール可能なResultSet機能のサポートAPI拡張

ResultSet内の、現在のカーソル位置からの相対位置または指定の位置に、カーソルを進めたり戻したりする機能について、一部未サポートであったメソッドをサポートしました。



参照

.....

詳細は、“Java APIリファレンス”の“ResultSet”インタフェースの“moveToCurrentRow”メソッドを参照してください。

.....

バッチ更新機能

バッチ更新に関するAPIをサポートしました。

これにより、複数の更新系SQL文を一度に送信し、まとめて結果を受信できるようになりました。



参照

.....

詳細は、“アプリケーション開発ガイド(JDBCドライバ編)”の“バッチ更新機能について”を参照してください。

.....

1.1.3.4 ODBC対応アプリケーション

ODBC対応アプリケーションにおける新機能について説明します。

- APIサポート範囲の拡張

APIサポート範囲の拡張

以下のAPIをサポートしました。

- SQLColumnPrivileges
- SQLForeignKeys
- SQLTablePrivileges

また、以下のAPIのプロパティを拡張しました。

- SQLSetStmtAttr
- SQLSetStmtOption



参照

.....

詳細は、“アプリケーション開発ガイド(ODBCドライバ編)”の“APIリファレンス”を参照してください。

.....

1.1.3.5 .NET Data Provider対応アプリケーション

.NET Data Provider対応アプリケーションにおける新機能について説明します。

- APIサポート範囲の拡張

APIサポート範囲の拡張

データベーススキーマ情報を取得するための以下のAPIをサポートしました。

- SymfowareConnection.GetSchema



参照

.....

詳細は、“アプリケーション開発ガイド(.NET Data Provider編)”の“APIリファレンス”を参照してください。

.....

1.1.3.6 SQL文

SQL文における新機能および改善項目について説明します。

- INSERT文のVALUES句への値式サポート

- ・ 関数のサポート範囲の拡張

INSERT文のVALUES句への値式サポート

INSERT文のVALUES句に値式を指定できるようになりました。

これにより、SQL文中でデータを加工してからデータベースにデータを挿入を更新できるようになるため、データ加工処理を標準化したり、アプリケーションの処理を簡素化することができます。



参照

.....
詳細は、“SQLリファレンス”の“INSERT文”を参照してください。
.....

関数のサポート範囲の拡張

以下の関数のサポート範囲を拡張しました。

- ・ 数値関数
- ・ データ列値関数
- ・ 日時値関数

これにより、今までアプリケーションで行っていた処理を関数で行うことができるため、アプリケーションの生産性が向上します。

数値関数

以下の数値関数をサポートしました。

- ACOS
- ASCII
- ASIN
- ATAN
- ATAN2
- COS
- EXP
- LN
- OCTET_POSITION
- POWER
- SIGN
- SIN
- SQRT
- TAN



参照

.....
詳細は、“SQLリファレンス”の“数値関数”を参照してください。
.....

データ列値関数

以下のデータ列値関数をサポートしました。

- CHR

- LTRIM
- OCTET_SUBSTRING
- RTRIM



参照

.....
 詳細は、“SQLリファレンス”の“データ列値関数”を参照してください。

日時値関数

日時値関数として、以下をサポートしました。

- CNV_TIME
- CNV_TIMESTAMP

これにより、Symfoware Serverの組み込み関数を使用してフォーマットの統一およびデータ加工処理の標準化が可能となるため、アプリケーションの生産性が向上します。



参照

.....
 CNV_TIME関数およびCNV_TIMESTAMP関数の詳細は、“アプリケーション開発ガイド(共通編)”の“日付のデータを操作する”および“SQLリファレンス”の“日時値関数”を参照してください。

1.1.3.7 トランザクションモニタとの連携

トランザクションモニタとの連携における新機能について説明します。

- ・ XAインタフェースの3階層モデルへの対応

XAインタフェースの3階層モデルへの対応

XAインタフェースが、3階層モデルで利用可能となりました。



参照

.....
 詳細は、“RDB運用ガイド”の“トランザクションモニタとの連携”を参照してください。

1.1.3.8 アプリケーション開発環境

アプリケーション開発環境における新機能について説明します。

- ・ Visual Studio 2008およびVisual Studio 2010対応
- ・ Visual C++ 2010対応
- ・ .NET Framework 3.5および.NET Framework 4対応
- ・ Office 2007およびOffice 2010対応

Visual Studio 2008およびVisual Studio 2010対応

Windows(R)のSymfoware Server クライアント機能の開発環境としてVisual Studio 2008およびVisual Studio 2010に対応します。



参照

.....
 詳細は、“インストールガイド(クライアント編)”の“関連ソフトウェア”を参照してください。

Visual C++ 2010対応

Windows(R)のSymfoware Server クライアント機能の開発環境としてVisual C++ 2010に対応します。



参照

.....
詳細は、“インストールガイド(クライアント編)”の“関連ソフトウェア”を参照してください。
.....

.NET Framework 3.5および.NET Framework 4対応

Windows(R)のSymfoware Server クライアント機能の開発環境として.NET Framework 3.5および.NET Framework 4に対応します。



参照

.....
詳細は、“インストールガイド(クライアント編)”の“関連ソフトウェア”を参照してください。
.....

Office 2007およびOffice 2010対応

Windows(R)のSymfoware Server クライアント機能の開発環境としてOffice 2007およびOffice 2010に対応します。



参照

.....
詳細は、“インストールガイド(クライアント編)”の“関連ソフトウェア”を参照してください。
.....

1.1.4 運用

Symfoware Serverの運用に関する新機能および改善項目について説明します。

- ・ データベース二重化
- ・ ロードシェア縮退
- ・ ノード間通信性能改善
- ・ データベース構築の簡易化
- ・ rdbexecsqlコマンドのSQL文実行エラーの切分け
- ・ rdbexecsqlコマンドの実行結果の出力改善
- ・ システム表の追加
- ・ JIS2004対応
- ・ Connection ManagerのPRIMECLUSTER対応

1.1.4.1 データベース二重化

通常のネットワーク(TCP/IP)を利用し、2台のサーバ間でのデータベースのミラーリングを実現します。

片方のサーバに何らかの異常が発生した場合、ミラーリング先に運用を切り替えることで、高信頼な運用が可能です。



参照

.....
詳細は、“データベース二重化導入運用ガイド”を参照してください。
.....

1.1.4.2 ロードシェア縮退

ロードシェア運用時、待機ノードを必要としない運用が可能となりました。本運用においてノードダウンが発生した場合は、生存している別のノードに業務を引き継いで、運用を継続します。このため、低コストで可用性の高いロードシェアシステムを構築することができます。二重故障が発生した場合でも、業務の継続が可能なシステムを構築することができます。

V10.1.0ではロードシェア縮退をロードシェア機能として説明しています。9.2.0以前で提供していたロードシェア機能については、“クラスタ導入運用ガイド”および“Connection Manager ユーザーズガイド”を参照してください。

9.2.0以前のロードシェア機能との変更点の詳細を以下に示します。

表1.2 変更点のポイント

カテゴリ		変更内容	説明している主なマニュアル
概要	運用	- 縮退運転のサポートにより、ホットスタンバイ機能を併用しなくても、システムダウン時の運用継続が可能となりました。 - 運用の単位はロググループとなります。この単位で処理を引き継ぎます。ロードシェア構成パラメタファイルのRDBLOGGROUPパラメタを指定してください。	解説書 5.4.3 ロードシェア
			クラスタ導入運用ガイド 1.3 Symfaware Serverのロードシェア運用とは
		Advanced Backup Controller 使用時で、AdvancedCopy Manager と組み合わせて運用している場合、AdvancedCopy Managerの運用手順により、縮退運転時のリカバリが可能になりました。	ETERNUS SF AdvancedCopy Manager 運用手引書
	Capitalシステム	- システムロググループを配置し、RDBディクショナリを管理します。 - データベースは配置できません。	クラスタ導入運用ガイド 2.1.2 ロードシェア運用の設計上の考慮点
	Satelliteシステム	- ユーザロググループを配置し、データベースを管理します。 - ユーザロググループを作成するため、以下の運用を行ってください。 - スケラブルログ運用 - スケラブルディレクトリ運用	クラスタ導入運用ガイド 2.1.2 ロードシェア運用の設計上の考慮点
	引継ぎの高速化	データベースのプレオープン処理を自動的に行います。ホットスタンバイ機能との併用モデルでは必要だったプレオープン操作が不要になりました。	クラスタ導入運用ガイド 1.6.4 引継ぎの高速化
	システムファイルの操作	作成、変更、削除など、停止中に行う操作は、Capitalシステムでのみ実行可能となります。	クラスタ導入運用ガイド 第7章 ロードシェア運用のセットアップ
			コマンドリファレンス
コネクション接続		SQLサーバ名にデータベース資源の配置先ロググループ名を対応づけることで、業務が対象とするデータベース資源の偏在先ノードへダイレクトな接続を行います。	Connection Manager ユーザーズガイド 1.3 Connection Managerの機能 2.4 SQLサーバについて
プレコネクション接続		事前に、ロググループの引継ぎ先のノードに自動的に接続を行います。	Connection Manager ユーザーズガイド 1.3 Connection Managerの機能

カテゴリ		変更内容	説明している主なマニュアル
セットアップ	ロードシェアの切り分け	Symfoware/RDBの動作環境をロードシェアシステムとすることを宣言するために指定するパラメタが変更になりました。RDB構成パラメタファイルのRDBSCLSYSTEMパラメタを設定してください。	クラスタ導入運用ガイド 7.4.1 Capitalシステム用のRDB構成パラメタファイルの編集 7.4.15 Satelliteシステム用のRDB構成パラメタファイルの編集 9.2.0以前のロードシェアをお使いの場合 クラスタ導入運用ガイド E.4.2 RDB構成パラメタファイルの編集
	システムファイルの見積り	見積り方法が変更になりました。見積り式を確認してください。	セットアップガイド 付録C 資源の見積り式
	メモリの見積り	見積り方法が変更になりました。見積り式を確認してください。	セットアップガイド 付録D メモリの見積り式
			Connection Manager ユーザーズガイド A.1.2 APC動作環境ファイルの指定で変動するメモリ量
	カーネル編集	縮退運転を想定した値で見積もってください。	クラスタ導入運用ガイド 7.3.1 カーネル編集
	RDB構成パラメタファイル	RDB 構 成 パ ラ メ タ フ ァ イ ル の RDBLOGGROUPMANAGEパラメタはCapitalシステム/Satelliteシステムで同じ値を指定してください。 このパラメタはロググループ管理ファイルのパスを示すものです。ロードシェアシステム全体で1つのファイルを共用する形態となりました。	クラスタ導入運用ガイド 7.4.1 Capitalシステム用のRDB構成パラメタファイルの編集 7.4.15 Satelliteシステム用のRDB構成パラメタファイルの編集
		Satelliteシステム用のRDB構成パラメタファイルのRDBDIRSPACEパラメタ/RDBLOGMANAGEパラメタは指定できません。 このパラメタはシステムロググループ資源を示すものです。システムロググループはCapitalシステムでのみ管理する形態となりました。	クラスタ導入運用ガイド 7.4.15 Satelliteシステム用のRDB構成パラメタファイルの編集
	ロードシェア構成パラメタファイル	縮退運転のサポートにより、RDBLOGGROUPパラメタが追加となりました。ロググループの配置先および引継ぎ先を、必ず設定してください。	クラスタ導入運用ガイド 7.4.12 Capitalシステム用のロードシェア構成パラメタファイルの編集
	APC動作環境ファイル	- パラメタRDBSYSTEMは、ロードシェアシステムを構成するSatelliteシステムの数だけ指定してください。 - パラメタSQLSERVERには、SQLサーバ名と対応づけるロググループ名を指定してください。	Connection Manager ユーザーズガイド 3.1.2.2 APC動作環境ファイルの編集
	共用バッファ	縮退運転を想定した値で見積もってください。	クラスタ導入運用ガイド 8.5 共用バッファの設定
運用	モニタリング	通信状態の表示時に、ロググループ名が表示されます。	Connection Manager ユーザーズガイド 4.1.1 通信状態の表示
コマンド	rdbcrdic	Satelliteシステムでの実行はできません。	コマンドリファレンス

カテゴリ		変更内容	説明している主なマニュアル
	rdbresident	・ 縮退運転のサポートにより、追加された機能があります。	
	rdbloggroup	・ 縮退運転のサポートにより、追加されたコマンドです。 RDBシステムに偏在するロググループの情報を表示します。	
	apcnet	・ 表示項目にロググループ名が追加されました。	Connection Manager ユーザーズガイド 6.1 apcnet

1.1.4.3 ノード間通信性能改善

ロードシェアシステムを構成するノード間で、大量のデータを送受信する場合の通信性能を改善しました。



設定方法の詳細は、“クラスタ導入運用ガイド”の“カーネル編集”および“Capitalシステム用のロードシェア構成パラメタファイルの編集”を参照してください。

1.1.4.4 データベース構築の簡易化

従来、データベース構築においては、複数のコマンドと複数の定義ファイルを組み合わせる必要がありましたが、`rdbexecsql`コマンドのみでデータベースを構築できるようになりました。これに伴い、CREATE DSI文で表のDSIおよびインデックスのDSIを初期化するFORMAT指定ができるようになりました。

また、入力ファイルを指定して実行する場合は、入力ファイル内のSQL文の可変要素をコマンドに指定した引数で切り替えることができるようになったため、従来、構築する環境数分必要だった入力ファイルをテンプレート化することができました。

これらにより、データベースの構築作業の負担が軽減されます。



詳細は、“SQLTOOLユーザーズガイド”の“データベースを構築する”、および“コマンドリファレンス”の“`rdbexecsql`”を参照してください。

1.1.4.5 rdbexecsqlコマンドのSQL文実行エラーの切分け

従来、`rdbexecsql`コマンドでは、SQL文の実行でエラーが発生したか否かを、外部のスクリプトなどから判断することができませんでした。

これを改善するため、`rdbexecsql`コマンドの終了ステータスとして、SQL文の実行でエラーが発生したか否かを返却する機能を提供します。



詳細は、“SQLTOOLユーザーズガイド”の“SQL文でのエラー発生時の対処”を参照してください。

1.1.4.6 rdbexecsqlコマンドの実行結果の出力改善

従来、SQL文を対話的に実行する`rdbexecsql`コマンドの実行結果は、1レコードのデータが列ごとに改行されて出力されていました。

この表示形式は、文字列長の長いデータの出力には適していますが、数値データのように比較的長さが短いデータを列ごとに比較するなどの、レコード間のデータを比較する場合には適していませんでした。

これを改善するため、実行結果を表形式で出力する機能を提供します。



参照

.....
詳細は、“SQLTOOLユーザズガイド”の“出力形式”を参照してください。
.....

1.1.4.7 システム表の追加

以下のシステム表を新たに提供します。

- ・ DSI情報
- ・ コネクションの動作環境のパラメタ設定情報
- ・ システムの動作環境のパラメタ設定情報
- ・ コネクション情報
- ・ 表定義拡張情報
- ・ インデックス拡張情報
- ・ ルーチン定義拡張情報



参照

.....
詳細は、“アプリケーション開発ガイド(共通編)”の“システム表”を参照してください。
.....

1.1.4.8 JIS2004対応

Windows(R)のSymfoware Server クライアント機能において、UNICODEの4バイト文字(補助文字)に対応しました。



参照

.....
詳細は、“解説書”の“文字コード系”を参照してください。
.....

1.1.4.9 Connection ManagerのPRIMECLUSTER対応

Connection ManagerとPRIMECLUSTERの連携が可能になりました。

これにより、アプリケーションサーバのクラスタ構成が実現できます。



参照

.....
詳細は、“Connection Manager ユーザズガイド”の“PRIMECLUSTERとの連携について”を参照してください。
.....

1.1.5 性能

性能に関する新機能について説明します。

- ・ [ASSIST指定](#)
- ・ [コミットデータ即時読み込み](#)
- ・ [ROWNUMのサポート](#)

1.1.5.1 ASSIST指定

アプリケーションの性能をチューニングする際、SQL文ごとにアクセスモデルを指定(ASSIST指定)できるようになりました。

これにより、データベースへのアクセス手順をSQL文単位で固定化することができ、データベースへのアクセス性能を保持することができます。



.....
詳細は、“アプリケーション開発ガイド(共通編)”の“ASSIST指定でアクセスモデルを指定する”を参照してください。
.....

1.1.5.2 コミットデータ即時読み込み

従来は、SQL文により更新中の行を取り出す場合、更新トランザクションの完了を待って、更新結果が反映された状態のコミット済みデータを取得していましたが、SEQUENTIAL構造の表のDSOの定義時に、格納オプションを指定することで、参照トランザクションが更新トランザクションの完了を待たずに最新のコミット済みデータを検索できるようになりました。

この機能を利用することで、排他待ちを意識せずに参照業務アプリケーションを開発することができます。



.....
詳細は、“アプリケーション開発ガイド(共通編)”の“PRECEDENCE(1)を指定したSEQUENTIAL構造の特徴と注意事項”および“RDB運用ガイド(データベース定義編)”の“SEQUENTIAL構造”を参照してください。
.....

1.1.5.3 ROWNUMのサポート

SQL文の検索結果を制御する機能として、ROWNUMをサポートします。

また、ROWNUMと組み合わせて使用できるように、導出表にORDER BY句を指定可能にします。

ROWNUMを使用することで、以下のような操作を行うことができます。

- ・ 結果として取り出す件数を限定する
- ・ 結果として取り出す行に1から順に番号を割り振る
- ・ 結果として取り出す行を途中から読み込む

これにより、それぞれ以下のような効果があります。

結果として取り出す件数を限定する

探索条件に従ったレコードを読み込むだけのような単純なカーソルの場合、ROWNUMに指定した“検索結果として取り出す件数”に比例して、検索レスポンスが良くなります。しかし、ソートやワークを使うような複雑なカーソルの場合は効果がありません。

また、COUNT関数で検索結果件数を求めるようなSQL文の場合、ROWNUMに“読み込み件数の上限値”を指定すると、最大でも上限値までの検索レスポンスになります。

結果として取り出す行に1から順に番号を割り振る

順番号を生成して付加するアプリケーションの処理を省けます。

結果として取り出す行を途中から読み込む

アプリケーションで読み飛ばす処理を省けます。



参照

.....

詳細は、“アプリケーション開発ガイド(共通編)”の“ROWNUMを使用してデータを操作する”および“SQLリファレンス”の“ROWNUM”を参照してください。

.....

1.1.6 プラットフォームエンハンス

プラットフォームエンハンスに関する新機能について説明します。

- ・ [サーバの動作OSの追加](#)
- ・ [クライアントの動作OSの追加](#)

1.1.6.1 サーバの動作OSの追加

Symfoware Server サーバ機能の動作OSとして以下に対応します。

- ・ RHEL6(Intel64)
- ・ RHEL6(x86)



参照

.....

詳細は、“インストールガイド(サーバ編)”の“前提基本ソフトウェア”を参照してください。

.....

1.1.6.2 クライアントの動作OSの追加

Symfoware Server クライアント機能の動作OSとして以下に対応します。

- ・ RHEL6(Intel64)
- ・ RHEL6(x86)
- ・ Windows Server(R) 2008
- ・ Windows Server(R) 2008 R2
- ・ Windows(R) 7



参照

.....

詳細は、“インストールガイド(クライアント編)”の“前提基本ソフトウェア”を参照してください。

.....

第2章 新機能および改善項目(EE/SE)

Symfoware Server Enterprise EditionおよびSymfoware Server Standard Editionにおいて本バージョンで追加した新機能の対応製品および改善項目について説明します。

表2.1 新機能の対応製品

バージョン レベル	機能名			EE		SE	
				Intel 64版	x86 版	Intel 64版	x86 版
V10.1.0	インストール		インストーラ改善	○	○	○	○
	アプリケーションの開発	SQL文	関数のサポート範囲の拡張	○	○	○	○
		アプリケーション 開発環境	Visual Studio 2010対応	○	○	○	○
			Visual C++ 2010対応	○	○	○	○
			.NET Framework 4対応	○	○	○	○
			Office 2010対応	○	○	○	○
	運用		データベース二重化	○	○	○	○
			Connection Managerの PRIMECLUSTER対応	○	○	○	○
	性能		コミットデータ即時読み込み	○	○	○	○
	プラットフォームエンハンス		サーバの動作OSの追加	○	○	○	○
クライアントの動作OSの追加			○	○	○	○	
V10.0.0	インストール		インストーラ改善	○	○	○	○
	セットアップ		パラメタのデフォルト値	○	○	○	○
			JDBCドライバ利用時の動作環 境設定	○	○	○	○
	アプリケーションの開発	XMLアプリ ケーション	SQL/XML対応	○	○	○	○
		Cまたは COBOLアプリ ケーション	埋込みC言語での8バイト2進数 使用	○	○	提 供 済 み	提 供 済 み
			埋込みSQLでの複数行の一括 挿入の機能拡張	○	○	提 供 済 み	提 供 済 み
		Javaアプリケー ション	APIサポート範囲の拡張	○	○	○	○
		ODBC対応ア プリケーション	APIサポート範囲の拡張	○	○	○	○
		.NET Data Provider対応ア プリケーション	APIサポート範囲の拡張	○	○	○	○
		SQL文	INSERT文のVALUES句への 値式サポート	○	○	○	○
		トランザクション モニタとの連携	XAインタフェースの3階層モデ ルへの対応	○	○	○	○

バージョン レベル	機能名			EE		SE	
				Intel 64版	x86 版	Intel 64版	x86 版
		アプリケーション 開発環境	Visual Studio 2008対応	○	○	○	○
			.NET Framework 3.5対応	○	○	○	○
			Office 2007対応	○	○	○	○
	運用		データベース構築の簡易化	○	○	○	○
			rdbeexecsqlコマンドのSQL文実行エラーの切分け	○	○	○	○
			rdbeexecsqlコマンドの実行結果の出力改善	○	○	○	○
			システム表の追加	○	○	○	○
			JIS2004対応	○	○	提供 済み	提供 済み
	性能		ASSIST指定	○	○	提供 済み	提供 済み
			ROWNUMのサポート	○	○	○	○
	プラットフォーム エンハンス	クライアントの動作OSの追加	Windows Server(R) 2008	○	○	提供 済み	提供 済み
			Windows Server(R) 2008 R2	○	○	○	○
			Windows(R) 7	○	○	○	○

○: 機能あり

ー: 機能なし

2.1 V10.1.0で追加された機能

V10.1.0で追加された新機能および改善項目について説明します。

- ・ [インストール](#)
- ・ [アプリケーションの開発](#)
- ・ [運用](#)
- ・ [性能](#)

2.1.1 インストール

インストールに関する改善項目について説明します。

- ・ [インストーラ改善](#)

2.1.1.1 インストーラ改善

サーバ機能とクライアント機能のインストーラを以下のように改善しました。

- ・ サーバ機能のインストーラ改善

独立していた以下のインストーラを1つに統合しました。

- Symfoware Server サーバ機能
- Symfoware Active DB Guard
- Symfoware Server Mirroring Controller

- ・ クライアント機能のインストーラ改善

Connection Manager機能をSymfoware Server クライアント機能に組み込みました。

Connection Manager機能がクライアントの動作OSで動作可能となりました。

これにより、最小限の選択、確認でインストールを行うことができます。



参照

.....
詳細は、“インストールガイド(サーバ編)”および“インストールガイド(クライアント編)”を参照してください。
.....

2.1.2 アプリケーションの開発

アプリケーション開発に関する新機能について説明します。

- ・ [SQL文](#)

2.1.2.1 SQL文

SQL文における新機能および改善項目について説明します。

- ・ [関数のサポート範囲の拡張](#)

関数のサポート範囲の拡張

以下の関数のサポート範囲を拡張しました。

- ・ 数値関数
- ・ データ列値関数
- ・ 日時値関数

これにより、今までアプリケーションで行っていた処理を関数で行うことができるため、アプリケーションの生産性が向上します。

数値関数

以下の数値関数をサポートしました。

- ACOS
- ASCII
- ASIN
- ATAN
- ATAN2
- COS
- EXP
- LN
- OCTET_POSITION
- POWER

- SIGN
- SIN
- SQRT
- TAN



参照

.....
 詳細は、“SQLリファレンス”の“数値関数”を参照してください。

データ列値関数

以下のデータ列値関数をサポートしました。

- CHR
- LTRIM
- OCTET_SUBSTRING
- RTRIM



参照

.....
 詳細は、“SQLリファレンス”の“データ列値関数”を参照してください。

日時値関数

日時値関数として、以下をサポートしました。

- CNV_TIME
- CNV_TIMESTAMP

これにより、Symfoware Serverの組み込み関数を使用してフォーマットの統一およびデータ加工処理の標準化が可能となるため、アプリケーションの生産性が向上します。



参照

.....
 CNV_TIME関数およびCNV_TIMESTAMP関数の詳細は、“アプリケーション開発ガイド(共通編)”の“日付のデータを操作する”および“SQLリファレンス”の“日時値関数”を参照してください。

2.1.2.2 アプリケーション開発環境

アプリケーション開発環境における新機能について説明します。

- Visual Studio 2010対応
- Visual C++ 2010対応
- .NET Framework 4対応
- Office 2010対応

Visual Studio 2010対応

Windows(R)のSymfoware Server クライアント機能の開発環境としてVisual Studio 2010に対応します。



参照

.....

詳細は、“インストールガイド(クライアント編)”の“関連ソフトウェア”を参照してください。

.....

Visual C++ 2010対応

Windows(R)のSymfoware Server クライアント機能の開発環境としてVisual C++ 2010に対応します。



参照

.....

詳細は、“インストールガイド(クライアント編)”の“関連ソフトウェア”を参照してください。

.....

.NET Framework 4対応

Windows(R)のSymfoware Server クライアント機能の開発環境として.NET Framework 4に対応します。



参照

.....

詳細は、“インストールガイド(クライアント編)”の“関連ソフトウェア”を参照してください。

.....

Office 2010対応

Windows(R)のSymfoware Server クライアント機能の開発環境としてOffice 2010に対応します。



参照

.....

詳細は、“インストールガイド(クライアント編)”の“関連ソフトウェア”を参照してください。

.....

2.1.3 運用

Symfoware Serverの運用に関する新機能および改善項目について説明します。

- ・ [データベース二重化](#)
- ・ [Connection ManagerのPRIMECLUSTER対応](#)

2.1.3.1 データベース二重化

詳細は、“[1.1.4.1 データベース二重化](#)”を参照してください。

2.1.3.2 Connection ManagerのPRIMECLUSTER対応

詳細は、“[1.1.4.9 Connection ManagerのPRIMECLUSTER対応](#)”を参照してください。

2.1.4 性能

性能に関する新機能について説明します。

- ・ [コミットデータ即時読み込み](#)

2.1.4.1 コミットデータ即時読み込み

詳細は、“[1.1.5.2 コミットデータ即時読み込み](#)”を参照してください。

2.1.5 プラットフォームエンハンス

プラットフォームエンハンスに関する新機能について説明します。

- ・ [サーバの動作OSの追加](#)
- ・ [クライアントの動作OSの追加](#)

2.1.5.1 サーバの動作OSの追加

詳細は、“[1.1.6.1 サーバの動作OSの追加](#)”を参照してください。

2.1.5.2 クライアントの動作OSの追加

Symfoware Server クライアント機能の動作OSとして以下に対応します。

- ・ RHEL6(Intel64)
- ・ RHEL6(x86)



参照

.....
詳細は、“インストールガイド(クライアント編)”の“前提基本ソフトウェア”を参照してください。
.....

2.2 V10.0.0で追加された機能

V10.0.0で追加された新機能および改善項目について説明します。

- ・ [インストール](#)
- ・ [セットアップ](#)
- ・ [アプリケーションの開発](#)
- ・ [運用](#)
- ・ [性能](#)
- ・ [プラットフォームエンハンス](#)

2.2.1 インストール

インストールに関する改善項目について説明します。

- ・ [インストーラ改善](#)

2.2.1.1 インストーラ改善

従来、それぞれ独立していた以下のインストーラを1つに統合しました。

- ・ Symfoware Server サーバ機能
- ・ Symfoware Server Advanced Backup Controller

これにより、最小限の選択、確認でインストールを行うことができます。



参照

.....
詳細は、“インストールガイド(サーバ編)”を参照してください。
.....

2.2.2 セットアップ

セットアップに関する新機能および改善項目について説明します。

- ・ [パラメタのデフォルト値](#)
- ・ [JDBCドライバ利用時の動作環境設定](#)

2.2.2.1 パラメタのデフォルト値

詳細は、“[1.1.2.1 パラメタのデフォルト値](#)”を参照してください。

2.2.2.2 JDBCドライバ利用時の動作環境設定

詳細は、“[1.1.2.2 JDBCドライバ利用時の動作環境設定](#)”を参照してください。

2.2.3 アプリケーションの開発

アプリケーション開発に関する新機能について説明します。

- ・ [XMLアプリケーション](#)
- ・ [CまたはCOBOLアプリケーション](#)
- ・ [Javaアプリケーション](#)
- ・ [ODBC対応アプリケーション](#)
- ・ [.NET Data Provider対応アプリケーション](#)
- ・ [SQL文](#)
- ・ [トランザクションモニタとの連携](#)
- ・ [アプリケーション開発環境](#)

2.2.3.1 XMLアプリケーション

詳細は、“[1.1.3.1 XMLアプリケーション](#)”を参照してください。

2.2.3.2 CまたはCOBOLアプリケーション

詳細は、“[1.1.3.2 CまたはCOBOLアプリケーション](#)”を参照してください。

2.2.3.3 Javaアプリケーション

詳細は、“[1.1.3.3 Javaアプリケーション](#)”を参照してください。

2.2.3.4 ODBC対応アプリケーション

詳細は、“[1.1.3.4 ODBC対応アプリケーション](#)”を参照してください。

2.2.3.5 .NET Data Provider対応アプリケーション

詳細は、“[1.1.3.5 .NET Data Provider対応アプリケーション](#)”を参照してください。

2.2.3.6 SQL文

SQL文における新機能および改善項目について説明します。

- ・ [INSERT文のVALUES句への値式サポート](#)

INSERT文のVALUES句への値式サポート

INSERT文のVALUES句に値式を指定できるようになりました。

これにより、SQL文中でデータを加工してからデータベースにデータを挿入を更新できるようになるため、データ加工処理を標準化したり、アプリケーションの処理を簡素化することができます。



参照

.....
詳細は、“SQLリファレンス”の“INSERT文”を参照してください。
.....

2.2.3.7 トランザクションモニタとの連携

詳細は、“[1.1.3.7 トランザクションモニタとの連携](#)”を参照してください。

2.2.3.8 アプリケーション開発環境

アプリケーション開発環境における新機能について説明します。

- Visual Studio 2008
- .NET Framework 3.5
- Office 2007

Visual Studio 2008

Windows(R)のSymfoware Server クライアント機能の開発環境としてVisual Studio 2008に対応します。



参照

.....
詳細は、“インストールガイド(クライアント編)”の“関連ソフトウェア”を参照してください。
.....

.NET Framework 3.5

Windows(R)のSymfoware Server クライアント機能の開発環境として.NET Framework 3.5に対応します。



参照

.....
詳細は、“インストールガイド(クライアント編)”の“関連ソフトウェア”を参照してください。
.....

Office 2007

Windows(R)のSymfoware Server クライアント機能の開発環境としてOffice 2007に対応します。



参照

.....
詳細は、“インストールガイド(クライアント編)”の“関連ソフトウェア”を参照してください。
.....

2.2.4 運用

Symfoware Serverの運用に関する新機能および改善項目について説明します。

- データベース構築の簡易化
- [rdbexecsql](#)コマンドのSQL文実行エラーの切分け

- [rdbexecsqlコマンドの実行結果の出力改善](#)
- システム表の追加
- [JIS2004対応](#)

2.2.4.1 データベース構築の簡易化

詳細は、“[1.1.4.4 データベース構築の簡易化](#)”を参照してください。

2.2.4.2 rdbexecsqlコマンドのSQL文実行エラーの切分け

詳細は、“[1.1.4.5 rdbexecsqlコマンドのSQL文実行エラーの切分け](#)”を参照してください。

2.2.4.3 rdbexecsqlコマンドの実行結果の出力改善

詳細は、“[1.1.4.6 rdbexecsqlコマンドの実行結果の出力改善](#)”を参照してください。

2.2.4.4 システム表の追加

詳細は、“[1.1.4.7 システム表の追加](#)”を参照してください。

2.2.4.5 JIS2004対応

詳細は、“[1.1.4.8 JIS2004対応](#)”を参照してください。

2.2.5 性能

性能に関する新機能について説明します。

- [ASSIST指定](#)
- [ROWNUMのサポート](#)

2.2.5.1 ASSIST指定

詳細は、“[1.1.5.1 ASSIST指定](#)”を参照してください。

2.2.5.2 ROWNUMのサポート

詳細は、“[1.1.5.3 ROWNUMのサポート](#)”を参照してください。

2.2.6 プラットフォームエンハンス

プラットフォームエンハンスに関する新機能について説明します。

- [2.2.6.1 クライアントの動作OSの追加](#)

2.2.6.1 クライアントの動作OSの追加

Symfoware Server クライアント機能の動作OSとして以下に対応します。

- Windows Server(R) 2008
- Windows Server(R) 2008 R2
- Windows(R) 7



参照

詳細は、“インストールガイド(クライアント編)”の“前提基本ソフトウェア”を参照してください。

第3章 互換に関する情報

旧バージョンレベルから変更した機能において、非互換項目と対処方法について説明します。

表3.1 バージョンレベル別非互換項目の参照先

項目	移行前のバージョンレベル							
	V5.0L10	V6.0L10	V7.0L10	8.0.x	9.0.x	9.1.0	9.2.0	V10.0.0
コンソールへのメッセージ出力の抑止	○	○	○	○	○	○	○	○
SQL文の制限値エラー通知	○	○	○	○	○	○	○	○
Connection ManagerとSymfware/RDB 間連携時の不要メッセージ出力	○	○	○	○	○	○	○	○
トランザクションを超越するカーソルのエ ラー抑止	—	○	○	○	○	○	○	○
パラメタの省略値	○	○	○	○	○	○	○	—
XAインタフェースの接続方式の変更	○	○	○	○	○	○	○	—
RDBディクショナリの使用量	○	○	○	○	○	○	○	—
ポート番号の指定範囲の変更	○	○	○	○	○	○	○	—
リモートアクセスでの利用者認証	○	○	○	○	○	○	○	—
RDBNAME未設定時のエラーメッセージ	○	○	○	○	○	○	○	—
RDB構成パラメタファイルのひな型ファ イル名の変更	○	○	○	○	○	○	○	—
JDBCデータソース定義の簡素化	○	○	○	○	○	○	○	—
アプリケーションの予約語のレベルの変更	○	○	○	○	○	○	○	—
DatabaseMetaDataクラス、 ResultSetMetaDataクラスの未サポート APIのサポート	○	○	○	○	○	○	○	—
WebAdmin/WebDBtoolsで使用するポー ト番号	○	○	○	○	○	○	○	—
SQLGetInfo関数の仕様変更	○	○	○	○	○	○	○	—
SQLTables関数の仕様変更	○	○	○	○	○	○	○	—
非活性状態のインデックスDSIの参照	○	○	○	○	○	○	—	—
アクセスプランへのデフォルトでのアドバ イス出力	○	○	○	○	○	○	—	—
パフォーマンスモニタでのアドバイス出力	—	—	—	—	○	○	—	—
DSI定義での動的容量拡張定義指定	○	○	○	○	○	—	—	—
ODBC連携時のトランザクション独立性水 準の初期値変更	○	○	○	○	○	—	—	—
LIKE述語の構文解析時に出力される JYPメッセージの内容変更	○	○	○	○	○	—	—	—
rdbstopコマンドのmcオプションによるコマ ンドの強制停止	○	○	○	○	○	—	—	—
Connection Managerの通信機構の変更	○	○	○	○	○	—	—	—
rdbprtコマンド	○	○	○	○ (注)	—	—	—	—

項目	移行前のバージョンレベル							
	V5.0L10	V6.0L10	V7.0L10	8.0.x	9.0.x	9.1.0	9.2.0	V10.0.0
リカバリポイントの自動設定	○	○	○	○	—	—	—	—
rdbugsコマンド実行時のRDBディクショナリ使用量	○	○	○	○	—	—	—	—
rdbmrdmpコマンド	○	○	○	○	—	—	—	—
rdbmrintfコマンド	○	○	○	○	—	—	—	—
rdbauditコマンド	○	○	○	○	—	—	—	—
各国語文字列型への半角カタカナ格納のエラー通知	○	○	○	○	—	—	—	—
JDBCドライバ使用時のLD_PRELOAD環境変数廃止	○	○	○	○	—	—	—	—
アプリケーションインタフェースの変更	○	○	○	○	—	—	—	—
文字コード系の指定方法の変更	○	○	○	—	—	—	—	—
rdbrcvコマンド	○	○	○	—	—	—	—	—
rdbexecsqlコマンドの独立性水準	○	○	○	—	—	—	—	—
アプリケーションのロケールの指定方法の変更	○	○	—	—	—	—	—	—
コード変換機能(iconv)の組込み	○	○	—	—	—	—	—	—
インデックス検索の適用拡大	○	○	—	—	—	—	—	—
rdbsloader、rdbsaloder、rdbsuloderコマンド	○	○	—	—	—	—	—	—
JDBCトレースの採取方法の変更	○	○	—	—	—	—	—	—
GROUP BY句を指定した導出表を含むSQL文の探索条件の判定タイミングの変更	○	○	—	—	—	—	—	—
列名の大文字および小文字の扱いの変更	○	—	—	—	—	—	—	—
ACCESS_PLANの変更	○	—	—	—	—	—	—	—
getObjectメソッドの仕様変更	○	—	—	—	—	—	—	—
getLongメソッドの仕様変更	○	—	—	—	—	—	—	—
定義長よりも長いデータの扱いの変更	○	—	—	—	—	—	—	—
ジョイン順の変更	○	—	—	—	—	—	—	—

○：非互換あり

—：非互換なし

注) Symfoware Server Enterprise Extended Editionの場合は8.0.0および8.0.1、Symfoware Server Enterprise EditionおよびSymfoware Server Standard Editionの場合は8.0.0の場合に参照してください。

3.1 コンソールへのメッセージ出力の抑止

変更内容

メッセージの出力先が変更になりました。

非互換

従来はシステムコンソールに出力されていたメッセージが、システムコンソールに出力されなくなります。

対処方法

- **Symfoware Server**のメッセージを参照する場合
システムログのメッセージ、または**RDB構成パラメタファイル**の**RDBREPORT**で指定したメッセージログファイルを参照してください。
- **Connection Manager**のメッセージを参照する場合
システムログのメッセージを参照してください。

3.2 SQL文の制限値エラー通知

変更内容

V10.0.0以前

制限値を超える資源を指定したSQL文を実行すると、Symfware/RDBがダウンまたは無応答となる場合があります(P番号P805588により修正されており、これを含む緊急修正を適用していない場合に該当します)。

V10.1.0以降

システム用の動作環境ファイルの以下の制限値チェックパラメタにONを指定することにより、制限値を超える資源を指定したSQL文を実行した場合にエラーを通知します。指定を省略した場合はOFFが指定されたとみなします。

なお、パラメタ変更後はSymfoware/RDBの再起動が必要です。

MAX_UNION

MAX_UNION = ({ON | OFF})

ON:

1つのSQL文に指定したUNIONの数が定量制限値(64個)を超えた場合、以下のエラーメッセージを出力します。

“JYP8940E 問合せ式に指定された問合せ項の数が制限値“64”を超えています。”

OFF:

制限値のエラー通知を行いません。

MAX JOINED TABLE

MAX JOINED TABLE=({ON|OFF})

ON:

FROM句の1つの表参照に指定した、結合表の入れ子の数が定量制限値(128個)を超えた場合、以下のエラーメッセージを出力します。

“JYP8987E：表参照に指定された結合表の数が制限値“128”を超えています。”

OFF:

制限値のエラー通知を行いません。

MAX FUNCTION

MAX FUNCTION= ({ON|OFF})

ON:

1つの値式に指定した関数の入れ子の数、または演算式の数が定量制限値(128個)を超えた場合、以下のエラーメッセージを出力します。

“JYP8988E：値式に指定された関数または演算式の数が増え制限値“128”を超えています。”

OFF:

制限値のエラー通知を行いません。

非互換

制限値チェックパラメタにONを指定した場合、制限値を超える資源を指定したSQL文を実行すると、従来正常終了していたものがエラー通知されるようになります。

対処方法

制限値チェックパラメタを省略または制限値チェックパラメタにOFFを指定した場合は、従来の動作を保証します。

ただし、Symfoware/RDBがダウンまたは無応答となる場合があります。

3.3 Connection Manager連携時の不要メッセージ出力の抑止

変更内容

Connection Manager連携時、Connection ManagerまたはSymfoware/RDBのいずれか一方を正常停止した場合のメッセージ出力を行わなくなりました。

非互換

データベースサーバとアプリケーションサーバの組合せにより、以下の事象が発生します。

		アプリケーションサーバ		
		V10.0.0以前 PG72943 適用なし	V10.0.0以前 PG72943 適用あり	V10.1.0以降
データ ベース サーバ	V10.0.0以前 PG72943 適用なし	現象1	現象2	現象2
	V10.0.0以前 PG72943 適用あり	現象3	現象4	現象4
	V10.1.0以降	現象3	現象4	現象4

【現象1】

データベースサーバとアプリケーションサーバの両方にPG72943が適用されていない場合、以下のようになります。

Symfoware/RDBを正常停止した場合、アプリケーションサーバのシステムログファイルに以下のメッセージが出力されます。

apc00022e : Heartbeat connection closed by foreign host. IPaddress=s* PortNumber=d*

s*:RDBシステムのIPアドレス

d*:相互ダウン監視通信のポート番号

Connection Managerを正常停止した場合、データベースサーバのシステムログファイルに以下のメッセージが出力されます。

apc01015e : Heartbeat connection closed by foreign host. IPaddress=s*

s*:APCシステムのIPアドレス

【現象2】

アプリケーションサーバのみPG72943が適用されていて、Connection Managerを正常停止した場合、データベースサーバのシステムログファイルに以下のメッセージが出力されます。

```
apc01019e : Heartbeat message format error. IPaddress=s* message=' t*' u*
```

s*:APCシステムのIPアドレス
t*:受信メッセージ内容(16進)
u*:RDBシステム名

【現象3】

データベースサーバのみPG72943が適用されていて、Symfoware/RDBを正常停止した場合、アプリケーションサーバのシステムログファイルに以下のメッセージが出力されます。

```
apc00026e : Heartbeat message format error. IPaddress=s* PortNumber=d* message=' t*' u*
```

s*:RDBシステムのIPアドレス
d*:相互ダウン監視通信のポート番号
t*:受信メッセージ内容(16進)

【現象4】

Connection ManagerとSymfoware/RDB間の相互監視プロセス処理において、Connection Managerを正常停止した場合、各RDBシステムに正常停止を通知します。また、Symfoware/RDBを正常停止した場合は、Connection Managerに正常停止を通知します。正常停止した旨を相互に通信することで、正常停止か否かの判断を行い、正常停止時にはメッセージ出力を行いません。

対処方法

データベースサーバおよびアプリケーションサーバの両方にPG72943が適用された状態にしてください。

PG72943の修正が提供されていない製品を使用している場合は、PG72943の適用ができませんが、不要なメッセージが出力されるのみで、業務に影響はありません。

3.4 トランザクションを超越するカーソルのエラー抑止

変更内容

トランザクションを超越するカーソルのオープン中にrdbexdsiコマンドが実行されても、アプリケーションが正常に動作するようになります。

ただし、トランザクションを終了した時点でカーソルを位置づけている行のDSIが、rdbexdsiコマンドによりSQL処理の対象から除外された場合は、従来どおりアプリケーションにエラーが通知されます。

非互換

トランザクションを超越するカーソルのオープン中にrdbexdsiコマンドが実行された場合の、アプリケーションの振る舞いが以下のように変更になります。

rdbexdsiコマンドの対象DSI		アプリケーションの振る舞い	
		V10.0.0以前	V10.1.0以降
トランザクションを超越するカーソルで参照する表のDSI	トランザクション終了時にカーソルを位置づけている行のDSI	エラー	エラー
	トランザクション終了時にカーソルを位置づけている行のDSIと異なるDSI		正常動作
トランザクションを超越するカーソルで参照しない表のDSI			

対処方法

対処は不要です。

ただし、`rdbexdsi`コマンドによるDSIの除外または除外の解除は、アプリケーションの次のトランザクションから有効になるので、トランザクションを終了していない場合は以下の注意が必要です。

- トランザクション実行中に`rdbexdsi`コマンドでDSIが除外されても、そのDSIに含まれる行が検索結果に含まれる場合があります。
- トランザクション実行中に`rdbexdsi`コマンドでDSIの除外を解除しても、そのDSIに含まれる行が検索結果に含まれない場合があります。

3.5 パラメタの省略値

変更内容

パラメタの設定方法には、以下の2つがあります。

- WebAdminによる設定
- 各種パラメタファイルの直接編集

それぞれの設定方法によってパラメタの省略値が異なります。また、同じ設定方法でもSymfoware Serverのバージョンレベルによっては、省略値が異なるパラメタがあります。

設定方法およびSymfoware Serverのバージョンレベルの違いで、省略値が異なるパラメタを説明します。

WebAdminによる設定

WebAdminを利用して設定する場合、バージョンレベルによって設定される値が異なります。

8.0.1以前

Symfoware Serverの各エディションに応じて省略値が設定されます。

9.0.0以降

規模の指定に応じて省略値が設定されます。

以下に設定される省略値を示します。

表3.2 WebAdminが設定するパラメタの省略値

パラメタの種類	パラメタ名	WebAdminが設定するパラメタの値							
		8.0.1以前		9.x			V10.0.0以降		
		EEEまたはEE	SE	大規模	中規模	小規模	大規模	中規模	小規模
RDB構成パラメタファイル	RDBLOG	自動設定							
		512,512	256,256	512,512		256,256	512,512		256,256
	RDBEXTMEM	13208	6332	42224	13208	7124	42224	13208	7124
	RDBCNTNUM	712	328	2200	712	400	2200	712	400
	RDBSYSBUF	/opt/FJSVrdb2b/etc/RDBシステム名							
	RDBSQLENV	/opt/FJSVrdb2b/etc/RDBシステム名.env							
	RDBDBSNUM	32	16	64	32	16	64	32	16
	RDBNETDBSNUM	32	16	64	32	16	64	32	16
	RDBLOGMANAGE	WebAdmin内で指定							
	RDBSYSTEMID	自動設定							

パラメタの種類	パラメタ名	WebAdminが設定するパラメタの値							
		8.0.1以前		9.x			V10.0.0以降		
		EEEまたはEE	SE	大規模	中規模	小規模	大規模	中規模	小規模
	RDBREPORT	WebAdmin内で指定							
	RDBREPORTSIZE	10485760							
	RDBBPM	RDBBPMパラメタ未サポート		WebAdmin内で指定					
	RDBLOGGROUPLANAGE	WebAdminでは未サポート		WebAdmin内で指定(運用フラグはSCLDIR_NOUSEに相当)					
システム用の動作環境ファイル	COMMUNICATION_BUFFER	32							
	MAX_CONNECTSYS	256	100	1000	256	100	1000	256	100
	MAX_CONNECTTCP	256	100	1000	256	100	1000	256	100
	WORK_MEM_SIZE	128							
	DEFAULT_INDEX_SIZE	4,4,168,32,256,0					8,8,30720,10240,10240,0		
	DEFAULT_TABLE_SIZE	32,256,512,0					32,30720,10240,0		
	TEMPORARY_INDEX_SIZE	160,64,256,0							
	TEMPORARY_TABLE_SIZE	256,512,0							
	R_LOCK	YES							
	READ_ERROR_INHIBIT	パラメタを設定しない(YESに相当)					パラメタを設定しない(NOに相当)		
	DEFAULT_ISOLATION	DEFAULT_ISOLATIONパラメタ未サポート		パラメタを設定しない(REPEATABLE_READに相当)					
	JOIN_ORDER	AUTO							
	USQL_LOCK	EX							
	ARC_FULL	RETURN							
デフォルトの共用バッファ定義ファイル	BUFFER1K	1040	520	2080	1040	520	2080	1040	520
	BUFFER2K	1040	520	2080	1040	520	2080	1040	520
	BUFFER4K	1040	520	8634	4317	2158	8634	4317	2158
	BUFFER8K	1040	520	8634	4317	2158	8634	4317	2158
	BUFFER16K	1040	520	8634	4317	2158	8634	4317	2158
	BUFFER32K	1040	520	8634	4317	2158	8634	4317	2158

各種パラメタファイルの直接編集

各種パラメタファイルを直接編集する場合、省略可能なパラメタを省略したときは、Symfoware Serverが以下の省略値を設定します。

表3.3 各種パラメタファイルを直接編集する場合のパラメタの省略値

パラメタの種類	パラメタ名	各種パラメタファイルを直接編集する場合のパラメタの省略値	
		9.2.0以前	V10.0.0以降
RDB構成 パラメタファイル	RDBLOG	省略不可	512,512
	RDBEXTMEM	省略不可	13208
	RDBCNTNUM	128	712
	RDBSYSBUF	/opt/FJSVrdb2b/etc	
	RDBSQLENV	省略不可	
	RDBDBSNUM	3	32
	RDBNETDBSNUM	3	32
	RDBLOGMANAGE	マルチRDBシステムの場合、またはログ管理ファイルをローデバ イスに配置する場合、省略不可	
	RDBSYSTEMID	マルチRDBシステムの場合、省略不可	
	RDBREPORT	メッセージログファイルの出力なし	
	RDBREPORTSIZE	10485760(8.0.0以前は65535)	
	RDBPM	パフォーマンスモニタを利用しない	
	RDBLOGGROUPMANA GE	SCLDIR_NOUSE	
システム用 の動作環 境ファイル	COMMUNICATION_BU FFER	1	32
	MAX_CONNECT_SYS	20	256
	MAX_CONNECT_TCP	0	・ RDB2_TCP連携で使用するポート番号を定義している場合: 256 ・ RDB2_TCP連携で使用するポート番号を定義していない場合: 0
	WORK_MEM_SIZE	64	128
	DEFAULT_INDEX_SIZE	2,2,168,32,32,0	8,8,30720,10240,10240,0
	DEFAULT_TABLE_SIZE	4,256,64,0	32,30720,10240,0
	TEMPORARY_INDEX_S IZE	160,64,32,0	160,64,256,0
	TEMPORARY_TABLE_S IZE	256,32,0	256,512,0
	R_LOCK	NO	YES(ただし、クライアント用およびサーバ用の動作環境ファイルのDSO_LOCKを指定した場合はNO)
	READ_ERROR_INHIBIT	YES	NO
	DEFAULT_ISOLATION	SERIALIZABLE	
	JOIN_ORDER	INSIDE	
	USQL_LOCK	SH	
	ARC_FULL	WAIT	RETURN

パラメタの種類	パラメタ名	各種パラメタファイルを直接編集する場合のパラメタの省略値	
		9.2.0以前	V10.0.0以降
デフォルトの共用バッファ定義ファイル	BUFFER1K	32	32
	BUFFER2K	32	32
	BUFFER4K	256	256
	BUFFER8K	32	32
	BUFFER16K	32	32
	BUFFER32K	32	32

表3.4 アプリケーションのパラメタの省略値

アプリケーションの種類	パラメタの種類	パラメタ名	パラメタの省略値	
			9.2.0以前	V10.0.0以降
埋込みSQL	クライアント用動作環境ファイル	MAX_SQL	32	1024
		OPL_BUFFER_SIZE	256	8192
		SQL_LEVEL	SQL2000	SQL2007
JDBCドライバ	データソースのオプション情報設定	最大コネクション数	4	256
		最大プールコネクション数	4	256

表3.5 環境変数のパラメタの省略値

環境変数名	パラメタの省略値	
	9.2.0以前	V10.0.0以降
RDBLSQL	SQL2000	SQL2007
RDBODBIX	2,2,168,32,32,0	8,8,30720,10240,10240,0
RDBODBTB	4,256,64,0	32,30720,10240,0
RDBRLOCK	NO	YES
RDBWMEM	64	128

非互換

パラメタの設定方法によってパラメタの省略値が異なります。また、同じ設定方法でもSymfoware Serverのバージョンレベルによっては、省略値が異なるパラメタがあります。

対処方法

以前の環境と同一のRDBシステムをセットアップしたい場合は、省略値の異なるパラメタを確認し、パラメタの値をチューニングしてください。

3.6 XAインタフェースの接続方式の変更

変更内容

XAインタフェースを利用した埋込みSQLのアプリケーションからのSymfoware/RDBへの接続方式が以下のとおり変更となります。

- ・ 9.2.0以前:システム内通信

- ・ V10.0.0以降:RDB2_TCP接続

非互換

従来の環境では、XAインタフェースを利用した埋込みSQLのアプリケーションからSymfoware/RDBに接続することができません。

対処方法

Symfoware/RDBの設定と、Symfoware/RDBが動作している環境と同じ環境で動作しているInterstage Application Serverの設定を変更する必要があります。

XAインタフェースを利用しているか否かの確認は、以下のInterstage Application Serverのコマンドで行ってください。

```
otssetrsc -l
```

コマンドの実行結果としてリソース定義名の一覧が出力された場合、そのシステムでXAインタフェースを利用しているため、Symfoware/RDBとInterstage Application Serverの設定を変更してください。

Symfoware/RDBの設定変更手順

以下の手順でSymfoware/RDBの設定を変更してください。

1. システム用の動作環境ファイルのMAX_CONNECT_TCPパラメタの現在値にMAX_CONNECT_SYSパラメタの値を加算してください。



MAX_CONNECT_TCPパラメタの現在値の確認方法は“アプリケーション開発ガイド(共通編)”の“コネクションの動作環境のパラメタ設定情報(一括出力)”を参照してください。

2. MAX_CONNECT_TCPパラメタが定義されていない場合は、MAX_CONNECT_TCPパラメタを定義し、MAX_CONNECT_SYSパラメタの値を設定してください。
3. Symfoware/RDBが動作している環境のservicesファイルに、アプリケーションからSymfoware/RDBに接続するためのポート番号を設定してください。

Interstage Application Serverの設定変更手順

データベース連携サービスに登録されているリソース定義とXAインタフェースを利用しているCORBAアプリケーションについて、以下の設定を行ってください。

- ー 環境変数SQLRTENVの設定を追加
- ー クライアント用の動作環境ファイルにSERVER_SPECパラメタを追加

リソース定義に関する設定

リソース定義に関する設定の変更手順を説明します。

リソース定義ファイルに環境変数SQLRTENVの設定を追加

1. 以下のコマンドを実行して、リソース定義名の一覧を取得します。

```
otssetrsc -l
```

2. 以下のコマンドを実行して、リソース定義の内容を出力します。

```
otssetrsc -l -n <リソース定義名>
```

出力された内容を確認し、環境変数SQLRTENVが設定されていないリソース定義を特定します。
また、以下のオープン文字列に設定されているSQLサーバ名も確認します。SQLサーバ名は、クライアント用の動作環境ファイルの設定時に必要な情報です。

```
OPENINFO=TO <SQLサーバ名> USER <ユーザ名>/<パスワード>
```

3. クライアント用の動作環境ファイルを任意のパスに作成します。

4. 環境変数SQLRTENVが設定されていないリソース定義について、リソース定義の内容を任意のテキストファイルに保存し、最終行に以下の一行を追加します。

```
ENVIRON SQLRTENV=<手順3で作成したクライアント用の動作環境ファイルの絶対パス>
```

5. 以下のコマンドを実行してリソース管理プログラムを停止します。

```
otsstoprsc -n <リソース定義名>
```

6. 以下のコマンドを実行して、環境変数SQLRTENVの設定をリソース定義へ追加してください。

```
otssetrsc -o -rf <手順4で修正したリソース定義ファイルの絶対パス>
```

7. 以下のコマンドを実行してリソース管理プログラムを起動します。

```
otsstartsrc -n <リソース定義名>
```

クライアント用の動作環境ファイルにSERVER_SPECパラメタを追加

環境変数SQLRTENVで指定したクライアント用の動作環境ファイルに、SERVER_SPECパラメタを追加します。SERVER_SPECパラメタには、以下を設定します。

```
SERVER_SPEC=(RDB2_TCP,<リソース定義のオープン文字列で指定しているSQLサーバ名>,<リソース定義のオープン文字列で指定しているSQLサーバ名>,localhost,<ポート番号>)
```

ポート番号には、Symfoware/RDBの設定変更で、servicesファイルに設定したポート番号を指定します。

CORBAアプリケーションの設定

CORBAアプリケーションに関する設定の変更手順を説明します。

XAインタフェースを利用しているCORBAアプリケーションの特定

1. 以下のコマンドを実行して、インプリメンテーションリポジトリに登録されているサーバアプリケーションのインプリメンテーションリポジトリIDの一覧を取得します。

```
OD_impl_inst -p
```

2. 以下のコマンドを実行して、インプリメンテーションリポジトリに登録されているサーバアプリケーションの情報を出力します。

```
OD_impl_inst -p -r <インプリメンテーションリポジトリID>
```

出力された内容を確認し、XAインタフェースを利用しているCORBAアプリケーションを特定します。XAインタフェースを利用しているCORBAアプリケーションの場合には、以下のように、リソースの設定に関する情報が出力されています。

```
data = "RESOURCE:[RM名:]<リソース定義名>"
```

CORBAアプリケーションが配備されているワークユニットの特定

1. 以下のコマンドを実行して、定義登録済みのワークユニット名の一覧を取得します。

```
islistwundef
```

2. 以下のコマンドを実行して、ワークユニットの情報を出力します。

```
isinfwundef <ワークユニット名>
```

出力された内容を確認し、CORBAアプリケーションが配備されているワークユニットを特定します。CORBAアプリケーションが配備されているワークユニットの場合には、以下のように、CORBAアプリケーションのインプリメンテーションリポジトリIDが出力されています。

```
Impl ID:<該当のCORBAアプリケーションのインプリメンテーションリポジトリID>
```

環境変数にSQLRTENVが設定されていないCORBAアプリケーションの特定

1. 以下のコマンドを実行してワークユニットを停止します。

```
isstopwu <ワークユニット名>
```

2. 以下のコマンドを実行してワークユニット定義を表示します。[Control Option]セクション、または、[Application Program]セクションのEnvironment Variableに記載されている“環境変数”を確認し、環境変数にSQLRTENVが設定されていないCORBAアプリケーションを特定します。

```
isinfwudef <ワークユニット名>
```

CORBAアプリケーションの環境変数にSQLRTENVの設定を追加

1. クライアント用の動作環境ファイルを任意のパスに作成します。
2. 以下のコマンドを実行してワークユニット定義をファイルに出力します。

```
isinfwudef <ワークユニット名><ワークユニット名>.txt
```

3. 手順2で出力したワークユニット定義ファイルの[Control Option]セクション、または、[Application Program]セクションのEnvironment Variableに以下を追加します。

```
SQLRTENV=<手順1で作成したクライアント用の動作環境ファイルの絶対パス>
```

4. 以下のコマンドを実行してワークユニット定義を更新します。

```
isaddwudef -o <手順3で修正したワークユニット定義ファイルの絶対パス>
```

5. 停止していたワークユニットを下のコマンドを実行してワークユニットを起動します。

```
isstartwu <ワークユニット名>
```

クライアント用の動作環境ファイルにSERVER_SPECパラメタを追加

環境変数SQLRTENVで指定したクライアント用の動作環境ファイルに、SERVER_SPECパラメタを追加します。SERVER_SPECパラメタには、以下を設定します。

```
SERVER_SPEC=(RDB2_TCP, <該当のCORBAアプリケーションに設定されているリソース定義のオープン文字列で指定しているSQLサーバ名>, <該当のCORBAアプリケーションに設定されているリソース定義のオープン文字列で指定しているSQLサーバ名>, localhost, <ポート番号>)
```

ポート番号には、Symfoware/RDBの設定変更で、servicesファイルに設定したポート番号を指定します。

CORBAアプリケーションに設定されているリソース定義のオープン文字列は、リソース定義の中で以下の形式で記述されています。

```
OPENINFO=<オープン文字列>
```

3.7 RDBディクショナリ使用量

変更内容

V10.0.0以降では、システム表の拡張により、RDBディクショナリのサイズが表資源数×1バイト増加します。

非互換

RDBディクショナリのサイズが異なります。

対処方法

表資源数×1バイトの増加を見込み、RDBディクショナリの使用量の増加に伴う影響がないかを確認してください。必要であればRDBディクショナリのサイズを見直して変更してください。

3.8 ポート番号の指定範囲の変更

変更内容

V10.0.0以降では、ポート番号を定義する以下の5つのシーンにおいて、ポート番号の指定範囲を1024～49151に変更します。

本製品としてはOSや他の製品が自動採番したポート番号と重複するのを避けるため、1024～32767の範囲を推奨します。

- WebAdmin、WebDBtoolで使用するポート番号
- RDB2_TCP通信で使用するポート番号
- Connection Managerのダウン監視プロセスで使用するポート番号
- JDBCのネーミングサービスで使用するポート番号
- ロードシェア運用のRDBシステム間通信で使用するポート番号

また、JDBCのネーミングサービスで使用するデフォルトポート番号を変更します。

非互換

- 以下のGUI画面で、ポート番号に1～1023および49152～65535を指定した場合、エラーメッセージを出力します。
 - WebAdmin/WebDBtoolsによるRDBシステム作成 - 構成・環境画面
 - PCクライアントインストール時に表示するGUI画面
 - Symfoware Serverインストール時のWebAdmin/WebDBtoolsのセットアップ画面
- 以下のコマンド(CUI)実行時にポート番号に1～1023および49152～65535を指定した場合、エラーメッセージを出力します。
 - symjddfnfs
 - `java com.fujitsu.symfoware.jdbc2.naming.SYMNameService [<port_no>]`
- JDBC3.x対応ドライバおよびJDBC4.x対応ドライバ利用時に、JDBCのネーミングサービスで使用する以下のデフォルトポート番号を、“10326”から“26600”に変更します。
 - PCクライアントインストール時に設定するJDBCのネーミングサービスのポート番号
 - JDBCドライバのsymjddfnfsコマンド(CUI)で登録するポート番号
 - Javaコマンドで起動するネーミングサービスのポート番号



PCクライアント利用時は、以下の点に注意してください。

- Windows(R) 2000、Windows(R) XPまたはWindows Server(R) 2003の場合
9.2.0以前にWindowsサービスにJDBCのネーミングサービスのポート番号をデフォルトを使用して登録していた場合に、JDBC3.x対応ドライバおよびJDBC4.x対応ドライバを利用する場合は、JDBCのネーミングサービスのポート番号が26600で起動されます。ただし、ポート番号を1～5000および49152～65535を登録していた場合は、JDBCのネーミングサービスが起動できなくなります。ポート番号を5001～49151に変更して、WindowsサービスにJDBCのネーミングサービスを再登録してください。
- Windows Vista(R)、Windows(R) 7、Windows Server(R) 2008またはWindows Server(R) 2008 R2の場合
9.2.0以前にWindowsサービスにJDBCのネーミングサービスのポート番号をデフォルトを使用して登録していた場合に、JDBC3.x対応ドライバおよびJDBC4.x対応ドライバを利用する場合は、JDBCのネーミングサービスのポート番号が26600で起動されます。ただし、ポート番号を1～1023および49152～65535を登録していた場合は、JDBCのネーミングサービスが起動できなくなります。ポート番号を1024～49151に変更して、WindowsサービスにJDBCのネーミングサービスを再登録してください。

対処方法

/etc/servicesファイルを参照し、OSや他の製品が使用するポート番号を調査し、1024～32767の範囲で未使用の値を設定してください。

アップグレードインストールの場合は、RDBシステムの中でポート番号に1～1023および32768～65535を使用している可能性があります。設定内容を確認して、1024～32767の範囲で未使用の値に変更してください。

RDB2_TCP通信で使用するポート番号およびJDBCのネーミングサービスで使用するポート番号の変更に合わせて、アプリケーションサーバで設定している接続先のポート番号を変更してください。

3.9 リモートアクセスでの利用者認証

変更内容

9.2.0以前

リモートアクセスの場合は、ユーザIDおよびパスワードの指定が必要でした。

V10.0.0以降

サーバとクライアントが同一マシンに存在する場合、リモートアクセスで接続先ホスト名に自端末のIPアドレス、自端末のホスト名、“localhost”またはループバックアドレスを指定した場合は、ユーザIDおよびパスワードの指定が不要となりました。

非互換

リモートアクセスで接続先ホスト名に自端末のIPアドレス、自端末のホスト名、“localhost”またはループバックアドレスを指定した場合は、従来必要であったユーザIDおよびパスワードの指定が不要となります。

なお、ユーザIDおよびパスワードを省略した場合、ユーザIDとしてOSのログイン名が指定されたとみなします。

対処方法

対処は不要です。

3.10 RDBNAME未設定時のエラーメッセージ

変更内容

RDBシステム名を設定して運用している環境で、環境変数RDBNAMEが未設定の場合に出力されるエラーメッセージが変更になりました。

9.2.0以前

qdg02250u

```
qdg02250u
RDBIIが未起動のため's*' コマンドは実行できません t*
[メッセージの意味]
Symfoware/RDBが未起動のためコマンドは実行できません。
[パラメタの意味]
s*: RDBコマンド
t*: RDBシステム名
RDBシステム名はマルチRDBの場合のみ出力されます。
[システムの処理]
このコマンドの処理を中止します。
[利用者の処置]
Symfoware/RDBを起動して、再実行してください。
```

qdg12118u

```
qdg12118u
RDBIIシステム名に誤りがあります s*
```

[メッセージの意味]
RDBシステム名に誤りがあります。

[パラメタの意味]
s*: RDBシステム名
RDBシステム名はマルチRDBの場合のみ出力されます。

[システムの処理]
処理を中止します。

[利用者の処置]
正しいシステム名を指定して、再度実行してください。

V10.0.0以降

qdg02250u

qdg02250u
Symfware/RDBが未起動または環境変数RDBNAMEが未設定のため's*' コマンドは実行できません t*

[メッセージの意味]
Symfware/RDBが未起動または、環境変数RDBNAMEが未設定のためコマンドは実行できません。

[パラメタの意味]
s*: RDBコマンド
t*: RDBシステム名
RDBシステム名はマルチRDBの場合のみ出力されます。

[システムの処理]
このコマンドの処理を中止します。

[利用者の処置]
RDBシステムが起動していない場合はRDBシステムを起動して、再度実行してください。
環境変数RDBNAMEが設定されていない場合は正しいRDBシステム名を指定して、再度実行してください。

qdg12118u

qdg12118u
環境変数RDBNAMEが設定されていないかまたは環境変数RDBNAMEに指定したRDBシステム名に誤りがあります s*

[メッセージの意味]
環境変数RDBNAMEが設定されていないか、環境変数RDBNAMEに指定したRDBシステム名に誤りがあるか、またはRDB構成パラメタファイルが存在しません。

[パラメタの意味]
s*: RDBシステム名
RDBシステム名はマルチRDBの場合のみ出力されます。

[システムの処理]
処理を中止します。

[利用者の処置]
以下のいずれかの処置を実施してください。
〈RDBシステム名を付ける運用の場合〉
環境変数RDBNAMEの設定を行っていない場合はRDBシステム名を指定して、再度実行してください。
環境変数RDBNAMEに誤りがある場合は正しいRDBシステム名を指定して、再度実行してください。
上記いずれでもない場合は以下のパスに指定したSymfware/RDBシステムのためのRDB構成パラメタファイルが存在するか確認してください。
/opt/FJSVrdb2b/etc
〈RDBシステム名を付けない運用の場合〉
環境変数RDBNAMEの設定を行っている場合は設定しないようにして、再度実行してください。
環境変数RDBNAMEの設定を行っていない場合は、以下のRDB構成パラメタファイルが存在するか確認してください。
/opt/FJSVrdb2b/etc/rdbsysconfigファイル

非互換

RDBNAME未設定時に出力されるqdg02250u、qdg12118uのメッセージ内容が異なります。また、アプリケーションでメッセージ本文を解析している場合に影響があります。

対処方法

アプリケーションでメッセージ本文を解析している場合は、メッセージIDを解析するよう、アプリケーションを変更してください。

3.11 RDB構成パラメタファイルのひな型ファイル名の変更

変更内容

RDB構成パラメタファイルのひな型ファイル名が以下のように変更になりました。

Symfoware Serverのバージョン	ひな型ファイル名
9.2.0以前	rdbsysconfig
V10.0.0以降	RDBSYS.cfg

非互換

従来使用していたRDB構成パラメタファイルのひな型ファイル(rdbsysconfig)は、使用できません。

対処方法

RDB構成パラメタファイルの新しいひな型ファイル(RDBSYS.cfg)を使用してください。

3.12 JDBCデータソース定義の簡素化

変更内容

V10.0.0以降では、誤操作の抑止を目的に、JDBCデータソース登録ツールのGUI画面において、接続方法のひとつであるRDA-SVを隠蔽し、JDBCデータソース登録における定義を簡素化します。

非互換

画面

以下の画面が変更になります。

- JDBCデータソース情報設定画面
- JDBCデータソース オプション設定画面

JDBCデータソース定義の登録

プロトコルとしてRDA-SV連携を指定したデータソースは登録できません。

JDBCデータソースのオプション情報の設定

データソースのオプションを設定する際に、RDA-SV連携固有の以下のオプションは設定できません。

- クライアントで使用する文字コード
- サーバから1回で読み込むデータの最大長
- サーバから1回の検索で先読みする行数
- サーバからの応答に対する待ち時間

対処方法

RDA-SV利用時にJDBCデータソースを登録、更新または削除する場合には、symjdddefdsコマンドを利用してください。

3.13 アプリケーションの予約語のレベルの変更

変更内容

V10.0.0では、アプリケーションの予約語のレベルの省略値がSQL2007になります。これにともない、V10.0.0以降では、以下の条件をすべて満たす場合、CREATE FUNCTION文で定義したファンクションルーチンが動作しません。

1. 以下の表に示す文字列と同名のファンクションルーチンを定義している

表3.6 対象の文字列

対象の文字列
ACOS
ASIN
ATAN
ATAN2
COS
EXP
LN
POWER
SIGN
SIN
SQRT
TAN
ASCII
OCTET_POSITION
LTRIM
RTRIM
OCTET_SUBSTRING
CHR
CNV_TIME
CNV_TIMESTAMP
XMLQUERY
XMLEXISTS

2. SQL文に上記のファンクションルーチンを指定し、そのルーチン名にスキーマ名修飾を行っていない
3. アプリケーションの予約語のレベルを設定していない、または以下のいずれかで設定している
- 埋込みSQL連携の場合、クライアント用の動作環境ファイルのパラメタSQL_LEVELにSQL2007を指定している
 - Java連携の場合、以下のいずれかで設定している
 - ctuneparamオプションのCLI_SQL_LEVELパラメタに、SQL2007を指定している
 - クライアント用の動作環境ファイルのSQL_LEVELパラメタに、SQL2007を指定している
 - ODBC連携の場合、ODBCデータソースのその他パラメタの、CLI_SQL_LEVELパラメタに、SQL2007を指定している
 - .NET Framework連携の場合、ConnectionStringプロパティのtuneparamキーワードの、SQL_LEVELパラメタに、SQL2007を指定している
 - 環境変数RDBLSQLに、SQL2007を指定している

非互換1

従来正常終了していたSQL文を実行した場合、アプリケーションにエラーメッセージが返却されます。

対処方法1

以下のいずれかの対処を行ってください。

対処1

SQL文に指定した利用者定義のファンクションルーチンにスキーマ名修飾を行ってください。

対処2

以下のいずれかの方法でアプリケーションの予約語のレベルをSQL2000に設定してください。ただし、アプリケーションの予約語のレベルをSQL2000にした場合は、SQL2007でサポートしている機能は利用できません。

- 埋込みSQL連携の場合、クライアント用の動作環境ファイルのSQL_LEVELパラメタに、SQL2000を指定してください。
- Java連携の場合、以下のいずれかの処置を行ってください。
 - ctuneparamオプションのCLI_SQL_LEVELパラメタに、SQL2000を指定してください。
 - クライアント用の動作環境ファイルのSQL_LEVELパラメタに、SQL2000を指定してください。
- ODBC連携の場合、ODBCデータソースのその他パラメタの、CLI_SQL_LEVELパラメタに、SQL2000を指定してください。
- .NET Framework連携の場合、ConnectionStringプロパティのtuneparamキーワードの、SQL_LEVELパラメタに、SQL2000を指定してください。
- 環境変数RDBLSQLに、SQL2000を指定してください。

非互換2

識別子としてROWNUMを指定したSQL文を実行した場合、アプリケーションにエラーメッセージが返却されます。

対処方法2

以下のいずれかの対処を行ってください。

対処1

ROWNUMを二重引用符で囲んで実行してください。

キーワードを二重引用符で囲むことで、キーワードではなく識別子として実行できます。

対処2

以下のいずれかの方法でアプリケーションの予約語のレベルをSQL2000に設定してください。ただし、アプリケーションの予約語のレベルをSQL2000にした場合は、SQL2007でサポートしている機能は利用できません。

- 埋込みSQL連携の場合、クライアント用の動作環境ファイルのSQL_LEVELパラメタに、SQL2000を指定してください。
- Java連携の場合、以下のいずれかの処置を行ってください。
 - ctuneparamオプションのCLI_SQL_LEVELパラメタに、SQL2000を指定してください。
 - クライアント用の動作環境ファイルのSQL_LEVELパラメタに、SQL2000を指定してください。
- ODBC連携の場合、ODBCデータソースのその他パラメタの、CLI_SQL_LEVELパラメタに、SQL2000を指定してください。
- .NET Framework連携の場合、ConnectionStringプロパティのtuneparamキーワードの、SQL_LEVELパラメタに、SQL2000を指定してください。
- 環境変数RDBLSQLに、SQL2000を指定してください。

3.14 DatabaseMetaDataクラス、ResultSetMetaDataクラスの未サポートAPIのサポート

変更内容

fjsymjdbc2.jarにおいて、これまで未サポートとしていた以下のJDBCのAPIをサポートします。

- DatabaseMetaDataクラスの以下のメソッド
 - getCatalogTerm
 - isCatalogAtStart
 - getCatalogSeparator
 - supportsCatalogsInDataManipulation
 - supportsCatalogsInProcedureCalls
 - supportsCatalogsInTableDefinitions
 - supportsCatalogsInIndexDefinitions
 - supportsCatalogsInPrivilegeDefinitions
 - getMaxCatalogNameLength
 - getCatalogs
 - getTableTypes
 - getColumnPrivileges
 - getTablePrivileges
 - getBestRowIdentifier
 - getVersionColumns
 - getImportedKeys
 - getExportedKeys
 - getCrossReference
 - deletesAreDetected
 - insertsAreDetected
 - updatesAreDetected
 - getUDTs
 - othersDeletesAreVisible
 - othersInsertsAreVisible
 - othersUpdatesAreVisible
 - ownDeletesAreVisible
 - ownInsertsAreVisible
 - ownUpdatesAreVisible
 - supportsBatchUpdates
- ResultSetMetaDataクラスの以下のメソッド
 - getCatalogName

非互換

上記APIのサポートに伴い、これまでAPI実行時にSQLExceptionの例外が発生していたものが、例外が発生なくなり、JDBC規約通りに正常に動作するようになります。

対処方法

今回サポートするAPIが既存の動作となる(SQLExceptionの例外となる)ようにするためには、データソースのオプションとして、`metadatacompatible`を設定してください。

指定形式

`metadatacompatible={YES|NO}`

省略時

`metadatacompatible =NO`

パラメタの意味

YES:

上記のAPIを実行時にSQLExceptionの例外が発生するようになります。

NO:

上記のAPIがサポートされ、実行時にSQLExceptionの例外が発生せず、正常に値が返却されるようになります。

オプションの設定方法として、JDBCデータソース登録ツールを使用する場合の例を説明します。`symjddfs`コマンドを使用する場合、`DriverManager`クラスのAPIを使用する場合には、“アプリケーション開発ガイド(JDBCドライバ編)”を参照し、それぞれの方法で、オプションを設定してください。

JDBCデータソース登録ツールを使用する場合

JDBCデータソース情報設定画面の[オプション]ボタンを押し、データソースのオプション情報設定画面を表示し、[その他パラメタ]に、`metadatacompatible`オプションを設定します。

3.15 WebAdmin/WebDBtoolsで使用するポート番号

変更内容

WebAdminで使用するポート番号とWebDBtoolsで使用するポート番号を変更します。

非互換

ポート名		8.0.1以前	9.x系	V10.0.0以降
Webサーバのポート番号 (ブラウザからWebAdmin/WebDBtoolsにアクセスするときに使用します)		14000	54000	26510
WebAdminが内部で使用するポート番号	内部ポート1	9002	54001	26511
	内部ポート2	9003	54002	26512
WebDBtoolsが内部で使用するポート番号	内部ポート1	9000	54003	26513
	内部ポート2	9001	54004	26514

対処方法

`/etc/services`ファイルを参照し、OSや他の製品が使用するポート番号を調査してください。また、OSや他の製品において、`/etc/services`ファイルの記述に関係なく、未使用のポート番号を自動採番してポート番号を使用する、または、製品内の環境ファイルで指定したポート番号を使用することがあります。OSや他の製品が使用するポート番号を調査してください。

9.x以前で使用していたポート番号が使用されていないことを確認した上で、インストールでのWebAdmin/WebDBtoolsのセットアップ、または、手動でのWebAdmin/WebDBtoolsのセットアップで、9.x以前で使用していたポート番号に変更してください。

3.16 SQLGetInfo関数の仕様変更

変更内容

ODBCのSQLGetInfo関数の第2引数にSQL_CATALOG_NAME、およびSQL_MAX_CATALOG_NAME_LENを指定した場合の第3引数の返却値を変更します。

非互換

ODBCのSQLGetInfo関数の第2引数にSQL_CATALOG_NAME、およびSQL_MAX_CATALOG_NAME_LENを指定した場合の第3引数の返却値が以下のように変更になります。

第2引数	第3引数	
	9.2.0以前	V10.0.0以降
SQL_CATALOG_NAME	N	Y
SQL_MAX_CATALOG_NAME_LEN	0	カタログ名の最大長

対処方法

9.2.0 以前と同様の動作としたい場合、ODBC データソースのオプションとして、CLI_SQL_CATALOG_NAME_COMPATIBLEにYESを設定してください。

指定形式

CLI_SQL_CATALOG_NAME_COMPATIBLE={YES NO}
--

省略時

CLI_SQL_CATALOG_NAME_COMPATIBLE=NO

パラメタの意味

YES:

SQLGetInfo関数の第2引数にSQL_CATALOG_NAMEを指定した場合、第3引数のバッファに“N”を返却します。SQLGetInfo関数の第2引数にSQL_MAX_CATALOG_NAME_LENを指定した場合、第3引数のバッファに“0”を返却します。

NO:

SQLGetInfo関数の第2引数にSQL_CATALOG_NAMEを指定した場合、第3引数のバッファに“Y”を返却します。SQLGetInfo関数の第2引数にSQL_MAX_CATALOG_NAME_LENを指定した場合、第3引数のバッファにカタログ名の最大長を返却します。

3.17 SQLTables関数の仕様変更

変更内容

ODBCのSQLTables関数にSQL_ALL_CATALOGS、SQL_ALL_SCHEMAS、およびSQL_ALL_TABLE_TYPESを指定した場合の返却値を変更します。

非互換

ODBCのSQLTables関数にSQL_ALL_CATALOGS、SQL_ALL_SCHEMAS、およびSQL_ALL_TABLE_TYPESを指定した場合の返却値が以下のように変更になります。

第2引数	第4引数	第6引数	第8引数	返却値	
				9.2.0以前	V10.0.0以降
SQL_ALL_CATALOGS	空の文字列	空の文字列	任意	テーブル一覧	カタログ名一覧 カタログ名以外はNULL

第2引数	第4引数	第6引数	第8引数	返却値	
				9.2.0以前	V10.0.0以降
空の文字列	SQL_ALL_SCHEMAS	空の文字列	任意		スキーマ名一覧 スキーマ名以外はNULL
空の文字列	空の文字列	空の文字列	SQL_ALL_TABLE_TYPES		テーブル種別一覧 テーブル種別以外はNULL

備考. SQL_ALL_CATALOGSを指定した場合、V10.0.0以降はカタログ名の重複を排除した結果が返却されます。
SQL_ALL_SCHEMASを指定した場合、V10.0.0以降はスキーマ名の重複を排除した結果が返却されます。
SQL_ALL_TABLE_TYPESを指定した場合、V10.0.0以降はテーブル種別の重複を排除した結果が返却されます。

以下にSQLTables関数にSQL_ALL_CATALOGSを指定してカタログ名一覧を取得する場合の返却値の例を示します。

表3.7 定義した表の一覧

カタログ名	スキーマ名	テーブル名
DB1	S1	T1(実表)
DB1	S1	T2(実表)
DB1	S2	T3(実表)
DB2	S3	T4(ビュー表)

表3.8 9.2.0以前の返却値

TABLE_CATALOG	TABLE_SCHEMA	TABLE_NAME	TABLE_TYPE	REMARKS
DB1	S1	T1	TABLE	NULL
DB1	S1	T2	TABLE	NULL
DB1	S2	T3	TABLE	NULL
DB2	S3	T4	VIEW	NULL

表3.9 V10.0.0以降の返却値

TABLE_CATALOG	TABLE_SCHEMA	TABLE_NAME	TABLE_TYPE	REMARKS
DB1	NULL	NULL	NULL	NULL
DB2	NULL	NULL	NULL	NULL

対処方法

9.2.0以前と同様の動作としたい場合、ODBCデータソースのオプションとして、CLI_SQLTABLES_COMPATIBLEにYESを設定してください。

指定形式

CLI_SQLTABLES_COMPATIBLE={YES NO}

省略時

```
CLI_SQLTABLES_COMPATIBLE=NO
```

パラメタの意味

YES:

SQL_ALL_CATALOGS、SQL_ALL_SCHEMAS、SQL_ALL_TABLE_TYPESを指定した場合、カタログ名、スキーマ名、テーブル名、テーブル種別をすべて返却します。

NO:

SQLTables関数の第2引数にSQL_ALL_CATALOGSを指定し、第4引数のスキーマ名、第6引数のテーブル名に空の文字列を指定した場合、カタログ名のみ返却し、その他の列はNULLを返却します。

SQLTables関数の第4引数にSQL_ALL_SCHEMASを指定し、第2引数のカタログ名、第6引数のテーブル名に空の文字列を指定した場合、スキーマ名のみ返却し、その他の列はNULLを返却します。

SQLTables関数の第8引数にSQL_ALL_TABLE_TYPESを指定し、第2引数のカタログ名、第4引数のスキーマ名、第6引数のテーブル名に空の文字列を指定した場合、テーブル種別のみ返却し、その他の列はNULLを返却します。

3.18 非活性状態のインデックスDSIの参照

変更内容

表が分割されているとき、インデックスを構成する一部のDSIが非活性状態であっても、アプリケーションからインデックスを使用することができるようになります。これにより、そのインデックスを使用したアクセスプランが選択されるようになります。

非互換

9.1.0以前

インデックスを構成する一部のDSIが非活性状態の場合、アプリケーションからインデックスを使用できません。

9.2.0以降

インデックスを構成する一部のDSIが非活性状態であっても、アプリケーションからインデックスを使用できます。ただし、非活性状態のインデックスDSIを参照した場合は、エラーが通知されます。

対処方法

9.1.0以前と同様の動作としたい場合、システム用の動作環境ファイルのパラメタINACTIVE_INDEX_SCANにNOを指定してください。

また、一括更新処理でインデックスを更新しない高速なバッチ業務を行う場合、バッチ業務が使用するクライアント用の動作環境ファイルのパラメタINACTIVE_INDEX_SCANにNOを指定してください。

3.19 アクセスプランへのデフォルトでのアドバイス出力

変更内容

9.1.0以前

ACCESS_PLANのSQLアドバイザ出力レベルを省略した場合、SQL文に対するアドバイスは出力されません。

9.2.0以降

ACCESS_PLANのSQLアドバイザ出力レベルを省略した場合、SQL文に対するアドバイスが出力されます。

非互換

ACCESS_PLANのSQLアドバイザ出力レベルの省略値が、NOADVICEからADVICEに変更になります。

バージョンレベル	SQLアドバイザ出力レベルの省略値
9.1.0以前	NOADVICE(SQL文に対するアドバイスを出力しません)
9.2.0以降	ADVICE(SQL文に対するアドバイスを出力します)

対処方法

9.1.0以前と同様の出力情報としたい場合、以下の対処を行ってください。

埋込みSQLを使用している場合

クライアント用の動作環境ファイルのパラメタACCESS_PLANのSQLアドバイザ出力レベルに、NOADVICEを指定してください。

JDBCを使用している場合

JDBCのctuneparamオプションのパラメタCLI_ACCESS_PLANのSQLアドバイザ出力レベルに、NOADVICEを指定してください。

ODOSを使用している場合

ODBCデータソースのその他パラメタのパラメタCLI_ACCESS_PLANのSQLアドバイザ出力レベルに、NOADVICEを指定してください。

Symfoware .NET Data Providerを使用している場合

ConnectionStringプロパティのtuneparamキーワードのパラメタACCESS_PLANのSQLアドバイザ出力レベルに、NOADVICEを指定してください。

rdbexecsqlコマンドを使用している場合

ACCESS PLAN文のSQLアドバイザ出力レベルに、NOADVICEを指定してください。

3.20 パフォーマンスモニタでのアドバイス出力

変更内容

9.2.0以降では、rdbpmsqlistコマンドのcオプションおよびtオプションで表示するアクセスプランの出力情報が変更され、SQL文に対するアドバイスが出力されます。

非互換

rdbpmsqlistコマンドのcオプションおよびtオプションで、従来出力されなかったSQL文に対するアドバイスがアクセスプランに出力されます。

9.1.0以前

```
Symfoware Server Performance Monitor / SQL detailed information

Start time: 2007/04/15 09:18:19.598
End time: 2007/04/15 09:18:33.454
.
.
.
SQL statement:
  SELECT COUNT(*) FROM USR1.TBL1
Access plan:
  Convert SQL statement:
  SELECT COUNT(*) FROM USR1.TBL1
=====
Main query
=sno==sectname==input1=====input2=====output/update=====
  1 : SCAN      [TBL1DSO      ][          ][          ]
      GROUP    [          ][          ][APPL      ]
=====
```

.
.
.

9.2.0以降

```
Symfoware Server Performance Monitor / SQL detailed information

Start time: 2007/04/15 09:18:19.598
End time: 2007/04/15 09:18:33.454
.
.
.
SQL statement:
SELECT COUNT(*) FROM USR1.TBL1
Access plan:
Convert SQL statement:
SELECT COUNT(*) FROM USR1.TBL1
Advice to an SQL statement:
JYP2401I 表の全件検索を行います。

=====
Main query
=sno==sectname====input1=====input2=====output/update=====
1 : SCAN      [TBL1DSO      ][          ][          ]
GROUP        [          ][          ][APPL      ]
-----
.
.
.
```

対処方法

9.1.0以前と同様の出力情報としたい場合、RDB構成パラメタファイルにRDBPM_ADVICE=NOを指定し、Symfoware Serverを再起動してください。再起動後に取得したパフォーマンスモニタの情報は、移行前と同じになります。

3.21 DSI定義での動的容量拡張定義指定

変更内容

9.0.1以前

表、およびインデックスのDSIに対して、アラームポイントおよび容量拡張定義を指定する場合、rdbalmdsiコマンドで指定可能です。

9.1.0以降

rdbalmdsiコマンドだけでなく、DSI定義時においても、表、およびインデックスのDSIに対して、アラームポイントおよび容量拡張定義が指定可能となりました。

非互換

9.0.1以前でエラーとしていた以下の処理について、エラーとせずに処理が正常終了します。

- 容量拡張定義を指定したDSIに対して、rdbresidentコマンドを実行
- すでに容量拡張したDSIに対して、rdbresidentコマンドを実行

また、以下の処理に対して、エラーが通知されます。

- メモリ常駐されているDSIに対して、自動容量拡張が行われた場合
- DSIのメモリ常駐を行っている場合に、rdbfmtコマンドのcオプションを実行

対処方法

9.0.1以前と同様の動作としたい場合、RDB構成パラメタファイルにRDBEXPDSI=NOを指定しDSI定義を行ってください。

またはDSI定義時にEXPAND OFFを指定してください。

3.22 ODBC連携時のトランザクション独立性水準の初期値変更

変更内容

9.0.1以前

ODBCアドミニストレータを使用して、新規にODBCのデータソース登録を実施すると、トランザクション独立性水準の初期値は、SERIALIZABLEになります。

9.1.0以降

ODBCアドミニストレータを使用して、新規にODBCのデータソース登録を実施すると、トランザクション独立性水準の初期値は、READ UNCOMMITTEDになります。

非互換

ODBCアドミニストレータを使用して、新規にODBCのデータソース登録を実施すると、トランザクション独立性水準の初期値が、SERIALIZABLEからREAD UNCOMMITTEDに変更になります。

セットアップAPIを使用して、新規にODBCのデータソース登録を実施する場合には影響ありません。

対処方法

ODBCデータソース登録時に、オプション設定画面で、トランザクションの独立性水準とアクセスモードのデフォルト設定値が表示されます。必要であれば設定を削除してください。

3.23 LIKE述語の構文解析時に出力されるJYPメッセージの内容変更

変更内容

9.0.1以前

JYP7165Eのメッセージ本文は以下のとおりです。

LIKE述語の照合値、パターン、エスケープ文字のデータ型が文字列型または各国語文字列型ではありません。

9.1.0以降

JYP7165Eのメッセージ本文は以下のとおりです。

LIKE述語の照合値、パターン、エスケープ文字に指定した値式のデータ型に誤りがあります。

非互換

LIKE述語における暗黙的な型変換機能の強化として、照合値に指定可能なデータ型の範囲が拡大されます。

これにより、LIKE述語の照合値、パターン、エスケープ文字に、指定できないデータ型の値式を指定した場合に出力される、JYP7165Eのメッセージ内容が変更になります。

対処方法

対処は不要です。

3.24 rdbstopコマンドのmcオプションによるコマンドの強制停止

変更内容

9.1.0からrdbstopコマンドのmcオプション指定でRDBコマンドを強制終了した場合、処理時間がデータベースの規模や扱うデータ量に依存する、以下のコマンドが処理中断するようになりました。

- rdbloader
- rdbsuloader
- rdbsaloader
- rdbfmt
- rdbgcdsi
- rdbunl
- rdbups
- rdbprdic
- rdbgcdic
- rdbudsi

この時、サーバプロセスでコマンド処理を実行中の場合、クライアントプロセスが停止したことを認識した旨のメッセージを、コンソールおよびRDB構成パラメタファイルのRDBREPORTで指定したメッセージログファイルに出力します。

qdg14185i: s*コマンドの処理の中断が指示されました 対象資源='t*' u*

非互換

コマンドの処理の変更

9.0.1以前ではコマンド処理中にrdbstopコマンドのmcオプションにより強制停止した場合、コマンドの処理が完結するまで動作し続けていましたが、9.1.0以降ではコマンドの処理を中断します。これに伴い、コマンドの実行結果に以下の変更があります。

- ー コマンドの処理中断による対象資源のアクセス禁止状態の設定
以下のコマンドでは、処理の中断により対象の資源に対してアクセス禁止状態が設定される場合があります。その時、コンソールおよびRDBREPORTで指定したメッセージログファイルに、メッセージ“qdg03400u”または“qdg13217u”が出力されます。
 - rdbloader
 - rdbsuloader
 - rdbsaloader
 - rdbfmt
 - rdbgcdsi
- ー 出力ファイルの途中状態
以下のコマンドでは、処理の中断により出力ファイルが出力途中の状態が残ります。
 - rdbunl

対処方法

- コマンドの処理中断による対象資源のアクセス禁止状態の設定
 - ー rdbloaderコマンド、rdbsuloaderコマンド、rdbsaloaderコマンドおよびrdbfmtコマンドの実行時は、“RDB運用ガイド”の“データベースのリカバリ”に従ってデータベースをリカバリしてください。
 - ー rdbgcdsiコマンドの実行時はRオプションを指定して再実行してください。
- 出力ファイルの途中状態
rdbunlコマンドを再実行する場合は、出力ファイルを削除してください。

.

3.25 Connection Managerの通信機構の変更

変更内容

9.1.0以降のConnection Managerでは、以下を実現しています。

- 通信機構の変更によるデータベースアクセスの高速化
Symfoware Serverへのデータベースアクセスをクライアントアプリケーションから実現
- Mirroring Controllerとの連携

非互換

Connection Managerを、9.0.1以前のバージョンから9.1.0以降にアップグレードする場合、以下の非互換があります。

- 通信機構が変更となります。
9.0.1以前: Symfoware ServerへのデータベースアクセスはConnection Managerから実現
9.1.0以降: Symfoware Serverへのデータベースアクセスはクライアントアプリケーションから実現
- APC動作環境ファイルに指定する以下の定義情報が設定不要となります。
 - APCMAXCONNECTION
 - APCCOMBUFF
 - APCEXTMEM
 - APCCNTNUM

対処方法

対処は不要です。

3.26 rdbprtコマンド

変更内容

V7.0L10以降では以下の条件の場合、rdbprtコマンドでの出力情報が変更されます。

一時表の定義情報を出力している場合

以下の情報が追加されるようになりました。

- 一時表の表制約の情報(PRIMARY KEY情報、UNIQUE情報)
- 一時表のPRIMARY KEY情報(構成する列名)
- 一時表のUNIQUE情報(構成する列名)
- 一時表を参照するルーチン名、ルーチン種別

ビュー表の定義情報を出力している場合

以下の情報が追加されるようになりました。

- ビュー表を参照するルーチン名、ルーチン種別

準備状態の定義資源一覧を出力している場合

列定義追加を行った列名の情報が準備モードで定義した順番に出力されるようになりました。

Symfoware Server Enterprise Extended Editionの場合は9.0.0以降、Symfoware Server Enterprise EditionおよびSymfoware Server Standard Editionの場合は8.0.1以降から変更になります。

非互換

一時表の定義情報を出力している場合

V6.0L10以前とV7.0L10以降で非互換があります。

rdbprtコマンドで従来出力されなかった以下の情報が追加されるようになります。

V6.0L10以前

No. 1	Table name		TMP01
Database name		DB01	
Schema name		S	
Type		GLOBAL TEMPORARY	
Creator		DDL4	
Created date		Tue Oct 19 11:41:18 2004	
Column information			
Column name		C101	
NOT NULL constraint		YES	Data length 4(Byte)
Data type		INTEGER	
.			
.			
.			
Record length		48(Byte)	
Preserve option		NO	
DSO information			
Base DSO name		_TEMP00000000730000000000	
Used database space information			
No.	Database space name		User number
1	DBS01		10

V7.0L10以降

No. 1	Table name		TMP01
Database name		DB01	
Schema name		S	
Type		GLOBAL TEMPORARY	
Creator		DDL4	
Created date		Tue Oct 19 11:41:18 2004	
Column information			
Column name		C101	
NOT NULL constraint		YES	Data length 4(Byte)
Data type		INTEGER	
.			
.			
.			
Record length		48(Byte)	
Preserve option		NO	
Constraint information			
Primary key constraint information			
No.	Column name		
1	C101		
Unique constraint information			

NOT NULL constraint	YES	Data length	4(Byte)
Data type	INTEGER		
.			
.			
.			
View information			
Consist of following table/view information			
No. 1	Table/View name ... TMP01		
Database name	DB01		
Schema name	S		
Type	GLOBAL TEMPORARY		
Creator	DDL4		
Created date	Tue Oct 19 12:00:54 2004		
.			
.			
.			
Routine information			
.....ビュー時表参照ルーチン情報追加			
No. 1	Routine name P01		
Schema name	S		
Routine type	PROCEDURE		

準備状態の定義資源一覧を出力している場合

Symfoware Server Enterprise Extended Editionの場合は8.0.1以前と9.0.0以降で、Symfoware Server Enterprise EditionおよびSymfoware Server Standard Editionの場合は8.0.0以前と8.0.1以降で非互換があります。

rdbprtコマンドの準備状態での定義資源一覧出力において、準備モードで列定義追加を行った場合の列名が定義順に出力されるようになります。

以下に示す順に準備モードで列定義追加を行った場合の表示結果を示します。

1. ADDC01
2. ADDC02
3. ADDC03
4. ADDC04

Symfoware Server Enterprise Extended Editionの場合 : 8.0.1以前

Symfoware Server Enterprise Editionの場合 : 8.0.0以前

Symfoware Server Standard Editionの場合 : 8.0.0以前

Prepare Definition Information		
No. 1		
Database name		DB
Schema name		SCM1
Table name		TBL0
Add Column Information		
No.	Column name	
1	ADDC01	
2	ADDC04	
3	ADDC03	
4	ADDC02	
Add DSI Information		
No.	DSI name	Usage type
1	DSI_B_A1	BASE
2	DSI_B_A2	BASE
3	IDXDSI_B_A1	INDEX
4	IDXDSI_B_A2	INDEX

Symfoware Server Enterprise Extended Editionの場合：9.0.0以降
Symfoware Server Enterprise Editionの場合：8.0.1以降
Symfoware Server Standard Editionの場合：8.0.1以降

Prepare Definition Information		
No. 1		
Database name		DB
Schema name		SCM1
Table name		TBL0
Add Column Information		定義順に出力
No.	Column name	
1	ADDC01	
2	ADDC02	
3	ADDC03	
4	ADDC04	
Add DSI Information		
No.	DSI name	Usage type
1	DSI_B_A1	BASE
2	DSI_B_A2	BASE
3	IDXDSI_B_A1	INDEX
4	IDXDSI_B_A2	INDEX

対処方法

一時表の定義情報を出力している場合およびビュー表の定義情報を出力している場合

rdbpertコマンドの出力結果を解析して動作するプログラムまたはシェルスクリプトなどが存在する場合、追加情報を考慮してください。

準備状態の定義資源一覧を出力している場合

rdbpertコマンドの準備状態での定義資源一覧出力の結果を解析して動作するプログラムまたはシェルスクリプトなどが存在する場合、準備モードで列定義追加を行った列名情報に対する出力順番の変更を考慮してください。

3.27 リカバリポイントの自動設定

変更内容

9.0.0以降では誤ってrdbloader、rdbsaload、rdbsuload、またはrdbfmtコマンドを実行した場合にその直前の時点までリカバリできるようになりました。これに伴い、Symfoware/RDBシステムがリカバリポイントを自動的に設定するよう変更になりました。

この時、リカバリポイント名に関する以下のメッセージを、コンソールおよびRDB構成パラメタファイルのRDBREPORTで指定したメッセージログファイルに出力します。

```
qdg14119i: リカバリポイントを設定しました 操作=' s*' 対象資源=' t*' リカバリポイント名=' u*' v*.
```

非互換

rdbloader、rdbsaload、rdbsuload、またはrdbfmtコマンドを実行した場合に、以下の非互換があります。

アーカイブログ量の増加

アーカイブログの使用量が、コマンドで処理する表のDSIごとに512バイト増加します。これにより、アーカイブログが満杯になる契機が変わります。

テンポラリログ量の増加

テンポラリログ(AIログ域)の使用量が、コマンドで処理する表のDSIごとに512バイト増加します。これにより、テンポラリログファイルの容量不足になる可能性があります。

メッセージ出力の増加

従来は出力されなかったメッセージ(qdg14119i)が、コンソールおよびRDB構成パラメタファイルのRDBREPORTで指定したメッセージログファイルに出力されるようになります。

対処方法

アーカイブログ量の増加

rdbsloader、rdbsaload、rdbsuload、またはrdbfmtコマンドの処理対象DSI数×512(バイト)の増加を見込み、アーカイブログが満杯になる契機が変わることで影響がないかを確認してください。必要であればrdblogコマンドのUオプションおよびaオプションでアーカイブログファイルを追加してください。

テンポラリログ量の増加

rdbsloader、rdbsaload、rdbsuload、またはrdbfmtコマンドの処理対象DSI数×512(バイト)の増加を見込み、テンポラリログファイルの容量不足が発生しないかを確認してください。必要であればrdblogコマンドのUオプションおよびtオプションでテンポラリログファイル(AIログ域)のサイズを変更してください。

メッセージ出力の増加

RDB構成パラメタファイルにRDBREPORTSIZEを指定している場合は、rdbsloader、rdbsaload、rdbsuload、またはrdbfmtコマンドの処理対象DSI数×qdg14119iのメッセージ出力バイト数の増加を見込み、メッセージ量の増加に伴う影響がないかを確認してください。必要であればRDBREPORTSIZEに指定する値を見直して変更してください。



参照

RDB構成パラメタファイルについては、“セットアップガイド”を参照してください。

3.28 rdbupsコマンド実行時のRDBディクショナリ使用量

変更内容

9.0.0以降ではrdbupsコマンドで最適化情報を設定する際に、RDBディクショナリに変更前の最適化情報を最大3回まで保持するようになりました。

非互換

rdbupsコマンドを実行した場合に、RDBディクショナリの使用量がrdbupsコマンドの処理対象DSI数×300バイト増加します。

対処方法

rdbupsコマンドの処理対象DSI数×300バイトの増加を見込み、RDBディクショナリの使用量の増加に伴う影響がないかを確認してください。必要であればRDBディクショナリのサイズを見直して変更してください。

または、RDB構成パラメタファイルにRDBUPSBACKUPを指定することで、rdbupsコマンドで最適化情報を設定する際に、RDBディクショナリに変更前の最適化情報を保持しないようにすることができます。



参照

RDB構成パラメタファイルについては、“セットアップガイド”を参照してください。

3.29 rdbmrdmpコマンド

変更内容

rdbmrdmpコマンドで退避データの破棄を行う際に、存在しないデータベース名、データベーススペース名、リカバリ制御ファイル配置ディレクトリ名を指定した場合、コマンドが正しく、復帰値1で終了するようになりました。

8.0.1以前

以下のいずれかの条件を満たしている場合、`rdbmrndmp`コマンドのDオプションを実行すると、メッセージ`qdg13175e`を出力して復帰値0で終了します。

- `p`オプションに、存在しないデータベース名またはデータベーススペース名を指定する。
- `f`オプションに、存在しないリカバリ制御ファイル配置ディレクトリ名を指定する。

9.0.0以降

“8.0.1以前”で示した条件の場合、`rdbmrndmp`コマンドのDオプションを実行すると、コマンドが同じくメッセージ`qdg13175e`を出力して復帰値1で終了します。

非互換

“8.0.1以前”で示した条件の場合、8.0.1以前では誤って復帰値0で終了していた`rdbmrndmp`コマンドが正しく復帰値1で終了します。

バージョンレベル	動作
8.0.1以前	復帰値0で終了
9.0.0以降	復帰値1で終了

対処方法

誤ったデータベース名、データベーススペース名、リカバリ制御ファイル配置ディレクトリ名を指定した際に、コマンドの復帰値が0かつメッセージ`qdg13175e`を監視することで異常を検知する運用を行っていた場合に影響があります。

コマンドの復帰値が1の場合でも異常を検知するように運用を変更してください。

3.30 rdbmrinfコマンド

変更内容

`rdbmrinf`コマンドでリカバリ制御ファイルの情報を出力する際に、存在しないデータベース名、データベーススペース名、リカバリ制御ファイル配置ディレクトリ名を指定した場合、コマンドが正しく、復帰値1で終了するようになりました。

8.0.1以前

以下のいずれかの条件を満たしている場合、`rdbmrinf`コマンドを実行すると、メッセージ`qdg13175e`を出力して復帰値0で終了します。

- `p`オプションに、存在しないデータベース名またはデータベーススペース名を指定する。
- `f`オプションに、存在しないリカバリ制御ファイル配置ディレクトリ名を指定する。

9.0.0以降

“8.0.1以前”で示した条件の場合、`rdbmrinf`コマンドを実行すると、コマンドが同じくメッセージ`qdg13175e`を出力して復帰値1で終了します。

非互換

“8.0.1以前”で示した条件の場合、8.0.1以前では誤って復帰値0で終了していた`rdbmrinf`コマンドが正しく復帰値1で終了します。

バージョンレベル	動作
8.0.1以前	復帰値0で終了
9.0.0以降	復帰値1で終了

対処方法

誤ったデータベース名、データベーススペース名、リカバリ制御ファイル配置ディレクトリ名を指定した際に、コマンドの復帰値が0かつメッセージqdg13175eを監視することで異常を検知する運用を行っていた場合に影響があります。

コマンドの復帰値が1の場合でも異常を検知するように運用を変更してください。

3.31 rdbauditコマンド

変更内容

cオプションを指定して監査ログデータベースの作成を行った場合に、監査ログの実表の列構成が変更されます。これに伴い監査ログをバックアップしたときのバックアップデータの形式が変更されます。

8.0.1以前

以下の表に示す列構成で監査ログ表の実表を定義します。

表3.10 8.0.1以前での監査ログ表の実表の列構成

列名	データ型	情報の意味
SYSTEM_NAME	CHAR(8)	RDBシステム名
ELEMENT_NO	SMALLINT	監査ログエレメント番号
RECORD_TYPE	CHAR(1)	レコード種別
USER_NAME	CHAR(128)	利用者名
PROCESS_ID	INT	プロセスID
MODULE_NAME	CHAR(34)	モジュール名
MODULE_KIND	CHAR(1)	ロードモジュール種別
ACCESS_TIME	TIMESTAMP	アクセス時刻、 処理の実行時刻、 事象の発生時刻
MILLI_SEC	SMALLINT	ACCESS_TIMEの補助情報
ACCESS_TYPE	CHAR(1)	アクセス種別
SELECT_SUCCESS	INT	SELECT文の実行の成功回数
SELECT_FAIL	INT	SELECT文の実行を試みたが権限チェックにより 失敗した回数
UPDATE_SUCCESS	INT	UPDATE文の実行の成功回数
UPDATE_FAIL	INT	UPDATE文の実行を試みたが権限チェックにより 失敗した回数
DELETE_SUCCESS	INT	DELETE文の実行の成功回数
DELETE_FAIL	INT	DELETE文の実行を試みたが権限チェックにより 失敗した回数
INSERT_SUCCESS	INT	INSERT文の実行の成功回数
INSERT_FAIL	INT	INSERT文の実行を試みたが権限チェックにより失 敗した回数
CALL_SUCCESS	INT	CALL文の実行の成功回数
CALL_FAIL	INT	CALL文の実行を試みたが権限チェックにより失 敗した回数
MAX_MEM	INT	セッションが使用した最大メモリ量
MAX_WORK	INT	セッションが使用した最大作業用ファイル量

列名	データ型	情報の意味
MAX_TRAN_MEM	INT	セッションが使用した最大トランザクション用メモリ量
MAX_TRAN_TIME	INT	セッションが使用した最大トランザクション時間
EVENT	CHAR(8)	実行した処理
PRIV_CHECK	CHAR(1)	権限チェックの結果、 認証の結果、 RDBコマンドまたは実行したSQL文の実行結果
AUDIT_TEXT	VCHAR (32000)	対象資源名、 認証失敗の理由、 実行したSQL文またはRDBコマンド引数文字列、 メッセージ

9.0.0以降

以下の表に示す列構成で監査ログ表の実表を定義します。なお、変更または追加になった項目を太字で示しています。

表3.11 9.0.0以降での監査ログ表の実表の列構成

列名	データ型	情報の意味
SYSTEM_NAME	CHAR(8)	RDBシステム名
ELEMENT_NO	SMALLINT	監査ログエレメント番号
RECORD_TYPE	CHAR(1)	レコード種別
USER_NAME	CHAR(128)	利用者名
PROCESS_ID	INT	プロセスID
MODULE_NAME	CHAR(34)	モジュール名
MODULE_KIND	CHAR(1)	ロードモジュール種別
ACCESS_TIME	TIMESTAMP	アクセス時刻、 処理の実行時刻、 事象の発生時刻、 SQL文の実行完了時刻
MILLI_SEC	SMALLINT	ACCESS_TIMEの補助情報
ACCESS_TYPE	CHAR(1)	アクセス種別
SELECT_SUCCESS	INT	SELECT文の実行の成功回数
SELECT_FAIL	INT	SELECT文の実行を試みたが権限チェックにより失敗した回数
UPDATE_SUCCESS	INT	UPDATE文の実行の成功回数
UPDATE_FAIL	INT	UPDATE文の実行を試みたが権限チェックにより失敗した回数
DELETE_SUCCESS	INT	DELETE文の実行の成功回数
DELETE_FAIL	INT	DELETE文の実行を試みたが権限チェックにより失敗した回数
INSERT_SUCCESS	INT	INSERT文の実行の成功回数
INSERT_FAIL	INT	INSERT文の実行を試みたが権限チェックにより失敗した回数
CALL_SUCCESS	INT	CALL文の実行の成功回数
CALL_FAIL	INT	CALL文の実行を試みたが権限チェックにより失敗した回数

列名	データ型	情報の意味
MAX_MEM	INT	セッションが使用した最大メモリ量
MAX_WORK	INT	セッションが使用した最大作業用ファイル量
MAX_TRAN_MEM	INT	セッションが使用した最大トランザクション用メモリ量
MAX_TRAN_TIME	INT	セッションが使用した最大トランザクション時間
EVENT	CHAR(8)	実行した処理
PRIV_CHECK	CHAR(1)	権限チェックの結果、 認証の結果、 RDBコマンドまたは実行したSQL文の実行結果
CLIENT_INF	CHAR(64)	クライアント情報
MODULE_INF	CHAR(64)	モジュール情報
ACTION_INF	CHAR(64)	アクション情報
CONNECTION_ID	CHAR(22)	コネクションID
SQL_HASH	CHAR(24)	SQL文のハッシュ値
STATEMENT_ID	INT	実行ごとのSQL文ID
REF_STATEMENT_ID	INT	位置づけSQL文ID
ROWS_PROCESSED	INT	処理結果件数
ELAPSED_TIME	INT	SQL文の処理時間
ELAPSED_MILLI_SEC	SMALLINT	ELAPSED_TIMEの補助情報
EXECUTIONS	INT	実行回数
AUDIT_TEXT	VCHAR (32000)	対象資源名、 認証失敗の理由、 実行したSQL文またはRDBコマンド引数文字列、 メッセージ、 SQL文、 入力ホスト変数の値または入力の動的パラメタ指定の値

非互換

cオプションを指定して監査ログデータベースの作成を行った場合に、監査ログの実表に以下の列定義が追加されます。

列名	データ型	情報の意味
CLIENT_INF	CHAR(64)	クライアント情報
MODULE_INF	CHAR(64)	モジュール情報
ACTION_INF	CHAR(64)	アクション情報
CONNECTION_ID	CHAR(22)	コネクションID
SQL_HASH	CHAR(24)	SQL文のハッシュ値
STATEMENT_ID	INT	実行ごとのSQL文ID
REF_STATEMENT_ID	INT	位置づけSQL文ID
ROWS_PROCESSED	INT	処理結果件数
ELAPSED_TIME	INT	SQL文の処理時間
ELAPSED_MILLI_SEC	SMALLINT	ELAPSED_TIMEの補助情報
EXECUTIONS	INT	実行回数

本非互換により、8.0.1以前で監査ログを取得する運用を実施しており、9.0.0以降にアップグレードした後で、たとえば監査ログの格納先を変更するなどの理由で監査ログ表を再作成する場合に影響します。

影響の内容は以下です。

監査ログのバックアップデータをいろいろな参照手段と連携して使用している場合に、バックアップデータの形式が変更されることで連携が正しく行われなくなる場合があります。たとえば監査ログのバックアップデータを別の表に格納して参照する運用を実施している場合は、監査ログのバックアップデータを別の表に格納するときのrdbloaderコマンドやrdbsaloaderコマンドの実行が異常終了します。

対処方法

監査ログ表の実表を8.0.1以前の列構成で作成する場合は、rdbauditコマンドのV0オプションを実行してください。

例

監査ログ表の実表を8.0.1以前の列構成で作成する場合

```
rdbaudit -c -n 3 -s 2048M -r /dev/raw/raw45 -V0
```

監査ログ表の実表がどの形式で作成されているか、rdbauditコマンドのVLオプションで確認することができます。

例

監査ログ表の実表の形式を調べる場合

```
rdbaudit -VL  
  
Audit version information  
Version : 1
```



参照

rdbauditコマンドの詳細については、“コマンドリファレンス”を参照してください。

3.32 各国語文字列型への半角カタカナ格納のエラー通知

変更内容

8.0.1以前

rdbloaderコマンド、rdbsaloaderコマンドおよびrdbsuloaderコマンドでテキスト形式の入力ファイルを指定した場合、データベースの文字コード系がEUCコードまたはシフトJISコードであるにもかかわらず、各国語文字列型の列に半角カタカナを格納していました(P番号PG49764により修正されており、これを含む緊急修正を適用していない場合に該当します)。

9.0.0以降

rdbloaderコマンド、rdbsaloaderコマンドおよびrdbsuloaderコマンドでテキスト形式の入力ファイルを指定した場合、データベースの文字コード系がEUCコードまたはシフトJISコードで、各国語文字列型の列に半角カタカナを格納しようとした場合にエラー通知します。

非互換

各国語文字列型の列に半角カタカナを格納しようとした場合に、従来正常終了していたものがエラー通知されるようになります。

対処方法

本機能を無効にする場合はRDB構成パラメタファイルのRDBNCHARKANAにNONを指定し、Symfoware/RDBを再起動してください。

NONを指定すると、半角カタカナのデータを格納することはできますが、格納したデータを正しく取り出すことができない場合があります。その場合にエラー通知するには、NORMALを指定してください。NORMALを指定した場合にエラーと

なるか否かの詳細は、“表3.12 エラー通知の対象となるバージョンレベル、条件およびコマンドと、RDBNCHARKANA=NORMAL指定時の動作”を参照してください。

注意

本機能は、誤って各国語文字列型の列に半角カタカナを格納しようとしたときにエラー通知できていなかったものをエラー通知するように修正するものです。したがって、本機能を有効にして運用することを推奨します。

RDBNCHARKANA

データベースの文字コード系がEUCコードまたはシフトJISコードの場合に、rdbloaderコマンド、rdbsaloadコマンドおよびrdbunloadコマンドで各国語文字列型の列に半角カタカナを格納する際にエラー通知するか否かを指定します。

記述形式は以下のとおりです。

RDBNCHARKANA = 半角カタカナ格納のエラー通知の有無

半角カタカナ格納のエラー通知の有無

各国語文字列型の列に半角カタカナを格納する際にエラー通知するか否かを指定します。省略した場合はERRORが指定されたものとみなします。

本指定は、データベースの文字コード系がEUCコードまたはシフトJISコードの場合に有効となります。

ERROR :

各国語文字列型の列への半角カタカナの格納をすべてエラー通知します。

NORMAL :

各国語文字列型の列への半角カタカナの格納時にデータ破損が発生する場合のみエラー通知します。

NON :

各国語文字列型の列への半角カタカナの格納をエラーとしません。

エラー通知の対象となるバージョンレベル、条件およびコマンドと、RDBNCHARKANA=NORMAL指定時の動作を以下に示します。

なお、以下の表では、各国語文字列型の列への半角カタカナ格納時に、データ破損が発生する可能性のある組合せのみを示しています。

表記していない組合せはすべてエラー通知されます。

表3.12 エラー通知の対象となるバージョンレベル、条件およびコマンドと、RDBNCHARKANA=NORMAL指定時の動作

Symfoware/RDBのロケール	バージョンレベル エディション	コード系の組合せ		コマンド	RDBNCHARKANAの指定		
		データベース	入力データ		省略または ERROR	NORMAL	NON
ja_JP.eucJP	8.0.1以前 EEE/EE/SE	シフトJIS コード	シフトJIS コード	rdbloader rdbsaload rdbunload	エラー 通知する	エラー 通知する	エラー通 知しない
		EUCコード	EUCコード	rdbloader rdbsaload rdbunload			

Symfoware/RDBのロケール	バージョンレベルエディション	コード系の組合せ		コマンド	RDBNCHARKANAの指定		
		データベース	入力データ		省略またはERROR	NORMAL	NON
	V6.0L10 ～8.0.1 EEE/EE/SE	シフトJISコード	UNICODE	rdbsloader rdbsaloader rdbsuloader		エラー通知しない	
ja_JP.UTF-8	V6.0L10 ～8.0.1 EEE/EE/SE	シフトJISコード	シフトJISコード	rdbsloader rdbsaloader rdbsuloader		エラー通知する	
		シフトJISコード	UNICODE	rdbsloader rdbsaloader rdbsuloader		エラー通知しない	
		EUCコード	EUCコード	rdbsloader(注) rdbsaloader rdbsuloader		エラー通知する	
	8.0.x EEE/EE/SE	EUCコード	EUCコード	rdbsloader(注) rdbsaloader rdbsuloader		エラー通知する	

注) rdbsloaderコマンドが以下の条件を満たさない場合に該当します。

- a. 表のDSIの格納構造がSEQUENTIAL構造である。かつ、
- b. 以下の条件を満たす場合。
 - a. 表にXML構造のインデックスが付加されている。または、
 - b. 表のレコード長が以下の条件を満たす場合。
 - a. ページ内格納域長を超えている。または、
 - b. 過去に表の定義変更文による列定義の削除を行っており、列定義の削除前にはレコード長がページ内格納域長を超えていた。



参照

レコード長およびページ内格納域長の見積りについては、以下を参照してください。

- Symfoware Server V6.0L10以前の場合：“RDBユーザズガイド データベース定義編”の“データベーススペースの所要量の見積り”
- Symfoware Server V7.0L10以降の場合：“RDB運用ガイド(データベース定義編)”の“データベーススペースの所要量の見積り”



3.33 JDBCドライバ使用時のLD_PRELOAD環境変数廃止 (Solaris/Linuxの場合)

変更内容

8.0.1以前

Interstage Application Serverを使用する場合の環境設定

S

Solarisの場合

アプリケーションを実行する環境のロケールがja_JP.UTF-8以外の環境から、文字コード系がUNICODEのデータベースにアクセスする場合、Interstage 管理コンソールの[システム]の[ワークユニット]にある[ワークユニット名]の中の[環境設定タブ画面]の[ワークユニット設定]の環境変数に、以下の設定を行う必要があります。

```
LD_PRELOAD=/etc/opt/FSUNiconv/lib/libicv.so
```

L

Linuxの場合

アプリケーションを実行する環境のロケールがja_JP.UTF-8以外の環境から、文字コード系がUNICODEのデータベースにアクセスする場合、Interstage 管理コンソールの[システム]の[ワークユニット]にある[ワークユニット名]の中の[環境設定タブ画面]の[ワークユニット設定]の環境変数に、以下の設定を行う必要があります。

32ビットの場合

```
LD_PRELOAD=/opt/FJSVrdb2b/lib/librdb2bicv.so
```

64ビットの場合

```
LD_PRELOAD=/opt/FJSVrdb2b/lib/librdb2bicv64.so
```

Javaアプリケーションの環境設定

S

Solarisの場合

アプリケーションを実行する環境のロケールがja_JP.UTF-8以外の環境から、文字コード系がUNICODEのデータベースにアクセスする場合、JDBCドライバが動作している環境で、以下の設定を行う必要があります。

```
LD_PRELOAD=/etc/opt/FSUNiconv/lib/libicv.so
```

L

Linuxの場合

アプリケーションを実行する環境のロケールがja_JP.UTF-8以外の環境から、文字コード系がUNICODEのデータベースにアクセスする場合、JDBCドライバが動作している環境で、以下の設定を行う必要があります。

32ビットの場合

```
LD_PRELOAD=/opt/FJSVrdb2b/lib/librdb2bicv.so
```

64ビットの場合

```
LD_PRELOAD=/opt/FJSVrdb2b/lib/librdb2bicv64.so
```

9.0.0以降

Interstage Application Serverを使用する場合の環境設定

LD_PRELOAD環境変数の設定は不要となります。

Javaアプリケーションの環境設定

LD_PRELOAD環境変数の設定は不要となります。

非互換

アプリケーションを実行する環境のロケールがja_JP.UTF-8以外の環境から、文字コード系がシフトJISまたはEUCのデータベースにアクセスする場合、“ー”、“//”、“～”、“¢”、“£”、“一”などの文字データを入出力する際、文字化けまたはコード変換エラーの事象が発生する場合があります。

また、この条件の場合、以下の列からデータを取り出すと、コード変換によりJYP2084E(文字データの有効文字が失われます)のエラーとなります。

- ・ CHAR型またはVARCHAR型で定義時に指定した文字数が21844文字以上の列
- ・ NCHAR型またはNCHAR VARYING型で定義時に指定した文字数が10922文字以上の列

対処方法

文字化けまたはコード変換エラーの事象が発生する場合は、以下の方法で対処してください。

Interstage Application Serverを使用する場合の環境設定

Interstage 管理コンソールの[システム]の[リソース]にある[JDBC]の[データソース名]の中の[環境設定タブ画面]の[その他パラメタ]に、以下の設定を行ってください。

```
codeselect=0S
```

Javaアプリケーションの環境設定

JDBCデータソース情報設定画面の[オプション]ボタンを押し、データソースのオプション情報設定画面を表示し、[その他パラメタ]に、以下の設定を行ってください。

```
codeselect=0S
```

上述した方法以外に、Interstage Charset Managerの機能を使用し、文字化けまたはコード変換エラーとなる文字データの対応定義を実施することで、対処することができます。



参照

詳細は、“Interstage Charset Manager 使用手引書 標準コード変換機能編”の以下を参照してください。

- ・ “標準コード変換関数(拡張関数)”の“iconv_ext”および“コーディング例”
- ・ “文字コード変換表のカスタマイズ”

3.34 アプリケーションインタフェースの変更

変更内容

従来、アプリケーションからSymfowareデータベースに接続するためのインタフェースとして提供されていたRDAリクエスト機能は、9.0.0以降未提供となりました。

非互換

RDAリクエスト機能を利用したアプリケーション開発はできません。

対処方法

ODBCドライバを使用し、アプリケーションを開発してください。

3.35 文字コード系の指定方法の変更

変更内容

Symfoware Serverの動作環境と文字コード系

Symfoware Serverの動作環境と文字コード系について、以下の変更があります。

変更内容	バージョンレベル			
	V5.0L10	V6.0L10	V7.0L10	8.0.0以降
動作環境	利用者は、EUC環境にしてインストールします。	Symfoware Serverは、OSのデフォルトロケールを見て、そのロケールに合った動作環境をインストールします。 利用者は、OSのデフォルトロケールに動作させたいロケールを設定して、Symfoware Serverをインストールします。		
データベースの文字コード系の指定方法	RDBディクショナリ作成(rdbcrdicコマンド)時に指定します。	Symfoware Serverをインストールするときにロケールに合わせて自動選択されます(推奨)。V6.0L10以前の互換保証から、V6.0L10以前で組合せ可能な範囲で別の文字コード系を指定することができます。		
データベースの文字コード系に指定できる文字コード系	• EUC: EUCコードのU90コード • SJIS: シフトJISコード • Unicode: UNICODE		• EUC_S90: EUCコードのS90コード • EUC_U90: EUCコードのU90コード • SJIS: シフトJISコード • Unicode: UNICODE	• EUC_S90: EUCコードのS90コード • SJIS: シフトJISコード • Unicode: UNICODE
EUCコードのデフォルト値	EUCコードのU90コードを使用しています。		EUCコードのS90コードを使用しています。	
rdbprtコマンド(-m CODEオプション指定時)の表示項目とその意味	• EUC: EUCコードのU90コード • SJIS: シフトJISコード • Unicode: UNICODE		• EUC_S90: EUCコードのS90コード • EUC_U90: EUCコードのU90コード • EUC: EUCコードのU90コード(-Z CODEオプションを指定した場合のみ出力されます) • SJIS: シフトJISコード • Unicode: UNICODE	

RDBコマンドのロケール

RDBコマンドのロケールの設定方法が、以下のように変更になりました。

変更内容	バージョンレベル		
	V5.0L10	V6.0L10	V7.0L10以降
RDBコマンドのロケールの設定方法	ja_JP.eucJPに設定します。	Symfoware/RDBのロケール(OSのデフォルトロケール)に合わせます。	Symfoware/RDBのロケール(OSのデフォルトロケール)に合わせるか、UNIX系標準のCロケー

変更内容	バージョンレベル		
	V5.0L10	V6.0L10	V7.0L10以降
			ルにする必要があります。
Symfoware/RDBのロケールと違う場合の動作	動作保証しません。 RDBコマンドの動作がエラーになったり、文字化けが発生します。	qdg13949uのエラーとなります。	qdg13959uのエラーとなります。

ロードデータ、アンロードデータの文字コード系

ロードデータやアンロードデータで指定する外部ファイルの文字コード系は利用者が明に指定できます。指定できる文字コード系が以下のように変更になりました。

変更内容	バージョンレベル	
	V6.0L10以前	V7.0L10以降
指定できる文字コード系	• EUC: EUCコードのU90コード • SJIS: シフトJISコード • UNICODE: UNICODE	• EUC_S90: EUCコードのS90コード • EUC_U90: EUCコードのU90コード • EUC: EUCコードのU90コード • SJIS: シフトJISコード • UNICODE: UNICODE

アプリケーションの文字コード系

COBOL言語以外のアプリケーションでは、ホスト変数やSQLメッセージ(SQLMSG)で使用する文字コード系を指定できます。この指定は、クライアント用の動作環境ファイルの以下のパラメタで指定できます。

- CHAR_SET
- NCHAR_CODE

これらのパラメタで指定できる文字コード系が以下のように変更になりました。

変更内容	バージョンレベル	
	V6.0L10以前	V7.0L10以降
CHAR_SETで指定できる文字コード系	• EUC: EUCコードのU90コード • SJIS: シフトJISコード • UTF8: UNICODE	• EUC_S90: EUCコードのS90コード • EUC_U90: EUCコードのU90コード • EUC: EUCコードのU90コード • SJIS: シフトJISコード • UTF8: UNICODE

変更内容	バージョンレベル	
	V6.0L10以前	V7.0L10以降
NCHAR_C ODEで指定 できる文字 コード系	• EUC: EUCコードのU90コード • COBOL_EUC: COBOL_EUC 形 式 の U90コード • SJIS: シフトJISコード • UTF8: UTF-8形式 • UCS2: UCS-2形式 • UCS2B: バイトスワップした UCS-2形式	• EUC_S90: EUCコードのS90コード • EUC_U90: EUCコードのU90コード • EUC: EUCコードのU90コード • COBOL_EUC_S90: COBOL_EUC 形 式 の S90コード • COBOL_EUC_U90: COBOL_EUC 形 式 の U90コード • COBOL_EUC: COBOL_EUC 形 式 の U90コード • SJIS: シフトJISコード • UTF8: UTF-8形式 • UCS2: UCS-2形式 • UCS2B: バイトスワップした UCS-2形式

マルチRDBシステムの文字コード系

マルチRDBシステムの文字コード系において、以下の変更点があります。

変更内容	バージョンレベル	
	V6.0L10以前	V7.0L10以降
マルチRDBシステムで指定で きるデータベースの文字コー ド系の種類	複数の文字コード系を選択でき ます。	複数の文字コード系を選択でき ません。

非互換

V5.0L10とV6.0L10以降の非互換

Symfoware/RDBとRDBコマンドのロケールのエラーチェック

V6.0L10以降では、Symfoware/RDBのロケールとRDBコマンドのロケールは、OSのデフォルトロケールと一致させる必要があります。

V6.0L10以前とV7.0L10以降の非互換

EUCコードのデフォルト値

EUCコードのデフォルト値が、U90からS90に変更になりました。

データベースの格納データの文字コード系の表示

EUCコードは、S90かU90かの詳細が表示されるようになりました。

Symfoware/RDBとRDBコマンドのロケールのエラーチェック

Symfoware/RDBのロケールとRDBコマンドのロケールが、OSのデフォルトロケールと一致していない場合に、出力されるエラーが以下のように変更になりました。

V6.0L10以前

```
qdg13949u
パッケージインストール時の文字コードと環境変数で指定した文字コードが異なります s*
[メッセージの意味]
  パッケージインストール時の文字コードと環境変数('LANG'または'LC_MESSAGES'または'LC_ALL')で指定した
  文字コードが異なります。
[パラメタの意味]
  s*: RDBシステム名
  RDBシステム名はマルチRDBの場合のみ出力されます。
[システムの処理]
  処理を中止します。
[利用者の処置]
  環境変数を正しく指定し、再実行してください。
```

V7.0L10以降

```
qdg13959u
環境変数で指定したロケール's*'に誤りがあります Symfoware/RDBのロケール='t*' u*
[メッセージの意味]
  環境変数で指定したロケールに誤りがあります。環境変数は“LC_ALL”、“LC_MESSAGES”、“LANG”の順番で有
  効となります。
[パラメタの意味]
  s*: 環境変数のロケール
  t*: Symfoware/RDBのロケール
  u*: RDBシステム名
  RDBシステム名はマルチRDBの場合のみ出力されます。
[システムの処理]
  処理を中止します。
[利用者の処置]
  環境変数を正しく指定して再実行してください。
```

マルチRDBシステムの文字コード系

V6.0L10以前は、マルチRDBシステムで複数の文字コード系を選択することができましたが、V7.0L10以降ではSymfoware Serverのインストール時に選択された文字コード系のみ利用可能です。

V7.0L10と8.0.0以降の非互換

指定できるデータベースの文字コード系

初期インストール時に指定する、データベースの文字コード系の値の中でEUC_U90が指定不可となりました。

対処方法

V5.0L10とV6.0L10以降の非互換に対する対処

Symfoware/RDBとRDBコマンドのロケールのエラーチェック

回避方法はありません。

V6.0L10以前とV7.0L10以降の非互換に対する対処

EUCコードのデフォルト値

データベースの文字コード系にEUCコードのU90コードを指定したい場合は、symfo_installコマンドを利用したアップグレードインストール時に指定してください。

データベースの格納データの文字コード系の表示

rdbprtコマンドを実行するとき、Zオプションを指定してV6.0L10以前の出力形式で出力してください。

Symfoware/RDBとRDBコマンドのロケールのエラーチェック

回避方法はありません。メッセージ本文を読み替えてください。

マルチRDBシステムの文字コード系

RDBディクショナリ作成コマンド(rdbcrdic)により、インストールした文字コード系以外の文字コードを選択してください(rdbcrdicコマンドの文字コード系の指定は互換として存在します)。

RDBディクショナリを、60メガバイトの容量で、ローデバイス/dev/raw/raw5に作成する場合の例を以下に示します。

例1

UNICODEを使用する場合

```
$ rdbcrdic -r /dev/raw/raw5 -a 60M -U
```

例2

シフトJISコードを使用する場合

```
$ rdbcrdic -r /dev/raw/raw5 -a 60M -S
```

V7.0L10と8.0.0以降の非互換に対する対処

指定できるデータベースの文字コード系

回避方法はありません。

3.36 rdbrcvコマンド

変更内容

表のDSIをリカバリした場合に、同期復元機能(rまたはrbオプション)を使用しなくても、関連するインデックスのDSI(XML格納構造のインデックスのDSIを除きます)を自動的にリカバリするようになりました。そのため、V7.0L10以前において、同期復元機能およびダンプレス機能を利用せずに、インデックスのDSIだけをリカバリする運用を行っていた場合に影響があります。

V7.0L10以前

表のDSIをリカバリ後にインデックスのDSIをリカバリする場合

以下の条件をすべて満たしている場合、rdbrcvコマンドは正常終了します。

- 表のDSIに対してLOADモード(ダンプレス機能(f baseオプション)を除く)、FWモードまたはREFモードでリカバリを行っている。
- 上記の表のDSIのリカバリ後に、表のDSIに関連するインデックスのDSI(XML格納構造のインデックスのDSIを除きます)のみをリカバリしている。

tオプションを使って表のDSIとインデックスのDSIを同時にリカバリする場合

以下の条件をすべて満たしている場合、rdbrcvコマンドは正常終了します。

- LOADモードまたはFWモードのリカバリを行っている。
- tオプションに指定したファイルの中に、表のDSIとそれに関連するインデックスのDSI(XML格納構造のインデックスのDSIを除きます)を記述してリカバリしている。

8.0.0以降

表のDSIをリカバリ後にインデックスのDSIをリカバリする場合

“V7.0L10以前”で示した条件の場合、rdbrcvコマンドを実行するとqdg02662u「指定した資源's*'はアクセス禁止状態になっていません t*」のメッセージを出力してコマンドがエラーで終了します。

tオプションを使って表のDSIとインデックスのDSIを同時にリカバリする場合

“V7.0L10以前”で示した条件の場合、rdbrcvコマンドを実行するとqdg12639u「指定した資源's*'に属するインデックスのDSI t*が -tオプションで指定したファイル内に存在します u*」のメッセージを出力してコマンドがエラーで終了します。

非互換

表のDSIをリカバリ後にインデックスのDSIをリカバリする場合

“V7.0L10以前”で示した条件の場合、V7.0L10以前では正常終了していたrdbrcvコマンドがエラーで終了します。

バージョンレベル	動作
V7.0L10以前	正常終了
8.0.0以降	qdg02662uのメッセージを出力してエラーで終了

tオプションを使って表のDSIとインデックスのDSIを同時にリカバリする場合

“V7.0L10以前”で示した条件の場合、V7.0L10以前では正常終了していたrdbrcvコマンドがエラーで終了します。

バージョンレベル	動作
V7.0L10以前	正常終了
8.0.0以降	qdg12639uのメッセージを出力してエラーで終了

対処方法

表のDSIをリカバリ後にインデックスのDSIをリカバリする場合

表のDSIのリカバリ後に行っていたインデックスのDSI(XML格納構造のインデックスのDSIを除きます)のリカバリは不要です。該当するインデックスのDSIをリカバリしない運用手順に変更してください。

tオプションを使って表のDSIとインデックスのDSIを同時にリカバリする場合

tオプションに指定したファイルに、表のDSIとそれに関連するインデックスのDSI(XML格納構造のインデックスのDSIを除きます)を記述している場合、インデックスのDSIの記述は不要です。tオプションに指定したファイルから、該当するインデックスのDSIの行を削除してください。

3.37 rdbexecsqlコマンドの独立性水準

変更内容

V7.0L10以前

rdbexecsqlコマンドの独立性水準の初期値は、以下の表のとおりです。

表3.13 rdbexecsqlコマンドの独立性水準の初期値(V7.0L10以前)

R_LOCKの値	DSO_LOCKの指定	独立性水準
YES	×	REPEATABLE READ
NO	○	SERIALIZABLE
	—	

×: 指定不可

○: 指定あり

—: 指定なし

8.0.0以降

rdbexecsqlコマンドの独立性水準の初期値がREAD UNCOMMITTEDとなります。

ただし、動作環境ファイルでDSO_LOCKを指定している場合はSERIALIZABLEです。

表3.14 rdbexecsqlコマンドの独立性水準の初期値(8.0.0以降)

R_LOCKの値	DSO_LOCKの指定	独立性水準
YES	×	READ UNCOMMITTED
NO	○	SERIALIZABLE
	—	READ UNCOMMITTED

×: 指定不可

○: 指定あり

—: 指定なし

非互換

DSO_LOCKを指定していない場合、rdbexecsqlコマンドの独立性水準の初期値がREAD UNCOMMITTEDとなります。

対処方法

V7.0L10以前と8.0.0以降の非互換による対処

独立性水準をREAD UNCOMMITTED以外に変更したい場合はSET TRANSACTION文で独立性水準を変更してください。

rdbexecsqlコマンドを実行する場合は、クライアント用の動作環境ファイルのDEFAULT_ISOLATIONで指定した独立性水準の変更は無視されます。

3.38 アプリケーションのロケールの指定方法の変更

変更内容

V6.0L10以前

SQL埋込みCプログラムを使用する場合、アプリケーションのロケールは、Symfoware Serverのパッケージに依存して決定します。

V7.0L10以降

SQL埋込みCプログラムを使用する場合、アプリケーションのロケールは、アプリケーションのコンパイル時と実行時にそれぞれ環境変数LANGで指定します。

非互換

アプリケーションのコンパイル時と実行時のアプリケーションのロケールが異なり、かつ全角文字のデータを取り扱った場合に、コード変換の失敗などの異常が発生します。

対処方法

アプリケーションのコンパイル時および実行時には、環境変数LANGに、アプリケーションのロケールとして、同じ値を指定してください。

3.39 コード変換機能(iconv)の組込み

変更内容

V6.0L10以前

以下のように環境変数LD_LIBRARY_PATHを設定します。

```
$ LD_LIBRARY_PATH=/opt/FJSVrdb2b/lib:/etc/opt/FSUNiconv/lib:$LD_LIBRARY_PATH ; export LD_LIBRARY_PATH
(1)
```

(1) コード変換機能(iconv)のライブラリ格納場所

V7.0L10以降

以下のように環境変数LD_LIBRARY_PATHを設定します。

```
$ LD_LIBRARY_PATH=/opt/FJSVrdb2b/lib:$LD_LIBRARY_PATH ; export LD_LIBRARY_PATH
```

非互換

環境変数LD_LIBRARY_PATHの設定からコード変換機能(iconv)のライブラリ指定が不要となります。

対処方法

環境変数LD_LIBRARY_PATHの設定からコード変換機能(iconv)のライブラリ指定を取り除き、Symfoware Serverを再起動してください。



参考

設定がある場合でも、組込み版と製品版ではライブラリ名が異なるため、動作的に問題となりません。

3.40 インデックス検索の適用拡大

変更内容

V6.0L10以前

以下のルールでアクセスプランを作成します。

CASTの場合

インデックスキーまたはクラスタキーにCASTを指定すると、そのキーでインデックスの範囲検索またはクラスタキー検索を行いません。

四則演算の場合

四則演算の検索範囲について、インデックス範囲検索やクラスタキー検索を行いません。

V7.0L10以降

以下のルールでアクセスプランを作成します。

CASTの場合

インデックスキーまたはクラスタキーにCASTを指定すると、そのキーでインデックスの範囲検索またはクラスタキー検索を行います。

四則演算の場合

四則演算の検索範囲について、インデックス範囲検索やクラスタキー検索を行います。

非互換

本性能改善を適用した環境では、ほとんどの場合、性能が向上します。しかし、一部のSQL文で性能が悪くなる場合があります。また、CASTを用いた場合、データ型を合わせるように表を再作成した場合と比べて、使用するリソースが増えます。

CASTの場合

【性能】

以下の条件をすべて満たす場合、インデックス検索を行うことが原因で処理が遅くなる場合があります。

- 実表と導出表のジョインのSQL文である。

- 複数のジョインキーがあり、かつ導出表側の一部がインデックス構成列である。
- 上記のインデックス構成列になっているジョインキーの異なるキー値数が、そのジョインする表の件数と比べて非常に小さい。
- 上記インデックス構成列から漏れているジョインキーの異なるキー値数が、そのジョインする表の件数に非常に近い。

【リソース】

- 1つのCASTにつき、メモリ使用量が24バイト増えます。
- 1つのCASTにつき、作業用テーブル域がCAST後のデータ長×レコード数分増えます。
- 1つのCASTにつき、作業用ソート域がCAST後のデータ長×レコード数分増えます。

四則演算の場合

以下の条件をすべて満たす場合、検索するインデックスが変わって処理が遅くなることがあります。

- 四則演算の検索範囲の述語を指定していて、対応するインデックス(IX1)がある。
- 定数またはホスト変数の検索範囲の述語を指定していて、上記とは別の対応するインデックス(IX2)がある。
- 上記の述語をANDで連結している。
- 実際の検索範囲は、四則演算の検索範囲の方が広い(ヒットするレコード数が多い)。
- IX1のデータ分布が偏っているため、異なるキー値数はIX2よりもIX1の方が大きい。

対処方法

V6.0L10 以前と同等のアクセスプランにしたい場合、動作環境ファイルにSCAN_KEY_CAST=NOおよびSCAN_KEY_ARITHMETIC_RANGE=NOを指定してください。

3.41 rdbsloder、rdbsaloder、rdbsuloderコマンド

変更内容

V6.0L10以前

oオプション指定時のエラーメッセージについて

以下の条件をすべて満たした場合、rdbsloder、rdbsaloderまたはrdbsuloderコマンドを実行するとqdg02484u「d*件目: 1件(e*バイト)に満たない長さのバイナリデータで入力ファイルが終了しました s*」のメッセージを出力してコマンドが異常終了します。

- oオプションを指定している。
- 入力ファイル内のデータが定義長より短い。

oオプション指定時の入力データの扱いについて

以下の条件をすべて満たした場合、rdbsloder、rdbsaloderまたはrdbsuloderコマンドを実行すると入力データをNULL値として対象列に格納します。

- oオプションを指定している。
- 入力ファイル中にVARCHAR型、NCHAR VARYING型またはBLOB型のデータを指定している。
- 上記のデータについてNULL値を指定し、データの長さ部に指定された値のデータ部が存在する。
- rdbsloderコマンドの場合は、さらに以下の条件を満たしている。
 - レコード長がページ内格納域長を超えている場合



参照

レコード長およびページ内格納域長の見積りについては、“RDBユーザズガイド データベース定義編”を参照してください。

- 過去に表定義変更文による列定義削除を行っていて、削除前にはレコード長がページ内格納域長を超えていた場合
- XMLデータのインデックスが定義されている場合

V7.0L10以降

oオプション指定時のエラーメッセージについて

“V6.0L10以前”で示した条件の場合、rdbloader、rdbsaloaderまたはrdbsuloaderコマンドを実行するとqdg02483u「d*件目: 異常データが存在します 列名=s* t*」のメッセージを出力してコマンドが異常終了します。

oオプション指定時の入力データの扱いについて

“V6.0L10以前”で示した条件の場合、rdbloader、rdbsaloaderまたはrdbsuloaderコマンドを実行するとコマンドの実行がエラーとなります。



参照

レコード長およびページ内格納域長の見積りについては、“RDB運用ガイド(データベース定義編)”を参照してください。

非互換

oオプション指定時のエラーメッセージについて

“V6.0L10以前”で示した条件の場合、rdbloader、rdbsaloaderまたはrdbsuloaderコマンドで出力されるメッセージが変更されます。

バージョンレベル	メッセージ
V6.0L10以前	qdg02484u
V7.0L10以降	qdg02483u

oオプション指定時の入力データの扱いについて

“V6.0L10以前”で示した条件の場合、rdbloader、rdbsaloaderまたはrdbsuloaderコマンドの実行時に、V6.0L10以前では、入力データをNULL値としてデータベースに格納していましたが、V7.0L10以降では、コマンドの実行がエラーとなります。

対処方法

oオプション指定時のエラーメッセージについて

rdbloader、rdbsaloaderまたはrdbsuloaderコマンドの出力メッセージを解析して処理を行うシェルスクリプトなどが存在する場合、出力メッセージの変更に対する考慮を行ってください。

oオプション指定時の入力データの扱いについて

“V6.0L10以前”で示した条件の場合、rdbloader、rdbsaloaderまたはrdbsuloaderコマンドの実行時に、可変長列にNULL値を格納する場合は、入力データにNULLタグとデータの長さ部のみを指定し、データ部を指定しないようにしてください。

上記の対処ができない場合、環境変数“RDB_UTY_LENCHK”に“YES”を指定してください。V6.0L10以前と同様に入力データをNULL値として対象列に格納できます。

環境変数“RDB_UTY_LENCHK”は、rdbstartコマンドの実行時に有効となります。

また、実行するすべてのrdbloader、rdbloaderまたはrdbloaderコマンドに対して有効になります。

3.42 JDBCトレースの採取方法の変更

変更内容

V6.0L10以前

デバッグを行う場合は、JDBCトレースを使用します。JDBCトレースは、アプリケーション内でsetLogWriterメソッドを実行することで、採取可能です。

V7.0L10以降

デバッグを行う場合は、JDBCスナップを使用します。

非互換

setLogWriterメソッドによる、JDBCトレースの採取ができなくなります。

対処方法

Symfaware Server V7.0L10で、アプリケーションデバッグ用のログ採取機能は、機能を充実させたJDBCスナップをサポートしています。デバッグの際は、JDBCスナップを採取してください。



参照

JDBCスナップについては、“アプリケーション開発ガイド(JDBCドライバ編)”を参照してください。

3.43 GROUP BY句を指定した導出表を含むSQL文の探索条件の判定タイミングの変更

変更内容

以下のいずれかの導出表を指定したSQL文のWHERE句に、導出表を絞り込む探索条件を指定した場合、その探索条件を導出表のWHERE句に移動することにより、導出表の結果のワークテーブルを作る前に探索条件を判定できるようになります。

- ・ 導出表にGROUP BY句、HAVING句または集合関数を指定している場合。
- ・ 導出表の選択リストに列指定以外を指定している場合。

これにより、導出表の結果のワークテーブルのサイズが小さくなりSQL文のレスポンスが向上します。

非互換

V6.0L10以前

導出表を実行してワークテーブルを作成した後に、そのワークテーブルを読み込みながら探索条件を判定します。

V7.0L10以降

導出表を絞り込む探索条件を指定した場合、その探索条件を導出表のWHERE句に移動して、導出表用のワークテーブルを作る前に探索条件を判定します。

ほとんどの場合、検索性能が向上しますが、最適化情報を設定しない運用の場合、移動した探索条件により最適でないアクセスプランが作成され、バージョンアップを契機に、まれにSQL文のレスポンスが悪くなる場合があります。

対処方法

以下の1)、2)のいずれかを行ってください。

1)

- すべてのアプリケーションをV6.0L10以前と同じ動作としたい場合
システム用の動作環境ファイルのパラメタGROUP_COL_COND_MOVEにNOを指定してください。
- V6.0L10以前とV7.0L10以降のアプリケーションが混在していて、V6.0L10以前のアプリケーションのみ、以前と同じ動作としたい場合
V6.0L10以前のアプリケーションが使用するクライアント用の動作環境ファイルのパラメタGROUP_COL_COND_MOVEにNOを指定してください。

2)

SQL文にASSIST指定のLEADING_TABLEまたはUSE_INDEXを指定して、ジョイン順またはインデックスを固定してください。

3.44 列名の大文字および小文字の扱いの変更

変更内容

V5.0L10

列名において大文字と小文字が区別されます。

たとえば列名が“ADDRESS”という列のデータを参照するとき、ResultSet.getStringメソッドに、“Address”という列名を指定しても、指定された列は存在しないというエラーが発生します。

V6.0L10以降

列名において大文字と小文字が区別されません。

たとえば列名が“ADDRESS”という列のデータを参照するとき、ResultSet.getStringメソッドに、“Address”という列名を指定すると、“ADDRESS”列のデータを参照します。

非互換

1つの表の中に、大文字小文字を分けるだけの、別の列名が存在する場合、V5.0L10とV6.0L10以降とで、検索によってヒットする列が変わります。

[列定義の例]

```
CREATE TABLE MYSCHEMA.MYTABLE
  (ADDRESS CHARACTER VARYING (20),
   "Address" CHARACTER VARYING (20))
ON DBSP;
```

[アプリケーションでの指定例と結果]

	ResultSet.getString ("ADDRESS")	ResultSet.getString ("Address")	ResultSet.getString ("¥Address¥")
V5.0L10	列ADDRESSを参照	列Addressを参照	エラーコード1035のエラーメッセージを返却
V6.0L10以降	列ADDRESSを参照	列ADDRESSを参照	列Addressを参照

対処方法

JDBCデータソースの登録時または、アプリケーションに指定するURLに、JDBCドライバの以下のオプションを指定してください。オプションを指定することで、V5.0L10と同様の動作になります。

```
COMPATIBLE_MODE=(2)
```

3.45 ACCESS_PLANの変更

変更内容

V5.0L10

チューニングが行われた状態でアクセスプランを作成し、以下の設定で動作します。

- インデックス検索と表データ取得のアクセスモデルにおいて、TIDソートを利用しない。
- TIDユニオンマージのアクセスモデルを有効にしない。
- 占有モードがEXで動作する。
- JOINする場合、フェッチジョインのアクセスモデルを優先する。

V6.0L10以降

チューニングを行わないデフォルトの状態でアクセスプランを作成し、以下の設定で動作します。

- インデックス検索と表データ取得のアクセスモデルにおいて、TIDソートを利用する。
- TIDユニオンマージのアクセスモデルを有効にする。
- 占有モードがSHで動作する。
- JOINする場合、Symfoware/RDBがJOINのアクセスモデルを自動選択する。

非互換

ODOSまたはJDBCドライバを使用したアプリケーションで、以下の条件の場合、一部の処理で性能劣化が発生する場合があります。

1. Symfoware Server V5.0L10を使用していた。かつ、
2. 1.のSymfoware Serverで、PG16798を吸収した応急修正を適用していない。かつ、
3. Symfoware Server V6.0L10以降にバージョンアップした場合。

Symfoware Server V5.0L10では、PG16798の障害のため、Symfoware/RDBが誤ったチューニングパラメタ値を見てACCESS_PLANを作成し、動作しますが、Symfoware Server V6.0L10以降では、デフォルトのチューニングパラメタ値でACCESS_PLANを作成し動作するよう修正されています。

これによって、ACCESS_PLANの初期値が変更されることで、一部のアプリケーションでは、性能劣化が発生する可能性があります。

対処方法

ODOSを使用している場合

1. [ODBCデータソースアドミニストレータ]を起動する。
2. 使用するODOSデータソースを選択し、[Symfoware ODOSセットアップ]画面を表示する。
3. [オプション]ボタンをクリックし、[Symfoware/RDBオプション設定]画面を表示する。
4. [その他パラメタ]に以下の情報を登録する。

CLI_DEFAULT_PARAM=(COMPATIBLE)

5. [OK]ボタンをクリックし、[Symfoware/RDBオプション設定]画面を閉じる。
6. [OK]ボタンをクリックし、[Symfoware ODOSセットアップ]画面を閉じる。
7. [OK]ボタンをクリックし、[ODBCデータソースアドミニストレータ]を終了する。

JDBCドライバを使用している場合

アプリケーション内でJDBCデータソースを使用して接続している場合

1. [JDBCデータソース登録ツール]を起動する。
2. 使用するデータソースの、[JDBCデータソース情報設定]画面を表示する。
3. [オプション]ボタンをクリックする。

4. その他パラメタに以下の情報を記載する。

```
ctuneparam=' CLI_DEFAULT_PARAM=(COMPATIBLE)'
```

5. [登録]ボタンをクリックする。
6. [OK]ボタンをクリックし、[JDBCデータソース登録ツール]を終了させる。

アプリケーション内で接続先のURLを直接指定している場合

JDBCのURLの後ろに、以下の文字列を追加する。

```
ctuneparam=' CLI_DEFAULT_PARAM=(COMPATIBLE)'
```

3.46 getObjectメソッドの仕様変更

変更内容

V5.0L10

データ型が数値型の列に、NULLのデータが格納されているとき、`ResultSet.getObject`メソッドを使用して、データを取得すると、JDBCドライバは、アプリケーションに対して、数値の0を返却します。

V6.0L10以降

データ型が数値型の列に、NULLのデータが格納されているとき、`ResultSet.getObject`メソッドを使用して、データを取得すると、JDBCドライバは、アプリケーションに対して、NULLを返却します。

非互換

データ型が数値型の列にNULLのデータが格納されているとき、`ResultSet.getObject`メソッドを使用してデータを取得すると、JDBCドライバからアプリケーションに返却されるデータが変更されます。

対処方法

JDBCデータソースの登録時または、アプリケーションに指定するURLに、JDBCドライバの以下のオプションを指定してください。オプションを指定することで、V5.0L10と同様の動作になります。

```
COMPATIBLE_MODE=(1)
```

3.47 getLongメソッドの仕様変更

変更内容

V5.0L10

データ型がNUMERIC型またはDECIMAL型で、精度15桁を超えるデータが格納されているとき、`ResultSet.getLong`メソッドを使用してデータを取り出すと、下1桁または2桁のデータが不定のデータになります。

たとえば、列定義がDECIMAL(18,0)の列から16桁データ“9999999999999991”を取り出すと、データが16桁の“9999999999999992”になって出力されます。

V6.0L10以降

データ型がNUMERIC型またはDECIMAL型で、精度15桁を超えるデータが格納されているとき、`ResultSet.getLong`メソッドを使用してデータを取り出すと、格納されたデータどおりの値を取得可能です。

たとえば、列定義がDECIMAL(18,0)の列から16桁データ“9999999999999991”を取り出すと、16桁の“9999999999999991”が返却されます。

非互換

データ型がNUMERIC型またはDECIMAL型で、精度15桁を超えるデータが格納されているとき、`ResultSet.getLong`メソッドを使用すると、JDBCドライバから、アプリケーションに返却されるデータが変更されます。

対処方法

JDBCデータソースの登録時または、アプリケーションに指定するURLに、JDBCドライバの以下のオプションを指定してください。オプションを指定することで、V5.0L10と同様の動作になります。

```
COMPATIBLE_MODE=(3)
```

3.48 定義長よりも長いデータの扱いの変更

変更内容

V5.0L10

INSERT文、UPDATE文、DELETE文など、データベースの更新操作を伴うSQL文を実行した際に、列の定義長よりも長いデータを指定した場合、アプリケーションに以下のエラーメッセージが返却されます。

```
The size of data specified exceeds the maximum allowable size of data for the column
```

V6.0L10以降

INSERT文、UPDATE文、DELETE文など、データベースの更新操作を伴うSQL文を実行した際に、列の定義長よりも長いデータを指定した場合、アプリケーションに以下のエラーメッセージが返却されます。

```
[SymfoWARE ODBC Driver][SymfoWARE Server] JYP2084E 文字データの有効文字が失われます.
```

非互換

アプリケーションに返却されるエラーメッセージが変更されます。

対処方法

アプリケーションの処理で、エラーメッセージのメッセージ本文を見て、処理の切り分けを行っている場合は、Symfoware Server V6.0L10以降の文字列に置き換えて処理を実行してください。

3.49 ジョイン順の変更

変更内容

Symfoware/RDBにおけるSQL文の最適化のチューニングとして、JOIN_ORDERパラメタを設定します。JOIN_ORDERには、AUTO、INSIDE(省略値)、OUTSIDEを指定することができます。

最適化処理は、最適化情報から処理手順にかかるコストを見積もり、最適なジョイン順を決めます。最適化情報が設定されていない場合は、どのジョイン順も同じコストになる可能性が高くなります。JOIN_ORDERにINSIDEを指定するか、省略し、同じコストの場合、ジョイン順は以下のようになります。

5.x系以前

WHERE句の表を結合する探索条件の記述の逆順にジョインするアクセスプランを選択します。

6.x系以降

WHERE句の表を結合する探索条件の記述順にジョインするアクセスプランを選択します。

非互換

V5.0L10以前

JOIN_ORDERにINSIDEを指定するか、省略し、最適化情報を設定しない運用の場合、ジョイン順がWHERE句の表を結合する探索条件の記述の逆順になります。

V6.0L10以降

JOIN_ORDERにINSIDEを指定するか、省略し、最適化情報を設定しない運用の場合、ジョイン順がWHERE句の表を結合する探索条件の記述順になり、バージョンアップを契機に、まれにSQL文のレスポンスが悪くなる場合があります。

対処方法

以下の1)、2)のいずれかを行ってください。

1)

- すべてのアプリケーションを5.x系以前と同じ動作としたい場合
システム用の動作環境ファイルのパラメタSAME_COST_JOIN_ORDERにREVERSEを指定してください。
- V5.0L10以前とV6.0L10以降のアプリケーションが混在していて、V5.0L10以前のアプリケーションのみ、以前と同じ動作としたい場合
V5.0L10以前のアプリケーションが使用するクライアント用の動作環境ファイルのパラメタSAME_COST_JOIN_ORDERにREVERSEを指定してください。

2)

SQL文にASSIST指定のLEADING_TABLEを指定して、ジョイン順を固定してください。

第4章 プログラム修正一覧

本ソフトウェアでは、以前のバージョンレベルで発生した障害が修正されています。

今回のバージョンレベルで吸収された修正内容、および修正番号については、以降に示す表を参照してください。

4.1 EEEの場合

No.	バージョン レベル	P番号	現象
1	V10.1.0	PG38319	以下の条件を満たす時、Symfoware/RDBがqdg02842u(※)のメッセージを出力してダウンする場合があります。 (※) qdg02842u:シグナル6を受信したためRDBIIシステム空間が異常終了しました 1. CREATE PROCEDURE文でプロシジャルーチンを以下のいずれかの方法で定義する。かつ、 — rdbddlexコマンドで定義する。または、 — アプリケーションから、EXECUTE 文またはEXECUTE IMMEDIATE文により定義する。 2. 前述1.のプロシジャルーチンに対し、新たにrdbddlexコマンドまたはアプリケーションから、以下のいずれかの方法で削除する。 — 当該プロシジャルーチンに対してDROP PROCEDURE 文を実行する。 — 当該プロシジャルーチン内で参照している表に対して、CASCADE指定のDROP TABLE 文を実行する。 — 当該プロシジャルーチンを含むスキーマに対して、CASCADE指定のDROP SCHEMA 文を実行する。
2		PG44815	[現象1] 以下のいずれかの条件の時、qdg02842uを出力しSymfoware Serverがダウンする場合がある。 [条件1] 1. データベースの文字コード系と、応用プログラムの文字コード系が異なる。かつ、 2. CONNECT文を実行する。または、DML文が、文字列型。または、各国語文字列型を扱う場合。 [条件2] 1. Symfoware/RDBの文字コード系とデータベースの文字コード系が異なる場合。かつ、 2. XMLアダプタを利用している。かつ 3. rdbinfコマンドにおいて-xml pathオプションを指定している。 [条件3] 1. Symfoware/RDBの文字コード系とデータベースの文字コード系が異なる場合。かつ、 2. Linkexpress Replication optionを使用したレプリケーション運用において、lxrepcrcコマンド(注1)の入力ファイルにWHEREを指定している。

No.	バージョン レベル	P番号	現象
			注1) Linkexpress Replication optionの抽出定義を作成するコマンドです。 詳細は、Linkexpress Replication optionのマニュアルを参照してください。 [現象2] 以下のいずれかの条件の時、以下のメッセージが出力され、メッセージ内容からエラー原因を特定することができない場合がある。 ・JYP2063E:コード変換に失敗しました。 ・JYP2532E:プロシジャルーチンのパラメタ変数のコード変換に失敗しました。 ・JYP2209E:出力ホスト変数へのコード変換で変換できない文字があります。 [条件1] 1. データベースに格納されるデータの文字コード系と、応用プログラムの文字コード系が異なる。かつ、 2. DML文が、文字列型。または、各国語文字列型を扱う場合。 [条件2] 1. データベースに格納されるデータの文字コード系と、応用プログラムの文字コード系が異なる。かつ、 2. プロシジャルーチンをCALLする。かつ、 3. 以下のいずれかの条件を満たす場合。かつ、 a. プロシジャルーチンでINパラメタ、または、INOUTパラメタを指定する。または、 b. プロシジャルーチン内で実行するDML文に値指定、または、列指定を指定する。 4. 3.で指定するデータ型が、文字列型、または、各国語文字列型の場合。 ※1 データの文字コード系は以下から確認できます。 ークライアント用動作環境ファイルのCHAR_SETに指定したコード系 ーCHAR_SETを省略した場合、応用プログラムの文字コード系 また、応用プログラムの文字コード系は以下から確認できます。 ーOSがSolaris、またはLinuxの場合 環境変数LANGに指定された文字コード系 ーOSがWindowsの場合 SJIS ※2 Symfoware/RDBの文字コード系は、以下のコマンドのRDBCODEの項で確認できます。 pkgparam -v FSUNrdb2b ※3 データベースの文字コード系は、以下のコマンドで確認できます。 rdbprt -m CODE

No.	バージョン レベル	P番号	現象
3		PG58422	[現象] SET STATISTICS文を実行すると、qdg02842u(※)のメッセージを出力してSymfoware/RDBがダウンする場合があります。 または、以下のいずれかのメッセージを出力してSET STATISTICS文の実行が異常終了する場合があります。 JYP4600E "@1@"で文が終了しています JYP4601E "@1@"の後ろに余分なオペランド"@2@"が指定されています (※) qdg02842u シグナルd*を受信したためRDBIIシステム空間が異常終了しました [環境] 以下のいずれかのOSである場合。 • Solaris(TM)Operating System または、 • Linux または、 • Windows [発生条件] 1. SET STATISTICS文を実行する。かつ、 2. SET STATISTICS文にFILEオペランドを指定し最適化情報を記述したファイル名を指定している。かつ、 3. 最適化情報を記述したファイルの最終行に改行を指定していない。かつ、 4. 最適化情報を記述したファイルの最終行が以下のいずれかを満たしている。 1. 数字のみを指定している。かつ、数字で行が終了している。(注1) 2. 文字列(注2)を1個のみ指定している。かつ、文字列で行が終了している。(注3) (注1)数字の前後に半角空白、またはタブが指定されている場合も該当 以下、数字で行が終了している例。(△:半角空白、^:タブ、[EOF]:行の最後) 123[EOF] 123△[EOF] 123^[EOF] (注2)半角空白、タブ、等号(=)、またはカンマ(,)以外の文字で構成される文字列 (注3)以下、文字列で行が終了している例。([EOF]:行の最後) ABC[EOF] ABC123[EOF]
4		PG59340	[現象]

No.	バージョン レベル	P番号	現象
			rdbupsコマンドを実行すると、qdg02842u(※)のメッセージを出力してSymfoware/RDBがダウンする場合があります。 (※) qdg02842u:シグナルd*を受信したため RDBIIシステム空間が異常終了しました。 [環境] 以下のいずれかのOSである場合。 • Solaris(TM) Operating System または、 • Linux または、 • Windows または、 • UXP/DS [発生条件] 1. 表に対して複数のインデックスのDSIが定義されている。かつ、 2. 一部のインデックスのDSIが以下いずれかの状態の場合。かつ、 ()は本来出力すべきエラーメッセージになります。 a. DSIが非活性、または、定義直後の状態(qdg02520u) b. DSIは他の利用者が参照または更新中(qdg03204u) c. DSIが更新抑止または参照更新抑止の状態(qdg12040u) d. DSIは他の利用者が参照または更新中(qdg03204u) e. データベーススペースが参照更新抑止の状態(qdg12042u) f. DSIがインダウト閉塞状態(qdg12814u) g. 指定された監査ログエレメントがフラッシュトリートメント閉塞状態(qdg13438u) h. インデックスのDSIがインダウトリカバリ不可閉塞状態(qdg13945u) i. インデックスのDSIがアクセス禁止状態(qdg12190u) j. RDBIIディクショナリがインダウト閉塞状態(qdg12816u) k. データベーススペースがアクセス禁止状態(qdg12044u) l. メモリ不足(qdg12071u,qdg12874u) 3. 表、または、DSO指定でrdbupsコマンドを実行した場合。
5		PG61276	[現象] 以下に示す環境・発生条件のとき、Connection ManagerまたはSymfoware/RDBが以下のメッセージを出力して異常終了する場合があります。 <Connection Managerを使用している場合> apc00008u:Connection Manager system process has been abnormally terminated because it received signal d*. d*:シグナル番号。-1073741819(Windows)または11(UNIX系)。 <Connection Managerを使用していない場合>

No.	バージョン レベル	P番号	現象
			qdg02842u:シグナルd*を受信したため RDBIIシステム空間が異常終了しましたs* d*:シグナル番号。-1073741819(Windows)または11(UNIX系)。 s*:RDBシステム名。マルチRDBの場合のみ出力。 [環境] 本障害は、以下のOSで発生します。 - Solaris(TM) Operating System - Linux - Windows - UXP/DS [発生条件] - 以下のいずれかのアプリケーションを使用する。かつ、 — 埋込みSQLを使用したC言語またはCOBOL言語のアプリケーション — JDBCを使用したJavaアプリケーション — ODBCアプリケーション 1つのアプリケーションプロセスから複数のRDBシステム(※1)に接続する。かつ、 - 接続方法がローカル接続(※2)である。かつ、 - アプリケーション内で2)で接続したコネクションを切断せずに、アプリケーションプロセスを終了する。 ※1 Connection Managerを使用している場合も含まれます。 (1つのアプリケーションプロセスから、1つのRDBシステムに対して、Connection Managerを使用して接続したコネクションと、ローカル接続したコネクションが存在する場合も該当します。) ※2 Connection Managerを使用している場合、アプリケーション— Connection Manager間には、ローカル接続となります。
6		PG61453	[現象] JYP1006E データ受信中にサーバとの通信が切断されました。 のメッセージを表示しSymfoware/RDBがダウンします。 [環境] • Solaris(TM)Operating System • Linux • Windows [発生条件] - SET SYSTEM PARAMETER 文で、セキュリティパラメタ AUDIT_MANAGE=YESを設定している。かつ、(※) - 監査ログデータベースを作成している。かつ、 - アプリケーションから静的SQL文で監査ログデータベースを参照する。かつ、

No.	バージョン レベル	P番号	現象
			4. 3.のアプリケーションで実行するSQL文の長さが32000バイトを超える場合。 (※)以下のコマンドで、セキュリティパラメタの状態を確認できます。 rdbrpt -m PARAM
7		PG62265	[現象] 利用者制御機能を使用してコネクションを接続すると、MAX_CONNECTIONの実行資源数に達していないにもかかわらず以下のメッセージを出力しエラーとなる場合があります。 『JYP2608E利用者制御機能における実行資源の制限を超えました. code = “1”』 [環境] 以下のOSである場合。 - Solaris(TM)Operating System または、 - Linux [発生条件] 1. 利用者制御機能を利用している。かつ、 2. ユーザパラメタの"MAX_CONNECTION"に0以外の値を指定している。かつ、 3. 以下のいずれかの場合。 — アプリケーションからコネクション接続時にエラー(*)が発生している。または、 — SET SESSION AUTHORIZATION文実行時にエラー(*)が発生している。 (*)ここで発生しうるエラーは以下の通りです。 ◇メモリ関連： - メモリ不足(JYP5007E、JYP5006E) ◇環境関連： - コード変換ライブラリの不備(JYP1068U、JYP1080U) - アクセスプラン、SQL_TRACEのファイルオープンエラー(JYP2600U、JYP2602U) - TRACEFILE_USEにNOを指定して調査用ファイルの取得(JYP2604U) ◇パラメタ関連： - INCLUSION_DSIの指定誤り(JYP1050E) - DSO_LOCKの指定誤り(JYP1051E) - WORK_PATHの指定誤り(JYP1056E) - R_LOCK=YESとDSO_LOCKを同時に指定(JYP1060E) - サーバ用動作環境ファイルの指定値のコード変換でエラー(JYP1041U) - クライアント用動作環境ファイルの指定値のコード変換でエラー(JYP1033U)

No.	バージョン レベル	P番号	現象
			- 標準セキュリティ運用で、システム用動作環境ファイル以外に WORK_PATHを指定 (JYP1082E) - 利用者制御機能における、実行資源数の制限を超えた(JYP2608) ◇RDBディクショナリアクセス関連： - デッドロック(JYP2099E) - ディクショナリ不整合(JYP5122E) - I/Oエラー(JYP5037E) - バッファ枯渇(JYP5008E)
8		PG62951	[現象] 各国語文字列定数に、文字として指定した引用符(")と合わせて32000 バイトを超えた文字列を指定すると、以下のメッセージを出力し Symfoware/RDBがダウンします。 ー qdg02842u:シグナル11を受信したため RDBIIシステム空間が異常 終了しました [環境] 以下のいずれかのOSである場合。 1. Solaris(TM) Operating System または、 2. Linux または、 3. Windows [発生条件] 1. データベースのコード系が、Unicodeである。かつ、 2. SQL文に指定した各国語文字列定数に、文字として引用符 (※)を指定している。かつ、 3. 2.を含む文字列の合計バイト数が、各国語文字列型の定量制 限值である32000バイトを超えている。 ※) 文字として引用符()を指定する場合、引用符()を2つ連続して記 述します。 例) SELECT CLM1 FROM SCH1.TBL1 WHERE CLM1 LIKE N'あ いう""えお' 『あいう""えお』の文字列の合計バイト数が、32000バイトを超える場 合。
9		PG63263	[現象] 以下に示す現象・発生条件のとき、アプリケーションおよび、RDBコマ ンドが無応答となる場合があります。 [環境] 本障害は以下のOSで発生します。 ・ Linux [発生条件] 1. データベーススペースへアクセスする際のI/O方式に非同期I/O を使用している。(注)かつ、

No.	バージョン レベル	P番号	現象
			2. データベースへの挿入・更新・削除処理を行っている。かつ、 3. 2.で挿入・更新・削除を行ったデータが配置されているデータベーススペースに対して、<code>rdbmrdmp</code>コマンドまたは<code>swstbackup</code>コマンドを実行している。 (注) RDB構成パラメタファイルの定義種別RDBASYNCIOにYESを設定することで使用することができます。
10		PG65282	[現象] 「qdg02842u シグナルd*を受信したため RDBIIシステム空間が異常終了しました s*」を出力し、Symfoware/RDBがダウンします。 [環境] 以下のいずれかの環境の場合。 ◆Solaris(TM) Operating System ◇Symfoware Server Enterprise Extended Edition 6.0 913574-18～30,913575-18～30,913576-18～30,913577-18～30 ◇Symfoware Server Enterprise Extended Edition 6.0.1 913621-18～32,913622-18～32,913623-18～32,913624-18～32 ◇Symfoware Server Enterprise Extended Edition 7.0 T014HS-08～18 ◇Symfoware Server Enterprise Extended Edition 7.0.1 T023GS-02～13 ◇Symfoware Server Enterprise Extended Edition 7.0.2 T025TS-01～11 ◇Symfoware Server Enterprise Extended Edition 8.0.0 T000174SP-01～09 ◇Symfoware Server Enterprise Extended Edition 9.0.0, 9.0.0A, 9.1.0 ◇Symfoware Server Enterprise Edition 6.0 Symfoware Server Standard Edition 6.0 913578-18～28,913579-18～28 ◇Symfoware Server Enterprise Edition 6.0.1 Symfoware Server Standard Edition 6.0.1 913625-17～27,913626-17～27 ◇Symfoware Server Enterprise Edition 7.0 Symfoware Server Standard Edition 7.0 T014IS-07～16 ◇Symfoware Server Enterprise Edition 7.0.1 Symfoware Server Standard Edition 7.0.1 T023HS-02～11 ◇Symfoware Server Enterprise Edition 7.0.2 Symfoware Server Standard Edition 7.0.2

No.	バージョン レベル	P番号	現象
			T025US-01～10 ◇Symfoware Server Enterprise Edition 8.0.0 Symfoware Server Standard Edition 8.0.0 T000191SP-01～08 ◇Symfoware Server Enterprise Edition 9.0.0, 9.0.0A, 9.1.0 Symfoware Server Standard Edition 9.0.0, 9.0.0A, 9.1.0 ◆Linux ◇Symfoware Server Enterprise Extended Edition V7.0L10 ◇Symfoware Server Enterprise Extended Edition 8.0.0, 8.0.0A, 8.0.1 T000132QP-02～11 ◇Symfoware Server Enterprise Extended Edition 9.0.0, 9.0.1, 9.1.0, 9.2.0 ◇Symfoware Server Enterprise Edition V6.0L10, V6.0L10A, V6.0L10B Symfoware Server Standard Edition V6.0L10, V6.0L10A T00305-15～19 ◇Symfoware Server Enterprise Edition V7.0L10 Symfoware Server Standard Edition V7.0L10 T00899-02～12 ◇Symfoware Server Enterprise Edition V7.0L10C Symfoware Server Standard Edition V7.0L10C T00989-01～11 ◇Symfoware Server Enterprise Edition 8.0.0, 8.0.0A Symfoware Server Standard Edition 8.0.0, 8.0.0A T000241LP-01～09 ◇Symfoware Server Enterprise Edition 9.0.0, 9.0.1, 9.1.0 10.0.0 Symfoware Server Standard Edition 9.0.0, 9.0.1, 9.1.0, 9.2.0 10.0.0 10.0.0A ◆Windows ◇Symfoware Server Enterprise Edition V6.0L10 Symfoware Server Standard Edition V6.0L10 Symfoware Server for Windows V6.0L10 TP08577,TP08773,TP08879,TP09047,TP09220,TP09420,TP09625,TP09705,TP09831,TP09926 ◇Symfoware Server Enterprise Edition V7.0L10, V7.0L10C Symfoware Server Standard Edition V7.0L10, V7.0L10C Symfoware Server for Windows V7.0L10, V7.0L10C TP08709,TP08911,TP09077,TP09257,TP09387,TP09557,TP09637,TP09711,

No.	バージョン レベル	P番号	現象
			TP09781,TP09873,TP09998 ◇Symfoware Server Enterprise Edition 8.0.0 Symfoware Server Standard Edition 8.0.0 Symfoware Server Base Edition 8.0.0 T00210WP-01～08 ◇Symfoware Server Enterprise Edition 9.1.0, 9.1.1 10.0.0 10.0.1 Symfoware Server Standard Edition 9.1.0, 9.1.1 10.0.0 10.0.1 [発生条件1] - 動的パラメタを指定したEXECUTE文を実行する。かつ、 - 以下のいずれかの操作を行う。かつ、 - rdbexdsiコマンド(-monオプション、-moffオプション、または、-mwオプション)を実行する。または、 - rdbddlfixコマンドを実行し、1.のEXECUTE文で参照する表の定義を変更する。または、 - SCOPE 定義を適用した認可識別子に対するSET SESSION AUTHORIZATION文を実行し、 1.のEXECUTE文のアクセス対象のDSIの範囲を変更する。 1.、2.を実行後にCOMMIT文、または、ROLLBACK文を実行する。かつ、 3.を実行後に、1.と同じSQL文識別子を指定したEXECUTE文を実行する。かつ、 1と4.のEXECUTE文が、以下のいずれかである。(*) - SQL記述子を指定している。または、 - プログラムソース上で同一行に記述している。 [発生条件2] - 動的パラメタを指定したEXECUTE文を実行する。かつ、 - 以下のいずれかの操作を行う。かつ、 - rdbalidxコマンド - rdbfmtコマンド - rdbsloaderコマンド 2.を実行後に、1)と同じSQL文識別子を指定したEXECUTE文を実行する。かつ、 1と3.のEXECUTE文が、以下のいずれかである。(*) - SQL記述子を指定している。または、 - プログラムソース上で同一行に記述している。 (*)rdbuptコマンドを実行した場合も本条件に該当します。
11		PG65659	[現象] DSIの削除においてqdg13777u(*1)のエラーメッセージを出力して異常終了後、RDBコマンドまたはアプリケーションを実行すると

No.	バージョン レベル	P番号	現象
			qdg12695u(*2)のメッセージを出力してSymfoware/RDBがダウンする場合があります。 (*1)qdg13777u:DSIが削除途中の状態でありロールバックが不可能なためデータベースをアクセス禁止状態にしました DB名='s*' DSI名='t*' u* (*2)qdg12695u:システム障害が発生しました 分類コード=s* 内部コード=(t*) u* [環境] 以下のいずれかのOSである場合。 • Oracle Solaris または、 • Linux または、 • Windows または、 • UXP/DS [発生条件] - 以下のいずれかによりDSIの容量拡張が発生している(*1)。かつ、 - 自動容量拡張の場合 - 以下のいずれかによりDSIの自動容量拡張を定義している。かつ、 — rdbalmsiコマンド — CREATE DSI文(EXPAND OFFを指定しない場合)(*2)(*3) 1.で指定したDSIに対して、以下のいずれかの処理の延長で自動容量拡張が動作する。 — INSERT文 — UPDATE文 — rdbloaderコマンド — rdbsaloaderコマンド — rdbsuloaderコマンド — rdbuptコマンド - 自動容量拡張以外の場合 - rdbgcdsiコマンド - ALTER DSI文による容量拡張(*2) 1.のDSIに対して以下のいずれかによりDSIの削除を実行する。かつ、 — DROP DSI文 — DROP SCHEMA文(CASCADE指定) — DROP TABLE文(CASCADE指定) — DROP DSO文(CASCADE指定) — DROP INDEX文

No.	バージョン レベル	P番号	現象
			3. 2.の実行中に以下のいずれかの事象が発生し、qdg13777uのエラーメッセージを出力する。かつ、 － 異常が発生 － 2.に対してロールバックを実行 － Symfoware/RDBがダウンした後、Symfoware/RDBを再起動 4. qdg13777uの利用者の処置に従って1.のDSIの削除を実行していない。かつ、 5. 4.の後、1.のDSIに対して以下のいずれかを実行した場合。 － rdbfmtコマンド － rdbloaderコマンド(*4) (*1)現象の発生するDSIの状態はrdbprtコマンド(DSI指定)の「Allocation information」の「No(割付け先の数)」から確認することができます。 <現象の発生するDSIの状態> ・ 表のDSIの場合 割付け先の数が501個以上 ・ インデックスのDSIの場合 割付け先の数が249個以上 (*2)9.1.0以降に利用できる機能 (*3)RDB構成パラメタファイルにRDBEXPDSI=YESまたは、RDBEXPDSIを指定しない場合。 (*4)rdbloaderコマンドは参照先のメモリ状態によって正常終了する場合があります。 その後、以下のアプリケーション、またはRDBコマンドによりDSIをアクセスした場合、Symfoware/RDBがダウンします。 [アプリケーション] INSERT文・DELETE文・SELECT文・UPDATE文 [RDBコマンド] rdbalmsi・rdbconbf・rdbddlex・rdbdisbf・rdbdmp・rdbexdsi・ rdbexecsql・rdbexspc・rdbfmt・rdbgcpsi・rdbinh・rdbmrddmp・rdbmrrcv・ rdbpmt・rdbrcv・rdbrcvdic・rdbresident・rdbrls・rdbrr・rdbsaload・ rdbsetrp・rdbloader・rdbuload・rdbudsi・rdbunl・rdbunlx・rdbups・ rdbupt・rdbunsql
12		PG65663	[現象] RDBコマンド、または、SQLアプリケーションを実行中に、qdg12695u(※1)のメッセージを出力してSymfoware/RDBがダウンする。 ※1)「qdg12695u システム障害が発生しました 分類コード=s* 内部コード=(t*) u*」 [環境] 以下のいずれかのOSを使用している場合。 - Solaris(TM) Operating System、または、 - Linux、または、 - Windows、または、

No.	バージョン レベル	P番号	現象
			- UXP/DS [発生条件] 1. RDBコマンド(※2)、または、SQLアプリケーションを実行する。かつ、 2. 1.を実行中にメモリ不足が発生して異常終了(※3)する。かつ、 3. 3.RDBコマンド(※4)、または、SQLアプリケーションを実行する。 ※2)以下のRDBコマンドが該当。(アルファベット順に記載) rdbalidx rdbalmdsi rdbaltop rdbconbf rbddlex rbddlfix rbdmp rdbcpload rbexdsi rbexecsql rbexspc rbfmt rbgcpsi rbhsuty rbinf rbinh rbmrdmp rbmrrcv rbpmt rbprt rbrcv rbrcvdc rbresident rbrls rbtr rbloader rbcldir(Vオプション指定) rbsetrp rbloader rbpcinf rbloader

No.	バージョン レベル	P番号	現象
			rdbudsi rdbunl rdbunlx rdbunsql rdbups rdbupt 注意事項: 上記コマンドは、VLによっては存在しないものもあります。マニュアルのコマンドリファレンスを確認ください。 ※3) RDBコマンドは以下のメッセージなどを出力して、コマンドが異常終了。 「qdg12071u 利用可能なメモリが不足しています s*」 「qdg12171u ローカルメモリ不足が発生しました s*」 また、SQLアプリケーションは以下のメッセージなどを出力して、コマンドが異常終了。 「JYP1070E メモリ不足が発生しました」 「JYP5007E RDBIIサーバ空間内のメモリ不足が発生しました」 ※4) (※2)のRDBコマンドが該当します。なお、[発生条件]1.のRDBコマンド、または、SQLアプリケーションと同じでなくても発生します。 補足) 本現象はメモリ配置によるため、発生条件を満たしても必ず発生するわけではありません。
13		PG65855	[現象] 問合せ指定に結合表を記述したSQL文を実行すると、qdg02842u(※)のメッセージを出力してSymfoware/RDBがダウンまたは、誤った検索結果が取り出される場合があります。 ※) qdg02842u:シグナルd*を受信したため RDBIIシステム空間が異常終了しました。 [環境] 以下のいずれかのOSである場合。 • Oracle Solaris または、 • Linux または、 • Windows または、 • UXP/DS [発生条件] 1. SQL文の問合せ指定に結合表を指定する。かつ、 2. 1.の結合表に対して1.で指定した同じ表(相関名なし)、または、1.と同じ相関名を指定して、さらなる結合を実施する。かつ、 3. 2.の表または相関名で修飾した列を、2.の結合条件に指定した場合。 以下にSQL文の例を示します。

No.	バージョン レベル	P番号	現象
			SELECT T1. C1 FROM S1. T1 LEFT JOIN S1. T2 ON T1. C1=T2. C1 LEFT JOIN S1. T2 ←条件2) ON T1. C1=T2. C1 ←条件3) 説明) S1.T2が重複して指定されています。 S1.T2の列を結合条件に指定しています。
14		PG66699	[現象] 下記の環境、条件のときに、qdg02842u のメッセージを出力して、Symfoware Server がダウンすることがある。 [環境] 以下のOSである場合。 • Linux • Solaris • Windows • UXP/DS [発生条件] 1. rdblnkfコマンドを-dオプションを指定して実行している。かつ、 2. 以下の二つの処理を同時に同一のデータベース資源に対して実行する。かつ、 2-1)以下の条件のもとでSELECT文を実行する。 - ー 並列指定にPARALLELを指定しているか、もしくは、クライアント用動作環境ファイル、サーバ用動作環境ファイルのPARALLEL_SCANにYESを指定している。かつ、 - ー トランザクションの独立性水準が、SERIALIZABLE、REPEATABLE READ、READ COMMITTEDのいずれかである。 2-2)更新のロックをとるSQL文を実行する。更新のロックをとるSQL文は以下のいずれかである。 - ー UPDATE文 または、 - ー DELETE文 または、 - ー 更新可能性句にFOR UPDATEを指定したSELECT文 または、 - ー 占有モード指定にEXCLUSIVE LOCKを指定したSELECT文 または、 - ー クライアント用動作環境ファイル、または、サーバ用動作環境ファイルのDSO_LOCKパラメタにEXを指定した SELECT文 3. 2の後、2-1)のSELECT文を実行したコネクションにおいて、デッドロックが発生する。
15		PG67462	[現象]

No.	バージョン レベル	P番号	現象
			SymfoWARE/RDBが"qdg02842u シグナルd*を受信したため RDBII システム空間が異常終了しました"のメッセージを出力してダウンする場合があります。 [環境] 以下のOSである場合。 1. Solaris(TM)Operating System または、 2. Linux または、 3. Windows [発生条件] 以下の場合、SymfoWARE/RDBがダウンする場合があります。 1. アプリケーションがコネクションを接続している状態である。かつ 2. ネットワークの異常等でSymfoWARE/RDBのサーバが不当なプロトコルを受信した場合。
16		PG67487	[現象] 最適化情報のファイルを記述したSET STATISTICS文の実行が正常終了したにもかかわらず、最適化情報が設定されない(※)ことがあります。なお、本現象の発生を利用者が認識するのは以下の場合です。 - PRINT STATISTICS文の出力結果を参照時。または、 - アクセスプランの取得結果を参照時 ※)設定されない最適化情報は以下です。 - DSI(RANDOM型)を記述した場合の以下の項目(一部の項目) AVERAGE PAGE MAXPAGE - DSI(BTREE型)を記述した場合の以下の項目(全ての項目) PAGE INDEX HIGHT DIFFERENT KEY [環境] 以下のいずれかのOSを使用している場合。 - ー Solaris(TM) Operating System、または、 - ー Linux、または、 - ー Windows [発生条件] 1. SET STATISTICS文を実行する。かつ、 2. SET STATISTICS文に最適化情報のファイルを記述している。かつ、 3. 2.ファイルにDSI(RANDOM型)、または、DSI(BTREE型)を記述している。

No.	バージョン レベル	P番号	現象
17		PG67641	ロードシェア運用の場合にDSIが偏在しないRDBシステムでコマンドやアプリケーションを実行すると以下の事象が発生する場合があります。 [現象1] リモートシステム(※)のデータベース資源を検索、更新するコマンドやアプリケーションを実行すると、データベース資源(DSI)の初期化や創成が完了しているにもかかわらず、以下の事象が発生する場合があります。 - データベース資源を更新するアプリケーションまたはrdbuptコマンドを実行すると、「JYP5002E スキーマ“XX”の表“XX”内に定義されているDSI“XX”の初期化が完了していません。」のエラーが発生する。 - データベース資源を参照するアプリケーションまたはrdbexecsqlおよびrdbunsqlコマンドを実行すると、データが存在している場合にも、当該DSIで1件もヒットせず、データを検索できない。 [現象2] リモートシステム(※)のデータベース資源を検索、更新するコマンドやアプリケーションを実行する場合に、DSIに設定されている最適化情報よりも古い最適化情報で動作する場合があります。 ※) ロードシェアを構成するRDBシステムの内、アプリケーションの接続先(コマンドの場合はコマンドを実行するRDBシステム)のRDBシステムを除く他のRDBシステムをリモートシステムと言います。 [環境] 以下のいずれかのOSである場合。 1. Solaris(TM) Operating System または、 2. Linux または、 3. UXP/DS [発生条件1] 1. ロードシェア運用を行っている。かつ、 2. DSIを定義する。かつ、 3. 2.のDSIのフォーマットや創成を行なう前に、DSIが存在するRDBシステム以外のRDBシステムで以下のいずれかの操作を行なう。かつ、 a. rdbpldicコマンドで、2.で定義したDSIの定義情報のメモリ展開を行なう。 b. アプリケーションから2.で定義したDSIを検索または更新する、かつ、接続を切断していない。 4. 以下のいずれかの操作を行う。かつ、(※) a. 2.のDSIのフォーマット、または、rdbloaderによる創成を行なう。 b. 2.のDSIに対して、rdbupsコマンド、または、SET STATISTICS文による最適化情報の設定を行う。

No.	バージョン レベル	P番号	現象
			5. 3.の操作を行なったRDBシステムに対して、2.のDSIを検索、更新するアプリケーション、または、以下のいずれかのRDBコマンドを実行する。 - rdbuptコマンド - rdbunlsqコマンド - rdbexecsqlコマンド ※ 4.a.の操作を行った場合、[現象1]が発生します。 4.b.の操作を行った場合、[現象2]が発生します。 [発生条件2] 1. ロードシェア運用を行っている。かつ、 2. DSIヘデータを格納する。かつ、 3. 2.のDSIに対して、DSIが存在するRDBシステム以外のRDBシステムで以下のいずれかの操作を行なう。かつ、 a. rdbpldicコマンドで、2.のDSIの定義情報のメモリ展開を行なう。 b. アプリケーションから2.のDSIを検索または更新する、かつ、コネクションを切断していない。 4. 2.のDSIのうち、表のDSIのみフォーマットを行う(表のDSIに所属するインデックスのDSIが閉塞する)。かつ、 5. アプリケーション、rdbuptコマンドまたはrdbexecsqlコマンドで2.のDSIヘデータを格納する。かつ、 6. 3.の操作を行なったRDBシステムに対して、2.のDSIを検索するアプリケーション、または、以下のいずれかのRDBコマンドを実行する。 - rdbunlsqコマンド - rdbexecsqlコマンド ※ [現象1]が発生します。
18		PG68326	[現象] Symfoware/RDBが以下のメッセージを出力してダウンする場合があります。 qdg02842u シグナルd*を受信したため RDBIIシステム空間が異常終了しました (d*: シグナル番号) [環境] 以下のOSで発生します。 • Solaris (TM) Operating System • Linux • Windows [発生条件] 1. 以下のいずれかのコマンドを実行する。かつ、

No.	バージョン レベル	P番号	現象
			a. rdbddlexコマンド(-lオプション)で、表に列を追加、または、DSIの追加を行う。または、 b. rdbddlexコマンドでDSIの分割値変更を行う。または、 c. rdbalidxコマンドでインデックスを非活性な状態に変更する。 2. 1.のコマンド実行中に、応用プログラムからSQL文を実行する。
19		PG68452	[現象] RDBコマンドの実行において、メッセージqdg12275w(※)を出力してアーカイブログファイルが閉塞される場合があります。 (※) (*****は可変の値／文字です) qdg12275w:アーカイブログファイル***** (通番:*****) への書込み時に*****システムコールでエラーが発生しました errno=***** [環境] 以下のいずれかのOSである場合。 • Solaris(TM) Operating System または、 • Linux または、 • Windows [条件] 1. アーカイブログ運用を行っている。かつ、 2. RDBシステムの状態が停止状態である。かつ、 3. 以下のいずれかのRDBコマンドを実行する。かつ、Symfoware Server のコマンド • rdbscldir -V • rdblog -V -a Symfoware Active DB Guard のコマンド • rdbbcrpl -V 4. 3.のコマンド実行中にI/Oエラーが発生する。
20		PG69007	[現象] 以下の環境および発生条件のいずれかに該当するとき、Symfoware/RDBがダウンする場合があります。 [環境] 以下のOSを使用している場合。 • Solaris(TM) Operating System または • Linux または • Windows 【発生条件1】 1. システム用またはクライアント用の動作環境ファイルのパラメタARC_FULLLにRETURNを指定している。かつ、 2. システム用またはクライアント用の動作環境ファイルのパラメタR_LOCKにYESを指定している。かつ、 3. インデックスを定義した表を定義している。かつ、

No.	バージョン レベル	P番号	現象
			4. アプリケーションから以下のいずれかのSQL文によって当該表を更新するトランザクションを実行する。かつ、 1. INSERT文 または 2. インデックスが定義された列を更新するUPDATE文:位置づけ または 3. インデックスが定義された列を更新するUPDATE文:探索 5. 当該インデックスがDSIの自動容量拡張の設定になっており、設定方法が以下のいずれかに合致する。かつ、 1. V9.1以降の場合、当該インデックスのDSI定義時にEXPAND ONを指定している。または、 2. V9.1以降の場合、当該インデックスのDSI定義時にEXPAND を指定していない。かつ、RDB構成パラメタファイルのパラメタRDBEXPDSIにYESを指定している。または、 3. rdbalmsiコマンドにより、当該インデックスに対する自動容量拡張を定義する。 6. 4.のトランザクションにおいてCOMMIT文を実行する。かつ、 7. 6.のCOMMIT文の処理においてインデックスDSIの空き容量が拡張契機に達する。かつ、 8. 6.のCOMMIT文の処理において、アーカイブログの満杯事象が発生する。 【発生条件2】 1. SQL文の実行時にエラー(※)が発生する。 (※)Symfoware/RDBの内部で内部矛盾と判定される不特定のエラーが該当します。
21		PG69505	[現象] [現象1] 以下の発生条件に一致した場合、qdg02842u(※)のメッセージを出力してSymfoware/RDBがダウンします。 ※ qdg02842u:シグナル6を受信したため RDBIIシステム空間が異常終了しました [現象2] 以下の発生条件に一致した場合、指定したスキーマと異なるスキーマにビューが定義されます。 [環境] 以下のいずれかのOSである場合。 － Solaris (TM) Operating System または、 － Windows または、 － Linux [発生条件] [現象1の発生条件]

No.	バージョン レベル	P番号	現象
			1. ビュー定義の間合せ指定の選択リストに、DEFAULT値として順序を定義した列を指定している。かつ、 2. ビューと順序が所属するスキーマ名の長さが以下にしめす条件に一致する。かつ、 － 1.の順序が所属するスキーマ名の長さがビューの所属するスキーマ名の長さより長い。または － 1.の順序が所属するスキーマ名の長さがビューの所属するスキーマ名の長さより短い。 3. 以下にしめす条件に一致する名前のスキーマが定義されていない。 － 1.の順序が所属するスキーマ名の長さと一致する。かつ、 － 1.のビューが所属するスキーマ名の先頭文字列と一致する。 例: <pre>CREATE TABLE SCM1.T1 (C1 INTEGER DEFAULT SCM1.SEQ1.NEXTVAL); (1) CREATE VIEW S1.VIEW1 AS SELECT C1 FROM SCM1.T1; (2)</pre> ※(1)と(2)の長さが一致していない。 [現象2の発生条件] 1. ビュー定義の間合せ指定の選択リストに、DEFAULT値として順序を定義した列を指定している。かつ、 2. 1.の順序が所属するスキーマ名の長さがビューの所属するスキーマ名の長さより短い。かつ、 3. 1.の順序が所属するスキーマ名の長さ分までビューの所属するスキーマ名文字列と一致するスキーマが定義されている。 4. 以下にしめす条件に一致する名前のスキーマが定義されている。 － 1.の順序が所属するスキーマ名の長さと一致する。かつ、 － 1.のビューが所属するスキーマ名の先頭文字列と一致する。 例: <pre>CREATE TABLE SC1.T1 (C1 INTEGER DEFAULT SC1.SEQ1.NEXTVAL); (1) CREATE VIEW SC11.VIEW1 AS SELECT C1 FROM SC1.T1; (2)</pre> ※(1)が(2)のスキーマ名より短く、(2)のスキーマ名のうち(1)のスキーマ名の長さ分のスキーマが存在する。
22		PG69562	[現象] RDBコマンドまたはアプリケーションを実行すると、無応答になる場合がある。 現象が発生した場合、メッセージログファイルに以下のメッセージが出力されます。 • qdg12440u インデックス域の入出力障害が発生しました errno=d* • qdg13239i ロググループ's*'において事象't*'が発生しました

No.	バージョン レベル	P番号	現象
			[環境] 以下のいずれかのOSを使用している場合に、発生します。 - Solaris(TM) Operating System - Linux - Windows [発生条件] 1. テンポラリログのインデックス部が破損する。かつ、 2. 以下のいずれかの操作を行う。 a. データベースを更新するアプリケーションを実行する。または b. データベース更新やデータベース定義を含む Symfoware / RDB のコマンドを実行する。(※) ※現象が発生する可能性のあるSymfoware / RDB のコマンド rdbalidx, rdbdmp, rdbddlex, rdbddlfix, rdbalmsi, rdbfmt rdbgcdic, rdbgcdsi, rdbrcv, rdbsaload, rdbslod, rdbsuload rdlbunl, rdbups, rdbupt
23		PG69756	[現象] 以下の環境および発生条件のいずれかに該当するとき、アプリケーションが無応答となる場合があります。また、派生する現象として、rdbtermコマンドによる接続の強制回収が出来なくなります。 [環境] 以下のOSを使用している場合。 - Solaris(TM) Operating System または - Linux [発生条件] 1. ロードシェア構成である。かつ、 2. CREATE SEQUENCE 文のCACHE 句に、保持順序数として1以上の値を指定した順序を定義している。かつ、 3. ロードシェアを構成するSATELLITEシステムの1台において、2.の順序に対する採番処理を伴うアプリケーションを多重(※)で実行する。 (※):CACHE 句に指定される保持順序数より大きな多重度
24		PG69994	[現象] 以下に示す条件下でアプリケーションを多重で実行した場合、COMMIT文の処理に時間がかかる(※)、または、COMMIT文の処理が完了しない場合があります。 ※目安として通常は数分オーダーで完了するところが、数時間オーダーとなる場合があります。 [環境] 以下のいずれかのOSを使用している場合。 ・ Solaris(TM) Operating System、または、

No.	バージョン レベル	P番号	現象
			• Linux、または、 • Windows [発生条件] 1. 表のDSO定義にSEQUENTIAL構造を指定している。かつ、 2. 1.の表に対してインデックスを付加している。かつ、 3. 1.の表に対して行単位の排他を使用したアプリケーションを実行している。かつ、 4. トランザクション内で1.の表に対してINSERT文またはDELETE文、UPDATE文を実行している。かつ、 5. 2.の同一DSIに対してアプリケーションを多重で実施している(注)。かつ、 6. 3.のアプリケーションで同時にCOMMIT文を実行している。 注)再現時の環境は以下。 1トランザクション200件の一括INSERTを同一DSIに対して400コネクションから実施しました。(1DSIに対しては、200件×400コネクション＝8万件の挿入処理) また、お客様環境では、1つのDSIに対して100多重以上が実行されていました。
25		PG70741	[現象] [現象1] GRANT文でユーザに対して、ビュー表のDROP権を付与しようとする と、JYP3503E(※1)のエラーとなります。 ※1) JYP3503E GRANT文に指定された権限“DROP”を付与する権 限がありません。 [現象2] GRANT文でユーザに対して、ビュー表に付与可能な全ての権限を 付与しようすると、DROP権が付与できません。 この結果、権限受領者はビュー表に対するDROP文を実行できませ ん。 [環境] 以下のいずれかのOSを使用している場合。 1. Solaris(TM) Operating System または、 2. Linux または、 3. Windows または、 4. UXP/DS [発生条件] [発生条件1] Symfowareの管理者(※2)以外のユーザが、以下のオペレーションを 実行(オペレーションは、全て同じユーザで実行)すると現象1が発生 します。 <パターン1>

No.	バージョン レベル	P番号	現象
			1. 問合せ指定が更新不可能なビュー表(※3)を定義する。かつ、 2. 以下を指定したGRANT文を実行する。 a. 対象名に1.のビュー表を指定する。かつ、 b. 権限にDROPを指定する。かつ、 c. 権限受領者に認可識別子、または、PUBLICを指定する。 <パターン2> 1. 問合せ指定が更新可能なビュー表(※3)を定義する。かつ、 2. 以下を指定したGRANT文を実行する。 a. 対象名に1.のビュー表を指定する。かつ、 b. a.のビュー表が参照する表に、実行ユーザに対するDROP権が付与されていない。かつ、 c. 権限にDROPを指定する。かつ d. 権限受領者に認可識別子、または、PUBLICを指定する。 [発生条件2] Symfoware管理者(※2)以外のユーザが、以下のオペレーションを実行(オペレーションは、全て同じユーザで実行)すると現象2が発生します。 <パターン1> 1. 問合せ指定が更新不可能なビュー表(※3)を定義する。かつ、 2. 以下を指定したGRANT文を実行する。 a. 対象名に1.のビュー表を指定する。かつ、 b. 権限にALL PRIVILEGESを指定する。かつ、 c. 権限受領者に認可識別子、または、PUBLICを指定する。 <パターン2> 1. 問合せ指定が更新可能なビュー表(※3)を定義する。かつ、 2. 以下を指定したGRANT文を実行する。 a. 対象名に1.のビュー表を指定する。かつ、 b. a.のビュー表が参照する表に、実行ユーザに対するDROP権が付与されていない。かつ、 c. 権限にALL PRIVILEGESを指定する。かつ、 d. 権限受領者に認可識別子、または、PUBLICを指定する。 ※2) RDBディクショナリの創成者。 ※3) 更新不可能か更新可能かは、rdbprtコマンドの出力結果(Updatable view)で確認できます。 Updatable viewがYESなら更新可能で、NOなら更新不可能(読込み専用)であることを示します。

No.	バージョン レベル	P番号	現象
			また、更新不可能か更新可能かは、マニュアルの以下に記載されている内容に、ビュー表の問合せ指定が合致するか否かで決定します。 Symfoware Server SQLリファレンス 第3章 基本的なSQL文 「DECLARE CURSOR(カーソル宣言)」の「読み込み専用カーソルとなる条件」の表
26		PG71199	[現象] RDBコマンド、ローカルアクセスを行うアプリケーション、またはRDA接続を行うアプリケーションが無応答になる場合があります。 また、Connection Managerの場合、アプリケーションまたは、APCコマンドが無応答になる場合があります。 [環境] 以下のいずれかのOSを使用している場合に発生します。 ーLinux ※ ーSolaris(TM) Operating System ーWindows ※ IA64版では発生しません。 [発生条件] 1. CPU数またはコア数が2以上である。かつ、 2. 以下のいずれかを実行した場合。 ーSymfoware/RDBの場合、RDBコマンド、ローカルアクセスを行うアプリケーション、または、RDA接続を行うアプリケーション ーConnection Managerの場合、APCコマンド、またはアプリケーション 尚、本障害はCPUの特性によるタイミング依存であるため、条件に一致しても発生しない場合があります。
27		PG73661	[現象] FETCH文を実行すると、qdg02842uを出力してSymfoware/RDBがダウンする場合があります。 qdg02842u:シグナルd*を受信したため RDBIIシステム空間が異常終了しました d*: シグナル番号 [環境] 以下の環境の場合。 ・ Solaris(TM) Operating System ・ Linux ・ Windows [発生条件1] 1. 埋込みSQLを利用した、C言語またはCOBOL言語のアプリケーションを使用する。かつ、 2. 以下のいずれの条件にも該当する。かつ、

No.	バージョン レベル	P番号	現象
			- 動作環境ファイルのRESULT_BUFFERの個数に0以外を指定(*1)する。かつ、 - 動作環境ファイルのRESULT_BUFFERのバッファサイズが、選択リストに指定した値式の合計長より長い。 - アクセスする表のインデックスに非活性状態(*2)のDSIが含まれる。かつ、 3.の表を参照するカーソルに対して、OPEN文を実行する。かつ、 3.のDSIに対して、4.と同時に以下のいずれかのコマンドを実行する。かつ、 - rdbfmtコマンド - rdbsloaderコマンド 5.の後に4.でオープンしたカーソルに対して、FETCH文を実行する。 [発生条件2] - JDBCを使用したJavaアプリケーションを使用する。かつ、 - 以下のいずれの条件にも該当する。かつ、 - ctuneparamオプションのCLI_RESULT_BUFFERパラメタの個数に0以外を指定(*3)する。かつ、 - CLI_RESULT_BUFFERパラメタのサイズが、選択リストに指定した値式の合計長より長い。 - アクセスする表のインデックスに非活性状態(*2)のDSIが含まれる。かつ、 3.の表を参照するSELECT文を指定して、以下のいずれかのメソッドを実行する。かつ、 - Statementインタフェースのexecuteまたは、executeQueryメソッド - PreparedStatementインタフェースのexecuteまたは、executeQueryメソッド 3.のDSIに対して、4.と同時に以下のいずれかのコマンドを実行する。かつ、 - rdbfmtコマンド - rdbsloaderコマンド 5.の後に4.の実行で作成されたResultSetに対して、以下のいずれかのメソッドを実行する。 - next - absolute - afterLast - first - last - previous

No.	バージョン レベル	P番号	現象
			7. relative [発生条件3] 1. ODOSを使用した、ODBCアプリケーションを使用する。かつ、 2. 以下のいずれの条件にも該当する。かつ、 1. CLI_RESULT_BUFFERパラメタの個数に0以外を指定(*3)する。かつ、 2. CLI_RESULT_BUFFERパラメタのサイズが、選択リストに指定した値式の合計長より長い。 3. アクセスする表のインデックスに非活性状態(*2)のDSIが含まれる。かつ、 4. 3.の表を参照する。かつ、 5. 3.のDSIに対して、4.と同時に以下のいずれかのコマンドを実行する。かつ、 1. rdbfmtコマンド 2. rdbsloaderコマンド 6. 5.の後に4.のデータを取得する。 [発生条件4] 1. rdbexecsqlコマンドを使用する。かつ、 2. 以下のいずれの条件にも該当する。かつ、 1. 動作環境ファイルのRESULT_BUFFERの個数に0以外を指定(*1)する。かつ、 2. 動作環境ファイルのRESULT_BUFFERのバッファサイズが、選択リストに指定した値式の合計長より長い。 3. アクセスする表のインデックスに非活性状態(*2)のDSIが含まれる。かつ、 4. 3.の表に対して、SELECT文を実行する。 5. 3.のDSIに対して、4.と同時に以下のいずれかのコマンドを実行する。 1. rdbfmtコマンド 2. rdbsloaderコマンド (*1):パラメタを省略した場合の(バッファの個数,バッファサイズ)は、Windows環境では(0,1)、Solaris/Linux環境では(2,32)になります。 (*2):以下の場合にDSIは非活性状態となります。 ・ DSIの定義直後の状態 ・ rdbalidxコマンドを実行した状態 ・ 表DSIおよびインデックスDSIが両方活性の状態から表DSIのみ初期化した状態 (*3):パラメタを省略した場合の(バッファの個数,バッファサイズ)は、(2,32)になります。
28		PG74549	[現象]

No.	バージョン レベル	P番号	現象
			Symfoware/RDBのデータベーススペースが作成されている場合、ACM(※1)のGUI画面またはACMのstgxfwcmsetdevコマンドを使用して、デバイス情報取得/反映を実行しても、Symfoware/RDBのデータベーススペース情報が登録されません。 (※1)ACMはETERNUS SF AdvancedCopy Managerの略です。以降ACMと呼びます。 [環境] 以下のいずれかのOSである場合。 • Solaris(TM) Operating System • Linux • Windows [発生条件] 1. Symfoware/RDBのデータベーススペースの作成先のパス名に区切り文字を2つ以上連続したパス名を指定してデータベーススペースを作成する。かつ 2. 上記を実施したノードに対して、ACMのGUIまたはACMのstgxfwcmsetdevコマンドを使用して、デバイス情報取得/反映を行う場合
29		PG74728	[現象] 以下のメッセージを出力し、Symfoware/RDBがダウンする場合があります。 『qdg02842u:シグナル*を受信したため RDBIIシステム空間が異常終了しました』 [環境] 以下のいずれかのOSである場合。 • Solaris(TM) Operating System または、 • Linux または、 • Windows [発生条件] 1. 監査ログ運用を行っている。かつ、 2. 監査ログパラメタAUDIT_SQLにYESを指定している。かつ、 3. 監査ログパラメタAUDIT_SQLBINDにYESを指定している。かつ、 4. 以下のいずれかの方法を使用したSQL文を実行する。かつ、 1. 文字列型の入力ホスト変数を使用した場合。または、 2. 文字列型の動的パラメタを使用した場合。 5. 4の入力ホスト変数または動的パラメタに指定した文字列に、二重引用符が含まれる。かつ、 6. 4の入力ホスト変数または動的パラメタに指定したデータが以下の式を満たす。 データ長(※) + データ内の二重引用符の数 > 1030

No.	バージョン レベル	P番号	現象
			(※) データ長が1024バイトを超える場合、1024として計算する。 なお、入力ホスト変数のデータ長が1024バイトを超える場合は、データ中に含まれる二重引用符の位置によっては、現象が発生しない場合があります。
30		PG74816	[現象] DDL文とDML文を同一トランザクションで実行するとき、qdg02842u(*)のメッセージを出力しSymfoware/RDBがダウンする。 (*)qdg02842u:シグナルd*を受信したため RDBIIシステム空間が異常終了しました s* [環境] 以下のいずれかのOSである場合。 • Solaris(TM) Operating System または、 • Linux または、 • Windows [発生条件] 1. 更新系のDML文を以下のいずれかの方法によって実行する。かつ、 1. PREPARE文で準備した動的SQLをEXECUTE文で実行する または 2. EXECUTE IMMEDIATE文でSQL文を実行する 2. 1.のDML文が構文エラー以外のエラーとなる。かつ、 3. 1.と同一のトランザクション内で、1.のDML文が処理対象とした資源に対して、以下のいずれかのDDL文を実行する。かつ、 1. DROP TABLE文 または 2. DROP DSO文 または 3. DROP DSI文 または 4. ALTER TABLE文 または 5. DROP INDEX文 または 6. DROP TRIGGER文 4. 3.の実行後、COMMIT文またはROLLBACK文を実行する。
31		PG74910	[現象] Symfoware Advanced Backup Controller(以降、ABC)のリカバリ中、メッセージqdg12695uを出力してSymfoware/RDBがダウンします。 qdg12695u: System error occurred. Reference code = XXXXXXXXXXXX Internal code = (idt_p:YYYYYYYYYYY sub_code:0 module:qdcmmers line:ZZZ) [環境] 以下のいずれかのOSを使用している場合。 • Solaris(TM) Operating System または、 • Linux または、

No.	バージョン レベル	P番号	現象
			- Windows [発生条件] - アーカイブログ運用を実施している。かつ、 - ABCのリカバリ(rdbmrrcvコマンド、または、swstrestoreコマンド)対象データベーススペースに対し、ABCのバックアップ(rdbmrddmpコマンド、または、swstbackupコマンド)を実施している。かつ、 - ABCのリカバリ対象データベーススペースにDSIが定義されていない。かつ、 - ABCのリカバリ対象データベーススペースが属するロググループのアーカイブログファイルの状態(*1)にfull状態または、using状態が存在しない。かつ、 2.の退避データを使用してABCのリカバリを実施する。 (*1)アーカイブログファイルの状態は以下のコマンドで確認可能。 rdblog -V -a [-g ユーザロググループ名]
32		PG74982	[現象] Symfoware/RDBに接続する応用プログラムが無応答になる場合があります。 [環境] 以下のOSで発生します。 - Solaris(TM) Operating System - Linux - Windows [発生条件] - 応用プログラムから接続を接続する。かつ、 - 以下のいずれかの場合。かつ、 - RDB2_TCP接続でSymfoware/RDBに接続している。または、 - Connection Managerを使用してSymfoware RDBに接続している。 1.の処理中に、rdbtermコマンドで1)の接続を切断する(*1)。 *1)rdbterm自体は正常終了します。
33		PG75261	[現象1] rdbstopコマンドでSymfoware/RDBを停止時に、以下のエラーメッセージが出力され、Symfoware/RDBが停止できない場合があります。 - 標準エラー rdb: ERROR: qdg12426u:RDBIIを停止できません 原因:動作中 - RBDREPORTファイル qdg12148e:SQL文の実行で重症エラーを検出しました:'JYP5015E RDBII起動中または停止中のため処理を実行できません.'

No.	バージョン レベル	P番号	現象
			qdg12147e:通信処理において異常が発生しました:'JYP5015E RDBII 起動中または停止中のため処理を実行できません.' [現象2] rdbstopコマンド -mc オプションでSymfoware/RDBを停止時に、以下のエラーメッセージを出力する場合があります。なお、Symfoware/RDBの停止は正常に終了します。 • RBDREPORT qdg12148e:SQL文の実行で重症エラーを検出しました:'JYP5015E RDBII起動中または停止中のため処理を実行できません.' qdg12147e:通信処理において異常が発生しました:'JYP5015E RDBII 起動中または停止中のため処理を実行できません.' [環境] 以下の環境である。 • Windows • Solaris • Linux [発生条件] 1. V9.1.0以降のSymfoware Connection Manager(以下Connection Manager)を使用している。かつ 2. 以下のいずれかの運用を行っている。かつ — V9.1.0以前のロードシェア運用(*1) — ホットスタンバイ運用 3. Symfowareを停止する。 (*1) RDB構成パラメタファイルに以下のパラメタが設定されている場合、V9.1.0以前のロードシェア運用となります。 • RDBLOADSHARE
34		PG75263	[現象] 以下に示す環境・発生条件のとき、下記のメッセージを出力してSymfoware/RDBがダウンする場合があります。 「qdg02842u:シグナル11を受信したためRDBIIシステム空間が異常終了しました」 [環境] 本障害は以下のいずれかのOSで発生します。 • Solaris(TM) Operating System • Linux • Windows [発生条件] 以下の条件で発生する場合があります。 1. パフォーマンスモニタを利用している。かつ、

No.	バージョン レベル	P番号	現象
			2. パフォーマンスデータ格納ファイルで入出力障害(*1)が発生する。かつ、 3. アプリケーション、またはRDBコマンド実行時にデッドロックが発生する。 *1) 出力されるメッセージは以下になります。 qdg14170w:パフォーマンスデータ格納ファイルにおいて、 入出力障害が発生しました ファイル名='*****' システムコール='*****' errno=***** (*****は可変の値)
35		PG75309	[現象] ロードシェア環境でrdbddlexコマンドを実行すると、Symfoware/RDBのメモリ使用量が不当に増加(*1)し、メモリ不足が発生する場合があります。 *1)1回のrdbddlexコマンドの実行毎に約50Kバイトのメモリ使用量が不当に増加します。 [環境] 以下のいずれかのOSを使用している場合。 • Solaris(TM) Operating System または、 • Linux または、 • UXP/DS [発生条件] 1. Satelliteシステムでrdbddlexコマンドを実行する。かつ、 2. 1.のコマンドに指定したファイルに以下のSQL文以外を記述している。 — CREATE TRIGGER文 — CREATE DSI文 — DROP TRIGGER文 — SET STATISTICS文
36		PG75656	[現象] NULLを指定したCASE式と並列指定を同時に指定したSQL文を実行すると、以下のエラーメッセージを出力してSymfoware/RDBがダウンする場合があります。 qdg02842u:シグナル11を受信したため RDBIIシステム空間が異常終了しました。 [環境] • Solaris(TM) Operating System • Linux • Windows [発生条件]

No.	バージョン レベル	P番号	現象
			1. 以下のいずれかによって、表を並列に検索する。かつ、 1-1) SQL文に並列検索(PARALLEL)を指定している。または、 1-2)クライアント用の動作環境ファイルまたは、サーバ用の動作環境ファイルにPARALLEL_SCAN=YESを指定している。または、 1-3)環境変数RDBPSCANにYESを指定している。 2. 以下の条件をすべて満たす場合。かつ、 2-1) 表をDSI分割している、かつ、複数のDSIに対してアクセスしている。 2-2) WHERE句にROW_IDを指定していない。 2-3) クラスタキーを構成するすべての列について、WHERE句に論理演算子ANDで、IN述語や=の比較述語で指定していない。 2-4) SQL文にCONTAINS関数を指定していない。 2-5) SQL文にファンクションルーチンを指定していない。 2-6) 探索条件に列を参照する条件を指定している。 3. 1-2)、または、1-3)の場合は、表の全件検索のアクセスモデルである。かつ、 4. SQL文にCASE式を指定している。かつ、 5. 4.のCASE式が以下のいずれかである。かつ、 5-1) CASE略式である。または、 5-2) CASE指定であり、結果にNULLを指定している。 6. 4.のCASE式の結果がNULLとなるレコードが含まれている。かつ、 7. 4.のCASE式を集合関数に指定している場合は、以下の条件を満たす場合。 7-1) FROM句には1つの表を指定している。かつ、 7-2) GROUP BY句を指定していない。かつ、 7-3) 副問合せを指定していない。かつ、 7-4) 7.の集合関数の他に、DISTINCTを指定した集合関数を指定していない。
37		PG75673	[現象] rdbdmpdicコマンド実行中にRDBディクショナリに対してI/Oエラーが発生または、RDBディクショナリの破壊を検出すると、qdg12695u(※)のメッセージを出力してSymfoware/RDBがダウンします。 (※)qdg12695u: System error occurred. Reference code = XXXXXXXXXXXX Internal code = (idt_p:YYYYYYYYYYY sub_code:W module:qdcsecom670 line:ZZZ) [環境] 以下のいずれかのOSを使用している場合。 • Solaris(TM) Operating System または、 • Linux または、 • Windows [発生条件] 1. rdbdmpdicコマンドを使用してRDBディクショナリのバックアップを実施している。かつ、

No.	バージョン レベル	P番号	現象
			2. 1.実行中に 以下のいずれかの事象が発生した場合 - ー RDBディクショナリに対してreadエラーが発生(※1)。 - ー RDBディクショナリの破壊を検出(※2)。 (※1)RDBディクショナリに対してreadエラーが発生した場合、RDBREPORTで指定したメッセージログファイルにqdg12771u(RDBIIディクショナリの入出力処理で異常が発生しました)のメッセージが出力されます。 (※2)RDBディクショナリの破壊を検出した場合、RDBREPORTで指定したメッセージログファイルにqdg12769u(RDBIIディクショナリが破壊されています)のメッセージが出力されます。
38		PG75683	[現象] ODBCアプリケーションで複数件のデータを参照したとき、返却されるはずのデータが返却されない場合があります。 [環境] 本障害は、以下の環境で発生します。 ・ Windows [発生条件] 1. Symfoware Server V10を使用している。かつ、 2. Symfoware ODOS連携のアプリケーションを実行する。かつ、 3. SQLSetStmtOptionで第2パラメタにSQL_ROWSET_SIZEを指定する。かつ、 4. SQLSetStmtOptionで第3パラメタに2以上の値を指定する。かつ、 5. SQLExtendedFetchでデータを参照する。
39		PG75821	[現象] 以下に示す発生条件のとき、以下の現象が発生する場合があります。 [現象1] JYP7201E スキーマ“@1@”が存在しません. のエラーとなります。 [現象2] JYP7210E データベース“@1@”が存在しません. のエラーとなります。 [現象3] JYP2263E スキーマ“@1@”の表“@2@”に“@3@”権がありません. のエラーとなります。 [現象4] SET TRANSACTION文で設定した独立性水準、トランザクションアクセスモード以外の状態でSQL文が動作することで、以下の事象が発生します。 1. 本来更新SQL文が実行可能なトランザクションであるにもかかわらず、「JYP2087E トランザクション状態は読み専用です. 更新系SQL文は実行できません.」エラーとなります。

No.	バージョン レベル	P番号	現象
			2. 他のトランザクションで更新中のデータに対して、本来1つ前のトランザクションでCOMMITされたデータが参照できず、他のトランザクションが完了するまで排他待ちとなります。 [環境] 以下のいずれかの環境の場合。 － Solaris(TM) Operating System － Linux － Windows [発生条件] [現象1の発生条件] 1. 後述のA)のいずれかを使用する。かつ、 2. V9.1以降のSymfoware Server Connection Managerを使用する。かつ、 3. 以下のいずれかに該当する。かつ、 埋込みSQLアプリケーションまたは、rdbexecsqlコマンドの場合) SET SCHEMA文を実行する。 Javaアプリケーションまたは、ODBCアプリケーションの場合) デフォルトスキーマ名を指定するか、SET SCHEMA文を実行する。 4. 後述のC)のいずれかの理由により、コネクションが切断される。かつ、 5. 4の後、ロールバックを実行する。かつ、 6. 5の後、スキーマ名で修飾していない識別子を使用して、以下のいずれかのSQL文を実行する。 埋込みSQLアプリケーションまたは、rdbexecsqlコマンドの場合) 動的カーソル宣言以外の動的SQL文または、CALL文。 Javaアプリケーションまたは、ODBCアプリケーションの場合) データ操作文または、CALL文。 [現象2の発生条件] 1. 後述のA)のいずれかを使用する。かつ、 2. V9.1以降のSymfoware Server Connection Managerを使用する。かつ、 3. 以下のいずれかに該当する。かつ、 埋込みSQLアプリケーションまたは、rdbexecsqlコマンドの場合) SET CATALOG 文または、データベース名を付けたSET SCHEMA文を実行する。 Javaアプリケーションまたは、ODBCアプリケーションの場合) データベース名を付けたSET SCHEMA文を実行する。 4. 後述のC)のいずれかの理由により、コネクションが切断される。かつ、 5. 4の後、ロールバックを実行する。かつ、

No.	バージョン レベル	P番号	現象
			6. 5.の後、以下のいずれかのSQL文を実行する。 埋込みSQLアプリケーションまたは、rdbexecsqlコマンドの場合) 動的カーソル宣言以外の動的SQL文または、CALL文。 Javaアプリケーションまたは、ODBCアプリケーションの場合) データ操作文または、CALL文。 [現象3の発生条件] 1. 後述のB)のいずれかを使用する。かつ、 2. V9.1以降のSymfoware Server Connection Managerを使用する。かつ、 3. SET SESSION AUTHORIZATION文またはSET ROLL文を実行する。かつ、 4. 後述のC)のいずれかの理由により、コネクションが切断される。かつ、 5. 4.の後、ロールバックを実行する。かつ、 6. 5.の後、SQL文を実行する。 [現象4の発生条件] 1. 後述のA)のいずれかを使用する。かつ、 2. V9.1以降のSymfoware Server Connection Managerを使用する。かつ、 3. 以下のいずれかに該当する。かつ、 埋込みSQLアプリケーションまたは、rdbexecsqlコマンドの場合) SET TRANSACTON文を実行する。 Javaアプリケーションの場合) default_readonlyオプションまたは、default_isolationオプションを指定する。 または、SET TRANSACTON文を実行する。 ODBCアプリケーションの場合) CLI_DEFAULT_ACCESS_MODE パラメタ または 、 CLI_DEFAULT_ISOLATIONパラメタを指定する。 または、SET TRANSACTON文を実行する。 4. 後述のC)のいずれかの理由により、コネクションが切断される。かつ、 5. 4.の後、ロールバックを実行する。かつ、 6. 5.の後、SQL文を実行する。 [発生条件]の補足説明 A)アプリケーションまたはコマンドの種類 ・埋込みSQLを利用した、C言語またはCOBOL言語のアプリケーション ・rdbexecsqlコマンド ・JDBCを使用した、Javaアプリケーション ・ODOSを使用した、ODBCアプリケーション B)アプリケーションまたはコマンドの種類

No.	バージョン レベル	P番号	現象
			・埋込みSQLを利用した、C言語またはCOBOL言語のアプリケーション ・rdbexecsqlコマンド C)コネクションが切断される理由 ・ロードシェア運用で、縮退、切替え、または、切戻しが発生する。 ・ホットスタンバイ運用で、運用系から待機系への切替えと切り戻しを行う。 ・rdbtermコマンドでコネクションを切断する。 ・通信異常などの理由により、コネクションが切断される。 ・アプリケーション実行中にアプリケーションサーバで時刻補正を行う。 ・TRAN_TIME_LIMITパラメタに指定した時間を超過する。 ・利用者制御機能のMAX_TRAN_TIMEパラメタに指定した時間を超過する。
40		PG76142	[現象] Symfoware ODBCドライバを利用したODBCアプリケーションで、SET TRANSACTION文またはSET SCHEMA文を実行すると、アプリケーションが異常終了(ダウン)する場合があります。 アプリケーションダウン時にイベントビューアに出力されるメッセージ qdg12148e:SQL文の実行で重症エラーを検出しました:'JYP1078U シグナルを受信したためアプリケーションが異常終了しました.' [環境] 本障害は、Windows環境で発生します。 [発生条件] 1. V10.0.0以降のSymfoware Server Client機能を使用する。かつ、 2. Symfoware ODOSを使用した、ODBCアプリケーションを使用する。かつ、 3. 文ハンドル作成後、以下のいずれかのSQL文を実行する。かつ、 － SET TRANSACTION文 － SET SCHEMA文 4. 3.の実行以前にトランザクションを開始するSQL文を実行していない。かつ、 5. ODBC APIのSQLMoreResultsを実行する。 ●ADO.NETを利用している場合 1. V10.0.0以降のSymfoware Server Client機能を使用する。かつ、 2. Symfoware ODOSを使用した、ODBCアプリケーションを使用する。かつ、 3. System.Data.Odbc.OdbcCommandオブジェクトを生成し、以下のいずれかのSQL文を実行する。かつ、

No.	バージョン レベル	P番号	現象
			— SET TRANSACTION文 — SET SCHEMA文 4. 3の実行以前にトランザクションを開始するSQL文を実行していない。 5. 以下のいずれかのメソッドを実行する。 — OdbcCommandのExecuteNonQueryメソッド — OdbcCommandのExecuteReaderメソッド — OdbcCommandのExecuteScalarメソッド ●RDOを利用している場合 1. V10.0.0以降のSymfoware Server Client機能を使用する。かつ、 2. Symfoware ODOSを使用した、ODBCアプリケーションを使用する。かつ、 3. rdoConnectionオブジェクトを生成し、以下のいずれかのSQL文を2回実行する。かつ、 — SET TRANSACTION文 — SET SCHEMA文 4. 3の実行以前にトランザクションを開始するSQL文を実行していない。 5. 以下のいずれかのメソッドを実行する。 — rdoConnectionのExecuteメソッド — rdoQueryのExecuteメソッド — rdoResultsetのMoreResultsメソッド ●DAOを利用している場合 1. V10.0.0以降のSymfoware Server Client機能を使用する。かつ、 2. Symfoware ODOSを使用した、ODBCアプリケーションを使用する。かつ、 3. Connectionオブジェクトを生成し、以下のいずれかのSQL文を2回実行する。かつ、 — SET TRANSACTION文 — SET SCHEMA文 4. 3の実行以前にトランザクションを開始するSQL文を実行していない。 5. ConnectionのExecuteメソッドを実行する。
41		PG76313	[現象] DSIと共用バッファプールの対応関係の解除または、DSIのメモリ常駐の解除を実行した場合に以下のメッセージを出力して、Symfoware/RDBがダウンする。 qdg02842u:シグナル6を受信したため RDBIIシステム空間が異常終了しました

No.	バージョン レベル	P番号	現象
			[環境] 以下のいずれかのOSである場合。 • Solaris (TM) Operating System または、 • Linux または、 • Windows または、 • UXP/DS [発生条件] 1. 以下のコマンドにより、DSIと共用バッファプールの対応関係の登録または、DSIをメモリに常駐している。かつ、 — rdbconbfコマンド または、 — rdbresident -monコマンド(※1) 2. 1.実行後に以下のコマンドを実行している。かつ、 — rdbdisbfコマンド または、 — rdbprtbコマンド または、 — rdbresident -moffコマンド(※1) または、 — rdbresident -mpコマンド(※1) または、 — rdbsar -rコマンド 3. 1.で操作したDSIに対して、2.実行中に以下のコマンドにより、Symfoware/RDBシステムにおける、すべての共用バッファプールとの対応関係および、すべてのDSIのメモリ常駐が解除された状態となる。 — rdbdisbfコマンド または、 — rdbresident -moffコマンド(※1) ※本障害はタイミングに依存するため、必ず発生するわけではありません。 ※1)rdbresidentコマンドは、以下の場合に利用できます。 • V5.0以降でV8.0以前の場合、Symfoware Server Enterprise Extended Editionの場合に利用できます。 • V9.0以降でV9.1以前の場合、Symfoware Server Enterprise Extended EditionまたはSymfoware Server Enterprise Editionの場合に利用できます。 • V9.2以降の場合、すべてのEditionで利用できます。
42		PG76652	[現象] 以下の条件の場合に、利用者プログラム、rdbコマンドまたは Linkexpress Replicationoptionのコマンドを実行すると、Symfoware/RDBがエラーメッセージqdg02842uを出力しダウンする場合があります。 ※ qdg02842u:シグナル11を受信したため RDBIIシステム空間が異常終了しました。 [環境] 以下の何れかの環境で発生します。

No.	バージョン レベル	P番号	現象
			• Solaris(TM) Operating System • Linux [発生条件] 1. Linkexpress Replication optionを使用し、Symfoware/RDBからのレプリケーション運用を行なっている。かつ、 2. レプリケーション運用における複写元システムでロードシェア運用(*1)を行っている。かつ、 3. SATELLITEシステムからrdbddlexコマンドにより、以下の何れかの操作を行なう。 — DROP TABLE — ALTER TABLE — SWAP TABLE — DROP DSI — ALTER DSI *1)「V9.2以降のロードシェア機能」を除きます。 なお、「V9.1以前のロードシェア機能」または「V9.2以降のロードシェア機能」のどちらを使用しているかの確認は以下のパラメタで判断します。 • RDB構成パラメタファイルに、RDBLOADSHAREを設定している場合 • 「V9.1以前のロードシェア機能」を使用していると判断できます。 • RDB構成パラメタファイルに、RDBSCLSYSTEMを設定している場合 「V9.2以降のロードシェア機能」を使用していると判断できます。
43		PG76944	[現象] SQL文の探索条件にIN述語と比較述語の指定がある場合、IN述語の指定値と一致し比較述語の条件に該当しない行が余分に返却される場合があります。 [環境] 以下のいずれかのOSである場合。 • Solaris(TM) Operating System • Linux • Windows • UXP/DS [発生条件] [条件1] 1. 行排他を使用しない。かつ、 2. インデックスキーの構成列に対して探索条件を指定する。かつ、 3. 2.の列に対して、IN述語の限定値リストに複数の値を指定する。かつ、

No.	バージョン レベル	P番号	現象
			4. 3.の列が、構成列の先頭列、もしくは、上位のすべての構成列に対して、以下のいずれかの条件を指定している。かつ、 1. 比較述語の「＝」 2. 限定値リストをひとつ指定したIN述語 5. 3.の後続の構成列に探索条件を指定する。かつ、 6. 3.の列と一部の限定値リストを比較する探索条件に、以下のいずれかの比較演算子を指定する。 1. 比較述語の「＜」 2. 比較述語の「＞」 [条件2] 1. 以下のいずれかに該当し、排他を獲得していない。かつ、 1. 独立性水準がREAD UNCOMMITTEDである。 2. 占有モードにNO LOCKを指定する。 2. ～6.[条件1]の2.～6.と同じ 3. SQL文に指定した列が、すべて2)の構成列に含まれる場合。 [条件3] 1. DSIの分割条件が「＝」の分割キーの列に対して探索条件を指定する。かつ、 2. ～5.[条件1]の3.～6.と同じ(※) [条件4] 1. 一意性制約のクラスタキーの構成列に対して探索条件を指定する。かつ、 2. 1.の列に対して、以下のいずれかの条件を指定する。かつ、 1. 比較述語の「＝」 2. IN述語 3. の列に対する探索条件に、以下のいずれかの条件を指定する、かつ 1. 比較述語の「＜」、「＞」、「＞＝」、「＜＝」 2. BETWEEN述語 4. 3.の条件が2.の探索条件の値を含まない。 [条件5] 1. 行排他を使用しない。かつ、 2. 構成列が2つ以上のインデックスを定義している。かつ、 3. 2.の先頭列と2番目以降の構成列に対して探索条件を指定する。かつ、 4. 3.の2番目以降の構成列に対して、IN述語の限定値リストに複数の値を指定する。かつ、 5. 2.の構成列の先頭列、もしくは、4)より上位のすべての構成列に対して、以下のいずれかの条件を指定している。かつ、

No.	バージョン レベル	P番号	現象
			1. 比較述語の「＝」 2. 限定値リストをひとつ指定したIN述語 6. 5.の列と指定した値と比較する探索条件に、以下のいずれかの比較述語を指定する。 1. 比較述語の「＜」 2. 比較述語の「＞」 [条件6] 1. 以下のいずれかに該当し、排他を獲得していない。かつ、 1. 独立性水準がREAD UNCOMMITTEDである。 2. 占有モードにNO LOCKを指定する。 2. ～6.[条件5]の2.～6.と同じ 3. SQL文に指定した列が、すべて2.の構成列に含まれる場合。 [条件7] 1. DSIの分割条件が「＝」の分割キーの列に対して探索条件を指定する。かつ、 2. 1.の構成列に2つ以上の列を定義している。かつ、 3. ～6.[条件5]の3.～6.と同じ ※[条件1]の3.の"2"は"1"に、[条件1]の4.～6.の"3"は"2"と読み替えてください。 条件1の例) INDEX構成列(C1,C2)の場合 <pre> SELECT C1 FROM S1. T1 WHERE T1. C2 = 1 AND T1. C1 IN (1 , 2) AND T1. C1 > 1 ... (1) </pre> 本来、返却すべきレコード : C1=2のレコード1件 本障害により返却するレコード : C1=1とC1=2のレコード2件 探索条件にIN述語の限定値リストを打ち消す条件(1)を指定しますが、正しく判定されずC1=1のレコードが余分に返却されてしまいます。
44		PG77195	[現象] リカバリログ量を大きく(目安として数百メガバイト以上)した場合に、以下のいずれかの現象が発生する場合があります。 [現象1] Symfoware/RDBの停止処理またはクラスタアプリケーションの停止処理に時間がかかる場合があります。 [現象2] テンポラリログファイルの閉塞解除処理に時間がかかる場合があります。 [現象3] RDBディクショナリのリカバリに時間がかかる場合があります。

No.	バージョン レベル	P番号	現象
			[環境] • Solaris(TM) Operating System • Linux • Windows [発生条件] [現象1] 1. リカバリログ量のサイズ(目安として数百メガバイト以上)が大きい場合。かつ、 2. 更新系アプリケーションを実行する。かつ、 3. Symfoware/RDBの正常停止(クラスタアプリケーションの停止も含む)を実行する。 3.の処理に時間がかかる場合があります。 [現象2] 1. リカバリログ量のサイズ(目安として数百メガバイト以上)が大きい場合。かつ、 2. 更新系アプリケーションを実行する。かつ、 3. 以下のいずれかの事象が発生する。かつ、 1. rdblog -H -tコマンドによりテンポラリログファイルを閉塞する。または 2. テンポラリログファイルが入出力異常により閉塞する。 4. rdblog -P -tコマンドによりテンポラリログファイルの閉塞を解除する。 4.の処理に時間がかかる場合があります。 [現象3] 1. RDBDICONBUFFERの指定によるフォールバック運用をしている。(※1)かつ、 2. システムロググループのリカバリログ量のサイズ(目安として数百メガバイト以上)が大きい場合。かつ、 3. データベース定義、変更、削除を実行する。かつ、 4. RDBディクショナリで入出力異常が発生する。かつ、 5. 5.rdbrcvdicコマンドのOverwriteモードによりRDBディクショナリのリカバリを行う。 5.の処理に時間がかかる場合があります。 ※1 RDB構成パラメタファイルにRDBDICONBUFFER=YESを指定している場合です。 [補足] 現象1～3のそれぞれの処理にかかる最大時間の見積もりは以下になります。 「テンポラリログのリカバリログ量の使用量(MB)※2」×「データベーススペースのI/O性能(MB/sec)※3」

No.	バージョン レベル	P番号	現象
			また、更新系アプリケーションまたはデータベース定義、変更、削除の動作が完了してから、以下の時間以上経過している場合は本障害は発生しません。 「テンポラリログのリカバリログ量の使用量(MB)※2」÷「データベーススペースのI/O性能(MB/Sec) ※3」 ※2 「リカバリログ量の指定値 × 0.8」か、「AI ログの定義サイズ - 処理直前の rdbmsar l -e の EmpAI」のいずれかの大きい方の値となります。 また、更新が行われた全てのロググループの合計値です。 ※3 データベーススペースを配置しているディスクのI/O性能に依存します。
45		PG77577	[現象] インデックスのDSIが非活性状態の場合、swstbackupコマンドまたはrdbmrddmpコマンドを実行すると、以下のエラーとなります。 qdg03226u 指定した資源's*'は他の利用者が使用中のため処理を続行できません t* [環境] - 以下のいずれかのOSである。かつ — Solaris — Linux — Windows - Symfoware Server Advanced Backup Controllerをインストールしている場合。 [発生条件] - 以下いずれかを使用している。かつ、 — PG68552の修正を含む緊急修正(※1)を適用している。 — Symfoware Server V10.0.1を使用している。(Windowsの場合) - swstbackupコマンドまたはrdbmrddmpコマンドを実行している。かつ、 2.で指定したデータベーススペースに割付けられている表のDSIが非活性状態(※2)でない。かつ 2.で指定したデータベーススペースに割付けられ、かつ、3.の表のDSIに関連するインデックスのDSIが非活性状態(※2)である場合。 ※1:対応する緊急修正番号は以下になります。 ・Solaris(TM) Operating System 緊急修正パッチid : 912090-62～63 : 912091-62～63 : 912092-62～63 : 912093-62～63 正式製品名称 : Symfoware Server Enterprise Extended Edition

No.	バージョン レベル	P番号	現象
			製品世代 : 5.0.1 緊急修正パッチid : 913574-34～35 : 913575-34～35 : 913576-34～35 : 913577-34～35 正式製品名称 : Symfoware Server Enterprise Extended Edition 製品世代 : 6.0 緊急修正パッチid : 913621-36～37 : 913622-36～37 : 913623-36～37 : 913624-36～37 正式製品名称 : Symfoware Server Enterprise Extended Edition 製品世代 : 6.0.1 緊急修正パッチid : T014HS-22～24 正式製品名称 : Symfoware Server Enterprise Extended Edition 製品世代 : 7.0 緊急修正パッチid : T014IS-20～22 正式製品名称 : Symfoware Server Enterprise Edition : Symfoware Server Standard Edition 製品世代 : 7.0 緊急修正パッチid : T023GS-17～19 正式製品名称 : Symfoware Server Enterprise Extended Edition 製品世代 : 7.0.1 緊急修正パッチid : T023HS-15～17 正式製品名称 : Symfoware Server Enterprise Edition : Symfoware Server Standard Edition 製品世代 : 7.0.1 緊急修正パッチid : T025TS-15～17 正式製品名称 : Symfoware Server Enterprise Extended Edition 製品世代 : 7.0.2 緊急修正パッチid : T025US-14～16 正式製品名称 : Symfoware Server Enterprise Edition : Symfoware Server Standard Edition 製品世代 : 7.0.2 緊急修正パッチid : T001096SP-08～09 正式製品名称 : Symfoware Server Enterprise Extended Edition 製品世代 : 9.0.0,9.0.0A 緊急修正パッチid : T001097SP-08～09

No.	バージョン レベル	P番号	現象
			正式製品名称 : Symfoware Server Enterprise Edition : Symfoware Server Standard Edition 製品世代 : 9.0.0,9.0.0A 緊急修正パッチid : T001858SP-07～09 正式製品名称 : Symfoware Server Enterprise Extended Edition 製品世代 : 9.1.0 緊急修正パッチid : T001859SP-06～08 正式製品名称 : Symfoware Server Enterprise Edition : Symfoware Server Standard Edition 製品世代 : 9.1.0 緊急修正パッチid : T002715SP-03～05 正式製品名称 : Symfoware Server Enterprise Extended Edition 製品世代 : 9.2.0 ※2:以下のいずれかの状態です。 ・ インデックスのDSIを定義した直後の状態 ・ rdbalidxコマンドの-s INACTIVE指定で、インデックスのDSIを非活性にした状態 ・ 表のDSIを初期化した後、インデックスのDSIを初期化/再創成していない状態 rdbinf -i DB名.DSI名 -aを実行して、DSIの状態を確認してください。 Stateの値が"INA"の場合は、非活性状態です。
46		PG77810	[現象] アプリケーションでコネクト処理をくり返し実行すると、コネクト処理がスローダウンします。また、派生する現象として、Symfoware/RDBプロセスでメモリークが発生します。 ※リークするメモリ量は環境によって異なりますが、1回のコネクト処理で、約100byteのメモリがリークします。 [環境] 1. 以下のOSの場合 かつ － Solaris(TM) Operating System 2. 以下のいずれかの製品を利用している場合。 － 9.1.0 Symfoware Server Enterprise Extended Edition 9.1.0 を使用している。かつT001858SP-01以降のパッチを適用している。 － 9.2.0 Symfoware Server Enterprise Extended Edition 9.2.0を使用している [発生条件] 1. Symfoware Serverをインストールしている環境に、以下のパッケージがインストールされている。かつ、

No.	バージョン レベル	P番号	現象
			ー Charset Manager SE AgentのFSUNiconvパッケージ 2. Symfoware Server が64bit環境で動作している。かつ、 3. 応用プログラムでコネクト処理を行う。
47		PG77834	[現象1] 探索条件に該当する一部のレコードがアプリケーションに返却されない場合があります。 [現象2] 以下のメッセージが出力され、Symfoware/RDBが異常終了する場合があります。 qdg02842u:シグナル6を受信したため RDBIIシステム空間が異常終了しました [環境] 以下のいずれかのOSである場合。 • Solaris(TM) Operating System • Linux • Windows • UXP/DS [発生条件] 1. 以下の製品を使用している。かつ、 1. Symfoware Server(*1)。または、 2. Symfoware Parallel Server(*2) 2. 以下のSQLデータ操作文(*3)を実行する。かつ、 1. カーソル指定にORDER BY句を指定する。または、 2. 問合せ指定にGROUP BY句を指定する。または、 3. 問合せ指定のFROM句に複数の表を指定する。または、 4. 問合せ指定にDISTINCTを指定している。または、 5. UNIONを指定している。または、 6. 問合せ指定にDISTINCTを指定した集合関数を指定している。 3. 処理対象のデータ量が、大量データ(*4)の場合。 (*1)Symfoware Serverを使用している場合、現象1が発生する場合があります。 (*2)Symfoware Parallel Serverを使用している場合、現象2が発生する場合があります。 (*3)以下を指定するSQLデータ操作文が対象です。 • 問合せ指定 • 単一行SELECT文 • 導出表 • 副問合せ

No.	バージョン レベル	P番号	現象
			(*4) データ量とは、作業用ソート領域に格納するレコード長×レコード件数になります。 本障害の発生有無は、作業用ソート領域のファイルに格納するレコードの格納順にも依存するため、格納するデータ量が特定の値を超えていても必ず障害が発生するとは限りません。 障害が発生する可能性があるデータ量の見積式は以下の通りです。 $\text{データ量} > 230\text{K} \times \text{RC} \times \text{RC} \times (\text{RC}-1)$ $\text{RC} = 20 + \text{MAX}\{0, \text{INT}((\text{SORT_MEM_SIZE} - 3300\text{K}) \div 500) \times 4\}$ RC: 一度にソートマージするメモリブロックの数 例) SORT_MEM_SIZEがデフォルト値=2112Kの場合 SORT_MEM_SIZEが3300Kより小さいので、MAX()内は0。 よって、処理対象のデータ量が、$230\text{K} \times 20 \times 20 \times (20-1) \approx 1.7\text{G}$より、多い場合に障害が発生する可能性があります。
48		PG78026	[現象] スクロールカーソルを使用するとき、サーバで下記のエラーメッセージを出力して、Symfoware/RDBがダウンする場合があります。 エラーメッセージ: 「qdg12695u システム障害が発生しました 分類コード=s*内部コード=(t*) u*」 [環境] 本障害は、以下のOSで発生します。 • Windows • Linux • Solaris(TM) Operating System [発生条件] 1. スクロールカーソルを使用する。かつ、 2. 1.のカーソルの探索条件に該当するデータの合計サイズ(*1)が、以下のしきい値を超える。 — 32bit版のSymfowareを使用している場合: 約64GB — 64bit版のSymfowareを使用している場合: 約32GB (*1)「選択リストに書かれた列の合計サイズ×探索条件に該当するレコード件数」
49		PG78251	[現象] リモートアクセス(RDB2_TCP連携)を指定したアプリケーションがデータベースに接続しようすると、Symfoware Server Connection Manager(以降、Connection Managerと略す)を使用してのデータベース接続になってしまいます。実際に発生する現象は以下の2種類です。 現象1)Connection Managerが起動している場合 リモートアクセスでのデータベース接続が有効にならず、Connection Manager連携でのデータベース接続となりますが、正常復帰します。 現象2)Connection Managerが起動していない場合 アプリケーションに以下のエラーメッセージが返却されます。 JYP5079E Connection Managerシステムが未起動です。

No.	バージョン レベル	P番号	現象
			[環境] 本障害は、以下のOSで発生します。 • Solaris(TM) Operating System • Linux • Windows [発生条件] 1. 以下のいずれかのアプリケーションを使用する。かつ、 - ー C言語やCOBOL言語のESQLアプリケーション - ー Java言語のJDBCアプリケーション - ー ODOSを使用したODBCアプリケーション 2. リモートアクセス(RDB2_TCP連携)を指定する。かつ、 3. アプリケーションサーバにV9.1以降のConnection Managerをインストールしている。かつ、 4. 接続先のデータ資源名または、SQLサーバ名をAPC動作環境ファイルに指定する。かつ、 1. Connection Managerが起動済み。→現象1 2. Connection Managerが未起動。→現象2
50		PG78884	[現象] Symfoware .NET Data ProviderのSymfowareConnectionオブジェクトが.NET Frameworkのガベージコレクションにより回収されたとき、qdg02842uのメッセージを出力して、Symfoware/RDBがダウンする場合があります。 Symfoware/RDB側に出力されるメッセージ qdg02842u:シグナル-1073741819を受信したため RDBIIシステム空間が異常終了しました アプリケーション側に出力されるメッセージ JYP9229E システムコールにおいてエラーが発生し、サーバとの通信が切断されました。 Function = "Socket.Receive", Error Code = "10054" [環境] 本障害は、以下の環境で発生します。 • Windows [発生条件] 1. Symfoware .NET Data Providerを使用する。かつ、 2. コネクションプーリングを使用しない(pooling=false)。かつ、 3. SymfowareConnectionオブジェクトを作成する。かつ、 4. SymfowareConnection.Open()を呼び出して、3.のコネクションを接続する。かつ、 5. 3.のSymfowareConnectionオブジェクトへの引用をなくす(※1)。かつ、

No.	バージョン レベル	P番号	現象
			6. もう1つのSymfowareConnectionオブジェクトを作成する。かつ、 7. SymfowareConnection.Open()を呼び出して6.のコネクションを接続する。かつ、 8. 7.の実行と同時に、.NET Frameworkでガベージコレクションが動作した場合(※2)。 ※1 例えば、当該SymfowareConnectionオブジェクトにnullを設定する。 ※2 ガベージコレクションによるオブジェクト回収順番に依存する障害であるため、上記条件に合致しても発生しない場合があります。
51		PG80224	[現象] 以下に示す発生条件のとき、データベースへのコネクションの数が不当に増加し、以下の現象が発生します。 現象1) アプリケーションにJYP1004EまたはJYP1006Eのエラーが返却され、RDBREPORTで指定したメッセージログファイルやアプリケーションのイベントログに、qdg12147e:エラーが出力されます。 JYP1004E データ送信中にサーバとの通信が切断されました。 JYP1006E データ受信中にサーバとの通信が切断されました。 qdg12147e:通信処理において異常が発生しました:' JYP1052E 接続できる通信の最大数を超過しました。 通信種別 = "@1@" 現象2) rdbpsコマンドまたは、rdbcninfコマンドでコネクションの状態を確認した時に、見積り上のコネクションの数より、接続されているコネクションの数が多くなります。 [環境] 以下のいずれかの環境の場合。 • Linux • Solaris(TM) Operating System • Windows [発生条件] 1. JDBCを使用したjavaアプリケーションを使用する。かつ、 2. Interstage Application Server V9.2.0以降を使用する。かつ、 3. Java EE機能を使用する。かつ、 4. Interstage Application Serverでのコネクションプーリングを使用する。かつ、 5. Symfoware Server Connection Managerを使用する。かつ、 6. SQL文を実行した時に、以下のいずれかの理由により、コネクションが切断され、SQLSTATE40003または40703のエラーが発生する。かつ、 - ー ロードシェア運用で、縮退、切替え、または、切戻しが発生する。または、 - ー ホットスタンバイ運用で、運用系から待機系への切替えと切り戻しを行う。または、

No.	バージョン レベル	P番号	現象
			— rdbtermコマンドでコネクションを切断する。または、 — 通信異常などの理由により、コネクションが切断される。または、 — TRAN_TIME_LIMITパラメタに指定した時間を超過する。または、 — 利用者制御機能のMAX_TRAN_TIMEパラメタに指定した時間を超過する。 7. 6.の後で、文の準備または文の実行からリトライせず、getConnectionメソッドでコネクションを取得する。
52		P805588	[現象] SQL文を実行すると、制限値オーバーの構文エラーにならず、qdg02842u(※)のメッセージを出力し、Symfoware/RDBがダウンします。または、Symfoware/RDBのシステムが無応答になります。 ※)qdg02842u:シグナル11を受信したため RDBIIシステム空間が異常終了しました。 [環境] 以下のいずれかのOSである場合。 • Solaris(TM) Operating System または、 • Linux または、 • Windows または、 • UXP/DS [発生条件] 1. 問合せ式にUNION(またはUNION ALL)を65個以上指定する。または、 2. 表参照に結合表を入れ子で129個以上指定する。または、 3. 値式に関数または演算式を129個以上指定する。

4.2 EE/SEの場合

4.2.1 Intel64版

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
1	V10.1.0	PG38319	以下の条件を満たす時、Symfoware/RDBがqdg02842u(※)のメッセージを出力してダウンする場合があります。 (※) qdg02842u:シグナル6を受信したためRDBIIシステム空間が異常終了しました 1. CREATE PROCEDURE文でプロシジャルーチンを以下のいずれかの方法で定義する。かつ、 — rdbddlexコマンドで定義する。または、 — アプリケーションから、EXECUTE文またはEXECUTE IMMEDIATE文により定義する。	○	○

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			2. 前述1.のプロシジャルーチンに対し、新たにrdbddlexコマンドまたはアプリケーションから、以下のいずれかの方法で削除する。 — 当該プロシジャルーチンに対してDROP PROCEDURE文を実行する。 — 当該プロシジャルーチン内で参照している表に対して、CASCADE指定のDROP TABLE文を実行する。 — 当該プロシジャルーチンを含むスキーマに対して、CASCADE指定のDROP SCHEMA文を実行する。		
2		PG44815	[現象1] 以下のいずれかの条件の時、qdg02842uを出力しSymfoware Serverがダウンする場合がある。 [条件1] 1. データベースの文字コード系と、応用プログラムの文字コード系が異なる。かつ、 2. CONNECT文を実行する。または、DML文が、文字列型。または、各国語文字列型を扱う場合。 [条件2] 1. Symfoware/RDBの文字コード系とデータベースの文字コード系が異なる場合。かつ、 2. XMLアダプタを利用している。かつ 3. rdbinfコマンドにおいて-xml pathオプションを指定している。 [条件3] 1. Symfoware/RDBの文字コード系とデータベースの文字コード系が異なる場合。かつ、 2. Linkexpress Replication optionを使用したレプリケーション運用において、lxrepreコマンド(注1)の入力ファイルにWHEREを指定している。 注1) Linkexpress Replication optionの抽出定義を作成するコマンドです。 詳細は、Linkexpress Replication optionのマニュアルを参照してください。 [現象2] 以下のいずれかの条件の時、以下のメッセージが出力され、メッセージ内容からエラー原因を特定することができない場合がある。 ・JYP2063E:コード変換に失敗しました。 ・JYP2532E:プロシジャルーチンのパラメタ変数のコード変換に失敗しました。 ・JYP2209E:出力ホスト変数へのコード変換で変換できない文字があります。 [条件1] 1. データベースに格納されるデータの文字コード系と、応用プログラムの文字コード系が異なる。かつ、	○	○

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			2. DML文が、文字列型。または、各国語文字列型を扱う場合。 [条件2] 1. データベースに格納されるデータの文字コード系と、応用プログラムの文字コード系が異なる。かつ、 2. プロシジャルーチンをCALLする。かつ、 3. 以下のいずれかの条件を満たす場合。かつ、 a. プロシジャルーチンでINパラメタ、または、INOUTパラメタを指定する。または、 b. プロシジャルーチン内で実行するDML文に値指定、または、列指定を指定する。 4. 3.で指定するデータ型が、文字列型、または、各国語文字列型の場合。 ※1 データの文字コード系は以下から確認できます。 ークライアント用動作環境ファイルのCHAR_SETに指定したコード系 ーCHAR_SETを省略した場合、応用プログラムの文字コード系 また、応用プログラムの文字コード系は以下から確認できます。 ーOSがSolaris、またはLinuxの場合 環境変数LANGに指定された文字コード系 ーOSがWindowsの場合 SJIS ※2 Symfoware/RDBの文字コード系は、以下のコマンドのRDBCODEの項で確認できます。 pkgparam -v FSUNrdb2b ※3 データベースの文字コード系は、以下のコマンドで確認できます。 rdbprt -m CODE		
3		PG58422	[現象] SET STATISTICS文を実行すると、qdg02842u(※)のメッセージを出力してSymfoware/RDBがダウンする場合があります。 または、以下のいずれかのメッセージを出力してSET STATISTICS文の実行が異常終了する場合があります。 JYP4600E "@1@"で文が終了しています JYP4601E "@1@"の後ろに余分なオペランド"@2@"が指定されています (※) qdg02842u シグナルd*を受信したためRDBIIシステム空間が異常終了しました [環境] 以下のいずれかのOSである場合。 • Solaris(TM)Operating System または、 • Linux または、	○	○

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			- Windows [発生条件] - SET STATISTICS文を実行する。かつ、 - SET STATISTICS文にFILEオペランドを指定し最適化情報を記述したファイル名を指定している。かつ、 - 最適化情報を記述したファイルの最終行に改行を指定していない。かつ、 - 最適化情報を記述したファイルの最終行が以下のいずれかを満たしている。 - 数字のみを指定している。かつ、数字で行が終了している。(注1) - 文字列(注2)を1個のみ指定している。かつ、文字列で行が終了している。(注3) (注1)数字の前後に半角空白、またはタブが指定されている場合も該当 以下、数字で行が終了している例。(△:半角空白、^:タブ、[EOF]:行の最後) 123[EOF] 123△[EOF] 123^[EOF] (注2)半角空白、タブ、等号(=)、またはカンマ(,)以外の文字で構成される文字列 (注3)以下、文字列で行が終了している例。([EOF]:行の最後) ABC[EOF] ABC123[EOF]		
4		PG59340	[現象] rdbupsコマンドを実行すると、qdg02842u(※)のメッセージを出力して Symfware/RDBがダウンする場合があります。 (※) qdg02842u:シグナルd*を受信したため RDBIIシステム空間が異常終了しました。 [環境] 以下のいずれかのOSである場合。 - Solaris(TM) Operating System または、 - Linux または、 - Windows または、 - UXP/DS [発生条件] - 表に対して複数のインデックスのDSIが定義されている。かつ、	○	○

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			2. 一部のインデックスのDSIが以下いずれかの状態の場合。かつ、 ()は本来出力すべきエラーメッセージになります。 a. DSIが非活性、または、定義直後の状態(qdg02520u) b. DSIは他の利用者が参照または更新中(qdg03204u) c. DSIが更新抑止または参照更新抑止の状態(qdg12040u) d. DSIは他の利用者が参照または更新中(qdg03204u) e. データベーススペースが参照更新抑止の状態(qdg12042u) f. DSIがインダウト閉塞状態(qdg12814u) g. 指定された監査ログエレメントがフラッシュトリートメント閉塞状態(qdg13438u) h. インデックスのDSIがインダウトリカバリ不可閉塞状態(qdg13945u) i. インデックスのDSIがアクセス禁止状態(qdg12190u) j. RDBIIディクショナリがインダウト閉塞状態(qdg12816u) k. データベーススペースがアクセス禁止状態(qdg12044u) l. メモリ不足(qdg12071u,qdg12874u) 3. 表、または、DSO指定でrdbupsコマンドを実行した場合。		
5		PG61276	[現象] 以下に示す環境・発生条件のとき、Connection ManagerまたはSymfoware/RDBが以下のメッセージを出力して異常終了する場合があります。 <Connection Managerを使用している場合> apc00008u:Connection Manager system process has been abnormally terminated because it received signal d*. d*:シグナル番号。-1073741819(Windows)または11(UNIX系)。 <Connection Managerを使用していない場合> qdg02842u:シグナルd*を受信したため RDBIIシステム空間が異常終了しましたs* d*:シグナル番号。-1073741819(Windows)または11(UNIX系)。 s*:RDBシステム名。マルチRDBの場合のみ出力。 [環境] 本障害は、以下のOSで発生します。 - Solaris(TM) Operating System - Linux - Windows - UXP/DS	○	○

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			[発生条件] - 以下のいずれかのアプリケーションを使用する。かつ、 - 埋込みSQLを使用したC言語またはCOBOL言語のアプリケーション - JDBCを使用したJavaアプリケーション - ODBCアプリケーション 1つのアプリケーションプロセスから複数のRDBシステム(※1)に接続する。かつ、 - 接続方法がローカル接続(※2)である。かつ、 - アプリケーション内で2)で接続したコネクションを切断せずに、アプリケーションプロセスを終了する。 ※1 Connection Managerを使用している場合も含みます。 (1つのアプリケーションプロセスから、1つのRDBシステムに対して、Connection Managerを使用して接続したコネクションと、ローカル接続したコネクションが存在する場合も該当します。) ※2 Connection Managerを使用している場合、アプリケーション－Connection Manager間には、ローカル接続となります。		
6		PG61453	[現象] JYP1006E データ受信中にサーバとの通信が切断されました。 のメッセージを表示しSymfoware/RDBがダウンします。 [環境] - Solaris(TM)Operating System - Linux - Windows [発生条件] - SET SYSTEM PARAMETER文で、セキュリティパラメタAUDIT_MANAGE=YESを設定している。かつ、(※) - 監査ログデータベースを作成している。かつ、 - アプリケーションから静的SQL文で監査ログデータベースを参照する。かつ、 3.のアプリケーションで実行するSQL文の長さが32000バイトを超える場合。 (※)以下のコマンドで、セキュリティパラメタの状態を確認できます。 rdbprt -m PARAM	○	○
7		PG62265	[現象] 利用者制御機能を使用してコネクションを接続すると、MAX_CONNECTIONの実行資源数に達していないにも関わらず以下のメッセージを出力しエラーとなる場合があります。 『JYP2608E利用者制御機能における実行資源の制限を超えました. code = “1”』 [環境]	○	○

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			以下のOSである場合。 - Solaris(TM)Operating System または、 - Linux [発生条件] 1. 利用者制御機能を利用している。かつ、 2. ユーザパラメタの"MAX_CONNECTION"に0以外の値を指定している。かつ、 3. 以下のいずれかの場合。 - ー アプリケーションからコネクション接続時にエラー(*)が発生している。または、 - ー SET SESSION AUTHORIZATION文実行時にエラー(*)が発生している。 (*)ここで発生しうるエラーは以下の通りです。 ◇メモリ関連： - メモリ不足(JYP5007E、JYP5006E) ◇環境関連： - コード変換ライブラリの不備(JYP1068U、JYP1080U) - アクセスプラン、SQL_TRACEのファイルオープンエラー(JYP2600U、JYP2602U) - TRACEFILE_USEにNOを指定して調査用ファイルの取得(JYP2604U) ◇パラメタ関連： - INCLUSION_DSIの指定誤り(JYP1050E) - DSO_LOCKの指定誤り(JYP1051E) - WORK_PATHの指定誤り(JYP1056E) - R_LOCK=YESとDSO_LOCKを同時に指定(JYP1060E) - サーバ用動作環境ファイルの指定値のコード変換でエラー(JYP1041U) - クライアント用動作環境ファイルの指定値のコード変換でエラー(JYP1033U) - 標準セキュリティ運用で、システム用動作環境ファイル以外にWORK_PATHを指定(JYP1082E) - 利用者制御機能における、実行資源数の制限を超えた(JYP2608) ◇RDBディクショナリアクセス関連： - デッドロック(JYP2099E) - ディクショナリ不整合(JYP5122E) - I/Oエラー(JYP5037E) - バッファ枯渇(JYP5008E)		
8		PG62951	[現象]	○	○

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			各国語文字列定数に、文字として指定した引用符(")と合わせて32000バイトを超えた文字列を指定すると、以下のメッセージを出力しSymfoware/RDBがダウンします。 ー qdg02842u:シグナル11を受信したため RDBIIシステム空間が異常終了しました [環境] 以下のいずれかのOSである場合。 1. Solaris(TM) Operating System または、 2. Linux または、 3. Windows [発生条件] 1. データベースのコード系が、Unicodeである。かつ、 2. SQL文に指定した各国語文字列定数に、文字として引用符(※)を指定している。かつ、 3. 2.を含む文字列の合計バイト数が、各国語文字列型の定量制限値である32000バイトを超えている。 ※) 文字として引用符()を指定する場合、引用符()を2つ連続して記述します。 例) SELECT CLM1 FROM SCH1.TBL1 WHERE CLM1 LIKE N'あいいう""えお' 『あいいう""えお』の文字列の合計バイト数が、32000バイトを超える場合。		
9		PG63263	[現象] 以下に示す現象・発生条件のとき、アプリケーションおよび、RDBコマンドが無応答となる場合があります。 [環境] 本障害は以下のOSで発生します。 ・ Linux [発生条件] 1. データベーススペースへアクセスする際のI/O方式に非同期I/Oを使用している。(注)かつ、 2. データベースへの挿入・更新・削除処理を行っている。かつ、 3. 2.で挿入・更新・削除を行ったデータが配置されているデータベーススペースに対して、rdbmrddmpコマンドまたはswstbackupコマンドを実行している。 (注) RDB構成パラメタファイルの定義種別RDBASYNIOにYESを設定することで使用することができます。	○	○
10		PG65282	[現象] 「qdg02842u シグナルd*を受信したため RDBIIシステム空間が異常終了しました s*」を出力し、Symfoware/RDBがダウンします。 [環境]	○	○

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			以下のいずれかの環境の場合。 ◆Solaris(TM) Operating System ◇Symfoware Server Enterprise Extended Edition 6.0 913574-18～30,913575-18～30,913576-18～30,913577-18～30 ◇Symfoware Server Enterprise Extended Edition 6.0.1 913621-18～32,913622-18～32,913623-18～32,913624-18～32 ◇Symfoware Server Enterprise Extended Edition 7.0 T014HS-08～18 ◇Symfoware Server Enterprise Extended Edition 7.0.1 T023GS-02～13 ◇Symfoware Server Enterprise Extended Edition 7.0.2 T025TS-01～11 ◇Symfoware Server Enterprise Extended Edition 8.0.0 T000174SP-01～09 ◇Symfoware Server Enterprise Extended Edition 9.0.0, 9.0.0A, 9.1.0 ◇Symfoware Server Enterprise Edition 6.0 Symfoware Server Standard Edition 6.0 913578-18～28,913579-18～28 ◇Symfoware Server Enterprise Edition 6.0.1 Symfoware Server Standard Edition 6.0.1 913625-17～27,913626-17～27 ◇Symfoware Server Enterprise Edition 7.0 Symfoware Server Standard Edition 7.0 T014IS-07～16 ◇Symfoware Server Enterprise Edition 7.0.1 Symfoware Server Standard Edition 7.0.1 T023HS-02～11 ◇Symfoware Server Enterprise Edition 7.0.2 Symfoware Server Standard Edition 7.0.2 T025US-01～10 ◇Symfoware Server Enterprise Edition 8.0.0 Symfoware Server Standard Edition 8.0.0 T000191SP-01～08 ◇Symfoware Server Enterprise Edition 9.0.0, 9.0.0A, 9.1.0 Symfoware Server Standard Edition 9.0.0, 9.0.0A, 9.1.0 ◆Linux ◇Symfoware Server Enterprise Extended Edition V7.0L10		

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			◇Symfoware Server Enterprise Extended Edition 8.0.0, 8.0.0A, 8.0.1 T000132QP-02～11 ◇Symfoware Server Enterprise Extended Edition 9.0.0, 9.0.1, 9.1.0, 9.2.0 ◇Symfoware Server Enterprise Edition V6.0L10, V6.0L10A, V6.0L10B Symfoware Server Standard Edition V6.0L10, V6.0L10A T00305-15～19 ◇Symfoware Server Enterprise Edition V7.0L10 Symfoware Server Standard Edition V7.0L10 T00899-02～12 ◇Symfoware Server Enterprise Edition V7.0L10C Symfoware Server Standard Edition V7.0L10C T00989-01～11 ◇Symfoware Server Enterprise Edition 8.0.0, 8.0.0A Symfoware Server Standard Edition 8.0.0, 8.0.0A T000241LP-01～09 ◇Symfoware Server Enterprise Edition 9.0.0, 9.0.1, 9.1.0 10.0.0 Symfoware Server Standard Edition 9.0.0, 9.0.1, 9.1.0, 9.2.0 10.0.0 10.0.0A ◆Windows ◇Symfoware Server Enterprise Edition V6.0L10 Symfoware Server Standard Edition V6.0L10 Symfoware Server for Windows V6.0L10 TP08577,TP08773,TP08879,TP09047,TP09220,TP09420,TP09625 , TP09705,TP09831,TP09926 ◇Symfoware Server Enterprise Edition V7.0L10, V7.0L10C Symfoware Server Standard Edition V7.0L10, V7.0L10C Symfoware Server for Windows V7.0L10, V7.0L10C TP08709,TP08911,TP09077,TP09257,TP09387,TP09557,TP09637,TP09711, TP09781,TP09873,TP09998 ◇Symfoware Server Enterprise Edition 8.0.0 Symfoware Server Standard Edition 8.0.0 Symfoware Server Base Edition 8.0.0 T00210WP-01～08 ◇Symfoware Server Enterprise Edition 9.1.0, 9.1.1 10.0.0 10.0.1 Symfoware Server Standard Edition 9.1.0, 9.1.1 10.0.0 10.0.1		

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			[発生条件1] - 動的パラメタを指定したEXECUTE文を実行する。かつ、 - 以下のいずれかの操作を行う。かつ、 - rdbexdsiコマンド(-monオプション、-moffオプション、または、-mwオプション)を実行する。または、 - rbdddlfixコマンドを実行し、1.のEXECUTE文で参照する表の定義を変更する。または、 - SCOPE 定義を適用した認可識別子に対するSET SESSION AUTHORIZATION文を実行し、 1.のEXECUTE文のアクセス対象のDSIの範囲を変更する。 1.、2.を実行後にCOMMIT文、または、ROLLBACK文を実行する。かつ、 3.を実行後に、1.と同じSQL文識別子を指定したEXECUTE文を実行する。かつ、 1.と4.のEXECUTE文が、以下のいずれかである。(*) - SQL記述子を指定している。または、 - プログラムソース上で同一行に記述している。 [発生条件2] - 動的パラメタを指定したEXECUTE文を実行する。かつ、 - 以下のいずれかの操作を行う。かつ、 - rdbalidxコマンド - rbdfmtコマンド - rdbsloaderコマンド 2.を実行後に、1)と同じSQL文識別子を指定したEXECUTE文を実行する。かつ、 1.と3.のEXECUTE文が、以下のいずれかである。(*) - SQL記述子を指定している。または、 - プログラムソース上で同一行に記述している。 (*)rdbuptコマンドを実行した場合も本条件に該当します。		
11		PG65659	[現象] DSIの削除においてqdg13777u(*)のエラーメッセージを出力して異常終了後、RDBコマンドまたはアプリケーションを実行するとqdg12695u(*)のメッセージを出力してSymfoware/RDBがダウンする場合があります。 (*)qdg13777u: DSIが削除途中の状態でありロールバックが不可能なためデータベースをアクセス禁止状態にしました DB名='s*' DSI名='t*' u* (*)qdg12695u: システム障害が発生しました 分類コード=s* 内部コード=(t*) u* [環境] 以下のいずれかのOSである場合。	○	○

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			• Oracle Solaris または、 • Linux または、 • Windows または、 • UXP/DS [発生条件] 1. 以下のいずれかによりDSIの容量拡張が発生している(*1)。かつ、 a. 自動容量拡張の場合 1. 以下のいずれかによりDSIの自動容量拡張を定義している。かつ、 － rdbalmsiコマンド － CREATE DSI文(EXPAND OFFを指定しない場合)(*2)(*3) 2. 1.で指定したDSIに対して、以下のいずれかの処理の延長で自動容量拡張が動作する。 － INSERT文 － UPDATE文 － rdbsloaderコマンド － rdbsaloaderコマンド － rdbsuloaderコマンド － rdbuptコマンド b. 自動容量拡張以外の場合 - rdbgcdsiコマンド - ALTER DSI文による容量拡張(*2) 2. 1.のDSIに対して以下のいずれかによりDSIの削除を実行する。かつ、 － DROP DSI文 － DROP SCHEMA文(CASCADE指定) － DROP TABLE文(CASCADE指定) － DROP DSO文(CASCADE指定) － DROP INDEX文 3. 2.の実行中に以下のいずれかの事象が発生し、qdg13777uのエラーメッセージを出力する。かつ、 － 異常が発生 － 2.に対してロールバックを実行 － Symfoware/RDBがダウンした後、Symfoware/RDBを再起動 4. qdg13777uの利用者の処置に従って1.のDSIの削除を実行していない。かつ、		

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			5. 4.の後、1.のDSIに対して以下のいずれかを実行した場合。 — rdbfmtコマンド — rdbloaderコマンド(*4) (*1)現象の発生するDSIの状態はrdbprtコマンド(DSI指定)の「Allocation information」の「No(割付け先の数)」から確認することができます。 <現象の発生するDSIの状態> ・ 表のDSIの場合 割付け先の数が501個以上 ・ インデックスのDSIの場合 割付け先の数が249個以上 (*2)9.1.0以降に利用できる機能 (*3)RDB構成パラメタファイルにRDBEXPDSI=YESまたは、RDBEXPDSIを指定しない場合。 (*4)rdbloaderコマンドは参照先のメモリ状態によって正常終了する場合があります。 その後、以下のアプリケーション、またはRDBコマンドによりDSIをアクセスした場合、Symfoware/RDBがダウンします。 [アプリケーション] INSERT文・DELETE文・SELECT文・UPDATE文 [RDBコマンド] rdbalmsi・rdbconbf・rdbddlex・rdbdisbf・rdbdmp・rdbexdsi・rdbexecsql・rdbexspc・rdbfmt・rdbgcpsi・rdbinh・rdbmrmp・rdbmrrcv・rdbpmt・rdbrcv・rdbrcvdc・rdbresident・rdbrls・rdbtr・rdbsaloadr・rdbsetrp・rdbloader・rdbsuloadr・rdbudsi・rdbunl・rdbunlx・rdbups・rdbupt・rdbunsql		
12		PG65663	[現象] RDBコマンド、または、SQLアプリケーションを実行中に、qdg12695u(※1)のメッセージを出力してSymfoware/RDBがダウンする。 ※1)「qdg12695u システム障害が発生しました 分類コード=s* 内部コード=(*) u*」 [環境] 以下のいずれかのOSを使用している場合。 - Solaris(TM) Operating System、または、 - Linux、または、 - Windows、または、 - UXP/DS [発生条件] 1. RDBコマンド(※2)、または、SQLアプリケーションを実行する。かつ、 2. 1.を実行中にメモリ不足が発生して異常終了(※3)する。かつ、 3. 3.RDBコマンド(※4)、または、SQLアプリケーションを実行する。	○	○

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			※2)以下のRDBコマンドが該当。(アルファベット順に記載) rdbalidx rdbalmsdi rdbaltop rdbconbf rdbddlex rdbddlfix rdbdmp rdbcploader rdbexdsi rdbexecsql rdbexspc rdbfmt rdbgcdsi rdbhsuty rdbinf rdbinh rdbmrddmp rdbmrrcv rdbpmt rdbprt rdbrcv rdbrcvdic rdbresident rdbrls rdbrrtr rdbsaloader rdbscldir(Vオプション指定) rdbsetrp rdbsloder rdbspcinf rdbsuloder rdbudsi rdbunl rdbunlx rdbunlsql rdbups rdbupt		

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			注意事項: 上記コマンドは、VLによっては存在しないものもあります。マニュアルのコマンドリファレンスを確認ください。 ※3) RDBコマンドは以下のメッセージなどを出力して、コマンドが異常終了。 「qdg12071u 利用可能なメモリが不足しています s*」 「qdg12171u ローカルメモリ不足が発生しました s*」 また、SQLアプリケーションは以下のメッセージなどを出力して、コマンドが異常終了。 「JYP1070E メモリ不足が発生しました」 「JYP5007E RDBIIサーバ空間内のメモリ不足が発生しました」 ※4) (※2)のRDBコマンドが該当します。なお、[発生条件]1.のRDBコマンド、または、SQLアプリケーションと同じでなくても発生します。 補足) 本現象はメモリ配置によるため、発生条件を満たしても必ず発生するわけではありません。		
13		PG65855	[現象] 問合せ指定に結合表を記述したSQL文を実行すると、qdg02842u(※)のメッセージを出力してSymfoware/RDBがダウンまたは、誤った検索結果が取り出される場合があります。 ※) qdg02842u:シグナルd*を受信したため RDBIIシステム空間が異常終了しました。 [環境] 以下のいずれかのOSである場合。 • Oracle Solaris または、 • Linux または、 • Windows または、 • UXP/DS [発生条件] 1. SQL文の問合せ指定に結合表を指定する。かつ、 2. 1.の結合表に対して1.で指定した同じ表(相関名なし)、または、1.と同じ相関名を指定して、さらなる結合を実施する。かつ、 3. 2.の表または相関名で修飾した列を、2.の結合条件に指定した場合。 以下にSQL文の例を示します。 <pre> SELECT T1. C1 FROM S1. T1 LEFT JOIN S1. T2 ON T1. C1=T2. C1 LEFT JOIN S1. T2 ←条件2) ON T1. C1=T2. C1 ←条件3) </pre> 説明) S1.T2が重複して指定されています。 S1.T2の列を結合条件に指定しています。	○	○

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
14		PG66699	[現象] 下記の環境、条件のときに、qdg02842u のメッセージを出力して、Symfoware Server がダウンすることがある。 [環境] 以下のOSである場合。 • Linux • Solaris • Windows • UXP/DS [発生条件] 1. rdblkinfコマンドを-dオプションを指定して実行している。かつ、 2. 以下の二つの処理を同時に同一のデータベース資源に対して実行する。かつ、 2-1)以下の条件のもとでSELECT文を実行する。 - ー 並列指定にPARALLELを指定しているか、もしくは、クライアント用動作環境ファイル、サーバ用動作環境ファイルのPARALLEL_SCANにYESを指定している。かつ、 - ー トランザクションの独立性水準が、SERIALIZABLE、REPEATABLE READ、READ COMMITTEDのいずれかである。 2-2)更新のロックをとるSQL文を実行する。更新のロックをとるSQL文は以下のいずれかである。 - ー UPDATE文 または、 - ー DELETE文 または、 - ー 更新可能性句にFOR UPDATEを指定したSELECT文 または、 - ー 占有モード指定にEXCLUSIVE LOCKを指定したSELECT文 または、 - ー クライアント用動作環境ファイル、または、サーバ用動作環境ファイルのDSO_LOCKパラメタにEXを指定したSELECT文 3. 2の後、2-1)のSELECT文を実行したコネクションにおいて、デッドロックが発生する。	○	○
15		PG67462	[現象] SymfoWARE/RDBが"qdg02842u シグナルd*を受信したため RDBIIシステム空間が異常終了しました"のメッセージを出力してダウンする場合があります。 [環境] 以下のOSである場合。 1. Solaris(TM)Operating System または、 2. Linux または、	○	○

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			3. Windows [発生条件] 以下の場合、SymfoWARE/RDBがダウンする場合があります。 1. アプリケーションがコネクションを接続している状態である。かつ 2. ネットワークの異常等でSymfoWARE/RDBのサーバが不当なプロトコルを受信した場合。		
16		PG67487	[現象] 最適化情報のファイルを記述したSET STATISTICS文の実行が正常終了したにもかかわらず、最適化情報が設定されない(※)ことがあります。なお、本現象の発生を利用者が認識するのは以下の場合です。 - PRINT STATISTICS文の出力結果を参照時。または、 - アクセスプランの取得結果を参照時 ※) 設定されない最適化情報は以下です。 - DSI(RANDOM型)を記述した場合の以下の項目(一部の項目) AVERAGE PAGE MAXPAGE - DSI(BTREE型)を記述した場合の以下の項目(全ての項目) PAGE INDEX HIGHT DIFFERENT KEY [環境] 以下のいずれかのOSを使用している場合。 - ー Solaris(TM) Operating System、または、 - ー Linux、または、 - ー Windows [発生条件] 1. SET STATISTICS文を実行する。かつ、 2. SET STATISTICS文に最適化情報のファイルを記述している。かつ、 3. 2.ファイルにDSI(RANDOM型)、または、DSI(BTREE型)を記述している。	○	○
17		PG68326	[現象] Symfoware/RDBが以下のメッセージを出力してダウンする場合があります。 qdg02842u シグナルd*を受信したため RDBIIシステム空間が異常終了しました (d*: シグナル番号) [環境] 以下のOSで発生します。	○	○

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			• Solaris (TM) Operating System • Linux • Windows [発生条件] 1. 以下のいずれかのコマンドを実行する。かつ、 a. rdbddlexコマンド(-lオプション)で、表に列を追加、または、DSIの追加を行う。または、 b. rdbddlexコマンドでDSIの分割値変更を行う。または、 c. rdbalidxコマンドでインデックスを非活性な状態に変更する。 2. 1.のコマンド実行中に、応用プログラムからSQL文を実行する。		
18		PG68452	[現象] RDBコマンドの実行において、メッセージqdg12275w(※)を出力してアーカイブログファイルが閉塞される場合があります。 (※) (*****は可変の値／文字です) qdg12275w:アーカイブログファイル***** (通番:*****)への書込み時に*****システムコールでエラーが発生しました errno=***** [環境] 以下のいずれかのOSである場合。 • Solaris(TM)Operating System または、 • Linux または、 • Windows [条件] 1. アーカイブログ運用を行っている。かつ、 2. RDBシステムの状態が停止状態である。かつ、 3. 以下のいずれかのRDBコマンドを実行する。かつ、Symfoware Server のコマンド • rdbscldir -V • rdblog -V -a Symfoware Active DB Guard のコマンド • rdbbcrpl -V 4. 3.のコマンド実行中にI/Oエラーが発生する。	○	○
19		PG69007	[現象] 以下の環境および発生条件のいずれかに該当するとき、Symfoware/RDBがダウンする場合があります。 [環境] 以下のOSを使用している場合。 • Solaris(TM) Operating System または • Linux または • Windows	○	○

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			【発生条件1】 1. システム用またはクライアント用の動作環境ファイルのパラメタ ARC_FULLLにRETURNを指定している。かつ、 2. システム用またはクライアント用の動作環境ファイルのパラメタ R_LOCKにYESを指定している。かつ、 3. インデックスを定義した表を定義している。かつ、 4. アプリケーションから以下のいずれかのSQL文によって当該表を更新するトランザクションを実行する。かつ、 1. INSERT文 または 2. インデックスが定義された列を更新するUPDATE文:位置づけ または 3. インデックスが定義された列を更新するUPDATE文:探索 5. 当該インデックスがDSIの自動容量拡張の設定になっており、設定方法が以下のいずれかに合致する。かつ、 1. V9.1以降の場合、当該インデックスのDSI定義時に EXPAND ONを指定している。または、 2. V9.1以降の場合、当該インデックスのDSI定義時に EXPAND を指定していない。かつ、RDB構成パラメタファイルのパラメタRDBEXPDSIにYESを指定している。または、 3. rdbalmdsiコマンドにより、当該インデックスに対する自動容量拡張を定義する。 6. 4.のトランザクションにおいてCOMMIT文を実行する。かつ、 7. 6.のCOMMIT文の処理においてインデックスDSIの空き容量が拡張契機に達する。かつ、 8. 6.のCOMMIT文の処理において、アーカイブログの満杯事象が発生する。 【発生条件2】 1. SQL文の実行時にエラー(※)が発生する。 (※)Symfoware/RDBの内部で内部矛盾と判定される不特定のエラーが該当します。		
20		PG69505	[現象] [現象1] 以下の発生条件に一致した場合、qdg02842u(※)のメッセージを出力してSymfoware/RDBがダウンします。 ※ qdg02842u:シグナル6を受信したため RDBIIシステム空間が異常終了しました [現象2] 以下の発生条件に一致した場合、指定したスキーマと異なるスキーマにビューが定義されます。 [環境] 以下のいずれかのOSである場合。	○	○

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			－Solaris(TM) Operating System または、 －Windows または、 －Linux [発生条件] [現象1の発生条件] 1. ビュー定義の問合せ指定の選択リストに、DEFAULT値として順序を定義した列を指定している。かつ、 2. ビューと順序が所属するスキーマ名の長さが以下にしめす条件に一致する。かつ、 － 1.の順序が所属するスキーマ名の長さがビューの所属するスキーマ名の長さより長い。または － 1.の順序が所属するスキーマ名の長さがビューの所属するスキーマ名の長さより短い。 3. 以下にしめす条件に一致する名前のスキーマが定義されていない。 － 1.の順序が所属するスキーマ名の長さと一致する。かつ、 － 1.のビューが所属するスキーマ名の先頭文字列と一致する。 例: <pre>CREATE TABLE SCM1. T1 (C1 INTEGER DEFAULT SCM1. SEQ1. NEXTVAL); (1) CREATE VIEW S1. VIEW1 AS SELECT C1 FROM SCM1. T1; (2)</pre> ※(1)と(2)の長さが一致していない。 [現象2の発生条件] 1. ビュー定義の問合せ指定の選択リストに、DEFAULT値として順序を定義した列を指定している。かつ、 2. 1.の順序が所属するスキーマ名の長さがビューの所属するスキーマ名の長さより短い。かつ、 3. 1.の順序が所属するスキーマ名の長さ分までビューの所属するスキーマ名文字列と一致するスキーマが定義されている。 4. 以下にしめす条件に一致する名前のスキーマが定義されている。 － 1.の順序が所属するスキーマ名の長さと一致する。かつ、 － 1.のビューが所属するスキーマ名の先頭文字列と一致する。 例: <pre>CREATE TABLE SC1. T1 (C1 INTEGER DEFAULT SC1. SEQ1. NEXTVAL); (1) CREATE VIEW SC11. VIEW1 AS SELECT C1 FROM SC1. T1; (2)</pre>		

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			※(1)が(2)のスキーマ名より短く、(2)のスキーマ名のうち(1)のスキーマ名の長さ分のスキーマが存在する。		
21		PG69562	[現象] RDBコマンドまたはアプリケーションを実行すると、無応答になる場合がある。 現象が発生した場合、メッセージログファイルに以下のメッセージが出力されます。 •qdg12440u インデックス域の入出力障害が発生しました errno=d* •qdg13239i ロググループ's*'において事象't*'が発生しました [環境] 以下のいずれかのOSを使用している場合に、発生します。 - Solaris(TM) Operating System - Linux - Windows [発生条件] 1. テンポラリログのインデックス部が破損する。かつ、 2. 以下のいずれかの操作を行う。 a. データベースを更新するアプリケーションを実行する。 または b. データベース更新やデータベース定義を含む Symfoware/RDB のコマンドを実行する。(※) ※現象が発生する可能性のあるSymfoware/RDB のコマンド rdbalidx, rdbdmp, rdbddlex, rdbddlfix, rdbalmdsi, rdbfmt rdbgcdcic, rdbgcdsi, rdbrcv, rdbsaloader, rdbsloder, rdbsuloder rdbunladt, rdbups, rdbupt	○	○
22		PG69756	[現象] 以下の環境および発生条件のいずれかに該当するとき、アプリケーションが無応答となる場合があります。また、派生する現象として、rdbtermコマンドによるコネクションの強制回収が出来なくなります。 [環境] 以下のOSを使用している場合。 - Solaris(TM) Operating System または - Linux [発生条件] 1. ロードシェア構成である。かつ、 2. CREATE SEQUENCE文のCACHE句に、保持順序数として1以上の値を指定した順序を定義している。かつ、 3. ロードシェアを構成するSATELLITEシステムの1台において、2.の順序に対する採番処理を伴うアプリケーションを多重(※)で実行する。	○	○

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			(※):CACHE句に指定される保持順序数より大きな多重度		
23		PG69994	[現象] 以下に示す条件下でアプリケーションを多重で実行した場合、COMMIT文の処理に時間がかかる(※)、または、COMMIT文の処理が完了しない場合があります。 ※目安として通常は数分オーダーで完了するところが、数時間オーダーとなる場合があります。 [環境] 以下のいずれかのOSを使用している場合。 • Solaris(TM) Operating System、または、 • Linux、または、 • Windows [発生条件] 1. 表のDSO定義にSEQUENTIAL構造を指定している。かつ、 2. 1.の表に対してインデックスを付加している。かつ、 3. 1.の表に対して行単位の排他を使用したアプリケーションを実行している。かつ、 4. トランザクション内で1.の表に対してINSERT文またはDELETE文、UPDATE文を実行している。かつ、 5. 2.の同一DSIに対してアプリケーションを多重で実施している(注)。かつ、 6. 3.のアプリケーションで同時にCOMMIT文を実行している。 注)再現時の環境は以下。 1トランザクション200件の一括INSERTを同一DSIに対して400コネクションから実施しました。(1DSIに対しては、200件×400コネクション＝8万件の挿入処理) また、お客様環境では、1つのDSIに対して100多重以上が実行されていました。	○	○
24		PG70741	[現象] [現象1] GRANT文でユーザに対して、ビュー表のDROP権を付与しようとすると、JYP3503E(※1)のエラーとなります。 ※1)JYP3503E GRANT文に指定された権限“DROP”を付与する権限がありません。 [現象2] GRANT文でユーザに対して、ビュー表に付与可能な全ての権限を付与しようとすると、DROP権が付与できません。 この結果、権限受領者はビュー表に対するDROP文を実行できません。 [環境] 以下のいずれかのOSを使用している場合。 1. Solaris(TM) Operating System または、	○	○

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			2. Linux または、 3. Windows または、 4. UXP/DS [発生条件] [発生条件1] Symfowareの管理者(※2)以外のユーザが、以下のオペレーションを実行(オペレーションは、全て同じユーザで実行)すると現象1が発生します。 <パターン1> - 問合せ指定が更新不可能なビュー表(※3)を定義する。かつ、 - 以下を指定したGRANT文を実行する。 - 対象名に1.のビュー表を指定する。かつ、 - 権限にDROPを指定する。かつ、 - 権限受領者に認可識別子、または、PUBLICを指定する。 <パターン2> - 問合せ指定が更新可能なビュー表(※3)を定義する。かつ、 - 以下を指定したGRANT文を実行する。 - 対象名に1.のビュー表を指定する。かつ、 - a.のビュー表が参照する表に、実行ユーザに対するDROP権が付与されていない。かつ、 - 権限にDROPを指定する。かつ - 権限受領者に認可識別子、または、PUBLICを指定する。 [発生条件2] Symfoware管理者(※2)以外のユーザが、以下のオペレーションを実行(オペレーションは、全て同じユーザで実行)すると現象2が発生します。 <パターン1> - 問合せ指定が更新不可能なビュー表(※3)を定義する。かつ、 - 以下を指定したGRANT文を実行する。 - 対象名に1.のビュー表を指定する。かつ、 - 権限にALL PRIVILEGESを指定する。かつ、 - 権限受領者に認可識別子、または、PUBLICを指定する。 <パターン2> - 問合せ指定が更新可能なビュー表(※3)を定義する。かつ、 - 以下を指定したGRANT文を実行する。		

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			a. 対象名に1.のビュー表を指定する。かつ、 b. a.のビュー表が参照する表に、実行ユーザに対するDROP権が付与されていない。かつ、 c. 権限にALL PRIVILEGESを指定する。かつ、 d. 権限受領者に認可識別子、または、PUBLICを指定する。 ※2) RDBディクショナリの創成者。 ※3) 更新不可能か更新可能かは、rdbprtコマンドの出力結果(Updatable view)で確認できます。 Updatable viewがYESなら更新可能で、NOなら更新不可能(読み専用)であることを示します。 また、更新不可能か更新可能かは、マニュアルの以下に記載されている内容に、ビュー表の問合せ指定が合致するか否かで決定します。 Symfoware Server SQLリファレンス 第3章 基本的なSQL文 「DECLARE CURSOR(カーソル宣言)」の「読み専用カーソルとなる条件」の表		
25		PG71199	[現象] RDBコマンド、ローカルアクセスを行うアプリケーション、またはRDA接続を行うアプリケーションが無応答になる場合があります。 また、Connection Managerの場合、アプリケーションまたは、APCコマンドが無応答になる場合があります。 [環境] 以下のいずれかのOSを使用している場合に発生します。 ーLinux ※ ーSolaris(TM) Operating System ーWindows ※ IA64版では発生しません。 [発生条件] 1. CPU数またはコア数が2以上である。かつ、 2. 以下のいずれかを実行した場合。 ーSymfoware/RDBの場合、RDBコマンド、ローカルアクセスを行うアプリケーション、または、RDA接続を行うアプリケーション ーConnection Managerの場合、APCコマンド、またはアプリケーション 尚、本障害はCPUの特性によるタイミング依存であるため、条件に一致しても発生しない場合があります。	○	○
26		PG73661	[現象] FETCH文を実行すると、qdg02842uを出力してSymfoware/RDBがダウンする場合があります。	○	○

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			qdg02842u:シグナルd*を受信したため RDBIIシステム空間が異常終了しました d*: シグナル番号 [環境] 以下の環境の場合。 • Solaris(TM) Operating System • Linux • Windows [発生条件1] 1. 埋込みSQLを利用した、C言語またはCOBOL言語のアプリケーションを使用する。かつ、 2. 以下のいずれの条件にも該当する。かつ、 1. 動作環境ファイルのRESULT_BUFFERの個数に0以外を指定(*1)する。かつ、 2. 動作環境ファイルのRESULT_BUFFERのバッファサイズが、選択リストに指定した値式の合計長より長い。 3. アクセスする表のインデックスに非活性状態(*2)のDSIが含まれる。かつ、 4. 3.の表を参照するカーソルに対して、OPEN文を実行する。かつ、 5. 3.のDSIに対して、4.と同時に以下のいずれかのコマンドを実行する。かつ、 1. rdbfmtコマンド 2. rdbsloaderコマンド 6. 5.の後に4.でオープンしたカーソルに対して、FETCH文を実行する。 [発生条件2] 1. JDBCを使用したJavaアプリケーションを使用する。かつ、 2. 以下のいずれの条件にも該当する。かつ、 1. ctuneparamオプションのCLI_RESULT_BUFFERパラメタの個数に0以外を指定(*3)する。かつ、 2. CLI_RESULT_BUFFERパラメタのサイズが、選択リストに指定した値式の合計長より長い。 3. アクセスする表のインデックスに非活性状態(*2)のDSIが含まれる。かつ、 4. 3.の表を参照するSELECT文を指定して、以下のいずれかのメソッドを実行する。かつ、 1. Statement インタフェースの execute または、executeQueryメソッド 2. PreparedStatementインタフェースのexecuteまたは、executeQueryメソッド		

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			5. 3.のDSIに対して、4.と同時に以下のいずれかのコマンドを実行する。かつ、 1. rdbfmtコマンド 2. rdbsloaderコマンド 6. 5.の後に4.の実行で作成されたResultSetに対して、以下のいずれかのメソッドを実行する。 1. next 2. absolute 3. afterLast 4. first 5. last 6. previous 7. relative [発生条件3] 1. ODOSを使用した、ODBCアプリケーションを使用する。かつ、 2. 以下のいずれの条件にも該当する。かつ、 1. CLI_RESULT_BUFFERパラメタの個数に0以外を指定(*3)する。かつ、 2. CLI_RESULT_BUFFERパラメタのサイズが、選択リストに指定した値式の合計長より長い。 3. アクセスする表のインデックスに非活性状態(*2)のDSIが含まれる。かつ、 4. 3.の表を参照する。かつ、 5. 3.のDSIに対して、4.と同時に以下のいずれかのコマンドを実行する。かつ、 1. rdbfmtコマンド 2. rdbsloaderコマンド 6. 5.の後に4.のデータを取得する。 [発生条件4] 1. rdbexecsqlコマンドを使用する。かつ、 2. 以下のいずれの条件にも該当する。かつ、 1. 動作環境ファイルのRESULT_BUFFERの個数に0以外を指定(*1)する。かつ、 2. 動作環境ファイルのRESULT_BUFFERのバッファサイズが、選択リストに指定した値式の合計長より長い。 3. アクセスする表のインデックスに非活性状態(*2)のDSIが含まれる。かつ、 4. 3.の表に対して、SELECT文を実行する。		

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			5. 3.のDSIに対して、4.と同時に以下のいずれかのコマンドを実行する。 1. rdbfmtコマンド 2. rdbloaderコマンド (*1):パラメタを省略した場合の(バッファの個数,バッファサイズ)は、Windows環境では(0,1)、Solaris/Linux環境では(2,32)になります。 (*2):以下の場合にDSIは非活性状態となります。 ・ DSIの定義直後の状態 ・ rdbalidxコマンドを実行した状態 ・ 表DSIおよびインデックスDSIが両方活性の状態から表DSIのみ初期化した状態 (*3):パラメタを省略した場合の(バッファの個数,バッファサイズ)は、(2,32)になります。		
27		PG74549	[現象] Symfoware/RDBのデータベーススペースが作成されている場合、ACM(※1)のGUI画面またはACMのstgxfwcmsetdevコマンドを使用して、デバイス情報取得/反映を実行しても、Symfoware/RDBのデータベーススペース情報が登録されません。 (※1)ACMはETERNUS SF AdvancedCopy Managerの略です。以降ACMと呼びます。 [環境] 以下のいずれかのOSである場合。 ・ Solaris(TM) Operating System ・ Linux ・ Windows [発生条件] 1. Symfoware/RDBのデータベーススペースの作成先のパス名に区切り文字を2つ以上連続したパス名を指定してデータベーススペースを作成する。かつ 2. 上記を実施したノードに対して、ACMのGUIまたはACMのstgxfwcmsetdevコマンドを使用して、デバイス情報取得/反映を行う場合	○	○
28		PG74728	[現象] 以下のメッセージを出力し、Symfoware/RDBがダウンする場合があります。 『qdg02842u:シグナル*を受信したため RDBIIシステム空間が異常終了しました』 [環境] 以下のいずれかのOSである場合。 ・ Solaris(TM) Operating System または、 ・ Linux または、 ・ Windows	○	○

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			[発生条件] 1. 監査ログ運用を行っている。かつ、 2. 監査ログパラメタAUDIT_SQLにYESを指定している。かつ、 3. 監査ログパラメタAUDIT_SQLBINDにYESを指定している。かつ、 4. 以下のいずれかの方法を使用したSQL文を実行する。かつ、 1. 文字列型の入力ホスト変数を使用した場合。または、 2. 文字列型の動的パラメタを使用した場合。 5. 4.の入力ホスト変数または動的パラメタに指定した文字列に、二重引用符が含まれる。かつ、 6. 4.の入力ホスト変数または動的パラメタに指定したデータが以下の式を満たす。 データ長(※) + データ内の二重引用符の数 > 1030 (※) データ長が1024バイトを超える場合、1024として計算する。 なお、入力ホスト変数のデータ長が1024バイトを超える場合は、データ中に含まれる二重引用符の位置によっては、現象が発生しない場合があります。		
29		PG74816	[現象] DDL文とDML文を同一トランザクションで実行するとき、qdg02842u(*)のメッセージを出力しSymfoware/RDBがダウンする。 (*)qdg02842u:シグナルd*を受信したため RDBIIシステム空間が異常終了しました s* [環境] 以下のいずれかのOSである場合。 • Solaris(TM) Operating System または、 • Linux または、 • Windows [発生条件] 1. 更新系のDML文を以下のいずれかの方法によって実行する。かつ、 1. PREPARE文で準備した動的SQLをEXECUTE文で実行する または 2. EXECUTE IMMEDIATE文でSQL文を実行する 2. 1.のDML文が構文エラー以外のエラーとなる。かつ、 3. 1.と同一のトランザクション内で、1.のDML文が処理対象とした資源に対して、以下のいずれかのDDL文を実行する。かつ、 1. DROP TABLE文 または 2. DROP DSO文 または 3. DROP DSI文 または	○	○

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			4. ALTER TABLE文 または 5. DROP INDEX文 または 6. DROP TRIGGER文 4. 3.の実行後、COMMIT文またはROLLBACK文を実行する。		
30		PG74910	[現象] Symfoware Advanced Backup Controller(以降、ABC)のリカバリ中、メッセージqdg12695uを出力してSymfoware/RDBがダウンします。 qdg12695u: System error occurred. Reference code = XXXXXXXXXXXX Internal code = (idt_p:YYYYYYYYYYY sub_code:0 module:qdcmeris line:ZZZ) [環境] 以下のいずれかのOSを使用している場合。 • Solaris(TM) Operating System または、 • Linux または、 • Windows [発生条件] 1. アーカイブログ運用を実施している。かつ、 2. ABCのリカバリ(rdbmrrcvコマンド、または、swstrestoreコマンド)対象データベーススペースに対し、ABCのバックアップ(rdbmrdmpコマンド、または、swstbackupコマンド)を実施している。かつ、 3. ABCのリカバリ対象データベーススペースにDSIが定義されていない。かつ、 4. ABCのリカバリ対象データベーススペースが属するロググループのアーカイブログファイルの状態(*1)にfull状態または、using状態が存在しない。かつ、 5. 2.の退避データを使用してABCのリカバリを実施する。 (*1)アーカイブログファイルの状態は以下のコマンドで確認可能。 rdblog -V -a [-g ユーザロググループ名]	○	○
31		PG74982	[現象] Symfoware/RDBに接続する応用プログラムが無応答になる場合があります。 [環境] 以下のOSで発生します。 - ー Solaris(TM) Operating System - ー Linux - ー Windows [発生条件] 1. 応用プログラムからコネクションを接続する。かつ、 2. 以下のいずれかの場合。かつ、	○	○

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			a. RDB2_TCP接続でSymfoware/RDBに接続している。 または、 b. Connection Managerを使用してSymfoware RDBに接続している。 3. 1.の処理中に、rdbtermコマンドで1)のコネクションを切断する(*1)。 *1)rdbterm自体は正常終了します。		
32		PG75261	[現象1] rdbstopコマンドでSymfoware/RDBを停止時に、以下のエラーメッセージが出力され、Symfoware/RDBが停止できない場合があります。 - 標準エラー rdb: ERROR: qdg12426u:RDBIIを停止できません 原因:動作中 - RBDREPORTファイル qdg12148e:SQL文の実行で重症エラーを検出しました:'JYP5015E RDBII起動中または停止中のため処理を実行できません.' qdg12147e:通信処理において異常が発生しました:'JYP5015E RDBII起動中または停止中のため処理を実行できません.' [現象2] rdbstopコマンド -mc オプションでSymfoware/RDBを停止時に、以下のエラーメッセージを出力する場合があります。なお、Symfoware/RDBの停止は正常に終了します。 - RBDREPORT qdg12148e:SQL文の実行で重症エラーを検出しました:'JYP5015E RDBII起動中または停止中のため処理を実行できません.' qdg12147e:通信処理において異常が発生しました:'JYP5015E RDBII起動中または停止中のため処理を実行できません.' [環境] 以下の環境である。 - Windows - Solaris - Linux [発生条件] - V9.1.0 以降 の Symfoware Connection Manager(以下 Connection Manager) を使用している。かつ - 以下のいずれかの運用を行っている。かつ - V9.1.0以前のロードシェア運用(*1) - ホットスタンバイ運用 - Symfowareを停止する。 (*1) RDB構成パラメタファイルに以下のパラメタが設定されている場合、V9.1.0以前のロードシェア運用となります。	○	○

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			・RDBLOADSHARE		
33		PG75263	[現象] 以下に示す環境・発生条件のとき、下記のメッセージを出力して Symfoware/RDBがダウンする場合があります。 「qdg02842u:シグナル11を受信したためRDBIIシステム空間が異常終了しました」 [環境] 本障害は以下のいずれかのOSで発生します。 • Solaris(TM) Operating System • Linux • Windows [発生条件] 以下の条件で発生する場合があります。 1. パフォーマンスモニタを利用している。かつ、 2. パフォーマンスデータ格納ファイルで入出力障害(*1)が発生する。かつ、 3. アプリケーション、またはRDBコマンド実行時にデッドロックが発生する。 *1) 出力されるメッセージは以下になります。 qdg14170w:パフォーマンスデータ格納ファイルにおいて、入出力障害が発生しました ファイル名='*****' システムコール='*****' errno=***** (*****は可変の値)	○	○
34		PG75325	[現象] 以下の環境、条件を満たすとき、Symfoware/RDBがqdg02842uのエラーメッセージを出力しダウンする場合があります。 ※qdg02842u: シグナルd*を受信したため RDBII システム空間が異常終了しました s* d*: シグナル番号 s*: RDB システム名 RDB システム名はマルチRDB の場合のみ出力されます。 [環境] 以下のOS・製品で発生します。 • Linux (Red Hat Enterprise Linux 4) 修正番号 : T001856QP-03 製品名・世代 : Linux64-IPF Symfoware Server Enterprise Extended Edition 9.2.0 (Red Hat Enterprise Linux 5) 修正番号 : T001857QP-03	○	○

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			製品名・世代 : Linux64-IPF Symfoware Server Enterprise Extended Edition 9.2.0 (Red Hat Enterprise Linux 4) 修正番号 : T002786LP-03 製品名・世代 : Linux64-EM64T Symfoware Server Standard Edition for x64 9.2.0 (Red Hat Enterprise Linux 5) 修正番号 : T002788LP-03 製品名・世代 : Linux64-EM64T Symfoware Server Standard Edition for x64 9.2.0 (Red Hat Enterprise Linux 4) 修正番号 : T002784LP-03 製品名・世代 : Linux32 Symfoware Server Standard Edition 9.2.0 (Red Hat Enterprise Linux 5) 修正番号 : T002785LP-03 製品名・世代 : Linux32 Symfoware Server Standard Edition 9.2.0 (Red Hat Enterprise Linux 4と5) Symfoware Server V10.0.0およびV10.0.0A の各エディション • Windows Symfoware Server V10.0.0 の各エディション [発生条件-1] - カーソルをオープンしている。かつ、 1.のカーソル以外にSQL文を実行している。かつ、 1コネクション内で実行するSQL文の合計長が、1024バイトを超える。かつ 1.のカーソルをオープンした状態で、以下のいずれかでコネクションが切断される。 1. rdbstop -mc コマンドにより、実行中アプリケーションが強制終了される。または、 2. rdbterm コマンドにより、コネクションが強制切断される。または、 3. killコマンドでアプリケーションプロセスを強制終了する。または、 4. トランザクションの実行時間が、利用者制御機能の MAX_TRAN_TIMEを超える。または、 5. アプリケーションからの応答時間が、利用者制御機能の MAX_WAIT_TIMEを超える。または、 6. トランザクションの実行時間が、TRAN_TIME_LIMITを超える。または、		

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			7. Windowsクライアント端末で以下のいずれかを実行する。または、 - 時刻補正する。または、 - クライアント端末を再起動する。 8. DISCONNECT文を実行しないでアプリケーションプロセスを終了する。または、 9. RDB2_TCP接続のクライアントとの通信で、システムコールが何らかの原因により、エラーが発生する [発生条件-2] - 定義長が32Kバイト以上のBLOB列に対する動的パラメタを含む、SQL文を実行する。かつ、 1.の実行前にSQL文が実行されている。かつ、 1.を実行した時点で、1コネクション内で実行するSQL文の合計長が1024バイトを超える。 ※補足 SQL文情報を格納する内部メモリの使用状況も関係しているため必ず発生するものではありません。		
35		PG75656	[現象] NULLを指定したCASE式と並列指定を同時に指定したSQL文を実行すると、以下のエラーメッセージを出力してSymfoware/RDBがダウンする場合があります。 qdg02842u:シグナル11を受信したため RDBIIシステム空間が異常終了しました。 [環境] - Solaris(TM) Operating System - Linux - Windows [発生条件] - 以下のいずれかによって、表を並列に検索する。かつ、 - SQL文に並列検索(PARALLEL)を指定している。または、 - クライアント用の動作環境ファイルまたは、サーバ用の動作環境ファイルにPARALLEL_SCAN=YESを指定している。または、 - 環境変数RDBPSCANにYESを指定している。 - 以下の条件をすべて満たす場合。かつ、 - 表をDSI分割している、かつ、複数のDSIに対してアクセスしている。 - WHERE句にROW_IDを指定していない。 - クラスタキーを構成するすべての列について、WHERE句に論理演算子ANDで、IN述語や=の比較述語で指定していない。 - SQL文にCONTAINS関数を指定していない。 - SQL文にファンクションルーチンを指定していない。 - 探索条件に列を参照する条件を指定している。	○	○

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			3. 1-2)、または、1-3)の場合は、表の全件検索のアクセスモデルである。かつ、 4. SQL文にCASE式を指定している。かつ、 5. 4.のCASE式が以下のいずれかである。かつ、 5-1) CASE略式である。または、 5-2) CASE指定であり、結果にNULLを指定している。 6. 4.のCASE式の結果がNULLとなるレコードが含まれている。かつ、 7. 4.のCASE式を集合関数に指定している場合は、以下の条件を満たす場合。 7-1) FROM句には1つの表を指定している。かつ、 7-2) GROUP BY句を指定していない。かつ、 7-3) 副問合せを指定していない。かつ、 7-4) 7.の集合関数の他に、DISTINCTを指定した集合関数を指定していない。		
36		PG75673	[現象] rdbdmpdicコマンド実行中にRDBディクショナリに対してI/Oエラーが発生または、RDBディクショナリの破壊を検出すると、qdg12695u(※)のメッセージを出力してSymfoware/RDBがダウンします。 (※)qdg12695u: System error occurred. Reference code = XXXXXXXXXXXX Internal code = (idt_p:YYYYYYYYYY sub_code:W module:qdcsecom670 line:ZZZ) [環境] 以下のいずれかのOSを使用している場合。 • Solaris(TM) Operating System または、 • Linux または、 • Windows [発生条件] 1. rdbdmpdicコマンドを使用してRDBディクショナリのバックアップを実施している。かつ、 2. 1.実行中に 以下のいずれかの事象が発生した場合 - ー RDBディクショナリに対してreadエラーが発生(※1)。 - ー RDBディクショナリの破壊を検出(※2)。 (※1)RDBディクショナリに対してreadエラーが発生した場合、RDBREPORTで指定したメッセージログファイルにqdg12771u(RDBIIディクショナリの入出力処理で異常が発生しました)のメッセージが出力されます。 (※2)RDBディクショナリの破壊を検出した場合、RDBREPORTで指定したメッセージログファイルにqdg12769u(RDBIIディクショナリが破壊されています)のメッセージが出力されます。	○	○
37		PG75683	[現象] ODBCアプリケーションで複数件のデータを参照したとき、返却されるはずのデータが返却されない場合があります。	○	○

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			[環境] 本障害は、以下の環境で発生します。 • Windows [発生条件] 1. Symfoware Server V10を使用している。かつ、 2. Symfoware ODOS連携のアプリケーションを実行する。かつ、 3. SQLSetStmtOptionで第2パラメタにSQL_ROWSET_SIZEを指定する。かつ、 4. SQLSetStmtOptionで第3パラメタに2以上の値を指定する。かつ、 5. SQLExtendedFetchでデータを参照する。		
38		PG75821	[現象] 以下に示す発生条件のとき、以下の現象が発生する場合があります。 [現象1] JYP7201E スキーマ“@1@”が存在しません. のエラーとなります。 [現象2] JYP7210E データベース“@1@”が存在しません. のエラーとなります。 [現象3] JYP2263E スキーマ“@1@”の表“@2@”に“@3@”権がありません. のエラーとなります。 [現象4] SET TRANSACTION文で設定した独立性水準、トランザクションアクセスモード以外の状態でSQL文が動作することで、以下の事象が発生します。 1. 本来更新SQL文が実行可能なトランザクションであるにもかかわらず、「JYP2087E トランザクション状態は読み専用です. 更新系SQL文は実行できません. 」エラーとなります。 2. 他のトランザクションで更新中のデータに対して、本来1つ前のトランザクションでCOMMITされたデータが参照できず、他のトランザクションが完了するまで排他待ちとなります。 [環境] 以下のいずれかの環境の場合。 －Solaris(TM) Operating System －Linux －Windows [発生条件] [現象1の発生条件] 1. 後述のA)のいずれかを使用する。かつ、	○	○

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			2. V9.1以降のSymfoware Server Connection Managerを使用する。かつ、 3. 以下のいずれかに該当する。かつ、 埋込みSQLアプリケーションまたは、<code>rdbececsql</code>コマンドの場合) SET SCHEMA文を実行する。 Javaアプリケーションまたは、ODBCアプリケーションの場合) デフォルトスキーマ名を指定するか、SET SCHEMA文を実行する。 4. 後述のC)のいずれかの理由により、コネクションが切断される。かつ、 5. 4.の後、ロールバックを実行する。かつ、 6. 5.の後、スキーマ名で修飾していない識別子を使用して、以下のいずれかのSQL文を実行する。 埋込みSQLアプリケーションまたは、<code>rdbececsql</code>コマンドの場合) 動的カーソル宣言以外の動的SQL文または、CALL文。 Javaアプリケーションまたは、ODBCアプリケーションの場合) データ操作文または、CALL文。 [現象2の発生条件] 1. 後述のA)のいずれかを使用する。かつ、 2. V9.1以降のSymfoware Server Connection Managerを使用する。かつ、 3. 以下のいずれかに該当する。かつ、 埋込みSQLアプリケーションまたは、<code>rdbececsql</code>コマンドの場合) SET CATALOG文または、データベース名を付けたSET SCHEMA文を実行する。 Javaアプリケーションまたは、ODBCアプリケーションの場合) データベース名を付けたSET SCHEMA文を実行する。 4. 後述のC)のいずれかの理由により、コネクションが切断される。かつ、 5. 4.の後、ロールバックを実行する。かつ、 6. 5.の後、以下のいずれかのSQL文を実行する。 埋込みSQLアプリケーションまたは、<code>rdbececsql</code>コマンドの場合) 動的カーソル宣言以外の動的SQL文または、CALL文。 Javaアプリケーションまたは、ODBCアプリケーションの場合) データ操作文または、CALL文。 [現象3の発生条件] 1. 後述のB)のいずれかを使用する。かつ、 2. V9.1以降のSymfoware Server Connection Managerを使用する。かつ、 3. SET SESSION AUTHORIZATION文またはSET ROLL文を実行する。かつ、 4. 後述のC)のいずれかの理由により、コネクションが切断される。かつ、		

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			5. 4.の後、ロールバックを実行する。かつ、 6. 5.の後、SQL文を実行する。 [現象4の発生条件] 1. 後述のA)のいずれかを使用する。かつ、 2. V9.1以降のSymfoware Server Connection Managerを使用する。かつ、 3. 以下のいずれかに該当する。かつ、 埋込みSQLアプリケーションまたは、rdbexecsqlコマンドの場合) SET TRANSACTON文を実行する。 Javaアプリケーションの場合) default_readonlyオプションまたは、default_isolationオプションを指定する。 または、SET TRANSACTON文を実行する。 ODBCアプリケーションの場合) CLI_DEFAULT_ACCESS_MODE パラメタ または、 CLI_DEFAULT_ISOLATIONパラメタを指定する。 または、SET TRANSACTON文を実行する。 4. 後述のC)のいずれかの理由により、コネクションが切断される。かつ、 5. 4.の後、ロールバックを実行する。かつ、 6. 5.の後、SQL文を実行する。 [発生条件]の補足説明 A)アプリケーションまたはコマンドの種類 ・埋込みSQLを利用した、C言語またはCOBOL言語のアプリケーション ・rdbexecsqlコマンド ・JDBCを使用した、Javaアプリケーション ・ODOSを使用した、ODBCアプリケーション B)アプリケーションまたはコマンドの種類 ・埋込みSQLを利用した、C言語またはCOBOL言語のアプリケーション ・rdbexecsqlコマンド C)コネクションが切断される理由 ・ロードシェア運用で、縮退、切替え、または、切戻しが発生する。 ・ホットスタンバイ運用で、運用系から待機系への切替えと切り戻しを行う。 ・rdbtermコマンドでコネクションを切断する。 ・通信異常などの理由により、コネクションが切断される。 ・アプリケーション実行中にアプリケーションサーバで時刻補正を行う。 ・TRAN_TIME_LIMITパラメタに指定した時間を超過する。		

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			・利用者制御機能のMAX_TRAN_TIMEパラメタに指定した時間を超過する。		
39		PG76142	[現象] Symfoware ODBCドライバを利用したODBCアプリケーションで、SET TRANSACTION文またはSET SCHEMA文を実行すると、アプリケーションが異常終了(ダウン)する場合があります。 アプリケーションダウン時にイベントビューアに出力されるメッセージ qdg12148e:SQL文の実行で重症エラーを検出しました:'JYP1078U シグナルを受信したためアプリケーションが異常終了しました.' [環境] 本障害は、Windows環境で発生します。 [発生条件] 1. V10.0.0以降のSymfoware Server Client機能を使用する。かつ、 2. Symfoware ODOSを使用した、ODBCアプリケーションを使用する。かつ、 3. 文ハンドル作成後、以下のいずれかのSQL文を実行する。かつ、 － SET TRANSACTION文 － SET SCHEMA文 4. 3.の実行以前にトランザクションを開始するSQL文を実行していない。かつ、 5. ODBC APIのSQLMoreResultsを実行する。 ●ADO.NETを利用している場合 1. V10.0.0以降のSymfoware Server Client機能を使用する。かつ、 2. Symfoware ODOSを使用した、ODBCアプリケーションを使用する。かつ、 3. System.Data.Odbc.OdbcCommandオブジェクトを生成し、以下のいずれかのSQL文を実行する。かつ、 － SET TRANSACTION文 － SET SCHEMA文 4. 3.の実行以前にトランザクションを開始するSQL文を実行していない。 5. 以下のいずれかのメソッドを実行する。 － OdbcCommandのExecuteNonQueryメソッド － OdbcCommandのExecuteReaderメソッド － OdbcCommandのExecuteScalarメソッド ●RDOを利用している場合	○	○

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			1. V10.0.0以降のSymfoware Server Client機能を使用する。かつ、 2. Symfoware ODOSを使用した、ODBCアプリケーションを使用する。かつ、 3. rdoConnectionオブジェクトを生成し、以下のいずれかのSQL文を2回実行する。かつ、 － SET TRANSACTION文 － SET SCHEMA文 4. 3.の実行以前にトランザクションを開始するSQL文を実行していない。 5. 以下のいずれかのメソッドを実行する。 － rdoConnectionのExecuteメソッド － rdoQueryのExecuteメソッド － rdoResultsetのMoreResultsメソッド ●DAOを利用している場合 1. V10.0.0以降のSymfoware Server Client機能を使用する。かつ、 2. Symfoware ODOSを使用した、ODBCアプリケーションを使用する。かつ、 3. Connectionオブジェクトを生成し、以下のいずれかのSQL文を2回実行する。かつ、 － SET TRANSACTION文 － SET SCHEMA文 4. 3.の実行以前にトランザクションを開始するSQL文を実行していない。 5. ConnectionのExecuteメソッドを実行する。		
40		PG76313	[現象] DSIと共用バッファプールの対応関係の解除または、DSIのメモリ常駐の解除を実行した場合に以下のメッセージを出力して、Symfoware/RDBがダウンする。 qdg02842u:シグナル6を受信したため RDBIIシステム空間が異常終了しました [環境] 以下のいずれかのOSである場合。 ・ Solaris (TM) Operating System または、 ・ Linux または、 ・ Windows または、 ・ UXP/DS [発生条件] 1. 以下のコマンドにより、DSIと共用バッファプールの対応関係の登録または、DSIをメモリに常駐している。かつ、	○	○

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			— rdbconbfコマンド または、 — rdbresident -monコマンド(※1) 2. 1.実行後に以下のコマンドを実行している。かつ、 — rdbdisbfコマンド または、 — rdbprtbfコマンド または、 — rdbresident -moffコマンド(※1) または、 — rdbresident -mpコマンド(※1) または、 — rdbsar -rコマンド 3. 1.で操作したDSIに対して、2.実行中に以下のコマンドにより、Symfoware/RDBシステムにおける、すべての共用バッファプールとの対応関係および、すべてのDSIのメモリ常駐が解除された状態となる。 — rdbdisbfコマンド または、 — rdbresident -moffコマンド(※1) ※本障害はタイミングに依存するため、必ず発生するわけではありません。 ※1)rdbresidentコマンドは、以下の場合に利用できます。 • V5.0以降でV8.0以前の場合、Symfoware Server Enterprise Extended Editionの場合に利用できます。 • V9.0以降でV9.1以前の場合、Symfoware Server Enterprise Extended EditionまたはSymfoware Server Enterprise Editionの場合に利用できます。 • V9.2以降の場合、すべてのEditionで利用できます。		
41		PG76944	[現象] SQL文の探索条件にIN述語と比較述語の指定がある場合、IN述語の指定値と一致し比較述語の条件に該当しない行が余分に返却される場合があります。 [環境] 以下のいずれかのOSである場合。 • Solaris(TM) Operating System • Linux • Windows • UXP/DS [発生条件] [条件1] 1. 行排他を使用しない。かつ、 2. インデックスキーの構成列に対して探索条件を指定する。かつ、 3. 2.の列に対して、IN述語の限定値リストに複数の値を指定する。かつ、	○	○

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			4. 3.の列が、構成列の先頭列、もしくは、上位のすべての構成列に対して、以下のいずれかの条件を指定している。かつ、 1. 比較述語の「＝」 2. 限定値リストをひとつ指定したIN述語 5. 3.の後続の構成列に探索条件を指定する。かつ、 6. 3.の列と一部の限定値リストを比較する探索条件に、以下のいずれかの比較演算子を指定する。 1. 比較述語の「＜」 2. 比較述語の「＞」 [条件2] 1. 以下のいずれかに該当し、排他を獲得していない。かつ、 1. 独立性水準がREAD UNCOMMITTEDである。 2. 占有モードにNO LOCKを指定する。 2. ～6.[条件1]の2.～6.と同じ 3. SQL文に指定した列が、すべて2)の構成列に含まれる場合。 [条件3] 1. DSIの分割条件が「＝」の分割キーの列に対して探索条件を指定する。かつ、 2. ～5.[条件1]の3.～6.と同じ(※) [条件4] 1. 一意性制約のクラスタキーの構成列に対して探索条件を指定する。かつ、 2. 1.の列に対して、以下のいずれかの条件を指定する。かつ、 1. 比較述語の「＝」 2. IN述語 3. の列に対する探索条件に、以下のいずれかの条件を指定する、かつ 1. 比較述語の「＜」、「＞」、「＞＝」、「＜＝」 2. BETWEEN述語 4. 3.の条件が2.の探索条件の値を含まない。 [条件5] 1. 行排他を使用しない。かつ、 2. 構成列が2つ以上のインデックスを定義している。かつ、 3. 2.の先頭列と2番目以降の構成列に対して探索条件を指定する。かつ、 4. 3.の2番目以降の構成列に対して、IN述語の限定値リストに複数の値を指定する。かつ、 5. 2.の構成列の先頭列、もしくは、4)より上位のすべての構成列に対して、以下のいずれかの条件を指定している。かつ、		

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			1. 比較述語の「＝」 2. 限定値リストをひとつ指定したIN述語 6. 5.の列と指定した値と比較する探索条件に、以下のいずれかの比較述語を指定する。 1. 比較述語の「＜」 2. 比較述語の「＞」 [条件6] 1. 以下のいずれかに該当し、排他を獲得していない。かつ、 1. 独立性水準がREAD UNCOMMITTEDである。 2. 占有モードにNO LOCKを指定する。 2. ～6.[条件5]の2.～6.と同じ 3. SQL文に指定した列が、すべて2.の構成列に含まれる場合。 [条件7] 1. DSIの分割条件が「＝」の分割キーの列に対して探索条件を指定する。かつ、 2. 1.の構成列に2つ以上の列を定義している。かつ、 3. ～6.[条件5]の3.～6.と同じ ※[条件1]の3.の"2"は"1"に、[条件1]の4.～6.の"3"は"2"と読み替えてください。 条件1の例) INDEX構成列(C1,C2)の場合 <pre> SELECT C1 FROM S1.T1 WHERE T1.C2 = 1 AND T1.C1 IN (1 , 2) AND T1.C1 > 1 ... (1) </pre> 本来、返却すべきレコード : C1=2のレコード1件 本障害により返却するレコード : C1=1とC1=2のレコード2件 探索条件にIN述語の限定値リストを打ち消す条件(1)を指定しますが、正しく判定されずC1=1のレコードが余分に返却されてしまいます。		
42		PG77195	[現象] リカバリログ量を大きく(目安として数百メガバイト以上)した場合に、以下のいずれかの現象が発生する場合があります。 [現象1] Symfoware/RDBの停止処理またはクラスタアプリケーションの停止処理に時間がかかる場合があります。 [現象2] テンポラリログファイルの閉塞解除処理に時間がかかる場合があります。 [現象3] RDBディクショナリのリカバリに時間がかかる場合があります。	○	○

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			[環境] • Solaris(TM) Operating System • Linux • Windows [発生条件] [現象1] 1. リカバリログ量のサイズ(目安として数百メガバイト以上)が大きい場合。かつ、 2. 更新系アプリケーションを実行する。かつ、 3. Symfoware/RDBの正常停止(クラスタアプリケーションの停止も含む)を実行する。 3.の処理に時間がかかる場合があります。 [現象2] 1. リカバリログ量のサイズ(目安として数百メガバイト以上)が大きい場合。かつ、 2. 更新系アプリケーションを実行する。かつ、 3. 以下のいずれかの事象が発生する。かつ、 1. rdblog -H -tコマンドによりテンポラリログファイルを閉塞する。または 2. テンポラリログファイルが入出力異常により閉塞する。 4. rdblog -P -tコマンドによりテンポラリログファイルの閉塞を解除する。 4.の処理に時間がかかる場合があります。 [現象3] 1. RDBDICONBUFFERの指定によるフォールバック運用をしている。(※1)かつ、 2. システムロググループのリカバリログ量のサイズ(目安として数百メガバイト以上)が大きい場合。かつ、 3. データベース定義、変更、削除を実行する。かつ、 4. RDBディクショナリで入出力異常が発生する。かつ、 5. 5.rdbrcvdcコマンドのOverwriteモードによりRDBディクショナリのリカバリを行う。 5.の処理に時間がかかる場合があります。 ※1 RDB構成パラメタファイルにRDBDICONBUFFER=YESを指定している場合です。 [補足] 現象1～3のそれぞれの処理にかかる最大時間の見積もりは以下になります。 「テンポラリログのリカバリログ量の使用量(MB)※2」×「データベーススペースのI/O性能(MB/sec)※3」		

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			また、更新系アプリケーションまたはデータベース定義、変更、削除の動作が完了してから、以下の時間以上経過している場合は本障害は発生しません。 「テンポラリログのリカバリログ量の使用量(MB)※2」÷「データベーススペースのI/O性能(MB/Sec) ※3」 ※2 「リカバリログ量の指定値 × 0.8」か、「AI ログの定義サイズ - 処理直前の rdb\$arc_l - e の EmpAI」のいずれかの大きい方の値となります。 また、更新が行われた全てのロググループの合計値です。 ※3 データベーススペースを配置しているディスクのI/O性能に依存します。		
43		PG77577	[現象] インデックスのDSIが非活性状態の場合、swstbackupコマンドまたは rdbmrddmpコマンドを実行すると、以下のエラーとなります。 qdg03226u 指定した資源's*'は他の利用者が使用中のため処理を続行できません t* [環境] 1. 以下のいずれかのOSである。かつ — Solaris — Linux — Windows 2) Symfoware Server Advanced Backup Controllerをインストールしている場合。 [発生条件] 1. 以下いずれかを使用している。かつ、 — PG68552の修正を含む緊急修正(※1)を適用している。 — Symfoware Server V10.0.1を使用している。(Windowsの場合) 2. swstbackupコマンドまたはrdbmrddmpコマンドを実行している。かつ、 3. 2.で指定したデータベーススペースに割付けられている表のDSIが非活性状態(※2)でない。かつ 4. 2.で指定したデータベーススペースに割付けられ、かつ、3.の表のDSIに関連するインデックスのDSIが非活性状態(※2)である場合。 ※1:対応する緊急修正番号は以下になります。 •Solaris(TM) Operating System 緊急修正パッチid : 912090-62～63 : 912091-62～63 : 912092-62～63 : 912093-62～63 正式製品名称 : Symfoware Server Enterprise Extended Edition	○	○

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			製品世代 : 5.0.1 緊急修正パッチid : 913574-34～35 : 913575-34～35 : 913576-34～35 : 913577-34～35 正式製品名称 : Symfoware Server Enterprise Extended Edition 製品世代 : 6.0 緊急修正パッチid : 913621-36～37 : 913622-36～37 : 913623-36～37 : 913624-36～37 正式製品名称 : Symfoware Server Enterprise Extended Edition 製品世代 : 6.0.1 緊急修正パッチid : T014HS-22～24 正式製品名称 : Symfoware Server Enterprise Extended Edition 製品世代 : 7.0 緊急修正パッチid : T014IS-20～22 正式製品名称 : Symfoware Server Enterprise Edition : Symfoware Server Standard Edition 製品世代 : 7.0 緊急修正パッチid : T023GS-17～19 正式製品名称 : Symfoware Server Enterprise Extended Edition 製品世代 : 7.0.1 緊急修正パッチid : T023HS-15～17 正式製品名称 : Symfoware Server Enterprise Edition : Symfoware Server Standard Edition 製品世代 : 7.0.1 緊急修正パッチid : T025TS-15～17 正式製品名称 : Symfoware Server Enterprise Extended Edition 製品世代 : 7.0.2 緊急修正パッチid : T025US-14～16 正式製品名称 : Symfoware Server Enterprise Edition : Symfoware Server Standard Edition 製品世代 : 7.0.2 緊急修正パッチid : T001096SP-08～09 正式製品名称 : Symfoware Server Enterprise Extended Edition 製品世代 : 9.0.0,9.0.0A 緊急修正パッチid : T001097SP-08～09		

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			正式製品名称 : Symfoware Server Enterprise Edition : Symfoware Server Standard Edition 製品世代 : 9.0.0,9.0.0A 緊急修正パッチid : T001858SP-07～09 正式製品名称 : Symfoware Server Enterprise Extended Edition 製品世代 : 9.1.0 緊急修正パッチid : T001859SP-06～08 正式製品名称 : Symfoware Server Enterprise Edition : Symfoware Server Standard Edition 製品世代 : 9.1.0 緊急修正パッチid : T002715SP-03～05 正式製品名称 : Symfoware Server Enterprise Extended Edition 製品世代 : 9.2.0 ※2:以下のいずれかの状態です。 ・ インデックスのDSIを定義した直後の状態 ・ rdbalidxコマンドの-s INACTIVE指定で、インデックスのDSIを非活性にした状態 ・ 表のDSIを初期化した後、インデックスのDSIを初期化/再創成していない状態 rdbinif -i DB名.DSI名 -aを実行して、DSIの状態を確認してください。 Stateの値が"INA"の場合は、非活性状態です。		
44		PG77810	[現象] アプリケーションでコネクト処理をくり返し実行すると、コネクト処理がスローダウンします。また、派生する現象として、Symfoware/RDBプロセスでメモリーリークが発生します。 ※リークするメモリー量は環境によって異なりますが、1回のコネクト処理で、約100byteのメモリーがリークします。 [環境] - 以下のOSの場合 かつ — Solaris(TM) Operating System - 以下のいずれかの製品を利用している場合。 — 9.1.0 Symfoware Server Enterprise Extended Edition 9.1.0を使用している。かつT001858SP-01以降のパッチを適用している。 — 9.2.0 Symfoware Server Enterprise Extended Edition 9.2.0を使用している [発生条件] - Symfoware Serverをインストールしている環境に、以下のパッケージがインストールされている。かつ、	○	○

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			ー Charset Manager SE AgentのFSUNiconvパッケージ 2. Symfoware Server が64bit環境で動作している。かつ、 3. 応用プログラムでコネクト処理を行う。		
45		PG77834	[現象1] 探索条件に該当する一部のレコードがアプリケーションに返却されない場合があります。 [現象2] 以下のメッセージが出力され、Symfoware/RDBが異常終了する場合があります。 qdg02842u:シグナル6を受信したため RDBIIシステム空間が異常終了しました [環境] 以下のいずれかのOSである場合。 • Solaris(TM) Operating System • Linux • Windows • UXP/DS [発生条件] 1. 以下の製品を使用している。かつ、 1. Symfoware Server(*1)。または、 2. Symfoware Parallel Server(*2) 2. 以下のSQLデータ操作文(*3)を実行する。かつ、 1. カーソル指定にORDER BY句を指定する。または、 2. 問合せ指定にGROUP BY句を指定する。または、 3. 問合せ指定のFROM句に複数の表を指定する。または、 4. 問合せ指定にDISTINCTを指定している。または、 5. UNIONを指定している。または、 6. 問合せ指定にDISTINCTを指定した集合関数を指定している。 3. 処理対象のデータ量が、大量データ(*4)の場合。 (*1)Symfoware Serverを使用している場合、現象1が発生する場合があります。 (*2)Symfoware Parallel Serverを使用している場合、現象2が発生する場合があります。 (*3)以下を指定するSQLデータ操作文が対象です。 • 問合せ指定 • 単一行SELECT文 • 導出表	○	○

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			・ 副問合せ (*4) データ量とは、作業用ソート領域に格納するレコード長×レコード件数になります。 本障害の発生有無は、作業用ソート領域のファイルに格納するレコードの格納順にも依存するため、格納するデータ量が特定の値を超えていても必ず障害が発生するとは限りません。 障害が発生する可能性があるデータ量の見積式は以下の通りです。 $\text{データ量} > 230\text{K} \times \text{RC} \times \text{RC} \times (\text{RC}-1)$ $\text{RC} = 20 + \text{MAX}\{0, \text{INT}((\text{SORT_MEM_SIZE} - 3300\text{K}) \div 500) \times 4\}$ RC: 一度にソートマージするメモリブロックの数 例) SORT_MEM_SIZEがデフォルト値=2112Kの場合 SORT_MEM_SIZEが3300Kより小さいので、MAX()内は0。 よって、処理対象のデータ量が、$230\text{K} \times 20 \times 20 \times (20-1) \approx 1.7\text{G}$より、多い場合に障害が発生する可能性があります。		
46		PG78026	[現象] スクロールカーソルを使用するとき、サーバで下記のエラーメッセージを出力して、Symfoware/RDBがダウンする場合があります。 エラーメッセージ: 「qdg12695u システム障害が発生しました 分類コード=s*内部コード=(t*) u*」 [環境] 本障害は、以下のOSで発生します。 ・ Windows ・ Linux ・ Solaris(TM) Operating System [発生条件] 1. スクロールカーソルを使用する。かつ、 2. 1.のカーソルの探索条件に該当するデータの合計サイズ(*1)が、以下のしきい値を超える。 - ー 32bit版のSymfowareを使用している場合: 約64GB - ー 64bit版のSymfowareを使用している場合: 約32GB (*1)「選択リストに書かれた列の合計サイズ×探索条件に該当するレコード件数」	○	○
47		PG78251	[現象] リモートアクセス(RDB2_TCP連携)を指定したアプリケーションがデータベースに接続しようすると、Symfoware Server Connection Manager(以降、Connection Managerと略す)を使用してのデータベース接続になってしまいます。実際に発生する現象は以下の2種類です。 現象1)Connection Managerが起動している場合 リモートアクセスでのデータベース接続が有効にならず、Connection Manager連携でのデータベース接続となりますが、正常復帰します。	○	○

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			現象2)Connection Managerが起動していない場合 アプリケーションに以下のエラーメッセージが返却されます。 JYP5079E Connection Managerシステムが未起動です。 [環境] 本障害は、以下のOSで発生します。 • Solaris(TM) Operating System • Linux • Windows [発生条件] 1. 以下のいずれかのアプリケーションを使用する。かつ、 — C言語やCOBOL言語のESQLアプリケーション — Java言語のJDBCアプリケーション — ODOSを使用したODBCアプリケーション 2. リモートアクセス(RDB2_TCP連携)を指定する。かつ、 3. アプリケーションサーバにV9.1以降のConnection Managerをインストールしている。かつ、 4. 接続先のデータ資源名または、SQLサーバ名をAPC動作環境ファイルに指定する。かつ、 1. Connection Managerが起動済み。→現象1 2. Connection Managerが未起動。→現象2		
48		PG78884	[現象] Symfoware .NET Data ProviderのSymfowareConnectionオブジェクトが.NET Frameworkのガベージコレクションにより回収されたとき、qdg02842uのメッセージを出力して、Symfoware/RDBがダウンする場合があります。 Symfoware/RDB側に出力されるメッセージ qdg02842u:シグナル-1073741819を受信したため RDBIIシステム空間が異常終了しました アプリケーション側に出力されるメッセージ JYP9229E システムコールにおいてエラーが発生し、サーバとの通信が切断されました。 Function =“Socket.Receive”, Error Code =“10054” [環境] 本障害は、以下の環境で発生します。 • Windows [発生条件] 1. Symfoware .NET Data Providerを使用する。かつ、 2. コネクションプーリングを使用しない(pooling=false)。かつ、 3. SymfowareConnectionオブジェクトを作成する。かつ、	○	○

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			4. SymfowareConnection.Open()を呼び出して、3.のコネクションを接続する。かつ、 5. 3.のSymfowareConnectionオブジェクトへの引用をなくす(※1)。かつ、 6. もう1つのSymfowareConnectionオブジェクトを作成する。かつ、 7. SymfowareConnection.Open()を呼び出して6.のコネクションを接続する。かつ、 8. 7.の実行と同時に、.NET Frameworkでガベージコレクションが動作した場合(※2)。 ※1 例えば、当該SymfowareConnectionオブジェクトにnullを設定する。 ※2 ガベージコレクションによるオブジェクト回収順番に依存する障害であるため、上記条件に合致しても発生しない場合があります。		
49		PG80224	[現象] 以下に示す発生条件のとき、データベースへのコネクションの数が不当に増加し、以下の現象が発生します。 現象1) アプリケーションにJYP1004EまたはJYP1006Eのエラーが返却され、RDBREPORTで指定したメッセージログファイルやアプリケーションのイベントログに、qdg12147e:エラーが出力されます。 JYP1004E データ送信中にサーバとの通信が切断されました。 JYP1006E データ受信中にサーバとの通信が切断されました。 qdg12147e:通信処理において異常が発生しました:' JYP1052E 接続できる通信の最大数を超えました。 通信種別 = "@1@" 現象2) rdbbpsコマンドまたは、rdbcninfコマンドでコネクションの状態を確認した時に、見積り上のコネクションの数より、接続されているコネクションの数が多くなります。 [環境] 以下のいずれかの環境の場合。 • Linux • Solaris(TM) Operating System • Windows [発生条件] 1. JDBCを使用したjavaアプリケーションを使用する。かつ、 2. Interstage Application Server V9.2.0以降を使用する。かつ、 3. Java EE機能を使用する。かつ、 4. Interstage Application Serverでのコネクションプーリングを使用する。かつ、 5. Symfoware Server Connection Managerを使用する。かつ、	○	○

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			6. SQL文を実行した時に、以下のいずれかの理由により、コネクションが切断され、SQLSTATE40003または40703のエラーが発生する。かつ、 - ー ロードシェア運用で、縮退、切替え、または、切戻しが発生する。または、 - ー ホットスタンバイ運用で、運用系から待機系への切替えと切り戻しを行う。または、 - ー rdbtermコマンドでコネクションを切断する。または、 - ー 通信異常などの理由により、コネクションが切断される。または、 - ー TRAN_TIME_LIMITパラメタに指定した時間を超過する。または、 - ー 利用者制御機能のMAX_TRAN_TIMEパラメタに指定した時間を超過する。 7. 6.の後で、文の準備または文の実行からリトライせず、getConnectionメソッドでコネクションを取得する。		
50		P805588	[現象] SQL文を実行すると、制限値オーバーの構文エラーにならず、qdg02842u(※)のメッセージを出力し、Symfoware/RDBがダウンします。または、Symfoware/RDBのシステムが無応答になります。 ※)qdg02842u:シグナル11を受信したため RDBIIシステム空間が異常終了しました。 [環境] 以下のいずれかのOSである場合。 ・ Solaris(TM) Operating System または、 ・ Linux または、 ・ Windows または、 ・ UXP/DS [発生条件] 1. 問合せ式にUNION(またはUNION ALL)を65個以上指定する。または、 2. 表参照に結合表を入れ子で129個以上指定する。または、 3. 値式に関数または演算式を129個以上指定する。	○	○
51	V10.0.0	PG33133	以下の条件の時、応用プログラムがエラー「JYP1029U クライアントメッセージファイルがオープンできません.errno:""2""」を出力します。 ・ 現象条件1 1. 応用プログラムをシングルスレッドモデルで作成する。かつ、 2. プロセスで最初に実行されるSQL文より前に、ファイルディスクリプタSTDIN_FILENOをクローズする。または、プロセスで最初に実行されるSQL文より前に、ストリームstdinをクローズする。かつ、	○	すでに提供済み

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			3. 2.で実行したクローズ処理から、プロセスで最初にSQL文を実行する間でファイルをオープンしない。 ・ 現象条件2 1. 応用プログラムをマルチスレッドモデルで作成する。かつ、 2. プロセスで最初にセッションを作成する前に、ファイルディスクリプタSTDIN_FILENOをクローズする。または、プロセスで最初にセッションを作成する前にストリームstdinをクローズする。かつ、 3. 2.で実行したクローズ処理から、プロセスで最初にセッションを作成する間でファイルをオープンしない。		
52		PG53081	[現象] REVOKE文を実行するとREVOKE文の実行が終了するまでSymfoware/RDB全体が無応答となります。(※) ※プロシジャルーチン定義に指定した列名の増加に比例して、REVOKE文の実行時間が増加します。列名が488,303個の場合、62分43秒かかった事例があります。 [環境] 以下のいずれかのOSである場合。 1. Solaris(TM)Operating System または、 2. Linux または、 3. Windows または、 4. UXP/DS [発生条件] 以下のいずれかの条件のとき、本現象が発生します。 [条件1] 1. プロシジャルーチン定義(CREATE PROCEDURE文)にSQL手続き文を記載する。かつ、 2. 指定したSQL手続き文に表名、列名を指定する。かつ、 3. 2.の表名を対象名に指定したREVOKE文を実行する。 [条件2] 1. プロシジャルーチン定義(CREATE PROCEDURE文)にCALL文を記載する。かつ、 2. 指定したCALL文にプロシジャルーチン名を指定する。かつ、 3. 2.のCALL文で指定したプロシジャルーチン名を対象名に指定したREVOKE文を実行する。 [条件3] 1. プロシジャルーチン定義(CREATE PROCEDURE文)にSQL手続き文を記載する。かつ、 2. 指定したSQL手続き文にファンクションルーチン名を指定する。かつ、	○	○

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			3. 2.のファンクションルーチン名を対象名に指定したREVOKE文を実行する。 [条件4] 1. プロシジャルーチン定義(CREATE PROCEDURE文)にSQL手続き文を記載する。かつ、 2. 指定したSQL手続き文に順序名を指定する。かつ、 3. 2.の順序名を対象名に指定したREVOKE文を実行する。		
53		PG53708	[現象] GRANT文で資源に対する権限をロールに付与すると、qdg12695uのメッセージを出力して、Symfoware/RDBがダウンする。 [環境] 以下のいずれかのOSである場合。 1. Solaris(TM)Operating System または、 2. Linux または、 3. Windows [発生条件] 1. GRANT文で資源に対する権限をロールに付与している。かつ、 2. 1.で指定した資源と同じ資源に対する権限を別のロールにも付与している。 ※内部条件として以下の条件が必要となるため、本現象が発生する頻度はきわめて低い。 ロールに付与した権限情報を表す情報域(以降、ロール情報と称す)直下の13バイト目～16バイト目に格納されている数値情報が、権限付与対象のロールが持つロールコード(ロールの一意性を表すコード)の値と一致した場合のみ。	○	○
54		PG54618	[現象] 分割値を指定したDSI定義に対し、rdbprtコマンドを実行すると、qdg12695uのメッセージを出力して、Symfoware/RDBがダウンする。 [環境] 以下のいずれかのOSである場合。 1. Solaris(TM)Operating System または、 2. Linux または、 3. Windows または、 4. UXP/DS [発生条件] 1. 分割値を指定したDSI定義である。かつ、 2. 1.のDSI定義に指定されたUSINGオペランドの長さが特定の長さ(※1)を超えている。かつ、 3. 2.のDSI定義に対し、rdbprtコマンドを実行する場合。	○	○

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			※1)DSI定義に指定されたUSINGオペランドの長さ(※2)は、製品によって異なります。 イ)以下の製品の場合、USINGオペランドの長さが、32Kバイトを超えている場合に本障害が発生します。 • Solaris版 － Symfoware Server Enterprise Extended Edition 6.0.1以前 － Symfoware Server Enterprise Edition 6.0.1以前 － Symfoware Server Standard Edition 6.0.1以前 － SymfoWARE Server 全てのバージョンレベル － SymfoWARE Parallel Server 全てのバージョンレベル • Linux版 － Symfoware Server Standard Edition V5.0L10 • Windows版 － Symfoware Server Enterprise Edition V6.0L10以前 － Symfoware Server Standard Edition V6.0L10以前 － Symfoware Server for Windows V6.0L10 － SymfoWARE Server for WindowsNT 全てのバージョンレベル • UXP/DS － SymfoWARE Server Enterprise Edition 全てのバージョンレベル － SymfoWARE Server 全てのバージョンレベル － RDBII Base 全てのバージョンレベル ロ)以下の製品の場合、USINGオペランドの長さが、64Kバイトを超えている場合に本障害が発生します。 (以下の製品以降で実施した、OSロケール:Unicode対応により、64Kバイトに拡張) • Solaris版 － Symfoware Server Enterprise Extended Edition 7.0以降 － Symfoware Server Enterprise Edition 7.0以降 － Symfoware Server Standard Edition 7.0以降 • Linux版 － Symfoware Server Enterprise Extended Edition V7.0L10以降 － Symfoware Server Enterprise Edition V6.0L10以降 － Symfoware Server Standard Edition V6.0L10以降 • Windows版 － Symfoware Server Enterprise Edition V7.0L10以降 － Symfoware Server Standard Edition V7.0L10以降		

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			— Symfoware Server for Windows V7.0L10/V7.0L10C — Symfoware Server Base Edition 8.0.0以降 ※2)上記で示すUSINGオペランドの長さとは、 USING(a,b,c),(d,e,f)と指定された場合、先頭のUSINGから、終端のfの次の)までを表します。 各abcのデータの長さは、指定された定数の長さとなります。 ただし、列定義のデータ型が文字列型、または各国語文字列型の場合、指定された定数の長さは、"列定義の長さ(バイト長)+引用符2バイト"となります。 ・ USINGオペランドの長さを求める計算式は以下の通りとなります。 5<注1>+((分割値の要素<注2>に指定された各定数<注3>の合計長+(分割値の要素に指定された定数の数-1)<注4>+2<注5>) × 分割値の要素数)+(分割値の要素数-1)<注6> <注1>キーワードUSINGの語彙数(5で固定) <注2>分割値の要素とは、分割値として(a,b,c),(d,e,f)と指定した場合、(a,b,c)と(d,e,f)の各々のことを表します。 <注3>列定義のデータ型が文字列型、または各国語文字列型の場合、指定された定数の長さは、"列定義の長さ(バイト長)+引用符2バイト"となります。 <注4>各定数間のカンマ(,)の数 <注5>分割値の要素の両端の括弧の語彙数(2で固定) <注6>各分割値の要素間のカンマ(,)の数 例) CHAR(5),TIMESTAMP型の定義に対し、 USING('xyz',TIMESTAMP'2007-02-21 10:10:10'), ('w',TIMESTAMP'2007-02-21 12:12:12')と指定した場合、上記で示すUSINGオペランドの長さは、『86』<注7>になります。 <注7>USINGオペランドの長さを求める計算式に適用すると、5+((7+30+(2-1)+2)×2)+(2-1) = 『86』 になります。		
55		PG54637	[現象] rdbadjrcvコマンド実行中、メッセージqdg12695uを出力してSymfoware/RDBがダウンする場合があります。 rdb: ERROR: qdg12695u: System error occurred. Reference code = 16.1.17.769 Internal code = (idt_p:XXXXXXXXX sub_code:0 module:qdcmercp line:XXX) [環境] 以下のOSを使用している場合 • Solaris(TM)Operating System • Windows • Linux [発生条件] 1. アーカイブログ運用を行っている。かつ、	○	○

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			2. Symfoware/RDBが停止状態である。かつ、 3. rdblogコマンドのBオプション指定で、full,swich,using状態のアーカイブログファイルをすべてバックアップする。かつ、(using状態のアーカイブログファイルが存在しない状態にする) 4. 3.でバックアップしたアーカイブログ退避ファイルを指定して rdbadjrcvコマンドを実行した場合		
56		PG56031	[現象] SQL文実行中にプロシジャルーチン、トリガ、ファンクションルーチンの定義/削除を実行するとメッセージ「qdg12695u: System error occurred. Reference code = 16.5.64.769 Internal code = (idt_p: ~ sub_code:0 module:jypacerr line:192)」を出力しSymfowareがダウンする場合があります。 [環境] 1. Solaris(TM)Operationg Systemを使用しているシステム または、 2. Linuxを使用しているシステム または、 3. Windowsを使用しているシステム または、 4. UXP/DSを使用しているシステム [発生条件] 1. 応用プログラムからSQL文を実行する。かつ 2. 1.のSQL文がアクセスする表に対して、以下のいずれかの定義、または削除を実行する。 － プロシジャルーチン － ファンクションルーチン － トリガ	○	○
57		PG56312	[現象] rdbdmpコマンドのcオプション(rdbdmpコマンド実行中の更新ログを退避データに採取しない)指定時に、メッセージqdg02303uを出力してエラー終了する場合があります。 qdg02303u:退避データの取得に失敗しました [環境] 1. 以下のOSを使用している場合。かつ、 － Solaris (TM)Operating System － Windows － Linux 2. アーカイブログ運用している。かつ、 3. アーカイブログファイルの合計サイズが2ギガバイト以上 [発生条件] 1. rdbdmpコマンドをcオプション指定(注1)で実行する。かつ、 2. 1.実行中の更新ログ量(注2)が2ギガバイトを超えた場合	○	○

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			(注1):rdbdmpコマンド実行中の更新ログを退避データに採取しない指定 rdbdmpコマンドによるIO負荷を削減することを目的とした、rdbdmpコマンドのdオプション(インターバルバックアップ)指定時に、通常より更新ログが増加(=退避データサイズ増加)が予想されるため、更新ログを採取しない機能として用意した機能。 (注2):rdbdmpコマンド実行中に蓄積される更新ログ量の総量以下の手順で更新ログ量は実測可能です。 1. rdbsarコマンドのlオプション(テンポラリログに関する性能情報の表示)指定を実行し、出力されたAiBlock数を記録 2. rdbdmpコマンド実行 3. rdbsarコマンドのlオプション指定を実行し、出力されたAiBlock数を記録 更新ログ量=((3)で記録したAiBlock数-(1)で記録したAiBlock数)×512バイト		
58		PG59073	[現象] Symfoware Server Advanced Backup Controllerによるバックアップ実行中にエラーメッセージqdg12695uを出力してSymfoware/RDBがダウンする場合があります。 qdg12695u: System error occurred. Reference code = 16.1.17.769 Internal code = (com_inf:XXXXXXXXX idt_p:XXXXXXXXX sub_code:0 module:qdcmrct100 line:XXX) [環境] 以下のOSを使用している場合 • Solaris (TM) Operating System • Windows • Linux [発生条件] 1. CREATE DSI文を実行する(対象DSIが定義直後の状態)。かつ、 2. 1.のDSIが割り付けられたデータベーススペースを対象に、Symfoware Server Advanced Backup Controllerのバックアップ処理として、以下いずれかのコマンドを実行する。かつ、 — swstbackupコマンド(注1)、または、 — rdbmrdbmpコマンド 3. 2.実行中に、1.のDSIに対して以下いずれかのコマンドを実行した場合。 — rdbfmtコマンド、または、 — rdbsloderコマンド (注1)以下の製品のコマンド • Softek AdvancedCopy Manager、または、 • ETERNUS SF AdvancedCopy Manager	○	○

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
59		PG56993	[現象] Symfoware/RDBがメッセージ"qdg12695u"を出力してダウンする場合があります。 [環境] 1. 以下のいずれかのOSである場合。 1-a)Solaris(TM)Operating System または、 1-b)Linux または、 1-c)Windows または、 1-d)UXP/DS [発生条件] 1. 応用プログラムがコネクションを接続している状態である。かつ 2. ネットワークの異常等でSymfoware/RDBが不当なプロトコルを受信した場合。	○	すでに提供済み
60		PG59218	Symfoware/RDBがqdg02842uのメッセージを出力してダウンする場合があります。 qdg02842u:シグナルxxを受信したため RDBIIシステム空間が異常終了しました [環境] 以下のOSで発生します。 • Solaris (TM) Operating System • Linux • Windows [発生条件] 1. CONNECT文を実行する。かつ、 2. CONNECT文の実行中にメモリ不足が発生する。	○	すでに提供済み
61		PG59780	[現象] Symfoware/RDBに接続するアプリケーションが無応答となる場合があります。 [環境] 以下のOSで発生します。 • Solaris(TM) Operating System • Linux • Windows • UXP/DS [発生条件] 1. アプリケーションからSQL文を実行中である。かつ、 2. 以下のいずれかの方法でSymfoware/RDBに接続している。かつ、	○	すでに提供済み

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			a. RDB2_TCPを利用している。または、 b. Symfoware Server Connection Managerを利用している。 3. アプリケーションを実行しているサーバの電源を切断する。または、アプリケーションを実行しているサーバとDBサーバとの間のLANケーブルが抜けた場合。(*注) (*注) writeシステムコールがEAGAINを返却した場合を指します。		
62		PG59902	[現象] java.sql.PreparedStatement.getResultSetメソッドを使用して取得したResultSetを操作すると、アプリケーションに以下のエラーが返却され、アプリケーションが異常復帰する場合があります。 - ーエラーメッセージ ResultSetがクローズされました (エラーコード1058) [環境] 本障害は、以下の環境で発生します。 • Solaris(TM) Operating System • Linux • Windows ■Solaris(TM) Operating System 以下の製品および、以下の製品のSolaris用の各添付クライアント • Symfoware Server Standard Edition 6.0 + 913548-03, 6.0.1 + 913830-05 • Symfoware Server Enterprise Edition 6.0 + 913548-03, 6.0.1 + 913830-05 • Symfoware Server Enterprise Extended Edition 6.0 + 913548-03, 6.0.1 + 913830-05 以下の製品 • Connection Manager 6.0 + 913548-03, 6.0.1 + 913830-05 以下の製品および、以下の製品のSolaris用の各添付クライアント • Symfoware Server Standard Edition 8.0.0 + T000229SP-03 • Symfoware Server Enterprise Edition 8.0.0 + T000229SP-03 • Symfoware Server Enterprise Extended Edition 8.0.0 + T000229SP-03 以下の製品 • Connection Manager 8.0.0 + T000229SP-03 以下の製品の各OS用添付クライアント [製品] • Symfoware Server Standard Edition 8.0.0 • Symfoware Server Enterprise Edition 8.0.0	○	すでに提供済み

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			• Symfoware Server Enterprise Extended Edition 8.0.0 [Windows用添付クライアント] 上記製品にT000218WP-03を適用した環境 [Linux32用添付クライアント] 上記製品にT000230LP-03を適用した環境 [Linux64用添付クライアント] 上記製品にT000238QP-03を適用した環境 以下の製品および、以下の製品のWindows/Linux32/Linux64/ Solaris用の各添付クライアント • Symfoware Server Standard Edition 9.1.0 • Symfoware Server Enterprise Edition 9.1.0 • Symfoware Server Enterprise Extended Edition 9.1.0 以下の製品 • Connection Manager 9.1.0 ■Linux32 以下の製品および、以下の製品のLinux32用の各添付クライアント • Symfoware Server Standard Edition V6.0L10/A + T01262-01 • Symfoware Server Enterprise Edition V6.0L10/A/B + T01262-01 以下の製品 • Connection Manager V6.0L10/A + T01262-01 以下の製品および、以下の製品のLinux32用の各添付クライアント • Symfoware Server Standard Edition 8.0.0、8.0.0A + T000233LP-03 • Symfoware Server Enterprise Edition 8.0.0、8.0.0A + T000233LP-03 • Symfoware Server Enterprise Extended Edition 8.0.0、8.0.0A + T000233LP-03 以下の製品 • Connection Manager 8.0.0、8.0.1 + T000233LP-03 以下の製品の各OS用添付クライアント [製品] • Symfoware Server Standard Edition 8.0.0、8.0.0A • Symfoware Server Enterprise Edition 8.0.0、8.0.0A • Symfoware Server Enterprise Extended Edition 8.0.0、8.0.0A [Windows用添付クライアント] 上記製品にT000236WP-03を適用した環境 [Solaris用添付クライアント]		

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			上記製品にT000237SP-03を適用した環境 [Linux64用添付クライアント] 上記製品にT000231QP-03を適用した環境 ■Linux64 以下の製品および、以下の製品のLinux64用の各添付クライアント • Symfoware Server Enterprise Extended Edition 8.0.0、8.0.0A + T000231QP-03 以下の製品 • Connection Manager 8.0.0 + T000231QP-03 以下の製品の各OS用添付クライアント [製品] • Symfoware Server Enterprise Extended Edition 8.0.0、8.0.0A [Windows用添付クライアント] 上記製品にT000236WP-03を適用した環境 [Linux32用添付クライアント] 上記製品にT000233LP-03を適用した環境 [Solaris用添付クライアント] 上記製品にT000237SP-03を適用した環境 以下の製品および、以下の製品のLinux64用の各添付クライアント • Symfoware Server Enterprise Extended Edition 8.0.1 + T000238QP-03 以下の製品 • Connection Manager 8.0.0、8.0.1 + T000238QP-03 以下の製品の各OS用添付クライアント [製品] • Symfoware Server Enterprise Extended Edition 8.0.0、8.0.0A、8.0.1 [Windows用添付クライアント] 上記製品にT000218WP-03を適用した環境 [Linux32用添付クライアント] 上記製品にT000230LP-03を適用した環境 [Solaris用添付クライアント] 上記製品にT000229SP-03を適用した環境 ■Windows 以下の製品および、以下の製品のWindows用の各添付クライアント • Symfoware Server Enterprise Edition V6.0L10 + TP09620 • Symfoware Server Standard Edition V6.0L10 + TP09620 • Symfoware Server for Windows NT V6.0L10 + TP09620		

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			以下の製品および、以下の製品のWindows用の各添付クライアント • Symfoware Server Standard Edition 8.0.0 + T000218WP-03 • Symfoware Server Enterprise Edition 8.0.0 + T000218WP-03 • Symfoware Server Symfoware Server Base Edition 8.0.0 + T000218WP-03 以下の製品 • Connection Manager 8.0.0 + T000218WP-03 以下の製品の各OS用添付クライアント [製品] • Symfoware Server Standard Edition 8.0.0 • Symfoware Server Enterprise Edition 8.0.0 • Symfoware Server Base Edition 8.0.0 [Linux64用添付クライアント] 上記製品にT000238QP-03を適用した環境 [Linux32用添付クライアント] 上記製品にT000230LP-03を適用した環境 [Solaris用添付クライアント] 上記製品にT000229SP-03を適用した環境 [発生条件] 1. Javaアプリケーションを使用する。かつ、 2. プロトコルにローカルまたはリモート(RDB2_TCP連携)を使用する。かつ、 3. 以下のいずれかの場合。かつ、 • ステートメントキャッシュ機能を使用する。または、 • ステートメントキャッシュ機能を未使用で、ResultSet.closeを実行していない。 1. 以下のいずれかのメソッドにSELECT文を指定して、PreparedStatementオブジェクトを作成する。かつ、 • Connection.prepareStatement(String sql) • Connection.prepareStatement(String sql,int resultSetType,int resultSetConcurrency) 1. 4.のPreparedStatementオブジェクトのexecuteメソッドを使用して文を実行する。かつ、 2. 4.のPreparedStatementオブジェクトのgetResultSetメソッドを使用して、ResultSetオブジェクトを取得する。かつ、 3. 6.のResultSetオブジェクトのメソッドを実行する。かつ、 4. 以下のいずれかの場合。		

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			4.のPreparedStatementオブジェクトに対して5.～7.の操作を複数回行う。 4.で指定したSELECT文と同じSELECT文を指定して4.～7.の操作を複数回行う。		
63		PG60276	[現象] 以下のいずれかの動的SQL文を実行時に、qdg02842u(※)のメッセージを出力してSymfoware/RDBがダウンします。 - SELECT文、または、 - INSERT文、または、 - UPDATE文、または、 - DELETE文 ※)シグナルd*を受信したためRDBIIシステム空間が異常終了しました [環境] 以下のいずれかのOSである場合。 - Solaris(TM) Operating System または、 - Linux または、 - Windows または、 - UXP/DS [発生条件] - データ操作文として以下のいずれかを指定している。かつ、 - SELECT文 または、 - INSERT文 または、 - UPDATE文 または、 - DELETE文 1.にて、以下いずれかを2つ以上ネストして指定している。かつ、 - 副問合せ - 導出表 2.で2つ以上ネストした副問合せ、または、導出表の探索条件に、主問合せ(※1)に指定した参照列が存在する表の列に対して、動的パラメタを指定している。かつ、 3.の上位のネストに指定された副問合せ、または、導出表の探索条件に、主問合せに指定した参照列が存在する表とは異なる表の列を指定している。かつ、 4.の表に対して相関名(※2)を指定している場合(※3)。 (※1)主問合せとは、データ操作文に最初に指定した問合せのことを表す。 (※2)表の別の名前をつけること。 詳細については以下のマニュアル記事を参照してください。	○	○

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			Symfoware Server SQLビギナーズガイド 複数の表を関連づけて操作する方法 表に別名を用いてデータを操作する (※3)以下に[発生条件]に該当する例を示す。 SELECT T1.C11 FROM S1.T1 WHERE T1.C12 (←主問合せ)←発生条件1. = (SELECT DT2.C21 FROM (←副問合せ)←発生条件2. 4. (SELECT T2.C21 FROM S1.T2 WHERE T2.C22 = 10 AND T1.C11 = ?) AS DT2) (←導出表)←発生条件2. 3. 5.		
64		PG60461	[現象] CASTを指定したSQL文を実行するとqdg12695u(*1)のメッセージを出力してSymfoware/RDBがダウンする場合があります。 *1:qdg12695u システム障害が発生しました 分類コード=s* 内部コード=(t*) u* [環境] 1. 以下のいずれかのOSである場合。 — Solaris(TM) Operating System — Linux — Windows — UXP/DS [発生条件] 以下のCASTを指定したSQL文を実行した場合。 1. CASTオペランドのデータ型が概数型である。かつ、 2. 1.の値が-0である。かつ、 3. CAST相手のデータ型が文字列型である。	○	○
65		PG61002	[現象] 表名を指定しない動的UPDATE文を実行すると、JYP8399E(※1)の構文エラーにならず、Symfoware/RDBがqdg02842u(※2)のメッセージを出力してダウンします。 ※1)JYP8399E:“@1@”の前後にキーワード“@2@”が指定されていません。 ※2)qdg02842u:シグナル11を受信したため RDBIIシステム空間が異常終了しました。 [環境] 以下のいずれかのOSである場合。 1. Solaris(TM) Operating System または、 2. Linux または、 3. Windows [発生条件] 1. 以下のいずれかの方法でUPDATE文を実行する。かつ、	○	○

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			— C/COBOL埋め込みホストプログラムの場合、動的SQL文としてUPDATE文を実行している。または、 — JDBC連携の場合、UPDATE文を実行している。または、 — ODOS連携の場合、UPDATE文を実行している。または、 — .NET Data Providerの場合、UPDATE文を実行している。 2. UPDATE文に表名を指定していない。かつ、 3. UPDATE文にカーソル名を指定していない。かつ、 4. UPDATE文に実行オプション指定(※3)を指定している。 ※3)実行オプション指定は、Symfoware Server Enterprise Extended Editon 4.1からのサポート機能である。		
66		PG61609	[現象] 運用系RDBシステムと待機系RDBシステムがダウンした後、Symfoware Server Connection Managerから再起動したRDBシステムへの接続ができない場合があります。 [環境] 本障害は以下のOSで発生します。 • Solaris(TM)Operating System • Windows • Linux [発生条件] 1. フェイルオーバー運用を実施している。かつ、 2. Symfoware Server Connection Manager(以降CM)からRDBシステムへの接続を実施している。かつ、 3. 以下のいずれかが発生する。かつ、 3-1)運用系RDBシステムと待機系RDBシステムがダウンする。または、 3-2)待機系RDBシステムが起動されていない状態で運用系RDBシステムがダウンする。 4. 運用系RDBシステムもしくは、待機系RDBシステムのうち一方のみを起動する。	○	すでに提供済み
67		PG61838	[現象] 以下の条件の場合に、Connection Managerを使用してアプリケーションを実行すると下記のエラーメッセージを出力しcoreファイルを出力します。 <エラーメッセージ> qdg12148e:SQL文の実行で重症エラーを検出しました:'JYP1078U シグナルを受信したためアプリケーションが異常終了しました.' [環境] 以下のOSを使用している場合 • Solaris(TM) Operating System • Windows	○	すでに提供済み

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			- Linux [発生条件] - 以下のいずれかの製品を使用している。かつ、 - Solaris版 Symfoware Server Connection Manager 9.1 - Linux版 Symfoware Server Connection Manager 9.1 - Windows版 Symfoware Server Connection Manager 9.1 - rdbeexecsqlコマンド、または、アプリケーションにより、データベースへの接続を実行する。かつ、 - 以下のいずれかの理由により当該接続処理が失敗した場合 - クライアント用の動作環境ファイルのDEFAULT_CONNECTIONに誤った認可識別子または、パスワードを指定した場合 - アプリケーションに誤った認可識別子または、パスワードを指定した場合 - クライアント用の動作環境ファイルのSERVER_ENV_FILEに誤ったSQLサーバ名または、ファイル名を指定した場合 - クライアント用の動作環境ファイルのOPL_BUFFER_SIZEに指定したバッファの獲得に失敗した場合 - クライアント用の動作環境ファイルの結果RESULT_BUFFERに指定したバッファの獲得に失敗した場合 - クライアント用の動作環境ファイルのSORT_MEM_SIZEに指定したメモリの獲得に失敗した場合 - クライアント用の動作環境ファイルのWORK_MEM_SIZEに指定したメモリの獲得に失敗した場合 - クライアント用の動作環境ファイルのWORK_PATHに指定したス名に誤りがある場合 - クライアント用の動作環境ファイルのROUTINE_SNAPに指定したルーチンスナップファイル名に誤りがある場合 - クライアント用の動作環境ファイルのACCESS_PLANに指定したファイル名に誤りがあった場合		
68		PG61956	[現象] Symfoware/RDBがqdg12695uのメッセージを出力し、ダウンする場合があります。 qdg12695u: System error occurred. Reference code = 16.5.65.257 Internal code = (~ module:jypfs050 line:xx) [環境] 以下のOSで発生します。 - Solaris(TM) Operating System - Linux - Windows - UXP/DS	○	○

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			[発生条件] - 以下の条件を満たすSQL文を実行する。かつ、 - FROM句に複数の表を指定したSQL文を実行する。かつ、 - a.のSQL文のアクセスモデルが、フェッチジョインまたはマージジョインである。かつ、 - b.のジョインキーの値がユニークでない。 1.のSQL文がエラー終了する。かつ、 1.のSQL文を再実行する。かつ、 - 以下のいずれかを満たす場合。 1.のSQL文が以下のいずれかの条件を満たす場合。または、 - ORDER BY句を指定している。または、 - GROUP BY句を指定している。または、 - UNIONを指定している 2.の実行後以下の条件を満たすカーソルをOPENし、3.の実行時にOPEN中の場合 - ORDER BY句を指定している。または、 - GROUP BY句を指定している。または、 - UNIONを指定している。		
69		PG62037	[現象] ロードシェア運用またはスケーラブルログ運用において、Symfoware/RDBのダウンによりアプリケーションに下記メッセージが返却された場合に、トランザクションの一貫性が保証されず、ロググループごとに更新結果が不整合となる場合があります。 「JYP1006E データ受信中にサーバとの通信が切断されました。」 [環境] 以下の環境を使用していると発生します。 - 以下のいずれかのOSを使用している。かつ、 - Linuxまたは、 - Solaris(TM) Operating Systemまたは、 - Windows - 以下のいずれかの運用を行っている。 - 以下の運用を行っている。または、 - ロードシェア運用である。かつ、 - スケーラブルログ運用である。 - 以下の運用を行っている。 - トランザクションモニタを使用している。かつ、 - スケーラブルログ運用である。 [発生条件] 以下のいずれかの条件を満たした場合、トランザクションの一貫性が保証されない場合があります。	○	すでに提供済み

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			条件1 1. [環境]の条件2-1)を満たしている。かつ、 2. 更新を伴うアプリケーションを実行している。かつ、 3. 2.のアプリケーションは、リモートシステムへアクセスしている(注1)。かつ、 4. 2.のアプリケーションは、接続先のシステムでデータを更新している。かつ、 5. 4.の更新データは、複数のデータベーススペース上に分散している。かつ、 6. 5.のデータベーススペースは、複数のロググループ上に分散している。かつ、 7. 2.のアプリケーションの接続先のSymfoware/RDBがダウンする。かつ、 8. 7.のSymfoware/RDBが定義されたクラスタアプリケーションを起動する(注2) 注1:アプリケーションが参照するデータベース資源が、接続先のSymfoware/RDBに存在しない場合に、データベース資源が存在する他ノードのSymfoware/RDBに対して、Symfoware/RDBが通信を行っている状態を指す。 注2:ホットスタンバイ運用の場合は8)の条件を除外。 条件2 1. [環境]の条件2-2)を満たしている。かつ、 2. 更新を伴うアプリケーションを実行している。かつ、 3. 2.のアプリケーションは、接続先のシステムでデータを更新している。かつ、 4. 3.の更新データは、複数のデータベーススペース上に分散している。かつ、 5. 4.のデータベーススペースは、複数のロググループ上に分散している。かつ、 6. 2.のアプリケーションの接続先のSymfoware/RDBがダウンする。かつ、 7. 6.のSymfoware/RDBを起動する。		
70		PG62044	[現象] CREATE DBSPACE文のATTRIBUTE LOG GROUPにロググループ名を指定しないとqdg13555u(※)のメッセージを出力してSymfoware/RDBがダウンする場合があります。 (※)qdg13555u:SymfoWARE/RDBとの通信が切断されました [環境] 以下のいずれかのOSの場合。 1. Solaris(TM)Operating System または、 2. Windows または、 3. Linux	○	すでに提供済み

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			[発生条件] 1. CREATE DBSPACE文にATTRIBUTE LOG GROUPを指定している、かつ 2. 1.にロググループ名を指定していない。		
71		PG62220	[現象] Symfoware/RDBが以下のメッセージを出力してダウンする場合があります。 “rdb: ERROR: qdg02842u:シグナル6を受信したため RDBIIシステム空間が異常終了しました” [環境] 以下のいずれかのOSを使用している。 • Linux • Solaris(TM) Operating System • Windows [発生条件] 以下のいずれかの条件で発生します。 [条件1] 1. rdbstartコマンドを実行する。かつ、 2. Symfoware/RDBプロセス起動中にメモリ不足が発生する。 [条件2] 1. フェイルオーバー運用またはロードシェア運用である。かつ、 2. クラスタアプリケーションを起動する。かつ、 3. Symfoware/RDBプロセス起動中にメモリ不足が発生する。 [条件3] 1. フェイルオーバー運用またはロードシェア運用である。かつ、 2. クラスタアプリケーションの切替が発生する。かつ、 3. 切替先のシステムにおいて、Symfoware/RDBの切替処理中にメモリ不足が発生する。 補足) 使用可能メモリに対して、定義したロググループ数が多い場合に発生しやすくなります。 メモリ見積もり式は、セットアップガイドの付録Dを参照してください。	○	すでに提供済み
72		PG62266	[現象] Symfoware/RDBにおいてrdbrcvdicコマンドを実行すると、正常終了するべきであるにもかかわらず、qdg13139u(※)のエラーを出力して異常終了することがあります。 ※ロググループ名を「LOGG0100」と仮定した場合 qdg13139u:ロググループ'LOGG0100*'は存在しません [*は不定のゴミ文字列] [環境]	○	すでに提供済み

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			以下のいずれかのOSの場合。 1. Solaris(TM)Operating System または、 2. Windows または、 3. Linux [発生条件] 1. スケーラブルディレクトリ運用の場合。かつ、 2. -gオプションに、サイズが4の倍数のバイト数になる実在するユーザロググループ名を定義している。かつ、 3. 2.のユーザロググループ用のRDBディレクトリファイルに対して、-Oオプション(Symfoware/RDBの運用中のリカバリ)を指定している。かつ、 4. -ddlオプション(データベースの定義のみの復旧)を指定した場合。		
73		PG63029	[現象] 以下に示す発生条件の【条件1】または【条件2】のとき、アプリケーションがダウンする場合があります。 [環境] 1. 以下のいずれかのOSを使用している。 — Solaris(TM) Operating System または、 — Windows または — Linux かつ、 1. 以下の製品をインストールしている。 — Symfoware Server Connection Manager 9.1.0以降 [発生条件] 【条件1】 1. ロードシェア運用を行っている。かつ、 2. Connection Managerを使用している。かつ、 3. 埋込みSQLのアプリケーションにより、1つのセッションで複数のコネクションを接続する。かつ、 4. 条件3.の複数コネクションの接続先が以下のいずれかの条件を満たす。 4-1) いずれかの接続先に指定されたAPC動作環境ファイルのSQLSERVERに複数のRDBシステム名またはロググループ名が指定されている。または、 4-2) それぞれの接続先に指定されたAPC動作環境ファイルのSQLSERVERに互いに異なるRDBシステム名または互いに異なるロググループ名が指定されたコネクションが存在する。 かつ、 1. SET CONNECTION文により、現コネクションを変更する。かつ、	○	すでに提供済み

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			2. 以下のいずれか条件に一致する。 6-1) トランザクションを開始するSQL文の実行により、トランザクションを開始する。または、 6-2) SQL文の実行時にサーバとの通信でエラーが発生する。 【条件2】 1. ロードシェア運用を行っていない。かつ、 2. Connection Managerを使用している。かつ、 3. APC動作環境ファイルに複数のSQLSERVERを記述している。かつ、 4. 条件3.の複数のSQLSERVERのうち、互いに異なるRDBシステムを指定したSQLSERVERの組合せが存在する。かつ、 5. 埋込みSQLのアプリケーションによって、接続先として条件4.の組合せのそれぞれのSQLSERVERを指定した、複数のコネクションを1つのセッションから接続する。かつ、 6. SET CONNECTION文により、現コネクションを変更する。かつ、 7. 以下のいずれかの条件に一致する。 7-1) トランザクションを開始するSQL文の実行により、トランザクションを開始する。または、 7-2) SQL文の実行時にサーバとの通信でエラーが発生する。		
74		PG65312	[現象] 以下に示す環境・発生条件のとき、メモリがリークする場合があります。 [環境] 本障害は、以下のOSで発生します。 • Solaris(TM) Operating System • Linux • Windows [発生条件] 1. JDBCを使用したjavaアプリケーションを使用する。かつ、 2. 以下のいずれかの場合。かつ、 - ー riverManagerクラスのAPIを利用して、データベースに接続する。かつ、statementcacheオプションに1以上の値を指定する。 - ー ataSourceインタフェースを利用して、データベースに接続する。かつ、ステートメントキャッシュ数に1以上の値を指定する。かつ、 (最大プールコネクション数に0を指定する。または、最大プールコネクション数を超える数のコネクションを使用する。)	○	○

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			3. 2.のコネクションを使用して、PreparedStatementインタフェースまたは、CallableStatementインタフェースを利用して、SQLを実行する。かつ、 4. 2.のコネクションに対して、Connection.close()を実行する。かつ、 5. アプリケーションプロセスを終了する事なく、2.～4.を繰り返し行う。		
75		PG67686	[現象] 以下の2つの現象が発生する場合があります。 - 現象1 データベースサーバ上でConnection Managerの監視プロセスがコアを出力してダウンする。 - 現象2 稼働中のアプリケーションサーバのシステムログに、Connection Managerのエラーメッセージapc00024eおよびapc00001eが出力され、一時的にデータベースサーバとの通信に異常が発生し、アプリケーションを実行できなくなる。 * apc00024e:Heartbeat connection timed out. IPaddress=RDBシステムのIPアドレス PortNumber=相互ダウン監視通信用のポート番号 * apc00001e:An error has occurred on the communication line to RDB system 'RDBシステム名 ホスト名'. [環境] 以下のいずれかの OS を使用している。 - Solaris(TM) Operating System - Linux [発生条件] 以下の条件を満たしている場合に、本現象が発生する場合があります。 - データベースサーバに対して、Connection Managerを2つ以上接続している、かつ、 - 以下のいずれかの条件を満たしている。 2-1) 1つ以上のConnection Managerが任意の原因で停止する。または、 2-2) 1つ以上のConnection Managerとデータベースサーバとの間で通信異常が発生する。	○	○

4.2.2 x86版

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
1	V10.1.0	PG38319	以下の条件を満たす時、Symfoware/RDBがqdg02842u(※)のメッセージを出力してダウンする場合があります。 (※) qdg02842u:シグナル6を受信したためRDBIIシステム空間が異常終了しました	○	○

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			1. CREATE PROCEDURE文でプロシジャルーチンを以下のいずれかの方法で定義する。かつ、 — rdbddlexコマンドで定義する。または、 — アプリケーションから、EXECUTE 文 または EXECUTE IMMEDIATE文により定義する。 2. 前述1.のプロシジャルーチンに対し、新たにrdbddlexコマンドまたはアプリケーションから、以下のいずれかの方法で削除する。 — 当該プロシジャルーチンに対してDROP PROCEDURE文を実行する。 — 当該プロシジャルーチン内で参照している表に対して、CASCADE指定のDROP TABLE文を実行する。 — 当該プロシジャルーチンを含むスキーマに対して、CASCADE指定のDROP SCHEMA文を実行する。		
2		PG44815	[現象1] 以下のいずれかの条件の時、qdg02842uを出力しSymfoware Serverがダウンする場合がある。 [条件1] 1. データベースの文字コード系と、応用プログラムの文字コード系が異なる。かつ、 2. CONNECT文を実行する。または、DML文が、文字列型。または、各国語文字列型を扱う場合。 [条件2] 1. Symfoware/RDBの文字コード系とデータベースの文字コード系が異なる場合。かつ、 2. XMLアダプタを利用している。かつ 3. rdbinfコマンドにおいて-xml pathオプションを指定している。 [条件3] 1. Symfoware/RDBの文字コード系とデータベースの文字コード系が異なる場合。かつ、 2. Linkexpress Replication optionを使用したレプリケーション運用において、lxrepcreコマンド(注1)の入力ファイルにWHEREを指定している。 注1) Linkexpress Replication optionの抽出定義を作成するコマンドです。 詳細は、Linkexpress Replication optionのマニュアルを参照してください。 [現象2] 以下のいずれかの条件の時、以下のメッセージが出力され、メッセージ内容からエラー原因を特定することができない場合がある。 • JYP2063E:コード変換に失敗しました。 • JYP2532E:プロシジャルーチンのパラメタ変数のコード変換に失敗しました。	○	○

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			・JYP2209E:出力ホスト変数へのコード変換で変換できない文字があります。 [条件1] 1. データベースに格納されるデータの文字コード系と、応用プログラムの文字コード系が異なる。かつ、 2. DML文が、文字列型。または、各国語文字列型を扱う場合。 [条件2] 1. データベースに格納されるデータの文字コード系と、応用プログラムの文字コード系が異なる。かつ、 2. プロシジャルーチンをCALLする。かつ、 3. 以下のいずれかの条件を満たす場合。かつ、 a. プロシジャルーチンでINパラメタ、または、INOUTパラメタを指定する。または、 b. プロシジャルーチン内で実行するDML文に値指定、または、列指定を指定する。 4. 3.で指定するデータ型が、文字列型、または、各国語文字列型の場合。 ※1 データの文字コード系は以下から確認できます。 ークライアント用動作環境ファイルのCHAR_SETに指定したコード系 ーCHAR_SETを省略した場合、応用プログラムの文字コード系 また、応用プログラムの文字コード系は以下から確認できます。 ーOSがSolaris、またはLinuxの場合 環境変数LANGに指定された文字コード系 ーOSがWindowsの場合 SJIS ※2 Symfoware/RDBの文字コード系は、以下のコマンドのRDBCODEの項で確認できます。 pkgparam -v FSUNrdb2b ※3 データベースの文字コード系は、以下のコマンドで確認できます。 rdbprt -m CODE		
3		PG58422	[現象] SET STATISTICS文を実行すると、qdg02842u(※)のメッセージを出力してSymfoware/RDBがダウンする場合があります。 または、以下のいずれかのメッセージを出力してSET STATISTICS文の実行が異常終了する場合があります。 JYP4600E "@1@"で文が終了しています JYP4601E "@1@"の後ろに余分なオペランド"@2@"が指定されています (※) qdg02842u シグナルd*を受信したためRDBIIシステム空間が異常終了しました [環境]	○	○

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			以下のいずれかのOSである場合。 • Solaris(TM)Operating System または、 • Linux または、 • Windows [発生条件] 1. SET STATISTICS文を実行する。かつ、 2. SET STATISTICS文にFILEオペランドを指定し最適化情報を記述したファイル名を指定している。かつ、 3. 最適化情報を記述したファイルの最終行に改行を指定していない。かつ、 4. 最適化情報を記述したファイルの最終行が以下のいずれかを満たしている。 1. 数字のみを指定している。かつ、数字で行が終了している。(注1) 2. 文字列(注2)を1個のみ指定している。かつ、文字列で行が終了している。(注3) (注1)数字の前後に半角空白、またはタブが指定されている場合も該当 以下、数字で行が終了している例。(△:半角空白、^:タブ、[EOF]:行の最後) 123[EOF] 123△[EOF] 123^[EOF] (注2)半角空白、タブ、等号(=)、またはカンマ(,)以外の文字で構成される文字列 (注3)以下、文字列で行が終了している例。([EOF]:行の最後) ABC[EOF] ABC123[EOF]		
4		PG59340	[現象] rdbupsコマンドを実行すると、qdg02842u(※)のメッセージを出力して Symfoware/RDBがダウンする場合があります。 (※) qdg02842u:シグナルd*を受信したため RDBIIシステム空間が異常終了しました。 [環境] 以下のいずれかのOSである場合。 • Solaris(TM) Operating System または、 • Linux または、 • Windows または、 • UXP/DS [発生条件] 1. 表に対して複数のインデックスのDSIが定義されている。かつ、	○	○

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			2. 一部のインデックスのDSIが以下いずれかの状態の場合。かつ、() は本来出力すべきエラーメッセージになります。 a. DSIが非活性、または、定義直後の状態(qdg02520u) b. DSIは他の利用者が参照または更新中(qdg03204u) c. DSIが更新抑止または参照更新抑止の状態(qdg12040u) d. DSIは他の利用者が参照または更新中(qdg03204u) e. データベーススペースが参照更新抑止の状態(qdg12042u) f. DSIがインダウト閉塞状態(qdg12814u) g. 指定された監査ログエレメントがフラッシュトリートメント閉塞状態(qdg13438u) h. インデックスのDSIがインダウトリカバリ不可閉塞状態(qdg13945u) i. インデックスのDSIがアクセス禁止状態(qdg12190u) j. RDBIIディクショナリがインダウト閉塞状態(qdg12816u) k. データベーススペースがアクセス禁止状態(qdg12044u) l. メモリ不足(qdg12071u,qdg12874u) 3. 表、または、DSO指定でrdbupsコマンドを実行した場合。		
5		PG61276	[現象] 以下に示す環境・発生条件のとき、Connection ManagerまたはSymfoware/RDBが以下のメッセージを出力して異常終了する場合があります。 <Connection Managerを使用している場合> apc00008u:Connection Manager system process has been abnormally terminated because it received signal d*. d*:シグナル番号。-1073741819(Windows)または11(UNIX系)。 <Connection Managerを使用していない場合> qdg02842u:シグナルd*を受信したため RDBIIシステム空間が異常終了しましたs* d*:シグナル番号。-1073741819(Windows)または11(UNIX系)。 s*:RDBシステム名。マルチRDBの場合のみ出力。 [環境] 本障害は、以下のOSで発生します。 - Solaris(TM) Operating System - Linux - Windows - UXP/DS [発生条件] 1. 以下のいずれかのアプリケーションを使用する。かつ、	○	○

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			- ー 埋込みSQLを使用したC言語またはCOBOL言語のアプリケーション - ー JDBCを使用したJavaアプリケーション - ー ODBCアプリケーション 2. 1つのアプリケーションプロセスから複数のRDBシステム(※1)に接続する。かつ、 3. 接続方法がローカル接続(※2)である。かつ、 4. アプリケーション内で2)で接続したコネクションを切断せずに、アプリケーションプロセスを終了する。 ※1 Connection Managerを使用している場合も含みます。 (1つのアプリケーションプロセスから、1つのRDBシステムに対して、Connection Managerを使用して接続したコネクションと、ローカル接続したコネクションが存在する場合も該当します。) ※2 Connection Managerを使用している場合、アプリケーションーConnection Manager間は、ローカル接続となります。		
6		PG61453	[現象] JYP1006E データ受信中にサーバとの通信が切断されました。 のメッセージを表示しSymfoware/RDBがダウンします。 [環境] ・ Solaris(TM)Operating System ・ Linux ・ Windows [発生条件] 1. SET SYSTEM PARAMETER 文で、セキュリティパラメタ AUDIT_MANAGE=YESを設定している。かつ、(※) 2. 監査ログデータベースを作成している。かつ、 3. アプリケーションから静的SQL文で監査ログデータベースを参照する。かつ、 4. 3.のアプリケーションで実行するSQL文の長さが32000バイトを超える場合。 (※)以下のコマンドで、セキュリティパラメタの状態を確認できます。 rdbprt -m PARAM	○	○
7		PG62265	[現象] 利用者制御機能を使用してコネクションを接続すると、MAX_CONNECTIONの実行資源数に達していないにも関わらず以下のメッセージを出力しエラーとなる場合があります。 『JYP2608E利用者制御機能における実行資源の制限を超えました. code = “1”』 [環境] 以下のOSである場合。 - Solaris(TM)Operating System または、	○	○

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			- Linux [発生条件] 1. 利用者制御機能を利用している。かつ、 2. ユーザパラメタの"MAX_CONNECTION"に0以外の値を指定している。かつ、 3. 以下のいずれかの場合。 — アプリケーションからコネクション接続時にエラー(*)が発生している。または、 — SET SESSION AUTHORIZATION文実行時にエラー(*)が発生している。 (*)ここで発生しうるエラーは以下の通りです。 ◇メモリ関連： - メモリ不足(JYP5007E、JYP5006E) ◇環境関連： - コード変換ライブラリの不備(JYP1068U、JYP1080U) - アクセスプラン、SQL_TRACEのファイルオープンエラー(JYP2600U、JYP2602U) - TRACEFILE_USEにNOを指定して調査用ファイルの取得(JYP2604U) ◇パラメタ関連： - INCLUSION_DSIの指定誤り(JYP1050E) - DSO_LOCKの指定誤り(JYP1051E) - WORK_PATHの指定誤り(JYP1056E) - R_LOCK=YESとDSO_LOCKを同時に指定(JYP1060E) - サーバ用動作環境ファイルの指定値のコード変換でエラー(JYP1041U) - クライアント用動作環境ファイルの指定値のコード変換でエラー(JYP1033U) - 標準セキュリティ運用で、システム用動作環境ファイル以外にWORK_PATHを指定(JYP1082E) - 利用者制御機能における、実行資源数の制限を超えた(JYP2608) ◇RDBディクショナリアクセス関連： - デッドロック(JYP2099E) - ディクショナリ不整合(JYP5122E) - I/Oエラー(JYP5037E) - バッファ枯渇(JYP5008E)		
8		PG62951	[現象] 各国語文字列定数に、文字として指定した引用符(")と合わせて32000バイトを超えた文字列を指定すると、以下のメッセージを出力しSymfoware/RDBがダウンします。 — qdg02842u:シグナル11を受信したため RDBIIシステム空間が異常終了しました	○	○

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			[環境] 以下のいずれかのOSである場合。 1. Solaris(TM) Operating System または、 2. Linux または、 3. Windows [発生条件] 1. データベースのコード系が、Unicodeである。かつ、 2. SQL文に指定した各国語文字列定数に、文字として引用符(※)を指定している。かつ、 3. 2.を含む文字列の合計バイト数が、各国語文字列型の定量制限値である32000バイトを超えている。 ※) 文字として引用符()を指定する場合、引用符()を2つ連続して記述します。 例) SELECT CLM1 FROM SCH1.TBL1 WHERE CLM1 LIKE N'あいいう""えお' 『あいいう""えお』の文字列の合計バイト数が、32000バイトを超える場合。		
9		PG63263	[現象] 以下に示す現象・発生条件のとき、アプリケーションおよび、RDBコマンドが無応答となる場合があります。 [環境] 本障害は以下のOSで発生します。 ・ Linux [発生条件] 1. データベーススペースへアクセスする際のI/O方式に非同期I/Oを使用している。(注)かつ、 2. データベースへの挿入・更新・削除処理を行っている。かつ、 3. 2.で挿入・更新・削除を行ったデータが配置されているデータベーススペースに対して、rdbmrddmpコマンドまたはswstbackupコマンドを実行している。 (注) RDB構成パラメタファイルの定義種別RDBASYNCIOにYESを設定することで使用することができます。	○	○
10		PG65282	[現象] 「qdg02842u シグナルd*を受信したため RDBIIシステム空間が異常終了しました s*」を出力し、Symfoware/RDBがダウンします。 [環境] 以下のいずれかの環境の場合。 ◆Solaris(TM) Operating System ◇Symfoware Server Enterprise Extended Edition 6.0 913574-18～30,913575-18～30,913576-18～30,913577-18～30 ◇Symfoware Server Enterprise Extended Edition 6.0.1 913621-18～32,913622-18～32,913623-18～32,913624-18～32	○	○

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			◇Symfoware Server Enterprise Extended Edition 7.0 T014HS-08～18 ◇Symfoware Server Enterprise Extended Edition 7.0.1 T023GS-02～13 ◇Symfoware Server Enterprise Extended Edition 7.0.2 T025TS-01～11 ◇Symfoware Server Enterprise Extended Edition 8.0.0 T000174SP-01～09 ◇Symfoware Server Enterprise Extended Edition 9.0.0, 9.0.0A, 9.1.0 ◇Symfoware Server Enterprise Edition 6.0 Symfoware Server Standard Edition 6.0 913578-18～28,913579-18～28 ◇Symfoware Server Enterprise Edition 6.0.1 Symfoware Server Standard Edition 6.0.1 913625-17～27,913626-17～27 ◇Symfoware Server Enterprise Edition 7.0 Symfoware Server Standard Edition 7.0 T014IS-07～16 ◇Symfoware Server Enterprise Edition 7.0.1 Symfoware Server Standard Edition 7.0.1 T023HS-02～11 ◇Symfoware Server Enterprise Edition 7.0.2 Symfoware Server Standard Edition 7.0.2 T025US-01～10 ◇Symfoware Server Enterprise Edition 8.0.0 Symfoware Server Standard Edition 8.0.0 T000191SP-01～08 ◇Symfoware Server Enterprise Edition 9.0.0, 9.0.0A, 9.1.0 Symfoware Server Standard Edition 9.0.0, 9.0.0A, 9.1.0 ◆Linux ◇Symfoware Server Enterprise Extended Edition V7.0L10 ◇Symfoware Server Enterprise Extended Edition 8.0.0, 8.0.0A, 8.0.1 T000132QP-02～11 ◇Symfoware Server Enterprise Extended Edition 9.0.0, 9.0.1, 9.1.0, 9.2.0 ◇Symfoware Server Enterprise Edition V6.0L10, V6.0L10A, V6.0L10B Symfoware Server Standard Edition V6.0L10, V6.0L10A T00305-15～19 ◇Symfoware Server Enterprise Edition V7.0L10		

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			Symfoware Server Standard Edition V7.0L10 T00899-02～12 ◇Symfoware Server Enterprise Edition V7.0L10C Symfoware Server Standard Edition V7.0L10C T00989-01～11 ◇Symfoware Server Enterprise Edition 8.0.0, 8.0.0A Symfoware Server Standard Edition 8.0.0, 8.0.0A T000241LP-01～09 ◇Symfoware Server Enterprise Edition 9.0.0, 9.0.1, 9.1.0 10.0.0 Symfoware Server Standard Edition 9.0.0, 9.0.1, 9.1.0, 9.2.0 10.0.0 10.0.0A ◆Windows ◇Symfoware Server Enterprise Edition V6.0L10 Symfoware Server Standard Edition V6.0L10 Symfoware Server for Windows V6.0L10 TP08577,TP08773,TP08879,TP09047,TP09220,TP09420,TP09625, TP09705,TP09831,TP09926 ◇Symfoware Server Enterprise Edition V7.0L10, V7.0L10C Symfoware Server Standard Edition V7.0L10, V7.0L10C Symfoware Server for Windows V7.0L10, V7.0L10C TP08709,TP08911,TP09077,TP09257,TP09387,TP09557,TP09637,TP0 9711, TP09781,TP09873,TP09998 ◇Symfoware Server Enterprise Edition 8.0.0 Symfoware Server Standard Edition 8.0.0 Symfoware Server Base Edition 8.0.0 T00210WP-01～08 ◇Symfoware Server Enterprise Edition 9.1.0, 9.1.1 10.0.0 10.0.1 Symfoware Server Standard Edition 9.1.0, 9.1.1 10.0.0 10.0.1 [発生条件1] - 動的パラメタを指定したEXECUTE文を実行する。かつ、 - 以下のいずれかの操作を行う。かつ、 - rdbexdsiコマンド(-monオプション、-moffオプション、または、-mwオプション)を実行する。または、 - rdbddlfixコマンドを実行し、1.のEXECUTE文で参照する表の定義を変更する。または、 - SCOPE定義を適用した認可識別子に対するSET SESSION AUTHORIZATION文を実行し、 1.のEXECUTE文のアクセス対象のDSIの範囲を変更する。		

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			4. 1、2を実行後にCOMMIT文、または、ROLLBACK文を実行する。かつ、 5. 3を実行後に、1と同じSQL文識別子を指定したEXECUTE文を実行する。かつ、 6. 1と4のEXECUTE文が、以下のいずれかである。(*) a. SQL記述子を指定している。または、 b. プログラムソース上で同一行に記述している。 [発生条件2] 1. 動的パラメタを指定したEXECUTE文を実行する。かつ、 2. 以下のいずれかの操作を行う。かつ、 a. rdbalidxコマンド b. rdbfmtコマンド c. rdbsloderコマンド 3. 2を実行後に、1と同じSQL文識別子を指定したEXECUTE文を実行する。かつ、 4. 1と3のEXECUTE文が、以下のいずれかである。(*) a. SQL記述子を指定している。または、 b. プログラムソース上で同一行に記述している。 (*)rdbuptコマンドを実行した場合も本条件に該当します。		
11		PG65659	[現象] DSIの削除においてqdg13777u(*)のエラーメッセージを出力して異常終了後、RDBコマンドまたはアプリケーションを実行するとqdg12695u(*)のメッセージを出力してSymfoware/RDBがダウンする場合があります。 (*)qdg13777u: DSIが削除途中の状態でありロールバックが不可能なためデータベースをアクセス禁止状態にしました DB名='s*' DSI名='t*' u* (*)qdg12695u: システム障害が発生しました 分類コード=s* 内部コード=(t*) u* [環境] 以下のいずれかのOSである場合。 • Oracle Solaris または、 • Linux または、 • Windows または、 • UXP/DS [発生条件] 1. 以下のいずれかによりDSIの容量拡張が発生している(*)。かつ、 a. 自動容量拡張の場合 1. 以下のいずれかによりDSIの自動容量拡張を定義している。かつ、 — rdbalmdsiコマンド	○	○

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			— CREATE DSI文(EXPAND OFFを指定しない場合)(*2)(*3) 2. 1.で指定したDSIに対して、以下のいずれかの処理の延長で自動容量拡張が動作する。 — INSERT文 — UPDATE文 — rdbloaderコマンド — rdbloaderコマンド — rdbloaderコマンド — rdbloaderコマンド b. 自動容量拡張以外の場合 - rdbloaderコマンド - ALTER DSI文による容量拡張(*2) 2. 1.のDSIに対して以下のいずれかによりDSIの削除を実行する。かつ、 — DROP DSI文 — DROP SCHEMA文(CASCADE指定) — DROP TABLE文(CASCADE指定) — DROP DSO文(CASCADE指定) — DROP INDEX文 3. 2.の実行中に以下のいずれかの事象が発生し、qdg13777uのエラーメッセージを出力する。かつ、 — 異常が発生 — 2.に対してロールバックを実行 — Symfoware/RDBがダウンした後、Symfoware/RDBを再起動 4. qdg13777uの利用者の処置に従って1.のDSIの削除を実行していない。かつ、 5. 4.の後、1.のDSIに対して以下のいずれかを実行した場合。 — rdbfmtコマンド — rdbloaderコマンド(*4) (*1)現象の発生するDSIの状態はrdbprptコマンド(DSI指定)の「Allocation information」の「No(割付け先の数)」から確認することができます。 <現象の発生するDSIの状態> - 表のDSIの場合 割付け先の数が501個以上 - インデックスのDSIの場合 割付け先の数が249個以上 (*2)9.1.0以降に利用できる機能 (*3)RDB構成パラメタファイルにRDBEXPDSI=YESまたは、RDBEXPDSIを指定しない場合。		

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			(*4)rdbloaderコマンドは参照先のメモリ状態によって正常終了する場合があります。 その後、以下のアプリケーション、またはRDBコマンドによりDSIをアクセスした場合、Symfoware/RDBがダウンします。 [アプリケーション] INSERT文・DELETE文・SELECT文・UPDATE文 [RDBコマンド] rdbalmdsi・rdbconbf・rdbddlex・rdbdisbf・rdbdmp・rdbexdsi・rdbexecsql・rdbexspc・rdbfmt・rdbgcdsi・rdbinh・rdbmrmp・rdbmrrcv・rdbpmt・rdbrcv・rdbrcvdc・rdbresident・rdbrls・rdbtr・rdbsaload・rdbsetrp・rdbsloder・rdbsuloder・rdbudsi・rdbunl・rdbunlx・rdbups・rdbupt・rdbunsql		
12		PG65663	[現象] RDBコマンド、または、SQLアプリケーションを実行中に、qdg12695u(※1)のメッセージを出力してSymfoware/RDBがダウンする。 ※1)「qdg12695u システム障害が発生しました 分類コード=s* 内部コード=(t*) u*」 [環境] 以下のいずれかのOSを使用している場合。 - Solaris(TM) Operating System、または、 - Linux、または、 - Windows、または、 - UXP/DS [発生条件] 1. RDBコマンド(※2)、または、SQLアプリケーションを実行する。かつ、 2. 1.を実行中にメモリ不足が発生して異常終了(※3)する。かつ、 3. 3.RDBコマンド(※4)、または、SQLアプリケーションを実行する。 ※2)以下のRDBコマンドが該当。(アルファベット順に記載) rdbalidx rdbalmdsi rdbaltop rdbconbf rdbddlex rdbddlfix rdbdmp rdbcploder rdbexdsi rdbexecsql rdbexspc rdbfmt rdbgcdsi rdbhsuty	○	○

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			rdbinf rdbinh rdbmrdmp rdbmrrcv rdbpmt rdbprt rdbrcv rdbrcvdic rdbresident rdbrls rdbtrr rdbsaload rdbscldir(Vオプション指定) rdbsetrp rdbsloddr rdbspcinf rdbsuload rdbudsi rdbunl rdbunlx rdbunlsq rdbups rdbupt 注意事項: 上記コマンドは、VLによっては存在しないものもあります。マニュアルの コマンドリファレンスを確認ください。 ※3) RDBコマンドは以下のメッセージなどを出力して、コマンドが異常終 了。 「qdg12071u 利用可能なメモリが不足しています s*」 「qdg12171u ローカルメモリ不足が発生しました s*」 また、SQLアプリケーションは以下のメッセージなどを出力して、コマンド が異常終了。 「JYP1070E メモリ不足が発生しました」 「JYP5007E RDBIIサーバ空間内のメモリ不足が発生しました」 ※4) (※2)のRDBコマンドが該当します。なお、[発生条件]1.のRDBコマ ンド、または、SQLアプリケーションと同じでなくても発生します。 補足) 本現象はメモリ配置によるため、発生条件を満たしても必ず発生 するわけではありません。		
13		PG65855	[現象]	○	○

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			問合せ指定に結合表を記述したSQL文を実行すると、qdg02842u(※)のメッセージを出力してSymfoware/RDBがダウンまたは、誤った検索結果が取り出される場合があります。 ※) qdg02842u:シグナルd*を受信したため RDBIIシステム空間が異常終了しました。 [環境] 以下のいずれかのOSである場合。 • Oracle Solaris または、 • Linux または、 • Windows または、 • UXP/DS [発生条件] 1. SQL文の問合せ指定に結合表を指定する。かつ、 2. 1.の結合表に対して1.で指定した同じ表(関連名なし)、または、1.と同じ関連名を指定して、さらなる結合を実施する。かつ、 3. 2.の表または関連名で修飾した列を、2.の結合条件に指定した場合。 以下にSQL文の例を示します。 <pre> SELECT T1. C1 FROM S1. T1 LEFT JOIN S1. T2 ON T1. C1=T2. C1 LEFT JOIN S1. T2 ←条件2) ON T1. C1=T2. C1 ←条件3) </pre> 説明) S1.T2が重複して指定されています。 S1.T2の列を結合条件に指定しています。		
14		PG66699	[現象] 下記の環境、条件のときに、qdg02842u のメッセージを出力して、Symfoware Server がダウンすることがある。 [環境] 以下のOSである場合。 • Linux • Solaris • Windows • UXP/DS [発生条件] 1. rdblinkfコマンドを-dオプションを指定して実行している。かつ、 2. 以下の二つの処理を同時に同一のデータベース資源に対して実行する。かつ、 2-1)以下の条件のもとでSELECT文を実行する。	○	○

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			- ー 並列指定にPARALLELを指定しているか、もしくは、クライアント用動作環境ファイル、サーバ用動作環境ファイルのPARALLEL_SCANにYESを指定している。かつ、 - ー トランザクションの独立性水準が、SERIALIZABLE、REPEATABLE READ、READ COMMITTEDのいずれかである。 2-2)更新のロックをとるSQL文を実行する。更新のロックをとるSQL文は以下のいずれかである。 - ー UPDATE文 または、 - ー DELETE文 または、 - ー 更新可能性句にFOR UPDATEを指定したSELECT文 または、 - ー 占有モード指定にEXCLUSIVE LOCKを指定したSELECT文 または、 - ー クライアント用動作環境ファイル、または、サーバ用動作環境ファイルのDSO_LOCKパラメタにEXを指定した SELECT文 3. 2の後、2-1)のSELECT文を実行したコネクションにおいて、デッドロックが発生する。		
15		PG67462	[現象] SymfoWARE/RDBが"qdg02842u シグナルd*を受信したため RDBIIシステム空間が異常終了しました"のメッセージを出力してダウンスする場合があります。 [環境] 以下のOSである場合。 1. Solaris(TM)Operating System または、 2. Linux または、 3. Windows [発生条件] 以下の場合、SymfoWARE/RDBがダウンス場合があります。 1. アプリケーションがコネクションを接続している状態である。かつ 2. ネットワークの異常等でSymfoWARE/RDBのサーバが不当なプロトコルを受信した場合。	○	○
16		PG67487	[現象] 最適化情報のファイルを記述したSET STATISTICS文の実行が正常終了したにもかかわらず、最適化情報が設定されない(※)ことがあります。なお、本現象の発生を利用者が認識するのは以下の場合です。 - PRINT STATISTICS文の出力結果を参照時。または、 - アクセスプランの取得結果を参照時 ※)設定されない最適化情報は以下です。 - DSI(RANDOM型)を記述した場合の以下の項目(一部の項目) AVERAGE PAGE MAXPAGE	○	○

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			- DSI(BTREE型)を記述した場合の以下の項目(全ての項目) PAGE INDEX HIGHT DIFFERENT KEY [環境] 以下のいずれかのOSを使用している場合。 ー Solaris(TM) Operating System、または、 ー Linux、または、 ー Windows [発生条件] 1. SET STATISTICS文を実行する。かつ、 2. SET STATISTICS文に最適化情報のファイルを記述している。かつ、 3. 2.ファイルにDSI(RANDOM型)、または、DSI(BTREE型)を記述している。		
17		PG68326	[現象] Symfoware/RDBが以下のメッセージを出力してダウンする場合があります。 qdg02842u シグナルd*を受信したため RDBIIシステム空間が異常終了しました (d*: シグナル番号) [環境] 以下のOSで発生します。 ・ Solaris (TM) Operating System ・ Linux ・ Windows [発生条件] 1. 以下のいずれかのコマンドを実行する。かつ、 a. rdbddlexコマンド(-lオプション)で、表に列を追加、または、DSIの追加を行う。または、 b. rdbddlexコマンドでDSIの分割値変更を行う。または、 c. rdbalidxコマンドでインデックスを非活性化状態に変更する。 2. 1.のコマンド実行中に、応用プログラムからSQL文を実行する。	○	○
18		PG68452	[現象] RDBコマンドの実行において、メッセージqdg12275w(※)を出力してアーカイブログファイルが閉塞される場合があります。 (※) (*****は可変の値/文字です) qdg12275w:アーカイブログファイル***** (通番:*****)への書込み時に*****システムコールでエラーが発生しました errno=***** [環境]	○	○

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			以下のいずれかのOSである場合。 • Solaris(TM)Operating System または、 • Linux または、 • Windows [条件] 1. アーカイブログ運用を行っている。かつ、 2. RDBシステムの状態が停止状態である。かつ、 3. 以下のいずれかのRDBコマンドを実行する。かつ、 Symfoware Server のコマンド • rdbscldir -V • rdblog -V -a Symfoware Active DB Guard のコマンド • rdbbcrlp -V 4. 3.のコマンド実行中にI/Oエラーが発生する。		
19		PG69007	[現象] 以下の環境および発生条件のいずれかに該当するとき、Symfoware/RDB がダウンする場合があります。 [環境] 以下のOSを使用している場合。 • Solaris(TM) Operating System または • Linux または • Windows 【発生条件1】 1. システム用またはクライアント用の動作環境ファイルのパラメタ ARC_FULLにRETURNを指定している。かつ、 2. システム用またはクライアント用の動作環境ファイルのパラメタ R_LOCKにYESを指定している。かつ、 3. インデックスを定義した表を定義している。かつ、 4. アプリケーションから以下のいずれかのSQL文によって当該表を 更新するトランザクションを実行する。かつ、 1. INSERT文 または 2. インデックスが定義された列を更新するUPDATE文:位置づけ または 3. インデックスが定義された列を更新するUPDATE文:探索 5. 当該インデックスがDSIの自動容量拡張の設定になっており、設定 方法が以下のいずれかに合致する。かつ、 1. V9.1以降の場合、当該インデックスのDSI定義時にEXPAND ONを指定している。または、 2. V9.1以降の場合、当該インデックスのDSI定義時にEXPAND を指定していない。かつ、RDB構成パラメタファイルのパラメタ RDBEXPDSIにYESを指定している。または、	○	○

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			3. rdbalmsiコマンドにより、当該インデックスに対する自動容量拡張を定義する。 6. 4.のトランザクションにおいてCOMMIT文を実行する。かつ、 7. 6.のCOMMIT文の処理においてインデックスDSIの空き容量が拡張契機に達する。かつ、 8. 6.のCOMMIT文の処理において、アーカイブログの満杯事象が発生する。 【発生条件2】 1. SQL文の実行時にエラー(※)が発生する。 (※)Symfoware/RDBの内部で内部矛盾と判定される不特定のエラーが該当します。		
20		PG69505	[現象] [現象1] 以下の発生条件に一致した場合、qdg02842u(※)のメッセージを出力してSymfoware/RDBがダウンします。 ※ qdg02842u:シグナル6を受信したため RDBIIシステム空間が異常終了しました [現象2] 以下の発生条件に一致した場合、指定したスキーマと異なるスキーマにビューが定義されます。 [環境] 以下のいずれかのOSである場合。 －Solaris(TM) Operating System または、 －Windows または、 －Linux [発生条件] [現象1の発生条件] 1. ビュー定義の問合せ指定の選択リストに、DEFAULT値として順序を定義した列を指定している。かつ、 2. ビューと順序が所属するスキーマ名の長さが以下にしめす条件に一致する。かつ、 － 1.の順序が所属するスキーマ名の長さがビューの所属するスキーマ名の長さより長い。または － 1.の順序が所属するスキーマ名の長さがビューの所属するスキーマ名の長さより短い。 3. 以下にしめす条件に一致する名前のスキーマが定義されていない。 － 1.の順序が所属するスキーマ名の長さと一致する。かつ、 － 1.のビューが所属するスキーマ名の先頭文字列と一致する。 例: <pre>CREATE TABLE SCM1.T1 (C1 INTEGER DEFAULT SCM1.SEQ1.NEXTVAL); (1) CREATE VIEW S1.VIEW1 AS SELECT C1 FROM SCM1.T1;</pre>	○	○

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			(2) ※(1)と(2)の長さが一致していない。 [現象2の発生条件] - ビュー定義の間合せ指定の選択リストに、DEFAULT値として順序を定義した列を指定している。かつ、 1.の順序が所属するスキーマ名の長さがビューの所属するスキーマ名の長さより短い。かつ、 1.の順序が所属するスキーマ名の長さ分までビューの所属するスキーマ名文字列と一致するスキーマが定義されている。 - 以下にしめす条件に一致する名前のスキーマが定義されている。 1.の順序が所属するスキーマ名の長さと一致する。かつ、 1.のビューが所属するスキーマ名の先頭文字列と一致する。 例: <pre>CREATE TABLE SC1.T1 (C1 INTEGER DEFAULT SC1.SEQ1.NEXTVAL); (1) CREATE VIEW SC11.VIEW1 AS SELECT C1 FROM SC1.T1; (2)</pre> ※(1)が(2)のスキーマ名より短く、(2)のスキーマ名のうち(1)のスキーマ名の長さ分のスキーマが存在する。		
21		PG69562	[現象] RDBコマンドまたはアプリケーションを実行すると、無応答になる場合がある。 現象が発生した場合、メッセージログファイルに以下のメッセージが出力されます。 •qdg12440u インデックス域の入出力障害が発生しました errno=d* •qdg13239i ロググループ's*'において事象't*'が発生しました [環境] 以下のいずれかのOSを使用している場合に、発生します。 - Solaris(TM) Operating System - Linux - Windows [発生条件] - テンポラリログのインデックス部が破損する。かつ、 - 以下のいずれかの操作を行う。 - データベースを更新するアプリケーションを実行する。または - データベース更新やデータベース定義を含む Symfoware/RDB のコマンドを実行する。(※) ※現象が発生する可能性のあるSymfoware/RDB のコマンド rdbalidx, rdbdmp, rdbddlex, rdbddlfix, rdbalmdsi, rdbfmt	○	○

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			rdbgcdic, rdbgcddsi, rdbrcv, rdbsaloader, rdbsloder, rdbsloder rdbunladt, rdbups, rdbupt		
22		PG69756	[現象] 以下の環境および発生条件のいずれかに該当するとき、アプリケーションが無応答となる場合があります。また、派生する現象として、rdbtermコマンドによるコネクションの強制回収が出来なくなります。 [環境] 以下のOSを使用している場合。 - Solaris(TM) Operating System または - Linux [発生条件] 1. ロードシェア構成である。かつ、 2. CREATE SEQUENCE文のCACHE句に、保持順序数として1以上の値を指定した順序を定義している。かつ、 3. ロードシェアを構成するSATELLITEシステムの1台において、2.の順序に対する採番処理を伴うアプリケーションを多重(※)で実行する。 (※):CACHE句に指定される保持順序数より大きな多重度	○	○
23		PG69994	[現象] 以下に示す条件下でアプリケーションを多重で実行した場合、COMMIT文の処理に時間がかかる(※)、または、COMMIT文の処理が完了しない場合があります。 ※目安として通常は数分オーダーで完了するところが、数時間オーダーとなる場合があります。 [環境] 以下のいずれかのOSを使用している場合。 ・ Solaris(TM) Operating System、または、 ・ Linux、または、 ・ Windows [発生条件] 1. 表のDSO定義にSEQUENTIAL構造を指定している。かつ、 2. 1.の表に対してインデックスを付加している。かつ、 3. 1.の表に対して行単位の排他を使用したアプリケーションを実行している。かつ、 4. トランザクション内で1.の表に対してINSERT文またはDELETE文、UPDATE文を実行している。かつ、 5. 2.の同一DSIに対してアプリケーションを多重で実施している(注)。かつ、 6. 3.のアプリケーションで同時にCOMMIT文を実行している。 注)再現時の環境は以下。	○	○

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			1トランザクション200件の一括INSERTを同一DSIに対して400コネクションから実施しました。(1DSIに対しては、200件×400コネクション＝8万件の挿入処理) また、お客様環境では、1つのDSIに対して100多重以上が実行されていました。		
24		PG70741	[現象] [現象1] GRANT文でユーザに対して、ビュー表のDROP権を付与しようとする、JYP3503E(※1)のエラーとなります。 ※1) JYP3503E GRANT文に指定された権限“DROP”を付与する権限がありません。 [現象2] GRANT文でユーザに対して、ビュー表に付与可能な全ての権限を付与しようとする、DROP権が付与できません。 この結果、権限受領者はビュー表に対するDROP文を実行できません。 [環境] 以下のいずれかのOSを使用している場合。 1. Solaris(TM) Operating System または、 2. Linux または、 3. Windows または、 4. UXP/DS [発生条件] [発生条件1] Symfowareの管理者(※2)以外のユーザが、以下のオペレーションを実行(オペレーションは、全て同じユーザで実行)すると現象1が発生します。 <パターン1> 1. 問合せ指定が更新不可能なビュー表(※3)を定義する。かつ、 2. 以下を指定したGRANT文を実行する。 a. 対象名に1.のビュー表を指定する。かつ、 b. 権限にDROPを指定する。かつ、 c. 権限受領者に認可識別子、または、PUBLICを指定する。 <パターン2> 1. 問合せ指定が更新可能なビュー表(※3)を定義する。かつ、 2. 以下を指定したGRANT文を実行する。 a. 対象名に1.のビュー表を指定する。かつ、 b. a.のビュー表が参照する表に、実行ユーザに対するDROP権が付与されていない。かつ、 c. 権限にDROPを指定する。かつ d. 権限受領者に認可識別子、または、PUBLICを指定する。 [発生条件2]	○	○

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			Symfoware管理者(※2)以外のユーザが、以下のオペレーションを実行(オペレーションは、全て同じユーザで実行)すると現象2が発生します。 <パターン1> - 問合せ指定が更新不可能なビュー表(※3)を定義する。かつ、 - 以下を指定したGRANT文を実行する。 - 対象名に1.のビュー表を指定する。かつ、 - 権限にALL PRIVILEGESを指定する。かつ、 - 権限受領者に認可識別子、または、PUBLICを指定する。 <パターン2> - 問合せ指定が更新可能なビュー表(※3)を定義する。かつ、 - 以下を指定したGRANT文を実行する。 - 対象名に1.のビュー表を指定する。かつ、 - a.のビュー表が参照する表に、実行ユーザに対するDROP権が付与されていない。かつ、 - 権限にALL PRIVILEGESを指定する。かつ、 - 権限受領者に認可識別子、または、PUBLICを指定する。 ※2) RDBディクショナリの創成者。 ※3) 更新不可能か更新可能かは、rdbpriコマンドの出力結果(Updatable view)で確認できます。 Updatable viewがYESなら更新可能で、NOなら更新不可能(読み専用)であることを示します。 また、更新不可能か更新可能かは、マニュアルの以下に記載されている内容に、ビュー表の問合せ指定が合致するか否かで決定します。 Symfoware Server SQLリファレンス 第3章 基本的なSQL文 「DECLARE CURSOR(カーソル宣言)」の「読み専用カーソルとなる条件」の表		
25		PG71199	[現象] RDBコマンド、ローカルアクセスを行うアプリケーション、またはRDA接続を行うアプリケーションが無応答になる場合があります。 また、Connection Managerの場合、アプリケーションまたは、APCコマンドが無応答になる場合があります。 [環境] 以下のいずれかのOSを使用している場合に発生します。 —Linux ※ —Solaris(TM) Operating System —Windows ※ IA64版では発生しません。 [発生条件] - CPU数またはコア数が2以上である。かつ、	○	○

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			2. 以下のいずれかを実行した場合。 ーSymfoware/RDBの場合、RDBコマンド、ローカルアクセスを行うアプリケーション、または、RDA接続を行うアプリケーション ーConnection Managerの場合、APCコマンド、またはアプリケーション 尚、本障害はCPUの特性によるタイミング依存であるため、条件に一致しても発生しない場合があります。		
26		PG73661	[現象] FETCH文を実行すると、qdg02842uを出力してSymfoware/RDBがダウンする場合があります。 qdg02842u:シグナルd*を受信したため RDBIIシステム空間が異常終了しました d*: シグナル番号 [環境] 以下の環境の場合。 • Solaris(TM) Operating System • Linux • Windows [発生条件1] 1. 埋込みSQLを利用した、C言語またはCOBOL言語のアプリケーションを使用する。かつ、 2. 以下のいずれの条件にも該当する。かつ、 1. 動作環境ファイルのRESULT_BUFFERの個数に0以外を指定(*1)する。かつ、 2. 動作環境ファイルのRESULT_BUFFERのバッファサイズが、選択リストに指定した値式の合計長より長い。 3. アクセスする表のインデックスに非活性状態(*2)のDSIが含まれる。かつ、 4. 3.の表を参照するカーソルに対して、OPEN文を実行する。かつ、 5. 3.のDSIに対して、4.と同時に以下のいずれかのコマンドを実行する。かつ、 1. rdbfmtコマンド 2. rdbsloderコマンド 6. 5.の後に4.でオープンしたカーソルに対して、FETCH文を実行する。 [発生条件2] 1. JDBCを使用したJavaアプリケーションを使用する。かつ、 2. 以下のいずれの条件にも該当する。かつ、 1. ctuneparamオプションのCLI_RESULT_BUFFERパラメタの個数に0以外を指定(*3)する。かつ、 2. CLI_RESULT_BUFFERパラメタのサイズが、選択リストに指定した値式の合計長より長い。	○	○

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			3. アクセスする表のインデックスに非活性状態(*2)のDSIが含まれる。 かつ、 4. 3.の表を参照するSELECT文を指定して、以下のいずれかのメソッドを実行する。かつ、 1. Statementインタフェースのexecuteまたは、executeQueryメソッド 2. PreparedStatement インタフェースの execute または、executeQueryメソッド 5. 3.のDSIに対して、4.と同時に以下のいずれかのコマンドを実行する。かつ、 1. rdbfmtコマンド 2. rdbsloaderコマンド 6. 5.の後に4.の実行で作成されたResultSetに対して、以下のいずれかのメソッドを実行する。 1. next 2. absolute 3. afterLast 4. first 5. last 6. previous 7. relative [発生条件3] 1. ODOSを使用した、ODBCアプリケーションを使用する。かつ、 2. 以下のいずれの条件にも該当する。かつ、 1. CLI_RESULT_BUFFERパラメタの個数に0以外を指定(*3)する。かつ、 2. CLI_RESULT_BUFFERパラメタのサイズが、選択リストに指定した値式の合計長より長い。 3. アクセスする表のインデックスに非活性状態(*2)のDSIが含まれる。 かつ、 4. 3.の表を参照する。かつ、 5. 3.のDSIに対して、4.と同時に以下のいずれかのコマンドを実行する。かつ、 1. rdbfmtコマンド 2. rdbsloaderコマンド 6. 5.の後に4.のデータを取得する。 [発生条件4] 1. rdbexecsqlコマンドを使用する。かつ、 2. 以下のいずれの条件にも該当する。かつ、		

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			- 動作環境ファイルのRESULT_BUFFERの個数に0以外を指定(*1)する。かつ、 - 動作環境ファイルのRESULT_BUFFERのバッファサイズが、選択リストに指定した値式の合計長より長い。 - アクセスする表のインデックスに非活性状態(*2)のDSIが含まれる。かつ、 3.の表に対して、SELECT文を実行する。 3.のDSIに対して、4.と同時に以下のいずれかのコマンドを実行する。 - rdbfmtコマンド - rdbsloaderコマンド (*1):パラメタを省略した場合の(バッファの個数,バッファサイズ)は、Windows環境では(0,1)、Solaris/Linux環境では(2,32)になります。 (*2):以下の場合にDSIは非活性状態となります。 - DSIの定義直後の状態 - rdbalidxコマンドを実行した状態 - 表DSIおよびインデックスDSIが両方活性の状態から表DSIのみ初期化した状態 (*3):パラメタを省略した場合の(バッファの個数,バッファサイズ)は、(2,32)になります。		
27		PG74549	[現象] Symfoware/RDBのデータベーススペースが作成されている場合、ACM(※1)のGUI画面またはACMのstgxfwcmsetdevコマンドを使用して、デバイス情報取得/反映を実行しても、Symfoware/RDBのデータベーススペース情報が登録されません。 (※1)ACMはETERNUS SF AdvancedCopy Managerの略です。以降ACMと呼びます。 [環境] 以下のいずれかのOSである場合。 - Solaris(TM) Operating System - Linux - Windows [発生条件] - Symfoware/RDBのデータベーススペースの作成先のパス名に区切り文字を2つ以上連続したパス名を指定してデータベーススペースを作成する。かつ - 上記を実施したノードに対して、ACMのGUIまたはACMのstgxfwcmsetdevコマンドを使用して、デバイス情報取得/反映を行う場合	○	○
28		PG74728	[現象] 以下のメッセージを出力し、Symfoware/RDBがダウンする場合があります。	○	○

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			『qdg02842u:シグナル*を受信したため RDBIIシステム空間が異常終了しました』 [環境] 以下のいずれかのOSである場合。 • Solaris(TM) Operating System または、 • Linux または、 • Windows [発生条件] 1. 監査ログ運用を行っている。かつ、 2. 監査ログパラメタAUDIT_SQLにYESを指定している。かつ、 3. 監査ログパラメタAUDIT_SQLBINDにYESを指定している。かつ、 4. 以下のいずれかの方法を使用したSQL文を実行する。かつ、 1. 文字列型の入力ホスト変数を使用した場合。または、 2. 文字列型の動的パラメタを使用した場合。 5. 4の入力ホスト変数または動的パラメタに指定した文字列に、二重引用符が含まれる。かつ、 6. 4の入力ホスト変数または動的パラメタに指定したデータが以下の式を満たす。 データ長(※) + データ内の二重引用符の数 > 1030 (※) データ長が1024バイトを超える場合、1024として計算する。 なお、入力ホスト変数のデータ長が1024バイトを超える場合は、データ中に含まれる二重引用符の位置によっては、現象が発生しない場合があります。		
29		PG74816	[現象] DDL文とDML文を同一トランザクションで実行するとき、qdg02842u(*)のメッセージを出力しSymfoware/RDBがダウンする。 (*)qdg02842u:シグナルd*を受信したため RDBIIシステム空間が異常終了しました s* [環境] 以下のいずれかのOSである場合。 • Solaris(TM) Operating System または、 • Linux または、 • Windows [発生条件] 1. 更新系のDML文を以下のいずれかの方法によって実行する。かつ、 1. PREPARE文で準備した動的SQLをEXECUTE文で実行する または 2. EXECUTE IMMEDIATE文でSQL文を実行する 2. 1のDML文が構文エラー以外のエラーとなる。かつ、	○	○

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			3. 1.と同一のトランザクション内で、1.のDML文が処理対象とした資源に対して、以下のいずれかのDDL文を実行する。かつ、 1. DROP TABLE文 または 2. DROP DSO文 または 3. DROP DSI文 または 4. ALTER TABLE文 または 5. DROP INDEX文 または 6. DROP TRIGGER文 4. 3.の実行後、COMMIT文またはROLLBACK文を実行する。		
30		PG74910	[現象] Symfoware Advanced Backup Controller(以降、ABC)のリカバリ中、メッセージqdg12695uを出力してSymfoware/RDBがダウンします。 qdg12695u: System error occurred. Reference code = XXXXXXXXXXXX Internal code = (idt_p:YYYYYYYYYYY sub_code:0 module:qdcmmerrs line:ZZZ) [環境] 以下のいずれかのOSを使用している場合。 • Solaris(TM) Operating System または、 • Linux または、 • Windows [発生条件] 1. アーカイブログ運用を実施している。かつ、 2. ABCのリカバリ(rdbmrrcvコマンド、または、swstrestoreコマンド)対象データベーススペースに対し、ABCのバックアップ(rdbmrdmpコマンド、または、swstbackupコマンド)を実施している。かつ、 3. ABCのリカバリ対象データベーススペースにDSIが定義されていない。かつ、 4. ABCのリカバリ対象データベーススペースが属するロググループのアーカイブログファイルの状態(*1)にfull状態または、using状態が存在しない。かつ、 5. 2.の退避データを使用してABCのリカバリを実施する。 (*1)アーカイブログファイルの状態は以下のコマンドで確認可能。 rdblog -V -a [-g ユーザロググループ名]	○	○
31		PG74982	[現象] Symfoware/RDBに接続する応用プログラムが無応答になる場合があります。 [環境] 以下のOSで発生します。 — Solaris(TM) Operating System — Linux	○	○

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			ー Windows [発生条件] 1. 応用プログラムからコネクションを接続する。かつ、 2. 以下のいずれかの場合。かつ、 a. RDB2_TCP接続でSymfoware/RDBに接続している。または、 b. Connection Managerを使用してSymfoware RDBに接続している。 3. 1.の処理中に、rdbtermコマンドで1)のコネクションを切断する(*1)。 *1)rdbterm自体は正常終了します。		
32		PG75261	[現象1] rdbstopコマンドでSymfoware/RDBを停止時に、以下のエラーメッセージが出力され、Symfoware/RDBが停止できない場合があります。 ・ 標準エラー rdb: ERROR: qdg12426u:RDBIIを停止できません 原因:動作中 ・ RBDREPORTファイル qdg12148e:SQL文の実行で重症エラーを検出しました:'JYP5015E RDBII 起動中または停止中のため処理を実行できません.' qdg12147e:通信処理において異常が発生しました:'JYP5015E RDBII 起動中または停止中のため処理を実行できません.' [現象2] rdbstopコマンド -mc オプションでSymfoware/RDBを停止時に、以下のエラーメッセージを出力する場合があります。なお、Symfoware/RDBの停止は正常に終了します。 ・ RBDREPORT qdg12148e:SQL文の実行で重症エラーを検出しました:'JYP5015E RDBII 起動中または停止中のため処理を実行できません.' qdg12147e:通信処理において異常が発生しました:'JYP5015E RDBII 起動中または停止中のため処理を実行できません.' [環境] 以下の環境である。 ・ Windows ・ Solaris ・ Linux [発生条件] 1. V9.1.0以降のSymfoware Connection Manager(以下Connection Manager)を使用している。かつ 2. 以下のいずれかの運用を行っている。かつ - ー V9.1.0以前のロードシェア運用(*1)	○	○

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			ー ホットスタンバイ運用 3. Symfowareを停止する。 (*1) RDB構成パラメタファイルに以下のパラメタが設定されている場合、V9.1.0以前のロードシェア運用となります。 ・RDBLOADSHARE		
33		PG75263	[現象] 以下に示す環境・発生条件のとき、下記のメッセージを出力してSymfoware/RDBがダウンする場合があります。 「qdg02842u:シグナル11を受信したためRDBIIシステム空間が異常終了しました」 [環境] 本障害は以下のいずれかのOSで発生します。 ・ Solaris(TM) Operating System ・ Linux ・ Windows [発生条件] 以下の条件で発生する場合があります。 1. パフォーマンスモニタを利用している。かつ、 2. パフォーマンスデータ格納ファイルで入出力障害(*1)が発生する。かつ、 3. アプリケーション、またはRDBコマンド実行時にデッドロックが発生する。 *1) 出力されるメッセージは以下になります。 qdg14170w:パフォーマンスデータ格納ファイルにおいて、入出力障害が発生しました ファイル名='****' システムコール='****' errno=**** (****は可変の値)	○	○
34		PG75325	[現象] 以下の環境、条件を満たすとき、Symfoware/RDBがqdg02842uのエラーメッセージを出力しダウンする場合があります。 ※qdg02842u: シグナルd*を受信したため RDBII システム空間が異常終了しました s* d*: シグナル番号 s*: RDB システム名 RDB システム名はマルチRDB の場合のみ出力されます。 [環境] 以下のOS・製品で発生します。 ・ Linux (Red Hat Enterprise Linux 4)	○	○

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			修正番号：T001856QP-03 製品名・世代：Linux64-IPF Symfoware Server Enterprise Extended Edition 9.2.0 (Red Hat Enterprise Linux 5) 修正番号：T001857QP-03 製品名・世代：Linux64-IPF Symfoware Server Enterprise Extended Edition 9.2.0 (Red Hat Enterprise Linux 4) 修正番号：T002786LP-03 製品名・世代：Linux64-EM64T Symfoware Server Standard Edition for x64 9.2.0 (Red Hat Enterprise Linux 5) 修正番号：T002788LP-03 製品名・世代：Linux64-EM64T Symfoware Server Standard Edition for x64 9.2.0 (Red Hat Enterprise Linux 4) 修正番号：T002784LP-03 製品名・世代：Linux32 Symfoware Server Standard Edition 9.2.0 (Red Hat Enterprise Linux 5) 修正番号：T002785LP-03 製品名・世代：Linux32 Symfoware Server Standard Edition 9.2.0 (Red Hat Enterprise Linux 4と5) Symfoware Server V10.0.0およびV10.0.0A の各エディション - Windows Symfoware Server V10.0.0 の各エディション [発生条件-1] - カーソルをオープンしている。かつ、 1.のカーソル以外にSQL文を実行している。かつ、 1コネクション内で実行するSQL文の合計長が、1024バイトを超える。かつ 1.のカーソルをオープンした状態で、以下のいずれかでコネクションが切断される。 - rdbsstop -mc コマンドにより、実行中アプリケーションが強制終了される。または、 - rdbterm コマンドにより、コネクションが強制切断される。または、 - killコマンドでアプリケーションプロセスを強制終了する。または、 - トランザクションの実行時間が、利用者制御機能のMAX_TRAN_TIMEを超える。または、		

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			5. アプリケーションからの応答時間が、利用者制御機能のMAX_WAIT_TIMEを超える。または、 6. トランザクションの実行時間が、TRAN_TIME_LIMITを超える。または、 7. Windowsクライアント端末で以下のいずれかを実行する。または、 - 時刻補正する。または、 - クライアント端末を再起動する。 8. DISCONNECT文を実行しないでアプリケーションプロセスを終了する。または、 9. RDB2_TCP接続のクライアントとの通信で、システムコールが何らかの原因により、エラーが発生する [発生条件-2] - 定義長が32Kバイト以上のBLOB列に対する動的パラメタを含む、SQL文を実行する。かつ、 1の実行前にSQL文が実行されている。かつ、 1を実行した時点で、1コネクション内で実行するSQL文の合計長が1024バイトを超える。 ※補足 SQL文情報を格納する内部メモリの使用状況も関係しているため必ず発生するものではありません。		
35		PG75656	[現象] NULLを指定したCASE式と並列指定を同時に指定したSQL文を実行すると、以下のエラーメッセージを出力してSymfoware/RDBがダウンする場合があります。 qdg02842u:シグナル11を受信したため RDBIIシステム空間が異常終了しました。 [環境] - Solaris(TM) Operating System - Linux - Windows [発生条件] - 以下のいずれかによって、表を並列に検索する。かつ、 - SQL文に並列検索(PARALLEL)を指定している。または、 - クライアント用の動作環境ファイルまたは、サーバ用の動作環境ファイルにPARALLEL_SCAN=YESを指定している。または、 - 環境変数RDBPSCANにYESを指定している。 - 以下の条件をすべて満たす場合。かつ、 - 表をDSI分割している、かつ、複数のDSIに対してアクセスしている。 - WHERE句にROW_IDを指定していない。 - クラスタキーを構成するすべての列について、WHERE句に論理演算子ANDで、IN述語や=の比較述語で指定していない。 - SQL文にCONTAINS関数を指定していない。	○	○

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			2-5) SQL文にファンクションルーチンを指定していない。 2-6) 探索条件に列を参照する条件を指定している。 3. 1-2)、または、1-3)の場合は、表の全件検索のアクセスモデルである。かつ、 4. SQL文にCASE式を指定している。かつ、 5. 4.のCASE式が以下のいずれかである。かつ、 5-1) CASE略式である。または、 5-2) CASE指定であり、結果にNULLを指定している。 6. 4.のCASE式の結果がNULLとなるレコードが含まれている。かつ、 7. 4.のCASE式を集合関数に指定している場合は、以下の条件を満たす場合。 7-1) FROM句には1つの表を指定している。かつ、 7-2) GROUP BY句を指定していない。かつ、 7-3) 副問合せを指定していない。かつ、 7-4) 7.の集合関数の他に、DISTINCTを指定した集合関数を指定していない。		
36		PG75673	[現象] rdbdmpdicコマンド実行中にRDBディクショナリに対してI/Oエラーが発生または、RDBディクショナリの破壊を検出すると、qdg12695u(※)のメッセージを出力してSymfoware/RDBがダウンします。 (※)qdg12695u: System error occurred. Reference code = XXXXXXXXXXXX Internal code = (idt_p:YYYYYYYYYYY sub_code:W module:qdcsecom670 line:ZZZ) [環境] 以下のいずれかのOSを使用している場合。 • Solaris(TM) Operating System または、 • Linux または、 • Windows [発生条件] 1. rdbdmpdicコマンドを使用してRDBディクショナリのバックアップを実施している。かつ、 2. 1.実行中に 以下のいずれかの事象が発生した場合 — RDBディクショナリに対してreadエラーが発生(※1)。 — RDBディクショナリの破壊を検出(※2)。 (※1)RDBディクショナリに対してreadエラーが発生した場合、RDBREPORTで指定したメッセージログファイルにqdg12771u(RDBIIディクショナリの入出力処理で異常が発生しました)のメッセージが出力されます。 (※2)RDBディクショナリの破壊を検出した場合、RDBREPORTで指定したメッセージログファイルにqdg12769u(RDBIIディクショナリが破壊されています)のメッセージが出力されます。	○	○
37		PG75683	[現象] ODBCアプリケーションで複数件のデータを参照したとき、返却されるはずのデータが返却されない場合があります。	○	○

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			[環境] 本障害は、以下の環境で発生します。 • Windows [発生条件] 1. Symfoware Server V10を使用している。かつ、 2. Symfoware ODOS連携のアプリケーションを実行する。かつ、 3. SQLSetStmtOptionで第2パラメタにSQL_ROWSET_SIZEを指定する。かつ、 4. SQLSetStmtOptionで第3パラメタに2以上の値を指定する。かつ、 5. SQLExtendedFetchでデータを参照する。		
38		PG75821	[現象] 以下に示す発生条件のとき、以下の現象が発生する場合があります。 [現象1] JYP7201E スキーマ“@1@”が存在しません。 のエラーとなります。 [現象2] JYP7210E データベース“@1@”が存在しません。 のエラーとなります。 [現象3] JYP2263E スキーマ“@1@”の表“@2@”に“@3@”権がありません。 のエラーとなります。 [現象4] SET TRANSACTION文で設定した独立性水準、トランザクションアクセスモード以外の状態でSQL文が動作することで、以下の事象が発生します。 1. 本来更新SQL文が実行可能なトランザクションであるにもかかわらず、「JYP2087E トランザクション状態は読み専用です。更新系SQL文は実行できません。」エラーとなります。 2. 他のトランザクションで更新中のデータに対して、本来1つ前のトランザクションでCOMMITされたデータが参照できず、他のトランザクションが完了するまで排他待ちとなります。 [環境] 以下のいずれかの環境の場合。 － Solaris(TM) Operating System － Linux － Windows [発生条件] [現象1の発生条件] 1. 後述のA)のいずれかを使用する。かつ、 2. V9.1以降のSymfoware Server Connection Managerを使用する。かつ、 3. 以下のいずれかに該当する。かつ、 埋込みSQLアプリケーションまたは、rdbexecsqlコマンドの場合)	○	○

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			SET SCHEMA文を実行する。 Javaアプリケーションまたは、ODBCアプリケーションの場合) デフォルトスキーマ名を指定するか、SET SCHEMA文を実行する。 4. 後述のC)のいずれかの理由により、コネクションが切断される。かつ、 5. 4.の後、ロールバックを実行する。かつ、 6. 5.の後、スキーマ名で修飾していない識別子を使用して、以下のいずれかのSQL文を実行する。 埋込みSQLアプリケーションまたは、rdbexecsqlコマンドの場合) 動的カーソル宣言以外の動的SQL文または、CALL文。 Javaアプリケーションまたは、ODBCアプリケーションの場合) データ操作文または、CALL文。 [現象2の発生条件] 1. 後述のA)のいずれかを使用する。かつ、 2. V9.1以降のSymfoware Server Connection Managerを使用する。かつ、 3. 以下のいずれかに該当する。かつ、 埋込みSQLアプリケーションまたは、rdbexecsqlコマンドの場合) SET CATALOG文または、データベース名を付けたSET SCHEMA文を実行する。 Javaアプリケーションまたは、ODBCアプリケーションの場合) データベース名を付けたSET SCHEMA文を実行する。 4. 後述のC)のいずれかの理由により、コネクションが切断される。かつ、 5. 4.の後、ロールバックを実行する。かつ、 6. 5.の後、以下のいずれかのSQL文を実行する。 埋込みSQLアプリケーションまたは、rdbexecsqlコマンドの場合) 動的カーソル宣言以外の動的SQL文または、CALL文。 Javaアプリケーションまたは、ODBCアプリケーションの場合) データ操作文または、CALL文。 [現象3の発生条件] 1. 後述のB)のいずれかを使用する。かつ、 2. V9.1以降のSymfoware Server Connection Managerを使用する。かつ、 3. SET SESSION AUTHORIZATION文またはSET ROLL文を実行する。かつ、 4. 後述のC)のいずれかの理由により、コネクションが切断される。かつ、 5. 4.の後、ロールバックを実行する。かつ、 6. 5.の後、SQL文を実行する。 [現象4の発生条件] 1. 後述のA)のいずれかを使用する。かつ、 2. V9.1以降のSymfoware Server Connection Managerを使用する。かつ、		

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			3. 以下のいずれかに該当する。かつ、 埋込みSQLアプリケーションまたは、<code>rdbexecsql</code>コマンドの場合) SET TRANSACTION文を実行する。 Javaアプリケーションの場合) default_readonlyオプションまたは、default_isolationオプションを指定する。 または、SET TRANSACTION文を実行する。 ODBCアプリケーションの場合) CLI_DEFAULT_ACCESS_MODE パラメータ または 、 CLI_DEFAULT_ISOLATIONパラメータを指定する。 または、SET TRANSACTION文を実行する。 4. 後述のC)のいずれかの理由により、コネクションが切断される。かつ、 5. 4の後、ロールバックを実行する。かつ、 6. 5の後、SQL文を実行する。 [発生条件]の補足説明 A)アプリケーションまたはコマンドの種類 ・埋込みSQLを利用した、C言語またはCOBOL言語のアプリケーション ・rdbexecsqlコマンド ・JDBCを使用した、Javaアプリケーション ・ODOSを使用した、ODBCアプリケーション B)アプリケーションまたはコマンドの種類 ・埋込みSQLを利用した、C言語またはCOBOL言語のアプリケーション ・rdbexecsqlコマンド C)コネクションが切断される理由 ・ロードシェア運用で、縮退、切替え、または、切戻しが発生する。 ・ホットスタンバイ運用で、運用系から待機系への切替えと切り戻しを行う。 ・rdbtermコマンドでコネクションを切断する。 ・通信異常などの理由により、コネクションが切断される。 ・アプリケーション実行中にアプリケーションサーバで時刻補正を行う。 ・TRAN_TIME_LIMITパラメータに指定した時間を超過する。 ・利用者制御機能のMAX_TRAN_TIMEパラメータに指定した時間を超過する。		
39		PG76142	[現象] Symfoware ODBCドライバを利用したODBCアプリケーションで、SET TRANSACTION文またはSET SCHEMA文を実行すると、アプリケーションが異常終了(ダウン)する場合があります。 アプリケーションダウン時にイベントビューアに出力されるメッセージ qdg12148e:SQL文の実行で重症エラーを検出しました:'JYP1078U シグナルを受信したためアプリケーションが異常終了しました.' [環境] 本障害は、Windows環境で発生します。	○	○

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			[発生条件] 1. V10.0.0以降のSymfoware Server Client機能を使用する。かつ、 2. Symfoware ODOSを使用した、ODBCアプリケーションを使用する。かつ、 3. 文ハンドル作成後、以下のいずれかのSQL文を実行する。かつ、 － SET TRANSACTION文 － SET SCHEMA文 4. 3.の実行以前にトランザクションを開始するSQL文を実行していない。かつ、 5. ODBC APIのSQLMoreResultsを実行する。 ●ADO.NETを利用している場合 1. V10.0.0以降のSymfoware Server Client機能を使用する。かつ、 2. Symfoware ODOSを使用した、ODBCアプリケーションを使用する。かつ、 3. System.Data.Odbc.OdbcCommandオブジェクトを生成し、以下のいずれかのSQL文を実行する。かつ、 － SET TRANSACTION文 － SET SCHEMA文 4. 3.の実行以前にトランザクションを開始するSQL文を実行していない。 5. 以下のいずれかのメソッドを実行する。 － OdbcCommandのExecuteNonQueryメソッド － OdbcCommandのExecuteReaderメソッド － OdbcCommandのExecuteScalarメソッド ●RDOを利用している場合 1. V10.0.0以降のSymfoware Server Client機能を使用する。かつ、 2. Symfoware ODOSを使用した、ODBCアプリケーションを使用する。かつ、 3. rdoConnectionオブジェクトを生成し、以下のいずれかのSQL文を2回実行する。かつ、 － SET TRANSACTION文 － SET SCHEMA文 4. 3.の実行以前にトランザクションを開始するSQL文を実行していない。 5. 以下のいずれかのメソッドを実行する。 － rdoConnectionのExecuteメソッド － rdoQueryのExecuteメソッド － rdoResultsetのMoreResultsメソッド ●DAOを利用している場合		

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			1. V10.0.0以降のSymfoware Server Client機能を使用する。かつ、 2. Symfoware ODOSを使用した、ODBCアプリケーションを使用する。 かつ、 3. Connectionオブジェクトを生成し、以下のいずれかのSQL文を2回 実行する。かつ、 — SET TRANSACTION文 — SET SCHEMA文 4. 3.の実行以前にトランザクションを開始するSQL文を実行してい ない。 5. ConnectionのExecuteメソッドを実行する。		
40		PG76313	[現象] DSIと共用バッファプールの対応関係の解除または、DSIのメモリ常駐の 解除を実行した場合に以下のメッセージを出力して、Symfoware/RDBが ダウンする。 qdg02842u:シグナル6を受信したため RDBIIシステム空間が異常終了し ました [環境] 以下のいずれかのOSである場合。 ・ Solaris(TM) Operating System または、 ・ Linux または、 ・ Windows または、 ・ UXP/DS [発生条件] 1. 以下のコマンドにより、DSIと共用バッファプールの対応関係の登 録または、DSIをメモリに常駐している。かつ、 — rdbconbfコマンド または、 — rdbresident -monコマンド(※1) 2. 1.実行後に以下のコマンドを実行している。かつ、 — rdbdisbfコマンド または、 — rdbprtbfコマンド または、 — rdbresident -moffコマンド(※1) または、 — rdbresident -mpコマンド(※1) または、 — rdbsar -rコマンド 3. 1.で操作したDSIに対して、2.実行中に以下のコマンドにより、 Symfoware/RDBシステムにおける、すべての共用バッファプール との対応関係および、すべてのDSIのメモリ常駐が解除された状態 となる。 — rdbdisbfコマンド または、 — rdbresident -moffコマンド(※1)	○	○

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			※本障害はタイミングに依存するため、必ず発生するわけではありません。 ※1)rdbresidentコマンドは、以下の場合に利用できます。 ・ V5.0以降でV8.0以前の場合、Symfoware Server Enterprise Extended Editionの場合に利用できます。 ・ V9.0以降でV9.1以前の場合、Symfoware Server Enterprise Extended EditionまたはSymfoware Server Enterprise Editionの場合に利用できます。 ・ V9.2以降の場合、すべてのEditionで利用できます。		
41		PG76944	[現象] SQL文の探索条件にIN述語と比較述語の指定がある場合、IN述語の指定値と一致し比較述語の条件に該当しない行が余分に返却される場合があります。 [環境] 以下のいずれかのOSである場合。 ・ Solaris(TM) Operating System ・ Linux ・ Windows ・ UXP/DS [発生条件] [条件1] 1. 行排他を使用しない。かつ、 2. インデックスキーの構成列に対して探索条件を指定する。かつ、 3. 2.の列に対して、IN述語の限定値リストに複数の値を指定する。かつ、 4. 3.の列が、構成列の先頭列、もしくは、上位のすべての構成列に対して、以下のいずれかの条件を指定している。かつ、 1. 比較述語の「＝」 2. 限定値リストをひとつ指定したIN述語 5. 3.の後続の構成列に探索条件を指定する。かつ、 6. 3.の列と一部の限定値リストを比較する探索条件に、以下のいずれかの比較演算子を指定する。 1. 比較述語の「＜」 2. 比較述語の「＞」 [条件2] 1. 以下のいずれかに該当し、排他を獲得していない。かつ、 1. 独立性水準がREAD UNCOMMITTEDである。 2. 占有モードにNO LOCKを指定する。 2. ～6.[条件1]の2.～6.と同じ 3. SQL文に指定した列が、すべて2)の構成列に含まれる場合。	○	○

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			[条件3] 1. DSIの分割条件が「＝」の分割キーの列に対して探索条件を指定する。かつ、 2. ～5.[条件1]の3.～6.と同じ(※) [条件4] 1. 一意性制約のクラスタキーの構成列に対して探索条件を指定する。かつ、 2. 1.の列に対して、以下のいずれかの条件を指定する。かつ、 1. 比較述語の「＝」 2. IN述語 3. の列に対する探索条件に、以下のいずれかの条件を指定する、かつ 1. 比較述語の「＜」、「＞」、「＞＝」、「＜＝」 2. BETWEEN述語 4. 3.の条件が2.の探索条件の値を含まない。 [条件5] 1. 行排他を使用しない。かつ、 2. 構成列が2つ以上のインデックスを定義している。かつ、 3. 2.の先頭列と2番目以降の構成列に対して探索条件を指定する。かつ、 4. 3.の2番目以降の構成列に対して、IN述語の限定値リストに複数の値を指定する。かつ、 5. 2.の構成列の先頭列、もしくは、4)より上位のすべての構成列に対して、以下のいずれかの条件を指定している。かつ、 1. 比較述語の「＝」 2. 限定値リストをひとつ指定したIN述語 6. 5.の列と指定した値と比較する探索条件に、以下のいずれかの比較述語を指定する。 1. 比較述語の「＜」 2. 比較述語の「＞」 [条件6] 1. 以下のいずれかに該当し、排他を獲得していない。かつ、 1. 独立性水準がREAD UNCOMMITTEDである。 2. 占有モードにNO LOCKを指定する。 2. ～6.[条件5]の2.～6.と同じ 3. SQL文に指定した列が、すべて2.の構成列に含まれる場合。 [条件7] 1. DSIの分割条件が「＝」の分割キーの列に対して探索条件を指定する。かつ、		

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			2. 1.の構成列に2つ以上の列を定義している。かつ、 3. ～6.[条件5]の3.～6.と同じ ※[条件1]の3.の"2"は"1"に、[条件1]の4.～6.の"3"は"2"と読み替えてください。 条件1の例) INDEX構成列(C1,C2)の場合 <pre>SELECT C1 FROM S1.T1 WHERE T1.C2 = 1 AND T1.C1 IN (1 , 2) AND T1.C1 > 1 ... (1)</pre> 本来、返却すべきレコード :C1=2のレコード1件 本障害により返却するレコード:C1=1とC1=2のレコード2件 探索条件にIN述語の限定値リストを打ち消す条件(1)を指定しますが、正しく判定されずC1=1のレコードが余分に返却されてしまいます。		
42		PG77195	[現象] リカバリログ量を大きく(目安として数百メガバイト以上)した場合に、以下のいずれかの現象が発生する場合があります。 [現象1] Symfoware/RDBの停止処理またはクラスタアプリケーションの停止処理に時間がかかる場合があります。 [現象2] テンポラリログファイルの閉塞解除処理に時間がかかる場合があります。 [現象3] RDBディクショナリのリカバリに時間がかかる場合があります。 [環境] • Solaris(TM) Operating System • Linux • Windows [発生条件] [現象1] 1. リカバリログ量のサイズ(目安として数百メガバイト以上)が大きい場合。かつ、 2. 更新系アプリケーションを実行する。かつ、 3. Symfoware/RDBの正常停止(クラスタアプリケーションの停止も含む)を実行する。 3.の処理に時間がかかる場合があります。 [現象2] 1. リカバリログ量のサイズ(目安として数百メガバイト以上)が大きい場合。かつ、 2. 更新系アプリケーションを実行する。かつ、 3. 以下のいずれかの事象が発生する。かつ、	○	○

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			1. rdblog -H -tコマンドによりテンポラリログファイルを閉塞する。 または 2. テンポラリログファイルが入出力異常により閉塞する。 4. rdblog -P -tコマンドによりテンポラリログファイルの閉塞を解除する。 4.の処理に時間がかかる場合があります。 [現象3] 1. RDBDICONBUFFERの指定によるフォールバック運用をしている。 (※1)かつ、 2. システムロググループのリカバリログ量のサイズ(目安として数百メガバイト以上)が大きい場合。かつ、 3. データベース定義、変更、削除を実行する。かつ、 4. RDBディクショナリで入出力異常が発生する。かつ、 5. rdbrcvdicコマンドのOverwriteモードによりRDBディクショナリのリカバリを行う。 5.の処理に時間がかかる場合があります。 ※1 RDB構成パラメタファイルにRDBDICONBUFFER=YESを指定している場合です。 [補足] 現象1～3のそれぞれの処理にかかる最大時間の見積もりは以下になります。 「テンポラリログのリカバリログ量の使用量(MB)※2」×「データベーススペースのI/O性能(MB/sec)※3」 また、更新系アプリケーションまたはデータベース定義、変更、削除の動作が完了してから、以下の時間以上経過している場合は本障害は発生しません。 「テンポラリログのリカバリログ量の使用量(MB)※2」÷「データベーススペースのI/O性能(MB/Sec)※3」 ※2 「リカバリログ量の指定値 × 0.8」か、「AI ログの定義サイズ - 処理直前の rdb sar l -e の EmpAI」のいずれかの大きい方の値となります。 また、更新が行われた全てのロググループの合計値です。 ※3 データベーススペースを配置しているディスクのI/O性能に依存します。		
43		PG77577	[現象] インデックスのDSIが非活性状態の場合、swstbackupコマンドまたは rdbmrdmpコマンドを実行すると、以下のエラーとなります。 qdg03226u 指定した資源's*'は他の利用者が使用中のため処理を続行できません t* [環境] 1. 以下のいずれかのOSである。かつ — Solaris — Linux	○	○

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			— Windows 2)Symfoware Server Advanced Backup Controllerをインストールしている場合。 [発生条件] 1. 以下いずれかを使用している。かつ、 — PG68552の修正を含む緊急修正(※1)を適用している。 — Symfoware Server V10.0.1を使用している。(Windowsの場合) 2. swstbackupコマンドまたはrdbmrdmpコマンドを実行している。かつ、 3. 2.で指定したデータベーススペースに割付けられている表のDSIが非活性状態(※2)でない。かつ 4. 2.で指定したデータベーススペースに割付けられ、かつ、3.の表のDSIに関連するインデックスのDSIが非活性状態(※2)である場合。 ※1:対応する緊急修正番号は以下になります。 ・Solaris(TM) Operating System 緊急修正パッチid : 912090-62～63 : 912091-62～63 : 912092-62～63 : 912093-62～63 正式製品名称 : Symfoware Server Enterprise Extended Edition 製品世代 : 5.0.1 緊急修正パッチid : 913574-34～35 : 913575-34～35 : 913576-34～35 : 913577-34～35 正式製品名称 : Symfoware Server Enterprise Extended Edition 製品世代 : 6.0 緊急修正パッチid : 913621-36～37 : 913622-36～37 : 913623-36～37 : 913624-36～37 正式製品名称 : Symfoware Server Enterprise Extended Edition 製品世代 : 6.0.1 緊急修正パッチid : T014HS-22～24 正式製品名称 : Symfoware Server Enterprise Extended Edition 製品世代 : 7.0 緊急修正パッチid : T014IS-20～22 正式製品名称 : Symfoware Server Enterprise Edition : Symfoware Server Standard Edition		

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			製品世代 : 7.0 緊急修正パッチid : T023GS-17～19 正式製品名称 : Symfoware Server Enterprise Extended Edition 製品世代 : 7.0.1 緊急修正パッチid : T023HS-15～17 正式製品名称 : Symfoware Server Enterprise Edition : Symfoware Server Standard Edition 製品世代 : 7.0.1 緊急修正パッチid : T025TS-15～17 正式製品名称 : Symfoware Server Enterprise Extended Edition 製品世代 : 7.0.2 緊急修正パッチid : T025US-14～16 正式製品名称 : Symfoware Server Enterprise Edition : Symfoware Server Standard Edition 製品世代 : 7.0.2 緊急修正パッチid : T001096SP-08～09 正式製品名称 : Symfoware Server Enterprise Extended Edition 製品世代 : 9.0.0,9.0.0A 緊急修正パッチid : T001097SP-08～09 正式製品名称 : Symfoware Server Enterprise Edition : Symfoware Server Standard Edition 製品世代 : 9.0.0,9.0.0A 緊急修正パッチid : T001858SP-07～09 正式製品名称 : Symfoware Server Enterprise Extended Edition 製品世代 : 9.1.0 緊急修正パッチid : T001859SP-06～08 正式製品名称 : Symfoware Server Enterprise Edition : Symfoware Server Standard Edition 製品世代 : 9.1.0 緊急修正パッチid : T002715SP-03～05 正式製品名称 : Symfoware Server Enterprise Extended Edition 製品世代 : 9.2.0 ※2:以下のいずれかの状態です。 ・ インデックスのDSIを定義した直後の状態 ・ rdbalidxコマンドの-s INACTIVE指定で、インデックスのDSIを非活性にした状態 ・ 表のDSIを初期化した後、インデックスのDSIを初期化/再作成していない状態		

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			rdbinf -i DB名.DSI名 -aを実行して、DSIの状態を確認してください。 Stateの値が"INA"の場合は、非活性状態です。		
44		PG77810	[現象] アプリケーションでコネクト処理をくり返し実行すると、コネクト処理がスローダウンします。また、派生する現象として、Symfoware/RDBプロセスでメモリリークが発生します。 ※リークするメモリ量は環境によって異なりますが、1回のコネクト処理で、約100byteのメモリがリークします。 [環境] - 以下のOSの場合 かつ - Solaris(TM) Operating System - 以下のいずれかの製品を利用している場合。 9.1.0 Symfoware Server Enterprise Extended Edition 9.1.0 を使用している。かつT001858SP-01以降のパッチを適用している。 9.2.0 Symfoware Server Enterprise Extended Edition 9.2.0を使用している [発生条件] - Symfoware Serverをインストールしている環境に、以下のパッケージがインストールされている。かつ、 - Charset Manager SE AgentのFSUNiconvパッケージ - Symfoware Server が64bit環境で動作している。かつ、 - 応用プログラムでコネクト処理を行う。	○	○
45		PG77834	[現象1] 探索条件に該当する一部のレコードがアプリケーションに返却されない場合があります。 [現象2] 以下のメッセージが出力され、Symfoware/RDBが異常終了する場合があります。 qdg02842u:シグナル6を受信したため RDBIIシステム空間が異常終了しました [環境] 以下のいずれかのOSである場合。 - Solaris(TM) Operating System - Linux - Windows - UXP/DS [発生条件] - 以下の製品を使用している。かつ、	○	○

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			1. Symfoware Server(*1)。または、 2. Symfoware Parallel Server(*2) 2. 以下のSQLデータ操作文(*3)を実行する。かつ、 1. カーソル指定にORDER BY句を指定する。または、 2. 問合せ指定にGROUP BY句を指定する。または、 3. 問合せ指定のFROM句に複数の表を指定する。または、 4. 問合せ指定にDISTINCTを指定している。または、 5. UNIONを指定している。または、 6. 問合せ指定にDISTINCTを指定した集合関数を指定している。 3. 処理対象のデータ量が、大量データ(*4)の場合。 (*1)Symfoware Serverを使用している場合、現象1が発生する場合があります。 (*2)Symfoware Parallel Serverを使用している場合、現象2が発生する場合があります。 (*3)以下を指定するSQLデータ操作文が対象です。 ・ 問合せ指定 ・ 単一行SELECT文 ・ 導出表 ・ 副問合せ (*4) データ量とは、作業用ソート領域に格納するレコード長×レコード件数になります。 本障害の発生有無は、作業用ソート領域のファイルに格納するレコードの格納順にも依存するため、格納するデータ量が特定の値を超えていても必ず障害が発生するとは限りません。 障害が発生する可能性があるデータ量の見積式は以下の通りです。 $\text{データ量} > 230K \times RC \times RC \times (RC-1)$ $RC = 20 + \text{MAX}\{0, \text{INT}((\text{SORT_MEM_SIZE} - 3300K) \div 500) \times 4\}$ RC: 一度にソートマージするメモリブロックの数 例) SORT_MEM_SIZEがデフォルト値=2112Kの場合 SORT_MEM_SIZEが3300Kより小さいので、MAX()内は0。 よって、処理対象のデータ量が、$230K \times 20 \times 20 \times (20-1) \approx 1.7G$より、多い場合に障害が発生する可能性があります。		
46		PG78026	[現象] スクロールカーソルを使用するとき、サーバで下記のエラーメッセージを出力して、Symfoware/RDBがダウンする場合があります。 エラーメッセージ: 「qdg12695u システム障害が発生しました 分類コード=s*内部コード=(t*) u*」 [環境] 本障害は、以下のOSで発生します。 ・ Windows ・ Linux	○	○

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			• Solaris(TM) Operating System [発生条件] 1. スクロールカーソルを使用する。かつ、 2. 1.のカーソルの探索条件に該当するデータの合計サイズ(*1)が、以下のしきい値を超える。 — 32bit版のSymfowareを使用している場合:約64GB — 64bit版のSymfowareを使用している場合:約32GB (*1)「選択リストに書かれた列の合計サイズ×探索条件に該当するレコード件数」		
47		PG78251	[現象] リモートアクセス(RDB2_TCP連携)を指定したアプリケーションがデータベースに接続しようとする、Symfoware Server Connection Manager(以降、Connection Managerと略す)を使用してのデータベース接続になってしまいます。実際に発生する現象は以下の2種類です。 現象1)Connection Managerが起動している場合 リモートアクセスでのデータベース接続が有効にならず、Connection Manager連携でのデータベース接続となりますが、正常復帰します。 現象2)Connection Managerが起動していない場合 アプリケーションに以下のエラーメッセージが返却されます。 JYP5079E Connection Managerシステムが未起動です。 [環境] 本障害は、以下のOSで発生します。 • Solaris(TM) Operating System • Linux • Windows [発生条件] 1. 以下のいずれかのアプリケーションを使用する。かつ、 — C言語やCOBOL言語のESQLアプリケーション — Java言語のJDBCアプリケーション — ODOSを使用したODBCアプリケーション 2. リモートアクセス(RDB2_TCP連携)を指定する。かつ、 3. アプリケーションサーバにV9.1以降のConnection Managerをインストールしている。かつ、 4. 接続先のデータ資源名または、SQLサーバ名をAPC動作環境ファイルに指定する。かつ、 1. Connection Managerが起動済み。→現象1 2. Connection Managerが未起動。→現象2	○	○
48		PG78884	[現象] Symfoware .NET Data ProviderのSymfowareConnectionオブジェクトが.NET Frameworkのガベージコレクションにより回収されたとき、	○	○

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			qdg02842uのメッセージを出力して、Symfoware/RDBがダウンする場合があります。 Symfoware/RDB側に出力されるメッセージ qdg02842u:シグナル-1073741819を受信したため RDBIIシステム空間が異常終了しました アプリケーション側に出力されるメッセージ JYP9229E システムコールにおいてエラーが発生し、サーバとの通信が切断されました。 Function =“Socket.Receive”, Error Code =“10054” [環境] 本障害は、以下の環境で発生します。 • Windows [発生条件] 1. Symfoware .NET Data Providerを使用する。かつ、 2. コネクションプーリングを使用しない(pooling=false)。かつ、 3. SymfowareConnectionオブジェクトを作成する。かつ、 4. SymfowareConnection.Open()を呼び出して、3.のコネクションを接続する。かつ、 5. 3.のSymfowareConnectionオブジェクトへの引用をなくす(※1)。かつ、 6. もう1つのSymfowareConnectionオブジェクトを作成する。かつ、 7. SymfowareConnection.Open()を呼び出して6.のコネクションを接続する。かつ、 8. 7.の実行と同時に、.NET Frameworkでガベージコレクションが動作した場合(※2)。 ※1 例えば、当該SymfowareConnectionオブジェクトにnullを設定する。 ※2 ガベージコレクションによるオブジェクト回収順番に依存する障害であるため、上記条件に合致しても発生しない場合があります。		
49		PG80224	[現象] 以下に示す発生条件のとき、データベースへのコネクションの数が不当に増加し、以下の現象が発生します。 現象1) アプリケーションにJYP1004EまたはJYP1006Eのエラーが返却され、RDBREPORTで指定したメッセージログファイルやアプリケーションのイベントログに、qdg12147e:エラーが出力されます。 JYP1004E データ送信中にサーバとの通信が切断されました。 JYP1006E データ受信中にサーバとの通信が切断されました。 qdg12147e:通信処理において異常が発生しました。 JYP1052E 接続できる通信の最大数を超えました。 通信種別 = “@1@” 現象2) rdbpsコマンドまたは、rdbcninfコマンドでコネクションの状態を確認した時に、見積り上のコネクションの数より、接続されているコネクションの数が多くなります。	○	○

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			[環境] 以下のいずれかの環境の場合。 • Linux • Solaris(TM) Operating System • Windows [発生条件] 1. JDBCを使用したjavaアプリケーションを使用する。かつ、 2. Interstage Application Server V9.2.0以降を使用する。かつ、 3. Java EE機能を使用する。かつ、 4. Interstage Application Serverでのコネクションプーリングを使用する。かつ、 5. Symfoware Server Connection Managerを使用する。かつ、 6. SQL文を実行した時に、以下のいずれかの理由により、コネクションが切断され、SQLSTATE40003または40703のエラーが発生する。かつ、 - ー ロードシェア運用で、縮退、切替え、または、切戻しが発生する。または、 - ー ホットスタンバイ運用で、運用系から待機系への切替えと切り戻しを行う。または、 - ー rdbtermコマンドでコネクションを切断する。または、 - ー 通信異常などの理由により、コネクションが切断される。または、 - ー TRAN_TIME_LIMITパラメタに指定した時間を超過する。または、 - ー 利用者制御機能のMAX_TRAN_TIMEパラメタに指定した時間を超過する。 7. 6.の後で、文の準備または文の実行からリトライせず、getConnectionメソッドでコネクションを取得する。		
50		P805588	[現象] SQL文を実行すると、制限値オーバーの構文エラーにならず、qdg02842u(※)のメッセージを出力し、Symfoware/RDBがダウンします。または、Symfoware/RDBのシステムが無応答になります。 ※)qdg02842u:シグナル11を受信したため RDBIIシステム空間が異常終了しました。 [環境] 以下のいずれかのOSである場合。 • Solaris(TM) Operating System または、 • Linux または、 • Windows または、 • UXP/DS [発生条件]	○	○

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			1. 問合せ式にUNION(またはUNION ALL)を65個以上指定する。または、 2. 表参照に結合表を入れ子で129個以上指定する。または、 3. 値式に関数または演算式を129個以上指定する。		
51	V10.0.0	PG33133	以下の条件の時、応用プログラムがエラー「JYP1029U クライアントメッセージファイルがオープンできません.erno:""2""」を出力します。 ・ 現象条件1 1. 応用プログラムをシングルスレッドモデルで作成する。かつ、 2. プロセスで最初に行われるSQL文より前に、ファイルディスクリプタSTDIN_FILENOをクローズする。または、プロセスで最初に行われるSQL文より前に、ストリームstdinをクローズする。かつ、 3. 2.で実行したクローズ処理から、プロセスで最初にSQL文を実行する間でファイルをオープンしない。 ・ 現象条件2 1. 応用プログラムをマルチスレッドモデルで作成する。かつ、 2. プロセスで最初にセッションを作成する前に、ファイルディスクリプタSTDIN_FILENOをクローズする。または、プロセスで最初にセッションを作成する前にストリームstdinをクローズする。かつ、 3. 2.で実行したクローズ処理から、プロセスで最初にセッションを作成する間でファイルをオープンしない。	○	すでに提供済み
52		PG53081	[現象] REVOKE文を実行するとREVOKE文の実行が終了するまでSymfoware/RDB全体が無応答となります。(※) ※プロシジャルーチン定義に指定した列名の増加に比例して、REVOKE文の実行時間が増加します。列名が488,303個の場合、62分43秒かかった事例があります。 [環境] 以下のいずれかのOSである場合。 1. Solaris(TM)Operating System または、 2. Linux または、 3. Windows または、 4. UXP/DS [発生条件] 以下のいずれかの条件のとき、本現象が発生します。 [条件1] 1. プロシジャルーチン定義(CREATE PROCEDURE 文)にSQL手続き文を記載する。かつ、 2. 指定したSQL手続き文に表名、列名を指定する。かつ、 3. 2.の表名を対象名に指定したREVOKE文を実行する。 [条件2]	○	○

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			1. プロシジャルーチン定義(CREATE PROCEDURE文)にCALL文を記載する。かつ、 2. 指定したCALL文にプロシジャルーチン名を指定する。かつ、 3. 2.のCALL文で指定したプロシジャルーチン名を対象名に指定したREVOKE文を実行する。 [条件3] 1. プロシジャルーチン定義(CREATE PROCEDURE文)にSQL手続き文を記載する。かつ、 2. 指定したSQL手続き文にファンクションルーチン名を指定する。かつ、 3. 2.のファンクションルーチン名を対象名に指定したREVOKE文を実行する。 [条件4] 1. プロシジャルーチン定義(CREATE PROCEDURE文)にSQL手続き文を記載する。かつ、 2. 指定したSQL手続き文に順序名を指定する。かつ、 3. 2.の順序名を対象名に指定したREVOKE文を実行する。		
53		PG53708	[現象] GRANT文で資源に対する権限をロールに付与すると、qdg12695uのメッセージを出力して、Symfoware/RDBがダウンする。 [環境] 以下のいずれかのOSである場合。 1. Solaris(TM)Operating System または、 2. Linux または、 3. Windows [発生条件] 1. GRANT文で資源に対する権限をロールに付与している。かつ、 2. 1.で指定した資源と同じ資源に対する権限を別のロールにも付与している。 ※内部条件として以下の条件が必要となるため、本現象が発生する頻度はきわめて低い。 ロールに付与した権限情報を表す情報域(以降、ロール情報と称す)直下の13バイト目～16バイト目に格納されている数値情報が、権限付与対象のロールが持つロールコード(ロールの一意性を表すコード)の値と一致した場合のみ。	○	○
54		PG54618	[現象] 分割値を指定したDSI定義に対し、rdbprtコマンドを実行すると、qdg12695uのメッセージを出力して、Symfoware/RDBがダウンする。 [環境] 以下のいずれかのOSである場合。 1. Solaris(TM)Operating System または、	○	○

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			2. Linux または、 3. Windows または、 4. UXP/DS [発生条件] 1. 分割値を指定したDSI定義である。かつ、 2. 1.のDSI定義に指定されたUSINGオペランドの長さが特定の長さ(※1)を超えている。かつ、 3. 2.のDSI定義に対し、rdbprtコマンドを実行する場合。 ※1)DSI定義に指定されたUSINGオペランドの長さ(※2)は、製品によって異なります。 イ)以下の製品の場合、USINGオペランドの長さが、32Kバイトを超えている場合に本障害が発生します。 • Solaris版 － Symfoware Server Enterprise Extended Edition 6.0.1以前 － Symfoware Server Enterprise Edition 6.0.1以前 － Symfoware Server Standard Edition 6.0.1以前 － SymfoWARE Server 全てのバージョンレベル － SymfoWARE Parallel Server 全てのバージョンレベル • Linux版 － Symfoware Server Standard Edition V5.0L10 • Windows版 － Symfoware Server Enterprise Edition V6.0L10以前 － Symfoware Server Standard Edition V6.0L10以前 － Symfoware Server for Windows V6.0L10 － SymfoWARE Server for WindowsNT 全てのバージョンレベル • UXP/DS － SymfoWARE Server Enterprise Edition 全てのバージョンレベル － SymfoWARE Server 全てのバージョンレベル － RDBII Base 全てのバージョンレベル ロ)以下の製品の場合、USINGオペランドの長さが、64Kバイトを超えている場合に本障害が発生します。 (以下の製品以降で実施した、OSロケール:Unicode対応により、64Kバイトに拡張) • Solaris版 － Symfoware Server Enterprise Extended Edition 7.0以降 － Symfoware Server Enterprise Edition 7.0以降 － Symfoware Server Standard Edition 7.0以降 • Linux版		

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			— Symfoware Server Enterprise Extended Edition V7.0L10以降 — Symfoware Server Enterprise Edition V6.0L10以降 — Symfoware Server Standard Edition V6.0L10以降 • Windows版 — Symfoware Server Enterprise Edition V7.0L10以降 — Symfoware Server Standard Edition V7.0L10以降 — Symfoware Server for Windows V7.0L10/V7.0L10C — Symfoware Server Base Edition 8.0.0以降 ※2)上記で示すUSINGオペランドの長さとは、 USING(a,b,c),(d,e,f)と指定された場合、先頭のUSINGから、終端のfの次の)までを表します。 各abcのデータの長さは、指定された定数の長さとなります。 ただし、列定義のデータ型が文字列型、または各国語文字列型の場合、指定された定数の長さは、"列定義の長さ(バイト長)+引用符2バイト"となります。 • USINGオペランドの長さを求める計算式は以下の通りとなります。 5<注1>+(分割値の要素<注2>に指定された各定数<注3>の合計長+ (分割値の要素に指定された定数の数-1)<注4>+2<注5>) × 分割値の要素数)+(分割値の要素数-1)<注6> <注1>キーワードUSINGの語彙数(5で固定) <注2>分割値の要素とは、分割値として(a,b,c),(d,e,f)と指定した場合、(a,b,c)と(d,e,f)の各々のことを表します。 <注3>列定義のデータ型が文字列型、または各国語文字列型の場合、指定された定数の長さは、"列定義の長さ(バイト長)+引用符2バイト"となります。 <注4>各定数間のカンマ(,)の数 <注5>分割値の要素の両端の括弧の語彙数(2で固定) <注6>各分割値の要素間のカンマ(,)の数 例) CHAR(5),TIMESTAMP型の定義に対し、 USING('xyz',TIMESTAMP'2007-02-21 10:10:10'), ('w',TIMESTAMP'2007-02-21 12:12:12')と指定した場合、上記で示すUSINGオペランドの長さは、『86』<注7>になります。 <注7>USINGオペランドの長さを求める計算式に適用すると、5+((7+30+(2-1)+2)×2)+(2-1) = 『86』になります。		
55		PG54637	[現象] rdbadjrcvコマンド実行中、メッセージqdg12695uを出力してSymfoware/RDBがダウンする場合があります。 rdb: ERROR: qdg12695u: System error occurred. Reference code = 16.1.17.769 Internal code = (idt_p:XXXXXXXXX sub_code:0 module:qdcmercp line:XXX) [環境] 以下のOSを使用している場合	○	○

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			• Solaris(TM)Operating System • Windows • Linux [発生条件] 1. アーカイブログ運用を行っている。かつ、 2. Symfoware/RDBが停止状態である。かつ、 3. rdblogコマンドのBオプション指定で、full,swich,using状態のアーカイブログファイルをすべてバックアップする。かつ、 (using状態のアーカイブログファイルが存在しない状態にする) 4. 3. でバックアップしたアーカイブログ 退避ファイルを指定して rdbadjrcvコマンドを実行した場合		
56		PG56031	[現象] SQL文実行中にプロシジャルーチン、トリガ、ファンクションルーチンの定義/削除を実行するとメッセージ「qdg12695u: System error occurred. Reference code = 16.5.64.769 Internal code = (idt_p:~ sub_code:0 module:jypacerr line:192)」を出力しSymfowareがダウンする場合があります。 [環境] 1. Solaris(TM)Operating Systemを使用しているシステム または、 2. Linuxを使用しているシステム または、 3. Windowsを使用しているシステム または、 4. UXP/DSを使用しているシステム [発生条件] 1. 応用プログラムからSQL文を実行する。かつ 2. 1.のSQL文がアクセスする表に対して、以下のいずれかの定義、または削除を実行する。 — プロシジャルーチン — ファンクションルーチン — トリガ	○	○
57		PG56312	[現象] rdbdmpコマンドのcオプション(rdbdmpコマンド実行中の更新ログを退避データに採取しない)指定時に、メッセージqdg02303uを出力してエラー終了する場合があります。 qdg02303u:退避データの取得に失敗しました [環境] 1. 以下のOSを使用している場合。かつ、 — Solaris (TM)Operating System — Windows — Linux 2. アーカイブログ運用している。かつ、	○	○

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			3. アーカイブログファイルの合計サイズが2ギガバイト以上 [発生条件] 1. rdbdmpコマンドをcオプション指定(注1)で実行する。かつ、 2. 1.実行中の更新ログ量(注2)が2ギガバイトを超えた場合 (注1):rdbdmpコマンド実行中の更新ログを退避データに採取しない指定 rdbdmpコマンドによるIO負荷を削減することを目的とした、rdbdmpコマンドのdオプション(インターバルバックアップ)指定時に、通常より更新ログが増加(=退避データサイズ増加)が予想されるため、更新ログを採取しない機能として用意した機能。 (注2):rdbdmpコマンド実行中に蓄積される更新ログ量の総量 以下の手順で更新ログ量は実測可能です。 1. rdbsarコマンドのlオプション(テンポラリログに関する性能情報の表示)指定を実行し、出力されたAiBlock数を記録 2. rdbdmpコマンド実行 3. rdbsarコマンドのlオプション指定を実行し、出力されたAiBlock数を記録 更新ログ量=((3)で記録したAiBlock数-(1)で記録したAiBlock数)×512バイト		
58		PG56993	[現象] Symfoware/RDBがメッセージ"qdg12695u"を出力してダウンする場合があります。 [環境] 1. 以下のいずれかのOSである場合。 1-a)Solaris(TM)Operating System または、 1-b)Linux または、 1-c)Windows または、 1-d)UXP/DS [発生条件] 1. 応用プログラムがコネクションを接続している状態である。かつ 2. ネットワークの異常等でSymfoware/RDBが不当なプロトコルを受信した場合。	○	すでに提供済み
59		PG59073	[現象] Symfoware Server Advanced Backup Controllerによるバックアップ実行中にエラーメッセージqdg12695uを出力してSymfoware/RDBがダウンする場合があります。 qdg12695u:System error occurred. Reference code = 16.1.17.769 Internal code = (com_inf:XXXXXXXXX idt_p:XXXXXXXXX sub_code:0 module:qdcmrct100 line:XXX) [環境] 以下のOSを使用している場合 ・ Solaris(TM)Operating System	○	○

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			• Windows • Linux [発生条件] 1. CREATE DSI文を実行する(対象DSIが定義直後の状態)。かつ、 2. 1.のDSIが割り付けられたデータベーススペースを対象に、Symfoware Server Advanced Backup Controllerのバックアップ処理として、以下いずれかのコマンドを実行する。かつ、 — swstbackupコマンド(注1)、または、 — rdbmrdmpコマンド 3. 2.実行中に、1.のDSIに対して以下いずれかのコマンドを実行した場合。 — rdbfmtコマンド、または、 — rdbloaderコマンド (注1)以下の製品のコマンド • Softek AdvancedCopy Manager、または、 • ETERNUS SF AdvancedCopy Manager		
60		PG59218	Symfoware/RDBがqdg02842uのメッセージを出力してダウンする場合があります。 qdg02842u:シグナルxxを受信したため RDBIIシステム空間が異常終了しました [環境] 以下のOSで発生します。 • Solaris (TM) Operating System • Linux • Windows [発生条件] 1. CONNECT文を実行する。かつ、 2. CONNECT文の実行中にメモリ不足が発生する。	○	すでに提供済み
61		PG59780	[現象] Symfoware/RDBに接続するアプリケーションが無応答となる場合があります。 [環境] 以下のOSで発生します。 • Solaris(TM) Operating System • Linux • Windows • UXP/DS [発生条件] 1. アプリケーションからSQL文を実行中である。かつ、	○	すでに提供済み

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			2. 以下のいずれかの方法でSymfoware/RDBに接続している。かつ、 a. RDB2_TCPを利用している。または、 b. Symfoware Server Connection Managerを利用している。 3. アプリケーションを実行しているサーバの電源を切断する。または、アプリケーションを実行しているサーバとDBサーバとの間のLANケーブルが抜けた場合。(*注) (*注) writeシステムコールがEAGAINを返却した場合を指します。		
62		PG59902	[現象] java.sql.PreparedStatement.getResultSetメソッドを使用して取得したResultSetを操作すると、アプリケーションに以下のエラーが返却され、アプリケーションが異常復帰する場合があります。 - ーエラーメッセージ ResultSetがクローズされました (エラーコード1058) [環境] 本障害は、以下の環境で発生します。 • Solaris(TM) Operating System • Linux • Windows ■Solaris(TM) Operating System 以下の製品および、以下の製品のSolaris用の各添付クライアント • Symfoware Server Standard Edition 6.0 + 913548-03, 6.0.1 + 913830-05 • Symfoware Server Enterprise Edition 6.0 + 913548-03, 6.0.1 + 913830-05 • Symfoware Server Enterprise Extended Edition 6.0 + 913548-03, 6.0.1 + 913830-05 以下の製品 • Connection Manager 6.0 + 913548-03, 6.0.1 + 913830-05 以下の製品および、以下の製品のSolaris用の各添付クライアント • Symfoware Server Standard Edition 8.0.0 + T000229SP-03 • Symfoware Server Enterprise Edition 8.0.0 + T000229SP-03 • Symfoware Server Enterprise Extended Edition 8.0.0 + T000229SP-03 以下の製品 • Connection Manager 8.0.0 + T000229SP-03 以下の製品の各OS用添付クライアント [製品] • Symfoware Server Standard Edition 8.0.0 • Symfoware Server Enterprise Edition 8.0.0	○	すでに提供済み

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			• Symfoware Server Enterprise Extended Edition 8.0.0 [Windows用添付クライアント] 上記製品にT000218WP-03を適用した環境 [Linux32用添付クライアント] 上記製品にT000230LP-03を適用した環境 [Linux64用添付クライアント] 上記製品にT000238QP-03を適用した環境 以下の製品および、以下の製品のWindows/Linux32/Linux64/Solaris用の各添付クライアント • Symfoware Server Standard Edition 9.1.0 • Symfoware Server Enterprise Edition 9.1.0 • Symfoware Server Enterprise Extended Edition 9.1.0 以下の製品 • Connection Manager 9.1.0 ■Linux32 以下の製品および、以下の製品のLinux32用の各添付クライアント • Symfoware Server Standard Edition V6.0L10/A + T01262-01 • Symfoware Server Enterprise Edition V6.0L10/A/B + T01262-01 以下の製品 • Connection Manager V6.0L10/A + T01262-01 以下の製品および、以下の製品のLinux32用の各添付クライアント • Symfoware Server Standard Edition 8.0.0、8.0.0A + T000233LP-03 • Symfoware Server Enterprise Edition 8.0.0、8.0.0A + T000233LP-03 • Symfoware Server Enterprise Extended Edition 8.0.0、8.0.0A + T000233LP-03 以下の製品 • Connection Manager 8.0.0、8.0.1 + T000233LP-03 以下の製品の各OS用添付クライアント [製品] • Symfoware Server Standard Edition 8.0.0、8.0.0A • Symfoware Server Enterprise Edition 8.0.0、8.0.0A • Symfoware Server Enterprise Extended Edition 8.0.0、8.0.0A [Windows用添付クライアント] 上記製品にT000236WP-03を適用した環境 [Solaris用添付クライアント] 上記製品にT000237SP-03を適用した環境 [Linux64用添付クライアント] 上記製品にT000231QP-03を適用した環境		

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			■Linux64 以下の製品および、以下の製品のLinux64用の各添付クライアント • Symfoware Server Enterprise Extended Edition 8.0.0、8.0.0A + T000231QP-03 以下の製品 • Connection Manager 8.0.0 + T000231QP-03 以下の製品の各OS用添付クライアント [製品] • Symfoware Server Enterprise Extended Edition 8.0.0、8.0.0A [Windows用添付クライアント] 上記製品にT000236WP-03を適用した環境 [Linux32用添付クライアント] 上記製品にT000233LP-03を適用した環境 [Solaris用添付クライアント] 上記製品にT000237SP-03を適用した環境 以下の製品および、以下の製品のLinux64用の各添付クライアント • Symfoware Server Enterprise Extended Edition 8.0.1 + T000238QP-03 以下の製品 • Connection Manager 8.0.0、8.0.1 + T000238QP-03 以下の製品の各OS用添付クライアント [製品] • Symfoware Server Enterprise Extended Edition 8.0.0、8.0.0A、8.0.1 [Windows用添付クライアント] 上記製品にT000218WP-03を適用した環境 [Linux32用添付クライアント] 上記製品にT000230LP-03を適用した環境 [Solaris用添付クライアント] 上記製品にT000229SP-03を適用した環境 ■Windows 以下の製品および、以下の製品のWindows用の各添付クライアント • Symfoware Server Enterprise Edition V6.0L10 + TP09620 • Symfoware Server Standard Edition V6.0L10 + TP09620 • Symfoware Server for Windows NT V6.0L10 + TP09620 以下の製品および、以下の製品のWindows用の各添付クライアント • Symfoware Server Standard Edition 8.0.0 + T000218WP-03 • Symfoware Server Enterprise Edition 8.0.0 + T000218WP-03		

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			• Symfoware Server Symfoware Server Base Edition 8.0.0 + T000218WP-03 以下の製品 • Connection Manager 8.0.0 + T000218WP-03 以下の製品の各OS用添付クライアント [製品] • Symfoware Server Standard Edition 8.0.0 • Symfoware Server Enterprise Edition 8.0.0 • Symfoware Server Base Edition 8.0.0 [Linux64用添付クライアント] 上記製品にT000238QP-03を適用した環境 [Linux32用添付クライアント] 上記製品にT000230LP-03を適用した環境 [Solaris用添付クライアント] 上記製品にT000229SP-03を適用した環境 [発生条件] 1. Javaアプリケーションを使用する。かつ、 2. プロトコルにローカルまたはリモート(RDB2_TCP連携)を使用する。かつ、 3. 以下のいずれかの場合。かつ、 • ステートメントキャッシュ機能を使用する。または、 • ステートメントキャッシュ機能を未使用で、ResultSet.closeを実行していない。 1. 以下のいずれかのメソッドに SELECT 文を指定して、PreparedStatementオブジェクトを作成する。かつ、 • Connection.prepareStatement(String sql) • Connection.prepareStatement(String sql,int resultSetType,int resultSetConcurrency) 1. 4.のPreparedStatementオブジェクトのexecuteメソッドを使用して文を実行する。かつ、 2. 4.のPreparedStatementオブジェクトのgetResultSetメソッドを使用して、ResultSetオブジェクトを取得する。かつ、 3. 6.のResultSetオブジェクトのメソッドを実行する。かつ、 4. 以下のいずれかの場合。 • 4.のPreparedStatementオブジェクトに対して5.～7.の操作を複数回行う。 • 4.で指定したSELECT文と同じSELECT文を指定して4.～7.の操作を複数回行う。		
63		PG60276	[現象]	○	○

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			以下のいずれかの動的SQL文を実行時に、qdg02842u(※)のメッセージを出力してSymfoware/RDBがダウンします。 • SELECT文、または、 • INSERT文、または、 • UPDATE文、または、 • DELETE文 ※)シグナルd*を受信したためRDBIIシステム空間が異常終了しました [環境] 以下のいずれかのOSである場合。 1. Solaris(TM) Operating System または、 2. Linux または、 3. Windows または、 4. UXP/DS [発生条件] 1. データ操作文として以下のいずれかを指定している。かつ、 — SELECT文 または、 — INSERT文 または、 — UPDATE文 または、 — DELETE文 2. 1.にて、以下いずれかを2つ以上ネストして指定している。かつ、 — 副問合せ — 導出表 3. 2.で2つ以上ネストした副問合せ、または、導出表の探索条件に、主問合せ(※1)に指定した参照列が存在する表の列に対して、動的パラメタを指定している。かつ、 4. 3.の上位のネストに指定された副問合せ、または、導出表の探索条件に、主問合せに指定した参照列が存在する表とは異なる表の列を指定している。かつ、 5. 4.の表に対して相関名(※2)を指定している場合(※3)。 (※1)主問合せとは、データ操作文に最初に指定した問合せのことを表す。 (※2)表の別の名前をつけること。 詳細については以下のマニュアル記事を参照してください。 Symfoware Server SQLビギナーズガイド 複数の表を関連づけて操作する方法 表に別名を用いてデータを操作する (※3)以下に[発生条件]に該当する例を示す。 SELECT T1.C11 FROM S1.T1 WHERE T1.C12 (←主問合せ)←発生条件1.		

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			= (SELECT DT2.C21 FROM (←副問合せ)←発生条件2. 4. (SELECT T2.C21 FROM S1.T2 WHERE T2.C22 = 10 AND T1.C11 = ?) AS DT2) (←導出表)←発生条件2. 3. 5.		
64		PG60461	[現象] CASTを指定したSQL文を実行するとqdg12695u(*1)のメッセージを出力してSymfoware/RDBがダウンする場合があります。 *1:qdg12695u システム障害が発生しました 分類コード=s* 内部コード=(t*) u* [環境] - 以下のいずれかのOSである場合。 - Solaris(TM) Operating System - Linux - Windows - UXP/DS [発生条件] 以下のCASTを指定したSQL文を実行した場合。 - CASTオペランドのデータ型が概数型である。かつ、 1.の値が-0である。かつ、 - CAST相手のデータ型が文字列型である。	○	○
65		PG61002	[現象] 表名を指定しない動的UPDATE文を実行すると、JYP8399E(※1)の構文エラーにならず、Symfoware/RDBがqdg02842u(※2)のメッセージを出力してダウンします。 ※1)JYP8399E:“@1@”の前後にキーワード“@2@”が指定されていません。 ※2)qdg02842u:シグナル11を受信したため RDBIIシステム空間が異常終了しました。 [環境] 以下のいずれかのOSである場合。 - Solaris(TM) Operating System または、 - Linux または、 - Windows [発生条件] - 以下のいずれかの方法でUPDATE文を実行する。かつ、 - C/COBOL埋め込みホストプログラムの場合、動的SQL文としてUPDATE文を実行している。または、 - JDBC連携の場合、UPDATE文を実行している。または、 - ODOS連携の場合、UPDATE文を実行している。または、 .NET Data Providerの場合、UPDATE文を実行している。 - UPDATE文に表名を指定していない。かつ、	○	○

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			3. UPDATE文にカーソル名を指定していない。かつ、 4. UPDATE文に実行オプション指定(※3)を指定している。 ※3)実行オプション指定は、Symfoware Server Enterprise Extended Editon 4.1からのサポート機能である。		
66		PG61609	[現象] 運用系RDBシステムと待機系RDBシステムがダウンした後、Symfoware Server Connection Managerから再起動したRDBシステムへの接続ができない場合があります。 [環境] 本障害は以下のOSで発生します。 • Solaris(TM)Operating System • Windows • Linux [発生条件] 1. フェイルオーバー運用を実施している。かつ、 2. Symfoware Server Connection Manager(以降CM)からRDBシステムへの接続を実施している。かつ、 3. 以下のいずれかが発生する。かつ、 3-1)運用系RDBシステムと待機系RDBシステムがダウンする。または、 3-2)待機系RDBシステムが起動されていない状態で運用系RDBシステムがダウンする。 4. 運用系RDBシステムもしくは、待機系RDBシステムのうち一方のみを起動する。	○	すでに提供済み
67		PG61838	[現象] 以下の条件の場合に、Connection Managerを使用してアプリケーションを実行すると下記のエラーメッセージを出力しcoreファイルを出力します。 <エラーメッセージ> qdg12148e:SQL文の実行で重症エラーを検出しました:'JYP1078U シグナルを受信したためアプリケーションが異常終了しました.' [環境] 以下のOSを使用している場合 • Solaris(TM) Operating System • Windows • Linux [発生条件] 1. 以下のいずれかの製品を使用している。かつ、 — Solaris版 Symfoware Server Connection Manager 9.1 — Linux版 Symfoware Server Connection Manager 9.1 — Windows版 Symfoware Server Connection Manager 9.1	○	すでに提供済み

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			2. rdbexecsqlコマンド、または、アプリケーションにより、データベースへの接続を実行する。かつ、 3. 以下のいずれかの理由により当該接続処理が失敗した場合 － クライアント用の動作環境ファイルのDEFAULT_CONNECTIONに誤った認可識別子または、パスワードを指定した場合 － アプリケーションに誤った認可識別子または、パスワードを指定した場合 － クライアント用の動作環境ファイルのSERVER_ENV_FILEに誤ったSQLサーバ名または、ファイル名を指定した場合 － クライアント用の動作環境ファイルのOPL_BUFFER_SIZEに指定したバッファの獲得に失敗した場合 － クライアント用の動作環境ファイルの結果RESULT_BUFFERに指定したバッファの獲得に失敗した場合 － クライアント用の動作環境ファイルのSORT_MEM_SIZEに指定したメモリの獲得に失敗した場合 － クライアント用の動作環境ファイルのWORK_MEM_SIZEに指定したメモリの獲得に失敗した場合 － クライアント用の動作環境ファイルのWORK_PATHに指定したス名に誤りがある場合 － クライアント用の動作環境ファイルのROUTINE_SNAPに指定したルーチンスナップファイル名に誤りがある場合 － クライアント用の動作環境ファイルのACCESS_PLANに指定したファイル名に誤りがあった場合		
68		PG61956	[現象] Symfoware/RDBがqdg12695uのメッセージを出力し、ダウンする場合があります。 qdg12695u: System error occurred. Reference code = 16.5.65.257 Internal code = (~ module:jypfs050 line:xx) [環境] 以下のOSで発生します。 ・ Solaris(TM) Operating System ・ Linux ・ Windows ・ UXP/DS [発生条件] 1. 以下の条件を満たすSQL文を実行する。かつ、 a. FROM句に複数の表を指定したSQL文を実行する。かつ、 b. a.のSQL文のアクセスモデルが、フェッチジョインまたはマージジョインである。かつ、 c. b.のジョインキーの値がユニークでない。 2. 1.のSQL文がエラー終了する。かつ、	○	○

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			3. 1.のSQL文を再実行する。かつ、 4. 以下のいずれかを満たす場合。 a. 1.のSQL文が以下のいずれかの条件を満たす場合。または、 i) ORDER BY句を指定している。または、 ii) GROUP BY句を指定している。または、 iii) UNIONを指定している b. 2.の実行後以下の条件を満たすカーソルをOPENし、3.の実行時にOPEN中の場合 i) ORDER BY句を指定している。または、 ii) GROUP BY句を指定している。または、 iii) UNIONを指定している。		
69		PG62037	[現象] ロードシェア運用またはスケーラブルログ運用において、Symfoware/RDBのダウンによりアプリケーションに下記メッセージが返却された場合に、トランザクションの一貫性が保証されず、ロググループごとに更新結果が不整合となる場合があります。 「JYP1006E データ受信中にサーバとの通信が切断されました。」 [環境] 以下の環境を使用していると発生します。 1. 以下のいずれかのOSを使用している。かつ、 1-1)Linuxまたは、 1-2)Solaris(TM) Operating Systemまたは、 1-3)Windows 2. 以下のいずれかの運用を行っている。 2-1)以下の運用を行っている。または、 2-1-1)ロードシェア運用である。かつ、 2-1-2)スケーラブルログ運用である。 2-2)以下の運用を行っている。 2-2-1)トランザクションモニタを使用している。かつ、 2-2-2)スケーラブルログ運用である。 [発生条件] 以下のいずれかの条件を満たした場合、トランザクションの一貫性が保証されない場合があります。 条件1 1. [環境]の条件2-1)を満たしている。かつ、 2. 更新を伴うアプリケーションを実行している。かつ、 3. 2.のアプリケーションは、リモートシステムへアクセスしている(注1)。かつ、 4. 2.のアプリケーションは、接続先のシステムでデータを更新している。かつ、	○	すでに提供済み

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			5. 4.の更新データは、複数のデータベーススペース上に分散している。かつ、 6. 5.のデータベーススペースは、複数のロググループ上に分散している。かつ、 7. 2.のアプリケーションの接続先のSymfoware/RDBがダウンする。かつ、 8. 7.のSymfoware/RDBが定義されたクラスタアプリケーションを起動する(注2) 注1:アプリケーションが参照するデータベース資源が、接続先のSymfoware/RDBに存在しない場合に、データベース資源が存在する他ノードのSymfoware/RDBに対して、Symfoware/RDBが通信を行っている状態を指す。 注2:ホットスタンバイ運用の場合は8)の条件を除外。 条件2 1. [環境]の条件2-2)を満たしている。かつ、 2. 更新を伴うアプリケーションを実行している。かつ、 3. 2.のアプリケーションは、接続先のシステムでデータを更新している。かつ、 4. 3.の更新データは、複数のデータベーススペース上に分散している。かつ、 5. 4.のデータベーススペースは、複数のロググループ上に分散している。かつ、 6. 2.のアプリケーションの接続先のSymfoware/RDBがダウンする。かつ、 7. 6.のSymfoware/RDBを起動する。		
70		PG62044	[現象] CREATE DBSPACE文のATTRIBUTE LOG GROUPにロググループ名を指定しないとqdg13555u(※)のメッセージを出力してSymfoware/RDBがダウンする場合があります。 (※)qdg13555u:SymfoWARE/RDBとの通信が切断されました [環境] 以下のいずれかのOSの場合。 1. Solaris(TM)Operating System または、 2. Windows または、 3. Linux [発生条件] 1. CREATE DBSPACE文にATTRIBUTE LOG GROUPを指定している、かつ 2. 1.にロググループ名を指定していない。	○	すでに提供済み
71		PG62220	[現象] Symfoware/RDBが以下のメッセージを出力してダウンする場合があります。	○	すでに提

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			“rdb: ERROR: qdg02842u:シグナル6を受信したため RDBIIシステム空間が異常終了しました” [環境] 以下のいずれかのOSを使用している。 • Linux • Solaris(TM) Operating System • Windows [発生条件] 以下のいずれかの条件で発生します。 [条件1] 1. rdbstartコマンドを実行する。かつ、 2. Symfoware/RDBプロセス起動中にメモリ不足が発生する。 [条件2] 1. フェイルオーバー運用またはロードシェア運用である。かつ、 2. クラスタアプリケーションを起動する。かつ、 3. Symfoware/RDBプロセス起動中にメモリ不足が発生する。 [条件3] 1. フェイルオーバー運用またはロードシェア運用である。かつ、 2. クラスタアプリケーションの切替が発生する。かつ、 3. 切替先のシステムにおいて、Symfoware/RDBの切替処理中にメモリ不足が発生する。 補足) 使用可能メモリに対して、定義したロググループ数が多い場合に発生しやすくなります。 メモリ見積もり式は、セットアップガイドの付録Dを参照してください。		供 済 み
72		PG62266	[現象] Symfoware/RDBにおいてrdbrcvdicコマンドを実行すると、正常終了するべきであるにもかかわらず、qdg13139u(※)のエラーを出力して異常終了することがあります。 ※ロググループ名を「LOGG0100」と仮定した場合 qdg13139u:ロググループ'LOGG0100*'は存在しません [*は不定のゴミ文字列] [環境] 以下のいずれかのOSの場合。 1. Solaris(TM)Operating System または、 2. Windows または、 3. Linux [発生条件] 1. スケーラブルディレクトリ運用の場合。かつ、	○	す で に 提 供 済 み

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			2. -gオプションに、サイズが4の倍数のバイト数になる実在するユーザロググループ名を定義している。かつ、 3. 2.のユーザロググループ用のRDBディレクトリファイルに対して、-Oオプション(Symfoware/RDBの運用中のリカバリ)を指定している。かつ、 4. -ddlオプション(データベースの定義のみの復旧)を指定した場合。		
73		PG62293	[現象] 監査ログ表の列AUDIT_TEXTに格納される資源名に不要なデータが付く場合があります。 [環境] • Solaris(TM) Operating System • Linux • Windows [発生条件] 1. 監査ログ運用を行っている。かつ、 2. rdbpldicコマンドでデータベース名指定、またはスキーマ名指定で定義をメモリ上に展開している。かつ、 3. SET SYSTEM PARAMETER 文でセキュリティパラメタ AUDIT_ACCESS_SUCCESS=YESを設定する。かつ、 4. 以下のいずれかにアクセスした場合。 a. 表 または、 b. 順序定義 または、 c. トリガ または、 d. プロシジャルーチン または、 e. ファンクションルーチン	○	○
74		PG63029	[現象] 以下に示す発生条件の【条件1】または【条件2】のとき、アプリケーションがダウンする場合があります。 [環境] 1. 以下のいずれかのOSを使用している。 — Solaris(TM) Operating System または、 — Windows または — Linux かつ、 1. 以下の製品をインストールしている。 — Symfoware Server Connection Manager 9.1.0以降 [発生条件] 【条件1】 1. ロードシェア運用を行っている。かつ、	○	すでに提供済み

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			2. Connection Managerを使用している。かつ、 3. 埋込みSQLのアプリケーションにより、1つのセッションで複数のコネクションを接続する。かつ、 4. 条件3.の複数コネクションの接続先が以下のいずれかの条件を満たす。 4-1) いずれかの接続先に指定されたAPC動作環境ファイルのSQLSERVERに複数のRDBシステム名またはロググループ名が指定されている。または、 4-2) それぞれの接続先に指定されたAPC動作環境ファイルのSQLSERVERに互いに異なるRDBシステム名または互いに異なるロググループ名が指定されたコネクションが存在する。 かつ、 1. SET CONNECTION文により、現コネクションを変更する。かつ、 2. 以下のいずれか条件に一致する。 6-1) トランザクションを開始するSQL文の実行により、トランザクションを開始する。または、 6-2) SQL文の実行時にサーバとの通信でエラーが発生する。 【条件2】 1. ロードシェア運用を行っていない。かつ、 2. Connection Managerを使用している。かつ、 3. APC動作環境ファイルに複数のSQLSERVERを記述している。かつ、 4. 条件3.の複数のSQLSERVERのうち、互いに異なるRDBシステムを指定したSQLSERVERの組合せが存在する。かつ、 5. 埋込みSQLのアプリケーションによって、接続先として条件4.の組合せのそれぞれのSQLSERVERを指定した、複数のコネクションを1つのセッションから接続する。かつ、 6. SET CONNECTION文により、現コネクションを変更する。かつ、 7. 以下のいずれかの条件に一致する。 7-1) トランザクションを開始するSQL文の実行により、トランザクションを開始する。または、 7-2) SQL文の実行時にサーバとの通信でエラーが発生する。		
75		PG65312	[現象] 以下に示す環境・発生条件のとき、メモリがリークする場合があります。 [環境] 本障害は、以下のOSで発生します。 • Solaris(TM) Operating System • Linux • Windows [発生条件] 1. JDBCを使用したjavaアプリケーションを使用する。かつ、	○	○

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			2. 以下のいずれかの場合。かつ、 - riverManagerクラスのAPIを利用して、データベースに接続する。かつ、statementcacheオプションに1以上の値を指定する。 - ataSourceインタフェースを利用して、データベースに接続する。かつ、ステートメントキャッシュ数に1以上の値を指定する。かつ、 (最大プールコネクション数に0を指定する。または、最大プールコネクション数を超える数のコネクションを使用する。) 3. 2.のコネクションを使用して、PreparedStatementインタフェースまたは、CallableStatementインタフェースを利用して、SQLを実行する。かつ、 4. 2.のコネクションに対して、Connection.close()を実行する。かつ、 5. アプリケーションプロセスを終了する事なく、2.～4.を繰り返す。		
76		PG66002	[現象] 現象1: ロード系のRDBコマンド(注1)を実行すると、qdg13198u(注2)のメッセージを出力してRDBコマンドが異常終了します。 注1)rdbsloader/rdbsaloaders/rdbsuloadersコマンド 注2)「ファイル's*'において d*件目の文字列データが定義長を超えています 列名.定義長=(t*) u*」 現象2: ロード系のRDBコマンド(注1)を実行すると、文字列型の列に不当なデータが格納される(注2)ことがあります。 このため、データ検索の取出しにおいて本来取出されるべきデータが取出されないことがあります。 注1)rdbsloader/rdbsaloaders/rdbsuloadersコマンド 注2)文字列型データの最終バイトに制御コード(¥r:0x0d)が付加されます。 以下に例を示します。 入力データ: CHAR(8)の列に"ABC"を指定 格納結果: "ABC△△△¥r" (△は半角空白、¥rはバイナリの0x0dを示す) [環境] 以下のいずれかのOSである場合。 - Solaris(TM) Operating System または、 - Linux または、 - Windows [発生条件] 発生条件1: 1. 以下のいずれかのコマンドを実行する。かつ、 a. rdbsloaderコマンド(※)、または、 ※レコード定義長が32KBを超える(BLOB型の列が存在時)	○	○

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			場合で、-cオプションでBLOB型以外の列名を指定している場合 b. rdbsaloaderコマンド、または、 c. rdbsuloaderコマンド 2. 1.のコマンドで以下のオプションを指定する。かつ、 a. -t (入力ファイルがテキスト形式) および、 b. -l NONE_VALIDSPACE (区切り文字から区切り文字までをそのまま格納) 3. 1.の入力ファイルにレコードの終端を示す改行文字がCR(¥r)+LF(¥n)のレコードが存在する。かつ、 4. 3.のレコードが以下の全てを満たしている。 a. 最後の列のデータ型が文字列型である。かつ、 b. 最後の列の文字列長が列の定義長と同じである。かつ、 c. レコードの終端を示す改行文字が入力レコード読み込みバッファ(注)をまたがっている。 注)入力ファイル読み込み用の32KB(32768バイト)のローカルメモリです。以降の記述において、入力ファイルの先頭から32768×nバイト目にレコードの終端を示す改行文字の¥rが存在する場合を「バッファをまたがる」と称します。以下がバッファをまたがる例です。('l'は区切り文字を示す) …… JHC00001¥r¥n…… ¥rが先頭から32768×nバイト目の場合、バッファをまたがります。 発生条件2: 1. 以下のいずれかのコマンドを実行する。かつ、 a. rdbsloderコマンド(※)、または、 ※レコード定義長が32KBを超える(BLOB型の列が存在時)場合で、-cオプションでBLOB型以外の列名を指定している場合 b. rdbsaloaderコマンド、または、 c. rdbsuloaderコマンド、または、 2. 1.のコマンドで以下のオプションを指定する。かつ、 a. -t (入力ファイルがテキスト形式) および、 b. -l NONE_VALIDSPACE (区切り文字から区切り文字までをそのまま格納) 3. 1.の入力ファイルにレコードのを終端を示す改行文字がCR(¥r)+LF(¥n)のレコードが存在する。かつ、 4. 3.のレコードが以下の全てを満たしている。 a. 最後の列のデータ型が文字列型である。かつ、 b. 最後の列の文字列長が列の定義長より短い。かつ、 c. レコードの終端を示す改行文字が入力レコード読み込みバッファ(注)をまたがっている。 <補足>		

No.	バージョン レベル	P番号	現象	EE	SE
			発生条件1との違いは、4. b.のみです。		
77		PG67686	[現象] 以下の2つの現象が発生する場合があります。 ・ 現象1 データベースサーバ上でConnection Managerの監視プロセスがコアを出力してダウンする。 ・ 現象2 稼働中のアプリケーションサーバのシステムログに、Connection Managerのエラーメッセージapc00024eおよびapc00001eが出力され、一時的にデータベースサーバとの通信に異常が発生し、アプリケーションを実行できなくなる。 * apc00024e:Heartbeat connection timed out. IPaddress=RDBシステムのIPアドレス PortNumber=相互ダウン監視通信用のポート番号 * apc00001e:An error has occurred on the communication line to RDB system 'RDBシステム名 ホスト名'. [環境] 以下のいずれかの OS を使用している。 ・ Solaris(TM) Operating System ・ Linux [発生条件] 以下の条件を満たしている場合に、本現象が発生する場合があります。 1. データベースサーバに対して、Connection Managerを2つ以上接続している、かつ、 2. 以下のいずれかの条件を満たしている。 2-1) 1つ以上のConnection Managerが任意の原因で停止する。 または、 2-2) 1つ以上のConnection Managerとデータベースサーバとの間で通信異常が発生する。	○	○

索引

[記号]	
.NET Data Provider対応アプリケーション.....	7,23
.NET Framework 3.5.....	24
.NET Framework 3.5および.NET Framework 4対応.....	10
.NET Framework 4対応.....	21
[A]	
ACCESS_PLANの変更.....	79
APIサポート範囲の拡張.....	5,7
ASSIST指定.....	15,25
[C]	
Connection ManagerのPRIMECLUSTER対応.....	14,21
Connection Managerの通信機構の変更.....	53
Connection Manager連携時の不要メッセージ出力の抑止.....	29
CまたはCOBOLアプリケーション.....	4,23
[D]	
DatabaseMetaDataクラス、ResultSetMetaDataクラスの未サポートAPIのサポート.....	43
DSI定義での動的容量拡張定義指定.....	50
[G]	
getLongメソッドの仕様変更.....	81
getObjectメソッドの仕様変更.....	81
GROUP BY句を指定した導出表を含むSQL文の探索条件の判定タイミングの変更.....	78
[I]	
INSERT文のVALUES句への値式サポート.....	8,24
[J]	
Javaアプリケーション.....	4,23
JDBCデータソース定義の簡素化.....	41
JDBCドライバ使用時のLD_PRELOAD環境変数廃止.....	65
JDBCドライバ利用時の動作環境設定.....	3,23
JDBCトレースの採取方法の変更.....	78
JIS2004対応.....	14,25
[L]	
LIKE述語の構文解析時に出力されるJYPメッセージの内容変更.....	51
[O]	
ODBC対応アプリケーション.....	7,23
ODBC連携時のトランザクション独立性水準の初期値変更.....	51
Office 2007.....	24
Office 2007およびOffice 2010対応.....	10
Office 2010対応.....	21
[R]	
rdbauditコマンド.....	60
rdbexecsqlコマンドのSQL文実行エラーの切分け.....	13,25
rdbexecsqlコマンドの実行結果の出力改善.....	13,25
rdbexecsqlコマンドの独立性水準.....	73
rdbmrmpコマンド.....	58
rdbmrinfコマンド.....	59
RDBNAME未設定時のエラーメッセージ.....	39
rdbprtコマンド.....	53
rdbrcvコマンド.....	72
rdbslodder、rdbsalodder、rdbsulodderコマンド.....	76
rdbstopコマンドのmcオプションによるコマンドの強制停止.....	51
rdbupsコマンド実行時のRDBディクショナリ使用量.....	58
RDB構成パラメタファイルのひな型ファイル名の変更.....	41
RDBディクショナリ使用量.....	37
ResultSetの更新機能.....	6
RowIdサポート.....	5
ROWNUMのサポート.....	15,25
[S]	
SQLGetInfo関数の仕様変更.....	45
SQLTables関数の仕様変更.....	46
SQL/XML対応.....	4
SQL文.....	7,19,23
SQL文の制限値エラー通知.....	28
[M]	
Visual C++ 2010対応.....	10,21
Visual Studio 2008.....	24
Visual Studio 2008およびVisual Studio 2010対応.....	9
Visual Studio 2010対応.....	20
[W]	
WebAdmin/WebDBtoolsで使用するポート番号.....	45
[X]	
XAインタフェースの3階層モデルへの対応.....	9
XAインタフェースの接続方式の変更.....	34
XMLアプリケーション.....	4,23
[あ]	
アクセスプランへのデフォルトでのアドバイス出力.....	48
アプリケーションインタフェースの変更.....	67
アプリケーション開発環境.....	9,20,24
アプリケーションの開発.....	3,19,23
アプリケーションの予約語のレベルの変更.....	41
アプリケーションのロケールの指定方法の変更.....	74
インストーラ改善.....	2,18,22
インストール.....	2,18,22
インデックス検索の適用拡大.....	75
埋込みC言語での8バイト2進数使用.....	4
埋込みSQLでの複数行の一括挿入の機能拡張.....	4
運用.....	10,21,24
[か]	
各国語文字列型への半角カタカナ格納のエラー通知.....	63
関数のサポート範囲の拡張.....	8,19
クライアントの動作OSの追加.....	16,22,25
結果として取り出す行に1から順に番号を割り振る.....	15
結果として取り出す行を途中から読み込む.....	15
結果として取り出す件数を限定する.....	15
互換に関する情報.....	26

コミットデータ即時読み込み.....	15,21
コンソールへのメッセージ出力の抑止.....	27
コード変換機能(iconv)の組み込み.....	74

[さ]

サポートするJavaのデータ型の拡張.....	6
サーバの動作OSの追加.....	16,22
システム表の追加.....	14,25
ジョイン順の変更.....	82
数値関数.....	8,19
スクロール可能なResultSet機能のサポートAPI拡張.....	6
性能.....	14,21,25
セットアップ.....	2,23

[た]

タイムゾーン機能.....	5
定義長よりも長いデータの扱いの変更.....	82
データベース構築の簡易化.....	13,25
データベース二重化.....	10,21
データ列値関数.....	8,20
トランザクションモニタとの連携.....	9,24
トランザクションを超越するカーソルのエラー抑止.....	30

[な]

日時値関数.....	9,20
ノード間通信性能改善.....	13

[は]

バッチ更新機能.....	7
パフォーマンスモニタでのアドバイス出力.....	49
パラメタの省略値.....	31
パラメタのデフォルト値.....	3,23
非活性状態のインデックスDSIの参照.....	48
フェッチサイズの指定機能.....	6
複数のResultSetに対する同時操作機能.....	6
プラットフォームエンハンス.....	16,22,25
プログラム修正一覧.....	84
ポート番号の指定範囲の変更.....	38

[ま]

未サポートAPIの改善.....	5
文字コード系の指定方法の変更.....	67
文字ストリームのサポート.....	5

[ら]

リカバリポイントの自動設定.....	57
リモートアクセスでの利用者認証.....	39
列名の大文字および小文字の扱いの変更.....	79
ロードシェア縮退.....	11